熊本県文化財調査報告　第31集

菊池川流域文化財調査報告書

1978・3

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第31集

菊池川流域文化財調査報告書

1978・3

熊本県教育委員会

序　文

昭和49年８月、玉名郡菊水町でトンカラリンが話題となり、大きな関心を集めました。

これを契機として、菊池川流域の古代文化の再認識を痛感し、基本的な資料整備のための調査を実施することになりました。調査は、50年度から52年度にかけて実施いたしましたが、51～52年度は国の補助を受けております。

限られた期間のもとでは、菊池川流域のすべての遺跡について資料を収集することは不可能でありましたが、３ヵ年間の成果をここに刊行するものであります。

調査を実施するにあたり文化庁、菊池川流域の市町村教育委員会、土地所有者、専門的な調査をお願いした専門調査員の先生方など、関係者のご支援を受けました。とくに古閑三博先生には終始ご尽力いただきました。茲に厚くお礼申しあげます。

この報告書が各方面に活用されることを願い、文化財について、なお一層のご理解とご協力を願ってやみません。

昭和53年３月31日

熊本県教育委員会

教育長　林田正恒

例　言

1．本書は、トンカラリンをはじめとした菊池川流域の文化財調査報告である。

2．調査は、昭和50年度～52年度の３ヵ年にわたり、50年度は単県費事業、51・52年度は国庫補助事業として、熊本県教育委員会が実施した。

3．本書の執筆は、第Ⅲ章節５節２－(4)民俗調査の概要を安田宗生が分担し、他は松本健郎が行った。

　また、専門調査員の先生方の玉稿を付論として上梓した。

4．本書に使用した図の作成は、松本の他、熊本県文化財収蔵庫において行ったものであるが、松本が補訂して掲載した。製図は松本の他、広瀬賜代氏の協力を受けた。

　掲載写真は松本・白石巌によるものである。

5．本書の編集は、熊本県教育委員会文化課が行った。

本 文 目 次

第Ⅰ章　序　説
第1節　調査に至る経過と調査の経過…… 1
第2節　調査の組織…… 4
第Ⅱ章　菊池川流域の自然と文化
第1節　菊池川流域の位置と自然…… 6
第2節　菊池川流域の文化概説…… 7
第Ⅲ章　遺跡各説
第1節　天岩戸岩陰遺跡…… 11
第2節　東鍋田遺跡…… 54
第3節　若園貝塚…… 74
第4節　姫塚…… 95
第5節　トンカラリン…… 100
付論 1.　天岩戸岩陰遺跡灰層のプラント・オパール分析…… 113
藤原宏志（宮崎大学農学部）
付論 2.　天岩戸岩陰遺跡出土の人骨について…… 117
内藤芳篤（長崎大学医学部）・坂田邦洋（別府大学文学部）
付論 3.　若園貝塚出土貝類の分類・分析…… 122
菊池泰二（九州大学理学部・天草臨海実験所）
付論 4.　若園貝塚出土の動物遺存体・人骨…… 125
木村幾多郎（九州大学医学部）
付論 5.　トンカラリン地質調査報告…… 131
斉藤林次（熊本県文化財保護審議会委員）

挿 図 目 次

第 1 図　菊池川流域概要図…… 6
第 2 図　天岩戸岩陰遺跡位置図…… 11
第 3 図　天岩戸岩陰遺跡地形図…… 13・14
第 4 図　天岩戸岩陰遺跡グリット設定図…… 12
第 5 図　天岩戸岩陰遺跡断面図…… 15
第 6 図　天岩戸岩陰遺跡断面図…… 16
第 7 図　天岩戸岩陰遺跡A－2区人骨出土状態…… 17
第 8 図　天岩戸岩陰遺跡A－2区配石遺構実測図…… 17
第 9 図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図…… 19
第 10 図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図…… 20
第 11 図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図…… 21
第 12 図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図…… 22

第 13 図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図…… 23
第 14 図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図…… 24
第 15 図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図…… 25
第 16 図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図…… 26
第 17 図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図…… 27
第 18 図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図…… 29
第 19 図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図…… 30
第 20 図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図…… 31
第 21 図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図…… 32
第 22 図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図…… 33
第 23 図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図…… 34
第 24 図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図…… 35
第 25 図　天岩戸岩陰遺跡出土土器実測図…… 36
第 26 図　天岩戸岩陰遺跡出土土器実測図…… 37
第 27 図　天岩戸岩陰遺跡出土土器実測図…… 38
第 28 図　天岩戸岩陰遺跡出土石器実測図…… 40
第 29 図　天岩戸岩陰遺跡出土石器実測図…… 41
第 30 図　天岩戸岩陰遺跡出土石器・石製品・鉄器・骨角器・貝輪実測図…… 42
第 31 図　天岩戸岩陰遺跡出土石器実測図…… 43
第 32 図　天岩戸岩陰遺跡出土石器実測図…… 44
第 33 図　天岩戸岩陰遺跡出土石器実測図…… 45
第 34 図　天岩戸岩陰遺跡出土骨角器実測図…… 49
第 35 図　天岩戸岩陰遺跡出土石器原材・未製品実測図…… 51
第 36 図　東鍋田遺跡位置図…… 54
第 37 図　東鍋田遺跡地形図及びトレンチ配置図…… 55
第 38 図　東鍋田遺跡トレンチ断面図…… 57・58
第 39 図　東鍋田遺跡H トレンチ出土カメ棺実測図…… 59
第 40 図　東鍋田遺跡出土縄文式土器実測図…… 60
第 41 図　東鍋田遺跡出土縄文式土器実測図…… 61
第 42 図　東鍋田遺跡出土縄文式土器実測図…… 62
第 43 図　東鍋田遺跡出土縄文式土器実測図…… 63
第 44 図　東鍋田遺跡出土須恵器・土師器実測図…… 69
第 45 図　東鍋田遺跡出土石器実測図…… 70
第 46 図　東鍋田遺跡出土石器・石製品実測図…… 71
第 47 図　東鍋田遺跡出土石器実測図…… 71
第 48 図　東鍋田遺跡表採布目瓦・土錘実測図…… 72
第 49 図　若園貝塚位置図…… 74
第 50 図　若園貝塚周辺地形図…… 75

第 51 図　若園貝塚グリット配置図…… 76
第 52 図　若園貝塚グリット断面図…… 77・78
第 53 図　若園貝塚グリット断面図…… 79・80
第 54 図　若園貝塚出土縄文式土器実測図…… 83
第 55 図　若園貝塚出土縄文式土器実測図…… 84
第 56 図　若園貝塚出土縄文式土器実測図…… 85
第 57 図　若園貝塚出土縄文式土器実測図…… 89
第 58 図　若園貝塚出土縄文式土器実測図…… 89
第 59 図　若園貝塚出土遺物実測図…… 90
第 60 図　若園貝塚出土石器実測図…… 90
第 61 図　若園貝塚出土石器実測図…… 91
第 62 図　姫塚位置図…… 95
第 63 図　姫塚トレンチ断面図…… 96
第 64 図　姫塚出土土師器実測図…… 97
第 65 図　姫塚出土土器実測図…… 98
第 66 図　トンカラリン位置図…… 100
第 67 図　トンカラリン地形図……103・104
第 68 図　トンカラリン構造模式図…… 105
第 69 図　トンカラリントレンチ断面図…… 106
第 70 図　トンカラリントレンチ断面図・H 地点石組実測図…… 107
第 71 図　トンカラリン（辰崩地区）トレンチ断面図…… 108
付1－1図　試料採取点…… 114
付5－1図　トンカラリン付近地質図……133・134

表　目　次

第 1 表　天岩戸岩陰遺跡出土石器一覧表…… 46
第 2 表　東鍋田遺跡出土縄文式土器一覧表…… 64
第 3 表　若園貝塚出土縄文式土器一覧表…… 86
付1－表1　分析結果一覧表…… 115
付3－表1　若園貝塚出土貝類遺骸の量的組成…… 123
付4－表1　イノシシ四肢骨…… 126
付4－表2　イノシシ歯牙…… 127
付4－表3　シカ四肢骨…… 127
付4－表4　H－1－2 ブロックサンプル（30 cm）中貝類出現率表 …… 129
付5－表1　C－D 2，E－F 1トレンチ堆積状態の対比…… 132

図　版　目　次

図 版 1　菊水町周辺空中写真

図 版 2　(1)天岩戸岩陰遺跡遠景 (2)岩陰の内部（転石・排棄物除去後）
図 版 3　(1)A－3・B－3区北壁断面 (2)遺物出土状況
図 版 4　(1)天岩戸岩陰遺跡A－2区人骨出土状態 (2)天岩戸岩陰遺跡A－2区配石遺構
図 版 5　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（縄文式土器）
図 版 6　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（縄文式土器）
図 版 7　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（縄文式土器）
図 版 8　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（縄文式土器）
図 版 9　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（縄文式土器）
図 版 10　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（縄文式土器）
図 版 11　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（縄文式土器）
図 版 12　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（縄文式土器）
図 版 13　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（縄文式土器）
図 版 14　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（弥生式土器）
図 版 15　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（石器）
図 版 16　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（石器・石製品・鉄器・貝製品）
図 版 17　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（石器）
図 版 18　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（石皿）
図 版 19　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（石皿・石器原材・未製品）
図 版 20　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（骨角器・牙製品）
図 版 21　天岩戸岩陰遺跡出土石器原材・未製品・石屑
図 版 22　東鍋田遺跡全景
図 版 23　東鍋田遺跡出土遺物（カメ棺・縄文式土器）
図 版 24　東鍋田遺跡出土遺物（縄文式土器）
図 版 25　東鍋田遺跡出土遺物（縄文式土器・須恵器・土師器）
図 版 26　東鍋田遺跡出土遺物（土師器・石器・石製品）
図 版 27　(1)若園貝塚全景 (2)A－1区断面と磨製石斧出土状態
図 版 28　(1)若園貝塚調査地近景 (2)H－1区純貝層上面
図 版 29　若園貝塚出土遺物（縄文式土器）
図 版 30　若園貝塚出土遺物（縄文式土器）
図 版 31　若園貝塚出土遺物（石器・石製品・土製品）
図 版 32　姫塚と出土遺物
図 版 33　トンカラリン
図 版 34　トンカラリンとトレンチ出土遺物
図 版 35　トンカラリン辰崩地区
付1－図版1・付1－図版2・付1－図版3　天岩戸岩陰遺跡出土プラント・オパール
付2－図版1・付2－図版2　天岩戸岩陰遺跡出土人骨
付4－図版1・付4－図版2　若園貝塚出土動物遺存体・人骨

第1章　序　　説

第1節　調査に至る経過と調査の経過

昭和49年8月、古閑三博氏（県議会文教治安委員会副委員長、当時以下同）は知人よりトンカラリンの所在を知り現地を視察、同時に文化課に連絡された。

9月22日、田辺哲夫文化課長が古閑氏と同行、現地を調査。

10月2日、古閑氏は県議会文教治安委員会においてトンカラリン問題について発言。これに対し田辺文化課長は、築造された時代・目的については不明で今後調査を進めると答弁した。これを受けて、報道各社が一斉に“謎のトンネル・トンカラリン”と報道。この前後に、文化課参事緒方勉、学芸員高木正文等が現地を調査。略図等を作成し、トンカラリンの全長約451mとした。

10月29日、県文化財専門委員による第1回現地調査。

参加者　古閑三博（県議会文教治安委員会副委員長）
田辺哲夫・浜田勝・隈昭志（文化課）
松本雅明（熊本大学、東洋史・考古学）
井上辰雄（熊本大学、古代史）
斉藤林次（地質）
藤芳義男（土木工学）

この調査で、水路説・古代信仰遺跡説が出たが、結論には至らなかった。

11月4日、県文化財専門委員第2回現地調査

参加者　古閑三博（県議会文教治安委員会副委員長）
田辺哲夫・緒方勉・安田宗生（文化課）　松本雅明（熊本大学、東洋史・考古学）
井上辰雄（熊本大学、古代史）

この日の調査でも結論は出なかったが、井上専門委員唱えるところの古代信仰遺跡説が有力視される。

この前後、菊池川流域の遺跡探索に情熱を注ぐ古閑氏らは、菊水町、菊鹿町にも類似したものがあること、鹿央町岩倉の巨岩が古代磐座ではないかと察知した。

12月23日、古閑氏・井上氏・田辺文化課長らが鹿央町岩倉調査。

12月末、田辺課長の指導で、文化課参事緒方勉、学芸員島津義昭ら『熊本県城北におけるトンカラリン関連遺跡についての中間報告』熊本県教育委員会、を作成。

中間報告という形ではあるが、

第1部　菊池川流域に存在する聖線と諸遺構

第２部　トンカラリンについて

第３部　鞠智城にある石組（権現穴）について

からなる大冊である。八方ヶ岳・金峰山・倉永山を結ぶほぼ正三角形を「聖線」とし、その線上あるいは中線上に位置する信仰遺跡の可能性の強い地点を列挙している。また、トンカラリンについては、「トンカラリンについての伝承は残ってない。勿論記録がない。何時の頃、誰によって何のためにつくられたのか、目下のところ深いベールに包まれている。」と報告している。

昭和50年２月24日、田辺文化課長、熊本日日新聞に「トンカラリンの謎を推理する」を発表。

４月、昭和50年度になり、県教委では「菊池川流域古代文化圏総合調査」を計画。事業担当に文化課技師松本健郎があたる。

この間も古閑氏の精力的な調査活動が続けられ、菊鹿町・天岩戸岩陰遺跡の発見等、着実な成果があがる。

５月、作家松本清張氏、菊池川流域の調査。鞠智城・天岩戸岩陰遺跡・岩原古墳・トンカラリン等を視察。「邪馬台国新考」（別冊『週刊読売』）として発表。菊水町周辺が邪馬台国の可能性もありと発表。一躍脚光をあびる発端となる。

６月、井上辰雄氏「菊池川流域の古代祭祀遺跡―岩倉と隠り穴」『東アジアの古代文化』第５号、を発表。トンカラリン・岩倉など、菊池川流域の遺跡を信仰遺跡とし、それは古代豪族日置氏と関係するものではないかと推論。

８月８日、乙益重隆氏（国学院大学）にトンカラリン現地調査を依頼。同氏から調査所見が寄せられ、トンカラリンの用途は排水路であるとし、築造年代は江戸中期頃ではないかと推定。

８月11日、原口長之氏（熊本県文化財専門委員）、熊本日日新聞に「トンカラリンは排水路である」を発表。現地の地形、暗渠の構造、石組みの問題、伝承の問題等をあげ、「この地を開拓し守るために幾世代にわたって造られたであろうこの暗渠は誠に美事である」と指摘。

８月25日～11月６日、菊鹿町・天岩戸岩陰遺跡の発掘調査。縄文前期～古代にわたる包含層が確認され、多量の土器・石器・獣魚骨・貝類等を出土。縄文晩期の屈葬人骨１体も検出された。

11月14日～17日、菊鹿町・鞠智城内の岩くら調査。

11月25日～12月25日、菊水町トンカラリン発掘調査。地形測量とトレンチによる発掘を実施。

この調査速報として、松本が熊本日日新聞（51年１月10日付）に「トンカラリン調査記」を発表。従来451.4ｍといわれていた全長は464.6ｍ、トンカラリンの構造、出土遺物、金石・文献・民俗調査の概要について報告。とくに築造時期は近世の可能性が強いと指摘。

この調査期間中、文化財専門委員第３回・第４回現地調査。

12月25日、熊本日日新聞、昭和50年県内十大ニュースに「トンカラリンブーム」選定される。

昭和51年１月８日～10日、菊池川流域古代史研究会（沢田一精会長）の招きで東京国立博物

館亀井正道氏、トンカラリン等菊池川流域遺跡の調査。トンカラリン信仰遺跡説については否定。

8月2日、米村竜治氏（正竜寺住職）、熊本日日新聞に「トンカラリンは竜神信仰の遺跡である」を発表。「この呪術儀礼は治水のための農耕施設の技術と合理的に一致していた」と、信仰・治水併用を指摘。

8月9日、古閑三博氏の探査により、熊本市竜田山に全長約150mのトンネル新発見。原口長之氏（県文化財専門委員）・桑原憲彰（県文化課技師）等の調査により、立田城の抜け穴が有力視される。

8月5日～24日、山鹿市東鍋田遺跡発掘調査。縄文・弥生・古墳時代、中世の遺物を出土し、台地に包含される遺物の年代を知ることができた。

9月6日～9月17日、菊水町日置氏銅板墓誌出土地（いっちょ墓）発掘調査。現地の発掘調査ではみるべき成果はなかったが、金石・文献調査では新しい知見が得られた。

10月2日～10月6日、菊水町姫塚発掘調査。縄文・古墳・古代の遺物が包含されることが判明し、姫塚の年代を考えるうえで重要な資料を得ることができた。

10月7日～10月30日、菊水町トンカラリン調査。石組みの実測、トレンチによる調査を実施。

10月11日、古閑三博氏、熊本日日新聞に「神の里への洞窟の道」を発表。

11月16～17日、菊池川流域古代史研究会の招きで、李進熙氏（明治大学講師）鞠智城・船山古墳・トンカラリン等菊池川流域の調査。その所感は、熊日古代史探究講演会（11月17日）において「熊本と朝鮮の古代—菊池川流域を中心として—」と題して講演。鞠智城・船山古墳の問題にふれ、トンカラリンについては「トンネルの石組みは朝鮮式山城の石組みに類似し、用途は呪術的なもの」と指摘。

12月4日、金思燁氏（大阪外語大学客員教授・京都大学講師）、熊本日日新聞に「トンカラリン語義考—古代夷人の信仰（上）」を、6日付同紙に同（下）を発表。トンカラリンの語義を中心として、トンカラリンは信仰遺跡であると指摘。さらに同氏は「トンカラリンと狗奴国の謎」を刊行。

12月12日～13日、菊池川流域古代史研究会の招きで、金思燁氏、トンカラリン等を現地調査。13日、熊日古代史探究講演会で「古代の菊池川流域とトンカラリン」と題して講演。トンカラリンの語義、韓国の信仰形態からトンカラリン信仰遺跡を強調。

昭和52年1月12日～13日、菊池川流域古代史研究会の招きで、江上波夫氏（上智大学教授）トンカラリン等を調査。

2月26日、田渕実夫氏（関西民俗学研究会会長）、熊本日日新聞に「トンカラリン考（上）」を、28日付同紙に同（下）を発表。石積みの年代は3・4世紀のものとし、信仰遺跡であるとの所論を発表。

3月1日～3月30日、菊水町若園貝塚発掘調査。同時に前方後円墳参考地を伐採し古墳か否

かの判定。若園貝塚の範囲・年代等について重要な知見を得た。

7月4日、重松明久氏（広島大学教授）、熊本日日新聞に「トンカラリン遺跡の性格」を発表。築造年代は3～5世紀で、海宮遊幸神話に関わる信仰遺跡であろうと発表。

11月5日～11月30日、トンカラリン辰崩地区の発掘調査。石組み裏より陶磁器・瓦片出土。さらに近くに築かれた墓地の刻銘により築造年代推定の手がかりを得る。

以上が昭和49年夏のトンカラリン発見後の経過である。これ以外にも、多くの研究者の方々が現地を訪れられ、それぞれの所感があることと思うが、雑誌や新聞の著名記事として公表されたものだけを取りあげた。

とくに松本清張氏調査以後はトンカラリンブームが湧きおこり、現地には多数の見学者が相次いだ。このことは、昭和50年熊日新聞県内十大ニュースに選定されたことが如実に示している。文化財がこれほどの関心事となったのは近来にないことであり、トンカラリンブームの最大の意義であると考える。

第2節　調査の組織

調査関係者は次のとおりである。多くの方々の支援のもとに調査が円滑に遂行できたことに対して、改めて感謝の意を表するものである。

調査主体　熊本県教育委員会

調査責任者　田辺哲夫・境信三郎（前県文化課長）
合志太助（県文化課長）

調査総括　隈　昭志（県文化課文化財調査係長）

調査員　緒方　勉・高木端穂（文化課参事）、高木正文・安田宗生（文化課学芸員）
松本健郎（文化課技師・調査主任）、大田幸博（文化課技師）
白石　巌・松村道博（文化課調査員）
後藤早苗・佐藤征子（文化課嘱託）

調査事務局　浜田　勝・前田利郎・河野宗忠（前文化課長補佐）
田中　繁（文化課長補佐）
松本　巽（前文化課管理係長）
望野正雄（文化課管理係長）
岩永繁宏（前文化課主事）、石原昭宏（文化課主事）

熊本県文化財専門委員　藤芳義男・堀内清治・松本雅明・原口長之・白木原和美・佐藤光昭・後藤是山・工藤敬一・井上辰雄・米村共司・野口彰・吉倉真・斉藤林次

専門調査員　内藤芳篤（長崎大学医学部、天岩戸岩陰遺跡）

菊池泰二（九州大学理学部、若園貝塚）
乙益重隆（国学院大学、トンカラリン）
千藤忠昌（熊本大学理学部、東鍋田遺跡・天岩戸岩陰遺跡・若園貝塚）
畑中健一（北九州大学文学部、東鍋田遺跡）
藤原宏志（宮崎大学農学部、天岩戸岩陰遺跡・東鍋田遺跡）
坂田邦洋（長崎大学医学部、天岩戸岩陰遺跡）
木村幾多郎（九州大学医学部、天岩戸岩陰遺跡・若園貝塚）

遺物整理協力　熊本県文化財収蔵庫
上野辰男（文化課主幹）、山城仁恵（文化課嘱託）

調査協力者　菊鹿町（隈部堅正町長）・山鹿市（古閑一夫市長）・鹿央町（幸村武水町長）
菊水町（坂本　豊町長）
菊鹿町・山鹿市・鹿央町・菊水町各教育委員会
菊池川流域古代史研究会（沢田一精会長）
古閑三博（菊池川流域古代史研究会、県議会議員）
亀井正道（東京国立博物館）、李　進熙（明治大学）
高田貫一（菊鹿町教育長）、平島康弘（菊鹿町教育委員会）、木庭春生（菊鹿町文化財保護委員長）、弓掛正久（山鹿市教育長）、坂本信義（鹿央町教育長）、一安啓介・春田文夫（鹿央町教育委員会）、小林　泉（菊水町教育長）前川一丸・山中茂治・杉原幸寿（菊水町教育委員会）、島田花雄（菊水町文化財保護委員長）、池田知義（菊水町史談会長）、坂本実行（菊水町文化財保護委員）
富田紘一（熊本市立博物館）、高谷和生（別府大学学生）、斉木義男、杉原道隆、坂口実、高木誠治、坂本正幸、板楠和子、広瀬正照、広瀬賜代
島津義昭・西田道世・倉原謙治（県文化課）

この他、調査地の各区長、土地所有者、地区民の方々、調査・整理作業に従事された多くの方々の努力を忘れることはできない。また、菊池川流域古代史研究会においては、独自の事業として講師の招聘など活発な活動を展開され、その調査に同行の便を与えられる等全面的な支援を受けた。記して深謝の意を表するものである。

〔付記〕所属等は調査当時のものである。

第II章　菊池川流域の自然と文化

第１節　菊池川流域の位置と自然（第１図）

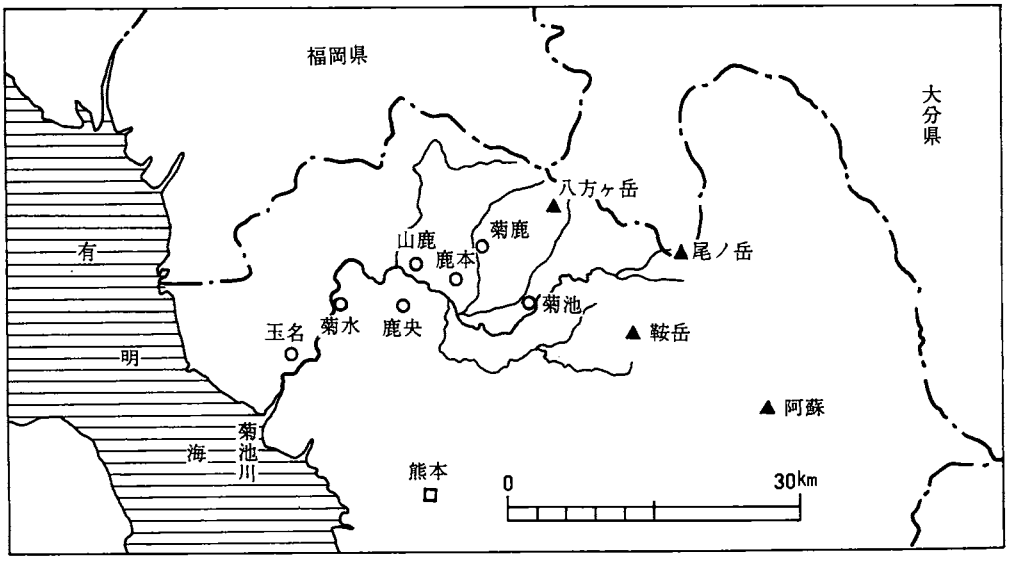
熊本県を三地区に大別する場合、熊本市を中心とする中部地区を中において、城北地区、城南地区とに分けられる。城北地区とは文字の示すとおり、熊本城より北方の地域ということであり、現在の行政区では阿蘇郡・菊池郡市・鹿本郡・山鹿市・玉名郡市が含まれる。このうち阿蘇郡と他の地域とはやや隔絶するところから細分され、阿蘇郡以外を城北と呼ぶ場合も多い。

ここで取扱う菊池川流域とは、城北地区の中心をなす地域であり、菊池川及びその支流域を指す。

菊池川流域の北側には筑肥山地が東西に横たわり、福岡・大分との県境を成している。東側は阿蘇外輪の西裾部に接し、南側は菊池・植木の両台地に画され、西側では有明海に接している。

菊池川は、阿蘇外輪山の西北方、大分県との境にある尾ノ岳（1041ｍ）に水源を発し、筑肥山地や阿蘇外輪からの支流を合わせながら、菊池市・鹿本郡・山鹿市を中心とする菊鹿平野を形成し、菊水の狭隘部を流れ、玉名の三角洲を形成して有明海に注ぐ。全長約61㎞、流域面積約996㎢（註１）で、白川・緑川・球磨川に次ぐ代表的な河川である。

上流部では菊池水源の景勝を作り、菊鹿平野・玉名平野は有力な穀倉地帯となっている。菊鹿平野は広大な阿蘇凝灰岩台地を削って形成された湖盆の跡で、約76㎢の面積がある。両翼に



第１図　菊池川流域概要図

は熔岩台地の一部が残り主に畑地となっている。平野部との境界には熔岩（阿蘇凝灰岩）の岩壁がいたるところに露呈している。菊鹿・玉名両平野の中間は低平な山塊・台地の間を曲流する狭隘部で、やがて江田川との合流点の下流あたりから広大な玉名平野を展開する。菊池川は、白川と同じく多量の土砂を運搬し、海岸平野の発達が著しく、加えて近世以降の干拓がさかんで、水田化が著しい。また、菊池川河口付近の海岸は遠浅となっている。

この流域の主な山塊としては、鞍岳(1119m)・八方ヶ岳（1052m)・小代山（501m）などがある。

菊池川の主な支流には迫間川・木野川・内田川・合志川・岩野川・江田川・繁根木川などがある。

このような菊池川流域の自然は、人間の生活と無縁ではなく、次節に述べるように、菊鹿平野・玉名平野には高度な古代文化が開花し、凝灰岩壁には多くの横穴が残されている等、自然との深い関わりをもって歴史が展開されている。

〔付記〕この項は、松本唯一「風土」『熊本県史・総説編』 昭和40年、に拠るところが多い。

註1　流域面積の順では球磨川、緑川・菊池川・白川の順となる。

第2節　菊池川流域の文化概説

菊池川流域には、三万田東原遺跡、天城遺跡、長田の貨泉出土地、山鹿～玉名の装飾古墳群、江田船山古墳、鞠智城など、重要遺跡が点在する。

これらの遺跡の調査は、古くは大正時代の京都大学による装飾古墳群の調査がある。昭和になると、坂本経堯氏による菊池台地周辺、さらには流域全般に亘る調査が展開されている。さらに乙益重隆・三島格・田辺哲夫・原口長之・隈昭志・杉村彰一氏らの調査があり、かなりの資料が蓄積されている。昭和40年代以降、行政的な大規模調査も増加し、資料的には増加の一途をたどっている。ただ惜しむらくは、これらの成果の公表は充分とは言えない。

これら先学の学恩に拠りながら、菊池川流域の古代文化の概要を時代別に記す。

1．旧石器時代

県下におけるこの時代の調査は数少く、資料的にも未知数の部分が多い。この時代の遺跡（遺物出土地）は現在20ヵ所余がリストアップされているが、調査が実施されたのは2～3例である。

菊池川流域においては、菊池市竜門虎口出土の尖頭器(註1)、山鹿市長沖出土の石核(註2)などが古くよ

り注目されていた。その後、菊池川の支流・岩野川流域の鹿本郡鹿北町柿原出土の尖頭器、山鹿市蒲生・下原遺跡の尖頭器・細石器、玉名郡菊水町中原出土のナイフ形石器などの資料が紹介され、徐々に資料の増加がみられているが、組織的な調査は実施されておらず、実態は不明確な部分が多い。(註3)(註4)(註5)

2．縄文時代

遺跡数も多く、調査資料も多い。上流における菊池台地の縄文遺跡調査は歴史も古く、坂本経堯・田中儀信・川上勇輝氏らによる資料が豊富である。中でも、三万田東原遺跡は代表的な遺跡で、上記三氏の他に、鹿本高校にも多量の遺物が収蔵されている。三万田東原遺跡については、農業改善事業に伴い昭和49年に発掘調査が実施され、住居址の検出等、遺跡の性格はより明確にされた。同時期の遺跡で、三万田東原遺跡と対照的な立地を示すのが菊池市・天城遺跡である。菊池川による低位扇状地に立地し、三万田東原の台地上立地とは好対照をなしている。昭和50年、圃場整備事業に伴って県教委によって調査され、ほぼ遺跡の全域を把握し、住居址・溝・配石遺構・カメ棺群等が多量の遺物とともに出土している。(註6)(註7)

中流域の鹿本・山鹿地方の台地にも縄文遺跡は多い。東鍋田遺跡（等Ⅲ章第２節参照）や対岸の原ン山遺跡（現県立教育センター）は押形文の良好な包含層が認められた。原ン山遺跡と同じ支々岐台地にある牛草遺跡は、後晩期の遺跡で、住居址の検出は県下では最も古い。(註8)(註9)

下流域の玉名地方にも縄文遺跡が豊富で、とくに有明海沿岸に点在する貝塚が注目される。

菊池川流域の貝塚については三島格氏の論述があるので詳述はさけるが、若園貝塚（第Ⅲ章第３節参照）をはじめ湯の浦貝塚・尾田貝塚・竹崎貝塚・桃田貝塚・保田木貝塚・繁根木貝塚・中土貝塚・庄司貝塚・古閑原貝塚などが知られている。(註10)(註11)

3．弥生時代

弥生前期の遺跡は顕著ではなく、菊池郡大津町・無田原遺跡、鹿本郡鹿本町・下原遺跡、玉名郡袋明町・中道貝塚などがある。玉名郡天水町・斉藤山貝塚は「日古最古の鉄斧」の出土地として著名である。山鹿市立川辺小学校には、板付Ⅱ式の壺が所蔵されているが出土地は不明である。(註12)(註13)(註14)(註15)

鹿本郡鹿本町と山鹿市にまたがる下原遺跡は、100基以上のカメ棺群が検出され、銅戈の破片の副葬が知られている。前期のものも含まれるが、主流は中期である。この他にも、中期の遺跡として各地にカメ棺群が検出されているが、生活遺跡としての住居址の調査例はない。

後期になると遺跡数も増し、調査例も多い。なかでも、玉名郡岱明町・下前原遺跡、玉名都菊水町諏訪原遺跡などの調査により、弥生後期の集落が調査され、多くの問題を提示した。また、山鹿市の方保田台地は、充分な調査は実施されなかったが弥生終末～古墳前期の土器を多量に出土し、有力な集落であったと考えられる。このように、後期の遺跡は台地に立地するものが多く、規模の大きな集落が営まれている。中期とは逆の現象で、後期の遺跡としては集落(註16)(註17)

址が多数発見されているが、墳墓の調査例はきわめて少ない。

全国でも数例しか出土していない貨泉を出土した長田遺跡は、上流部の菊池市にある。この他、この流域から出土した青銅器の量は、河川流域別にみると県下で最も多く、現在８ヵ所を数える。

4．古墳時代

菊池川流域の古代文化を特色づけるのがこの時代であり、多くの古墳が営まれている。なかでも装飾古墳は他の地域を圧している。

古式の古墳には竜王山古墳(註18)・山下古墳(註19)・院塚古墳等(註20)があり、それぞれ調査報告書が刊行されている。

中期古墳の代表例は何といっても江田船山古墳であり、鹿央町・岩原古墳も中流における盟主的存在として注目されるものである。前期から中期にかけて、船形石棺の盛行することもこの地域の特色で、古くより指摘されている。

装飾古墳は、現在県下では121例が知られているが、その半数以上が菊池川流域の山鹿から玉名にかけて分布し、後期古墳時代を彩っている。弁慶ヶ穴・チブサン・鍋田横穴・大坊古墳・永安東古墳・同西古墳と枚挙にいとまがない。

凝灰岩の岩壁には多くの横穴墓が営まれ、確認できるものだけでも、1,000基を下らない。しかも、その初現は５世紀末～６世紀初頭(註22)に求められ、古墳文化の展開の上で重要な存在(註21)となっている。

これら豊富な古墳（墳墓）に対して、集落址は不明なものが多く、調査例も数例あるのみである。巴形銅器を出土した山鹿市方保田東原遺跡や、鹿本町・津袋大塚遺跡(註23)、岱明町・山下遺跡等(註24)で住居址が検出されているが、集落全体の調査ではない。

5．古代

第一にあげられるのが菊鹿町の鞠智城である。鞠智城は続日本記に、大野・基肄城とともに修復に関する記事があり、７世紀中頃の築城と考えられる。昭和40～42年にかけて調査され(註25)、土塁や礎石列・門礎等が検出されている。ただ、城の範囲については検討の余地があろう。

玉名市においては玉名郡倉が調査され、菊池郡家も菊池市西寺に比定されている。古代寺院跡としては立願寺廃寺・稲佐廃寺(註26)・中村廃寺(註27)・十蓮寺廃寺(註28)などがある。

集落遺跡の調査はおくれているが、近年調査された菊池市、赤星福土・水溜遺跡(註29)は大きな意義がある。その他、古代の土器を出土する地点は流域全般にみられるが未調査の部分が多い。

古代の墳墓としては、各地から火葬骨を収めた蔵骨器が出土しているが、その中で銅板墓誌を副葬した日置氏銅板墓誌出土地は重要である。

さらに、山鹿市の不動岩から出土した滑石製経筒には久安元年(1145年)の紀年銘を有する。

菊池川流域の条里(註30)は、先年県教委による調査が実施され、成果が公表されているので参照さ

れたい。

註１　乙益重隆「無土器時代の文化」『熊本県史・総説編』所収、昭和40年。

註２　註１に同じ。

註３　杉村彰一「熊本県鹿北町柿原発見の尖頭器」『考古学集刊』第３巻３号、昭和42年。

註４　富田紘一「原始・古代」『鹿本町史』所収、昭和51年。

註５　清水宗昭・高木正文「熊本県玉名郡菊水町発見の先土器時代遺物」『九州考古学』41～44号、昭和46年。

註６　坂本経堯・緒方勉他『三万田東原一調査概報』、泗水町教育委員会、昭和47年。

註７　島津義昭「熊本県菊池台地における縄文後晩期の遺跡一菊池市天城遺跡の場合一」九州史学会研究発表要旨、『九州考古学』53号、昭和53年。

註８　昭和45年、教育センター建設に伴って調査。未報告。

註９　原口長之・隈昭志他『牛草遺跡調査概報』、昭和43年。

註10　三島格「縄文文化人の生業」『熊本県史・総説編』所収、昭和40年。

註11　坂本経堯「古閑原貝塚調査抄報」熊本県文化財調査報告書第６集、昭和27年。

註12　菊池高校考古学部「無田原遺跡調査報告」『菊高部報』創刊号、昭和52年。

註13　註４に同じ。

註14　田辺哲夫『中道貝塚調査概要報告』　昭和27年。

註15　乙益重隆「斉藤山貝塚」『日本農耕文化の生成』所収、昭和37年。

註16　田辺哲夫・田添夏喜「ベッドを有する弥生末期の方形竪穴住居跡群一肥後下前原遺跡一」日本考古学協会第22回総会研究発表要旨、昭和33年。

註17　緒方勉他『諏訪原遺跡発掘調査概報』九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報、昭和46年。

註18　隈昭志・杉村彰一「熊本県山鹿市竜王山古墳調査報告」『考古学雑誌』第57巻３号、昭和47年。

註19　三島格・内藤芳篤他「山下古墳調査概報」『熊本史学』第50号、昭和52年。

註20　乙益重隆・田辺哲夫他「院塚古墳調査報告」熊本県文化財調査報告第６集、昭和40年。
坂本経堯「院塚古墳の研究」熊本県文化財調査報告第６集、昭和40年。

註21　松本健郎「熊本県横穴地名表」『熊本史学』第48号、昭和50年。

註22　山鹿市付城横穴群出土の遺物（鹿本高校蔵）の中には、Ⅰ期の須恵器が含まれている。

註23　註４に同じ。

註24　松本健郎「中九州における古式土師器の新資料」『考古学雑誌』第60巻３号、昭和49年。

註25　熊本県教育委員会『昭和42～44年度文化財調査概報』　昭和43年～45年。

註26　田辺哲夫「玉名郡倉址と推定される肥後立願寺の遺構」『熊本史学』第10号、昭和31年。

註27　田辺哲夫『稲佐廃寺址調査報告』　昭和28年。
松本雅明「稲佐廃寺の伽藍配置」『熊本史学』第50号、昭和52年。

註28　桑原憲彰「中村廃寺について」『熊本史学』第18号、昭和35年。

註29　原口長之・野田拓治他『赤星福土・水溜遺跡』　熊本県文化財調査報告第27集、昭和52年。

註30　日野尚志・規工川宏輔他『熊本県の条里』　熊本県文化財調査報告第25集、昭和52年。

第Ⅲ章　遺　跡　各　説

第１節　天岩戸岩陰遺跡

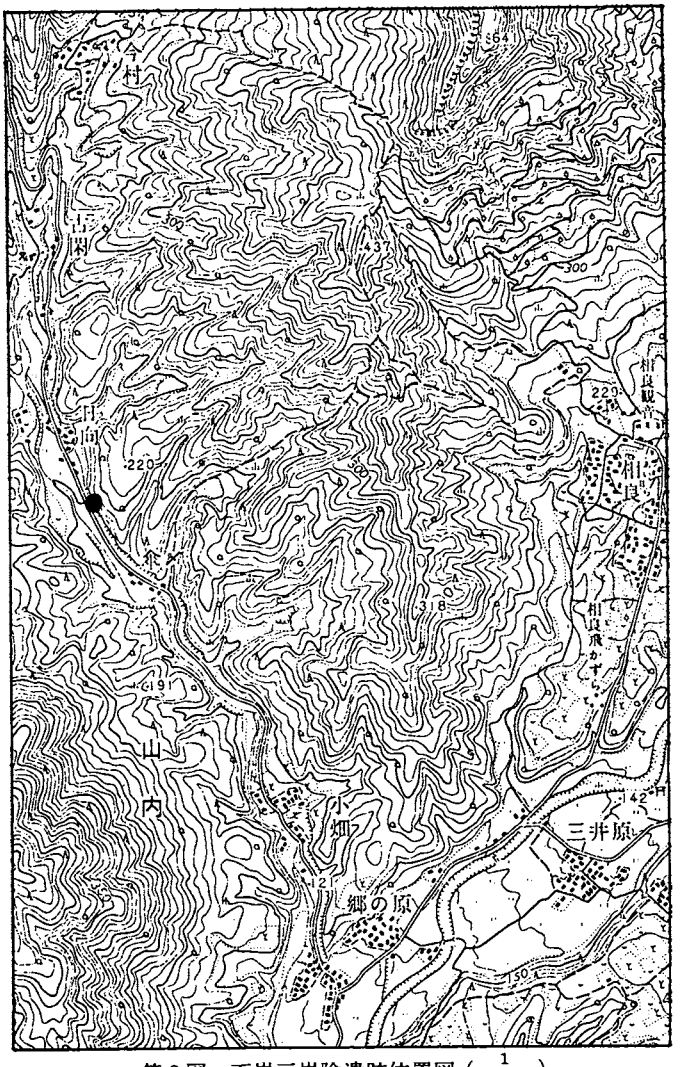
１．位置と概要（第２・３図）

鹿本郡菊鹿町大字山内字鶴次郎に位置する。（第２図）

熊本県と大分県の県境近くに八方ヶ岳（1,052m）があり、ここに水源を発して内田川が流れ菊池川に流入する。天岩戸岩陰遺跡は、内田川のさらに支流の山内川によって開析された谷の凝灰岩壁にある。

山内川は幅10～20mの小河川で、谷はほぼ南北に発達し、谷の幅は広い所で 100m強である。

谷の両側には低位な山塊が連なる。東側は300～600m級、西側は600～900m級の山脈があり、谷は狭隘である。谷の両側には凝灰岩壁が発達し、とくに東側面には約 2.5㎞にわたって断続する。



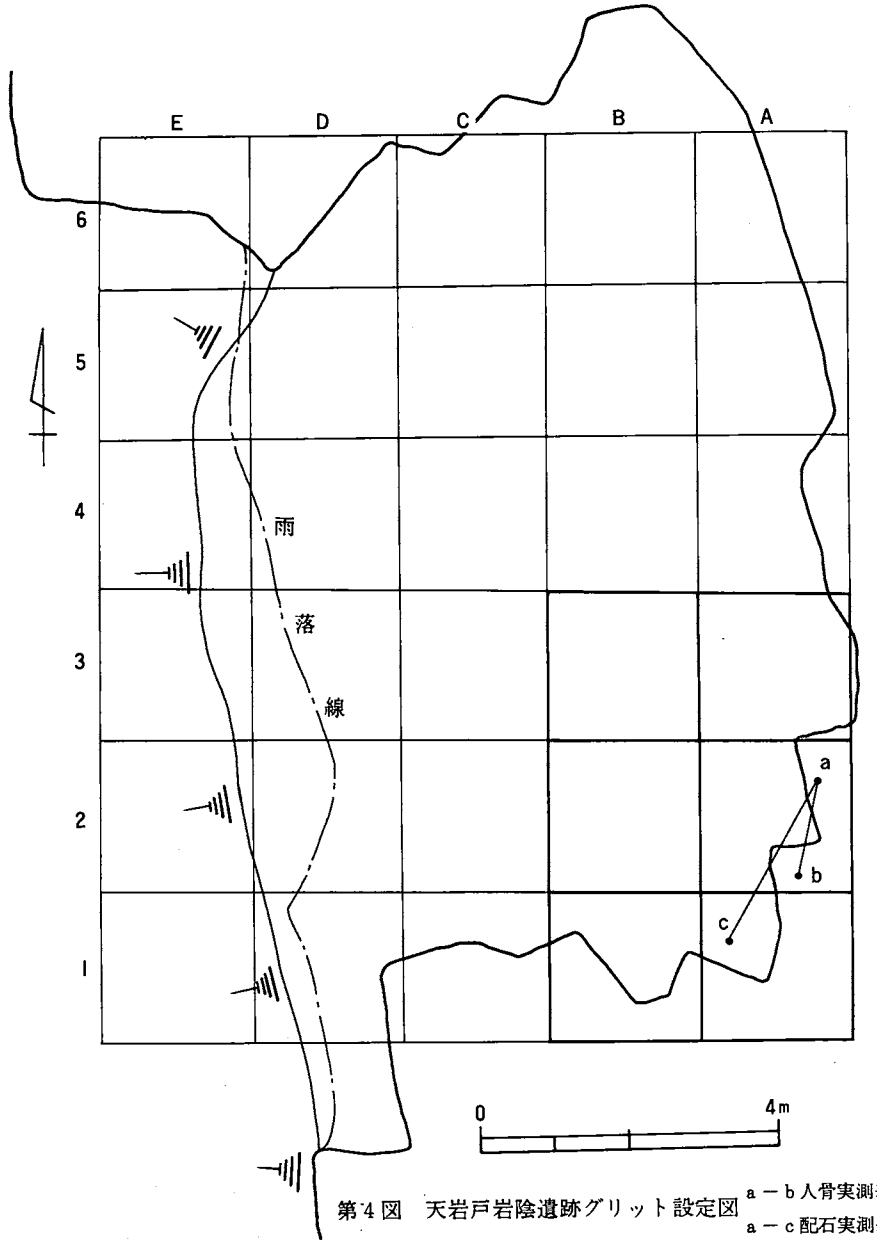
第２図　天岩戸岩陰遺跡位置図（$\frac{1}{25000}$）

遺跡はこの谷の東側の凝灰岩壁に形成された岩陰で、堆積土上面の海抜は約153.5mを測る。岩陰入口から山内川までの直線距離は約42mで、水面との比高差（調査時、11月６日測定）は約 9.5mを測る。岩陰

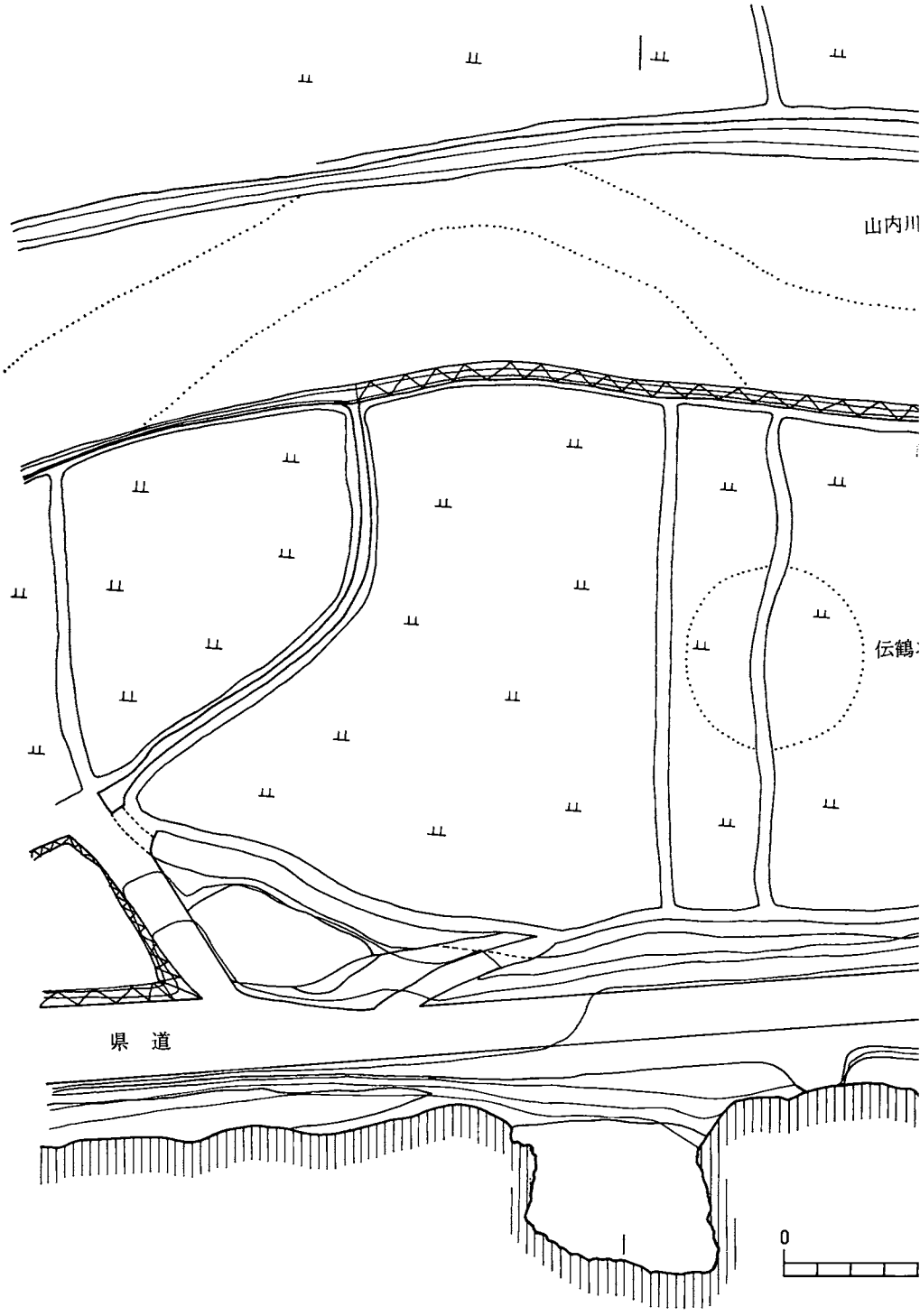
と山内川の間には水田が営まれ、対岸にもわずかな水田が開ける。このあたりの谷幅は比較的広く、約110ｍを測る。

岩陰は高さ約25ｍの凝灰岩壁に開口し、間口は11.5ｍ、奥行は最も深い所で８ｍを測る。

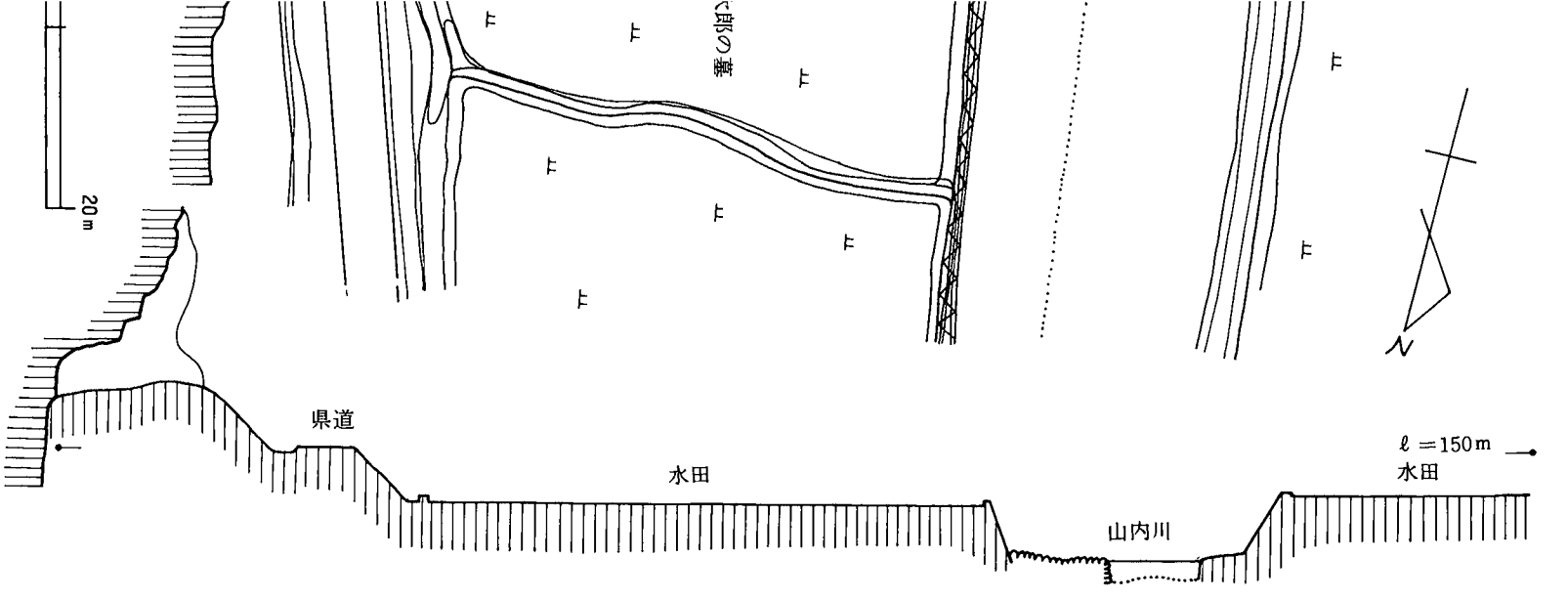
堆積土上に大小の石塊が落下し、さらに農業用廃材、家庭から廃棄された不燃物などが棄てられて、滅多に人の近寄らない場所となっていた。



第4図　天岩戸岩陰遺跡グリット設定図　a－b人骨実測基点　a－c配石実測基点



第３図　天岩戸岩陰遺跡地形図


20m
県道
水田
山内川
水田
ℓ＝150m

昭和49年11月、菊池川流域の遺跡の探求に情熱的に取り組み、各地の踏査を実施していた古閑三博・平島康弘（菊鹿町教育委員会）・木庭春生（菊鹿町文化財保護委員長）氏によって発見され、縄文・弥生時代の土器が採集された。

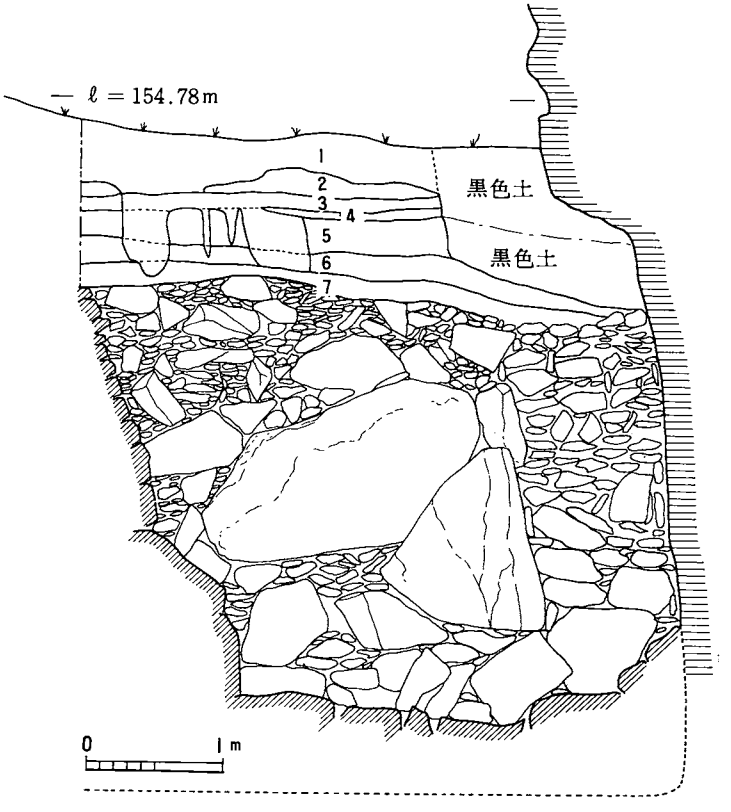
古閑氏からの通報で文化課長等が現地を踏査、有力な岩陰遺跡であることを確認し、昭和50年度調査地に選定したものである。

2. 調査の概要

調査は、昭和50年７月25日に開始し、11月10日に終了した。

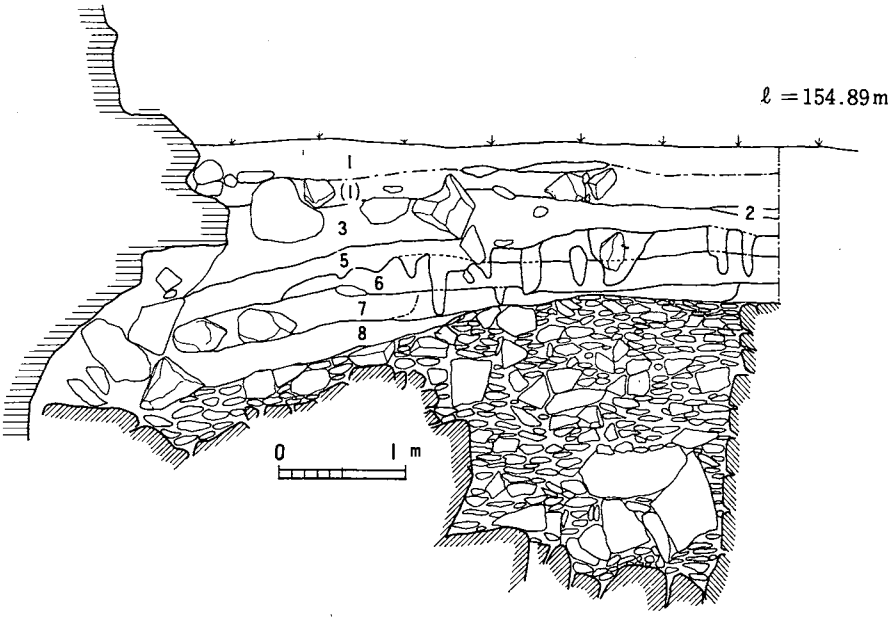
調査にあたり、２ｍ方眼のグリットを南北方位に設定し、東から西へＡ～Ｅ、南から北へ１～６として各区を呼称することにした（第４図）。発掘を実施したのはＡ—１～Ａ—３、Ｂ—１～Ｂ—３区の６区画で、他の部分は掘開しなかった。

層序は第５・６図に示すとおりであるが、いたるところに攪乱がみられ、層位的な発掘は困難をきわめた。しかも、特に壁ぎわにできた空洞（壁と転石の間隙）には各時代の遺物が転落堆積していた。ただ一つ救いであったのは、間層的にみられる灰層の存在で、この層により層序の判別を行いながら作業を実施した。この灰層というのは分析の結果、植物灰と火山性のシラス状土壌と判明した（付論１参照）が、これらと凝灰岩中より溶出した石灰分とが固着し、場所によってはセメント状に固まっていた。



第５図　天岩戸岩陰遺跡断面図（Ａ－３・Ｂ－３区北壁）

遺物の包含される文化層は約1.1～1.8mの厚さに及び、概ね８層に区分できた。その下は全く土壌を含まず、凝灰岩の落石が３ｍ以上に及び堆積して



第６図　天岩戸岩陰遺跡断面図（Ｂ－１～Ｂ－３区西壁）

いる。堆積土上面から約4.5ｍの深さまでは落石を除去し、基盤の状態と下部の遺物包含の有無を確認しようとしたが、湧水と断面壁崩壊の危険があり、それ以下の発掘は断念した。

出土した遺構・遺物は次に述べるが、時代的には縄文前・中・後・晩期、弥生前・中・後期、古墳前期、奈良時代、そして近・現代のものを含み、長期間に亘る岩陰利用を物語っている。

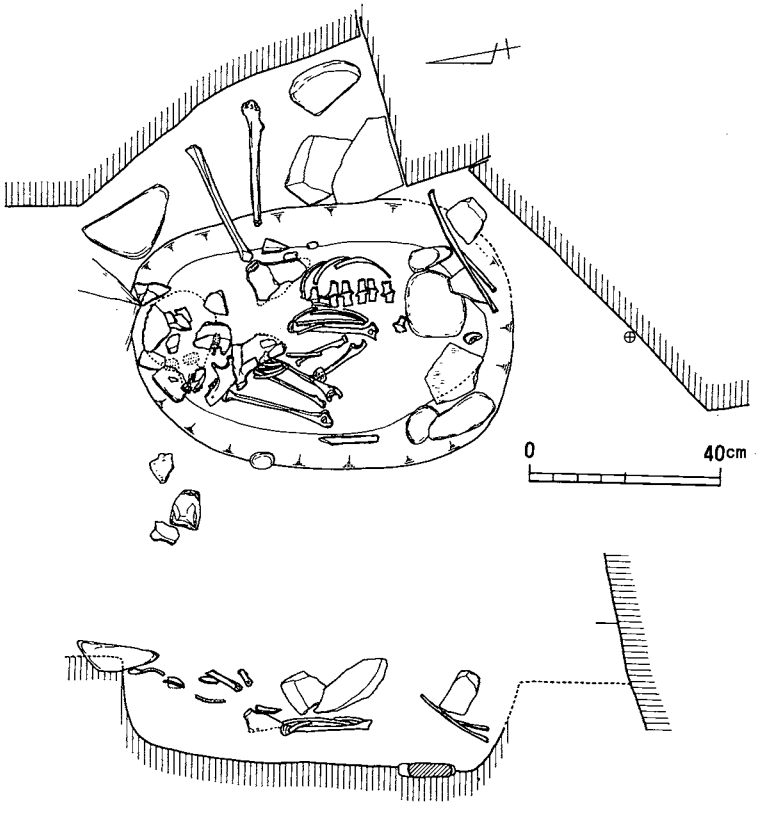
3．遺構と遺物

(1) 遺　構

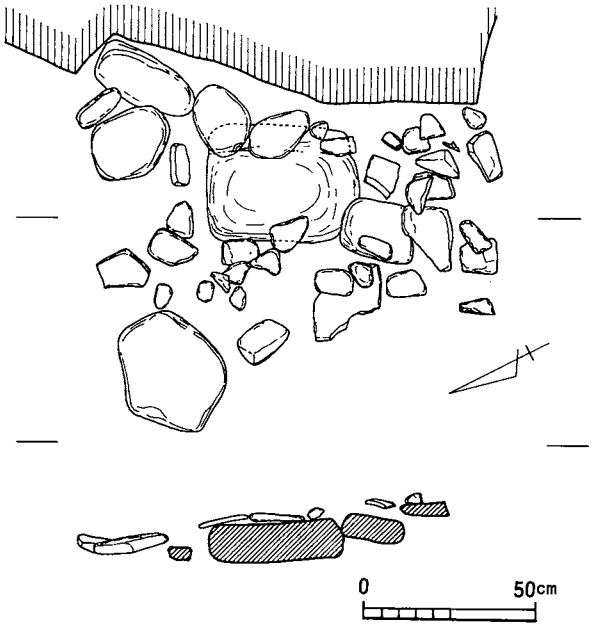
検出した遺構はＡ―２区における土壙墓と配石遺構である。

土壙墓（第７図）はＡ―２区の東側壁ぎわに検出された。掘り込み面が確実に把握できなかったが、長さ約80cm、幅55cmの楕円形を呈し、深さは20cm程であるが本来はもう少し深いものであったと考えられる。墓壙内から右側欧屈葬の人骨１体と数個の河原石、土器片が検出された。土器は後に分類した天岩戸XV類（人骨と伴出した土器は第16図112と第20図148）のもので、縄文晩期黒川式に比定できる。人骨についての詳細は付論１を参照されたい。

配石遺構（第８図）は性格不明である。大型の石皿や河原石がほぼ同レベルで集合し、中には石斧も数点混在した。壁ぎわにみられる黒色の堆積土中にみられ、正確な年代比定はむずかしいが、第５層相当と考えられ、縄文後期と思われる。下部には土壙墓などの遺構は認められなかった。



第７図　天岩戸岩陰遺跡Ａ－２区人骨出土状態



第８図　天岩戸岩陰遺跡Ａ－２区配石遺構実測図

(2) 遺　物

土器・石器・骨角器・自然遺物等豊富な出土品をみた。先にも述べたように、攪乱等によりすべて層位的に把握されたものではないので、種別に分類して記述することとする。

イ、縄文式土器

出土土器の大半を占め、時期も前期・中期・後期・晩期の各期に及ぶ。出土した縄文式土器を形態や出土層位・既知の編年を参考にして次の17類に分類した。なお、分類は精製土器と粗製土器とに大別し、さらに細分することにした。

天岩戸Ⅰ類（第9図1～6）

胎土に滑石又は雲母を含み、器壁は比較的薄い。焼成は良く、暗赤褐色を呈する。文様はヘラ状(または細い棒状)のものによる平行線を主体とした幾何学的文様で、刺突文も組み合せられる。第9図1にみられる器形は深鉢で、口縁部は低い波状を呈し、わずかに外反する。内面には貝殻条痕がわずかに認められる。

このⅠ類土器は数は少ないが文化層の最下部、落石層との境から出土し、本遺跡における年代の上限を示すものといえる。

天岩戸Ⅱ類（第9図7・8）

鋭利なヘラ状施文具により、直線及び曲線的な細沈線を施す。器壁は薄く、胎土・焼成も良い。外面は軽くヘラ削りされ、内面はナデ調整。図示した2点のみ（同一個体と思われる）の出土である。口縁部先端はわずかに外反し、口径は大きい。

天岩戸Ⅲ類（第9図9～12）

胎土に滑石を含み、凹線文を施すもの。凹線文は指頭によるものではなく、施文具を使用している。器壁はやや厚く、内外面ともに凹凸がある。大きな破片はなく、器形を窺えるものはない。

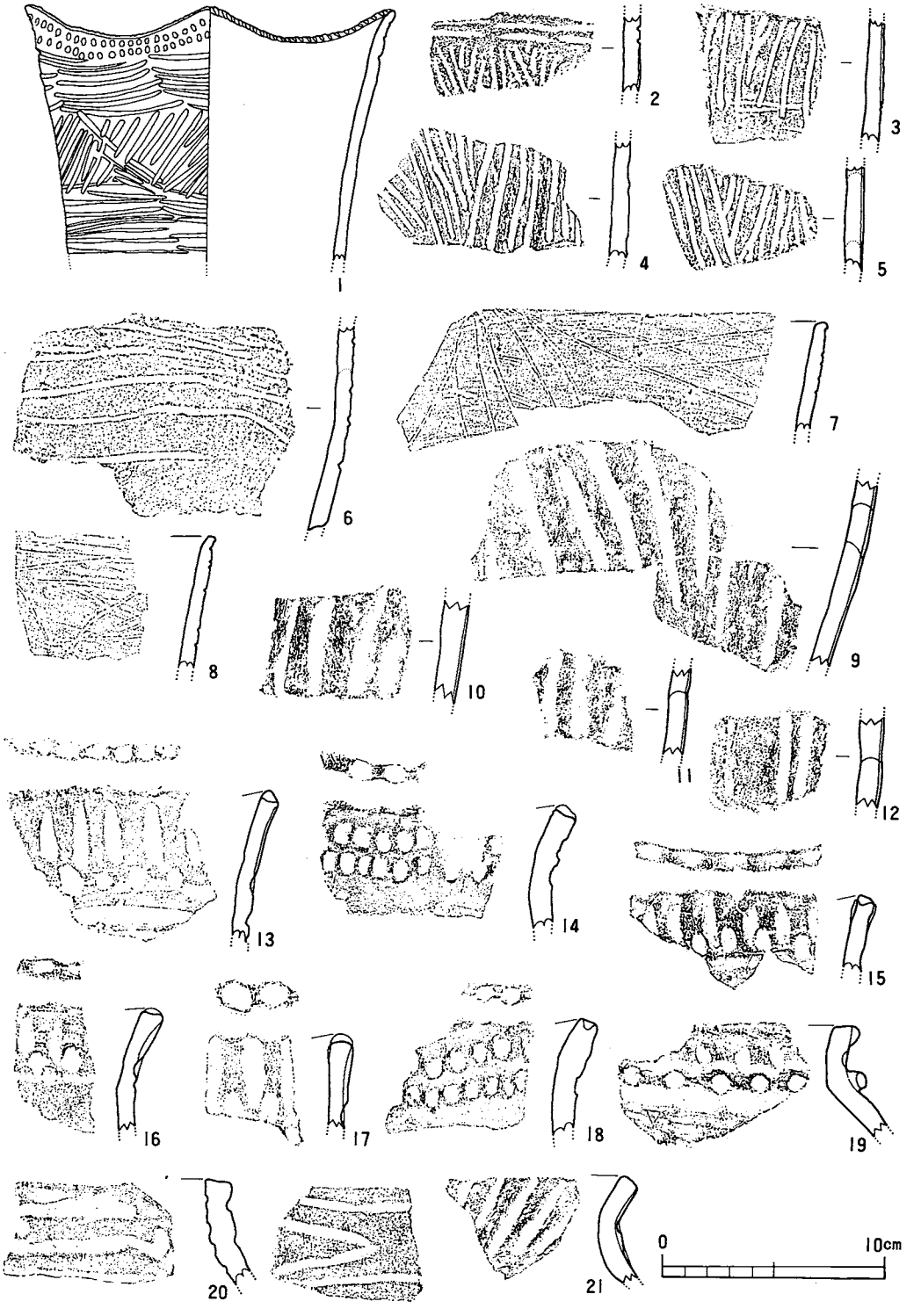
天岩戸Ⅳ類（第9図13～21）

凹線文・押点文を主体とするが、口縁部がわずかに肥厚し、文様帯も口縁部に限られる。口唇部が押圧され凹凸をなすもの（Ⅳa類）と平坦になでられるものに細分できる。胎土に滑石を含むものもわずかにあり、Ⅳb類には口縁部内面にも施文されるものがある。

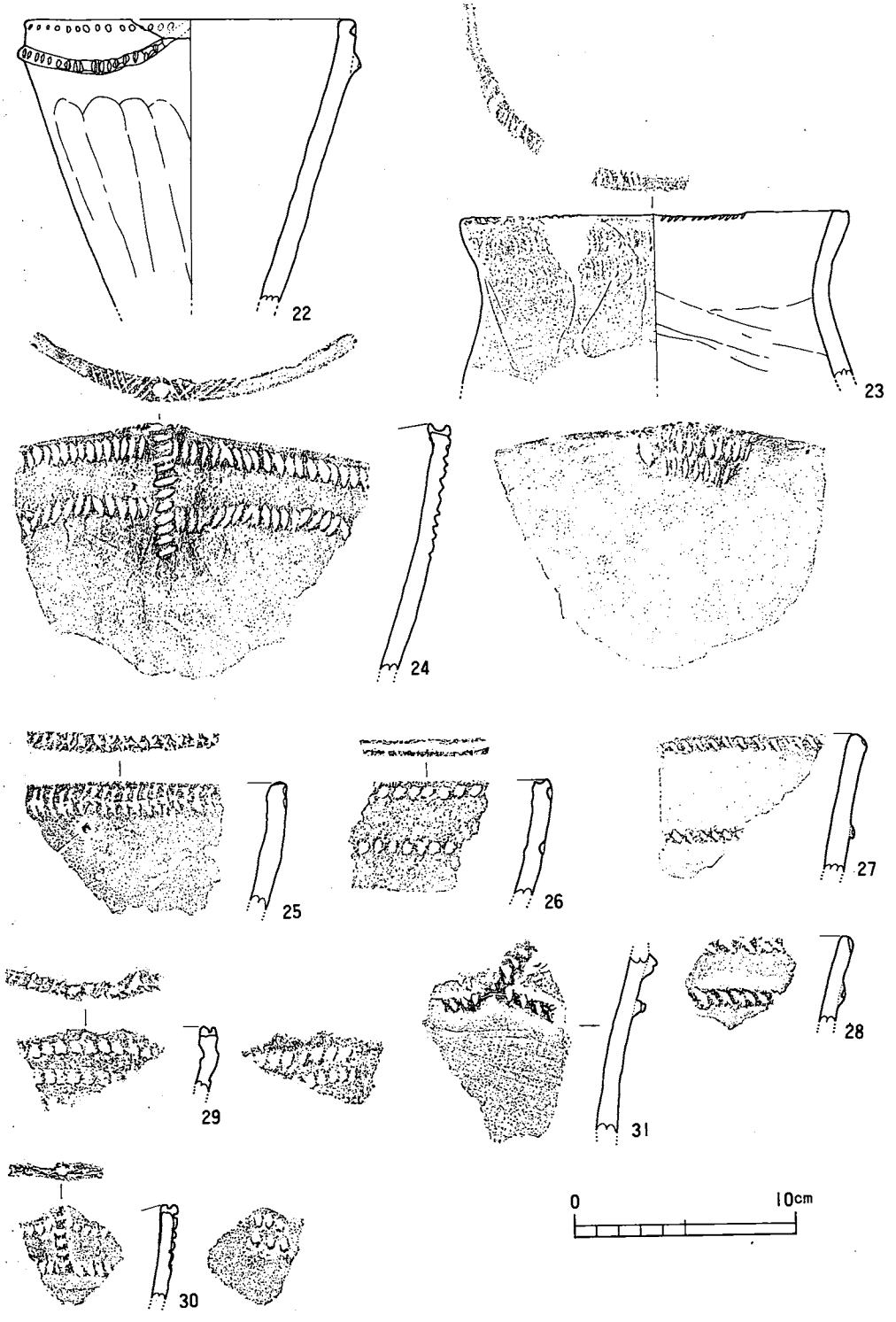
Ⅳa類の口縁部はわずかに外反するものが多く、Ⅳb類にはわずかに内傾するものと外反するものがある。

天岩戸Ⅴ類（第10図22～31）

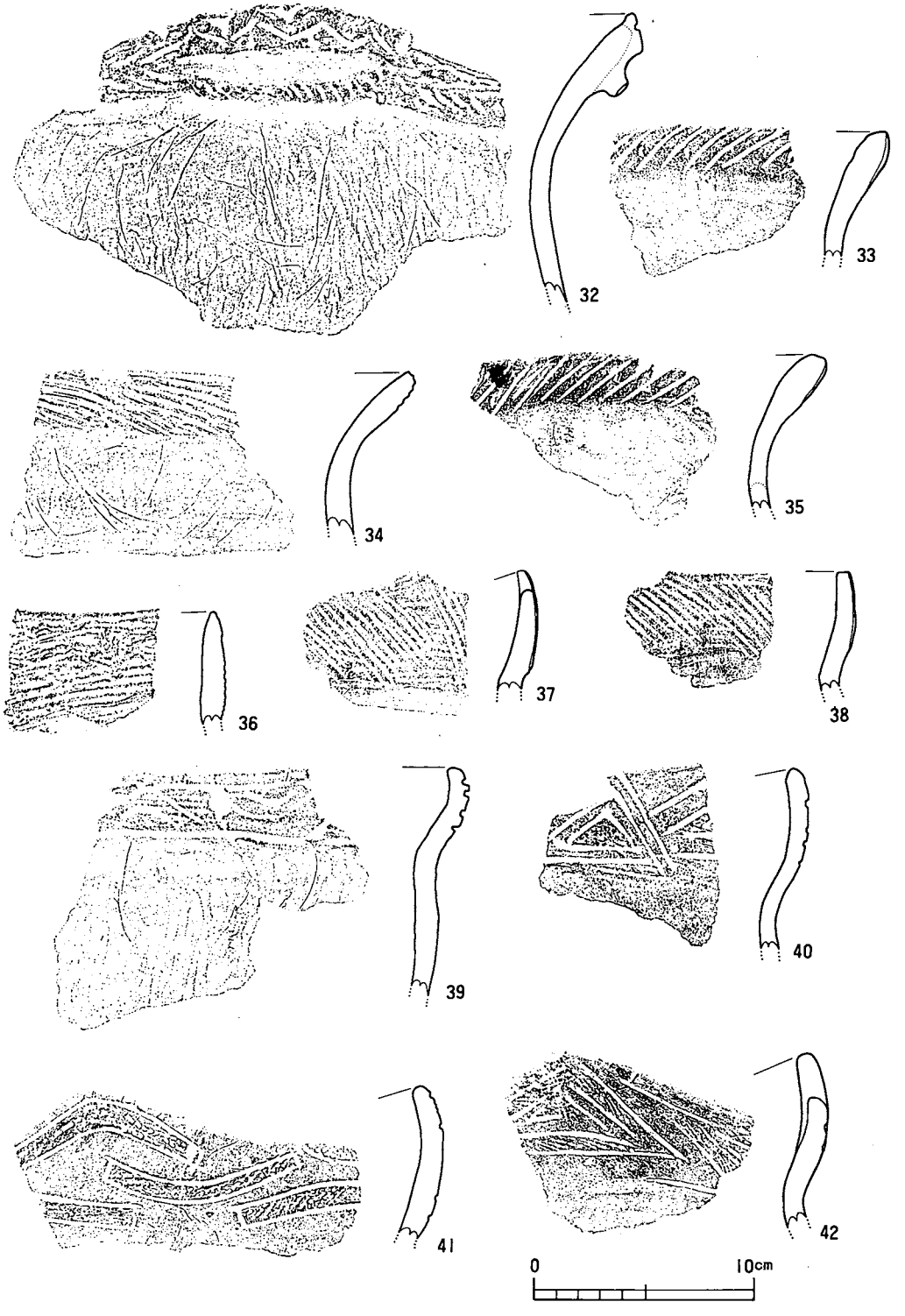
小型の深鉢形の土器で、連続刺突文あるいは貼付凸帯への刻み目文を連続させる。口唇部あるいは内面にも施文されるものがあり、口縁部に山形の突起をもつものもある。施文方法としてはヘラ状のものの他に貝圧によるものもみられる。頸部がくびれない単純な器形が多いが、頸部がくびれて口縁部がわずかに外反するものもある。全般的に胎土が悪く、整形・調整は雑で



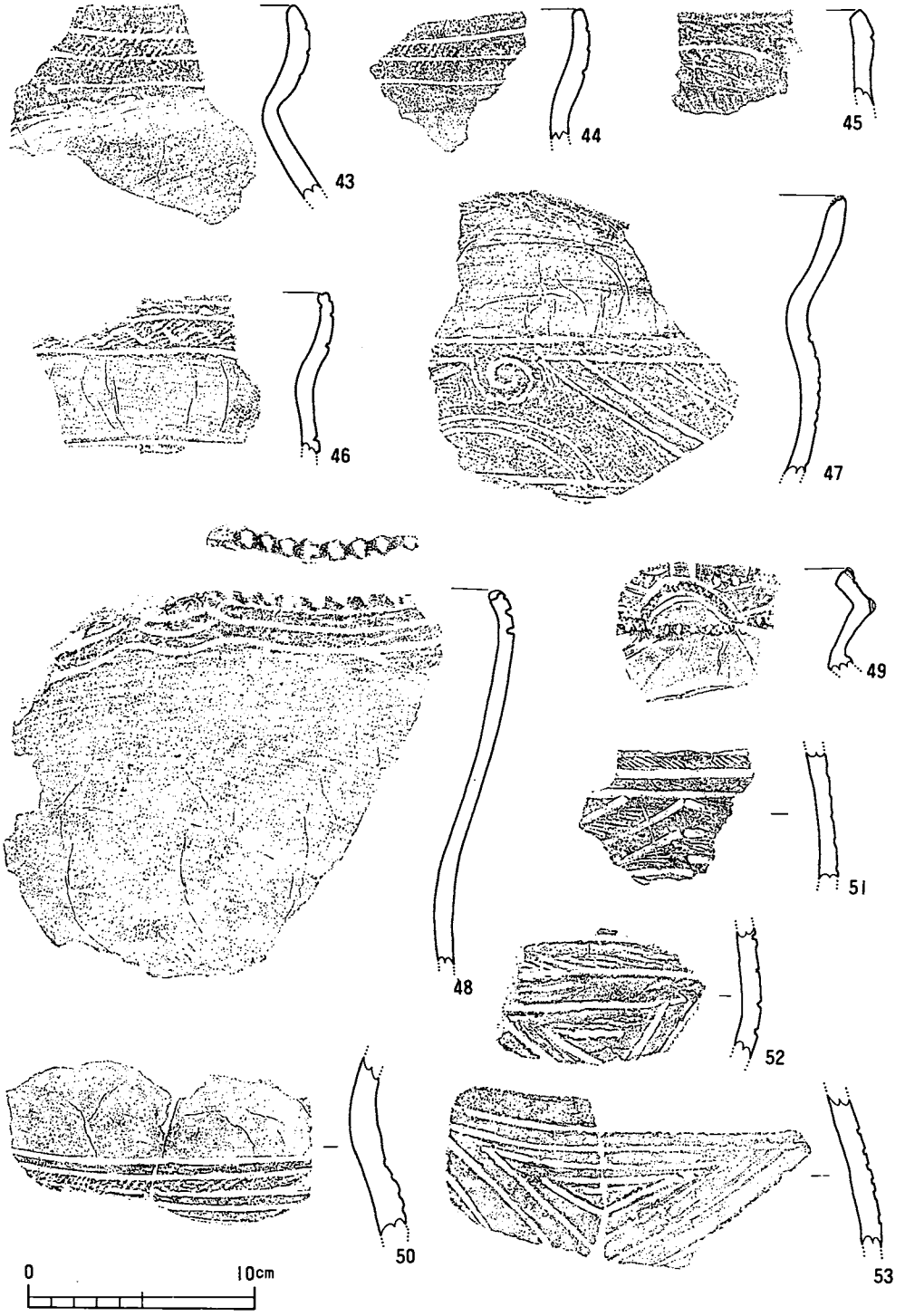
第９図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類）



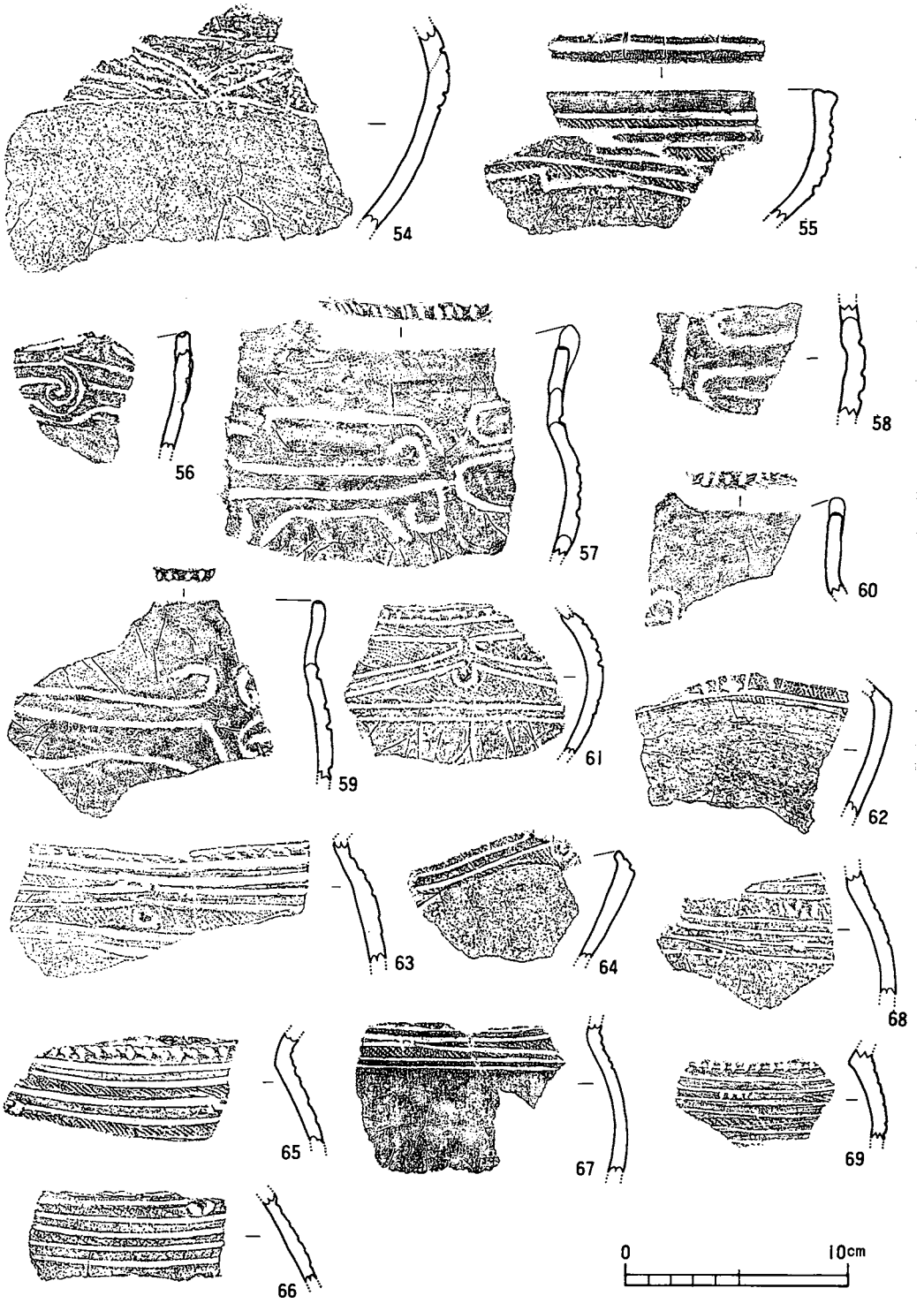
第10図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図（Ⅴ類）



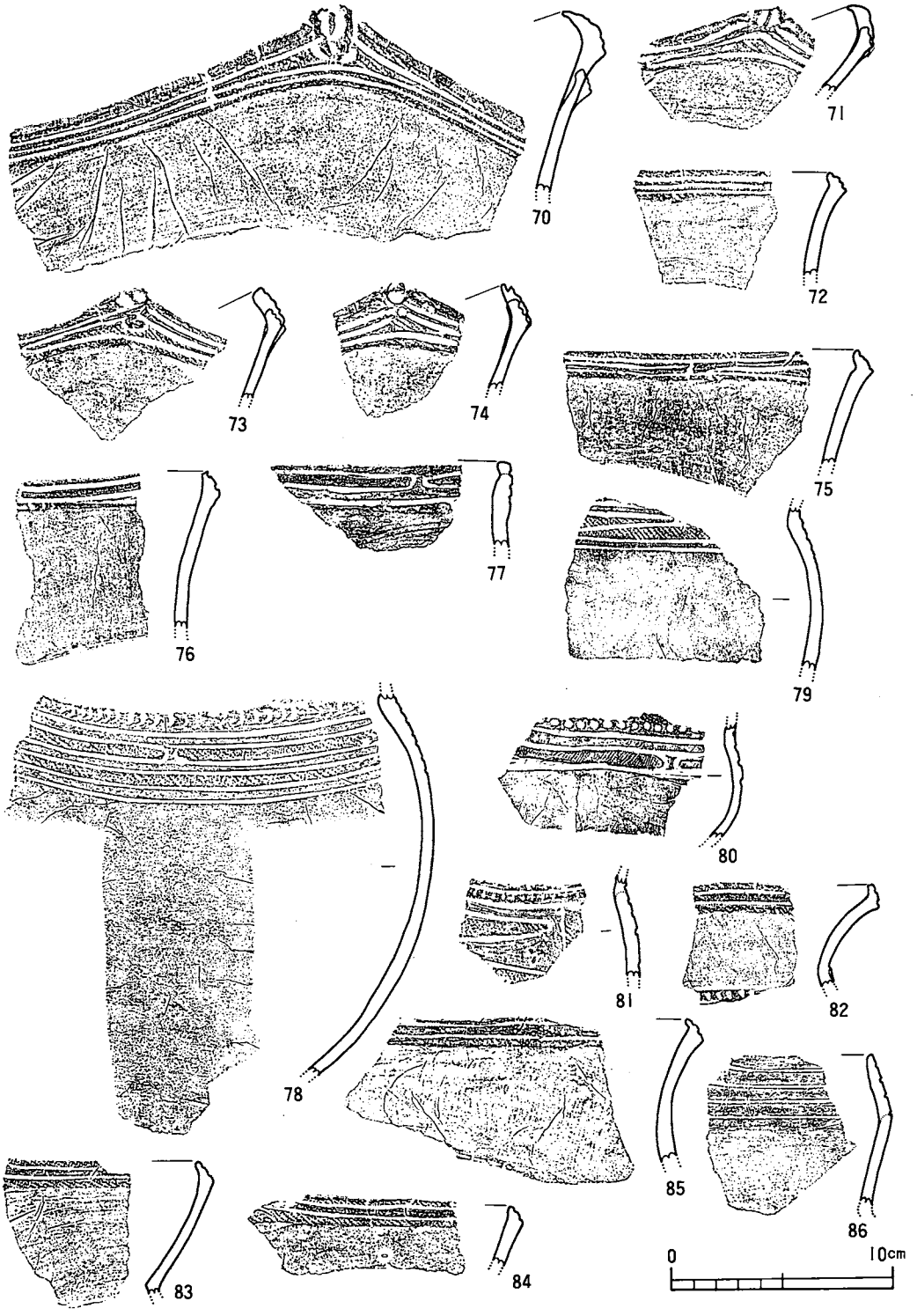
第11図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図（Ⅵ・Ⅶ類）



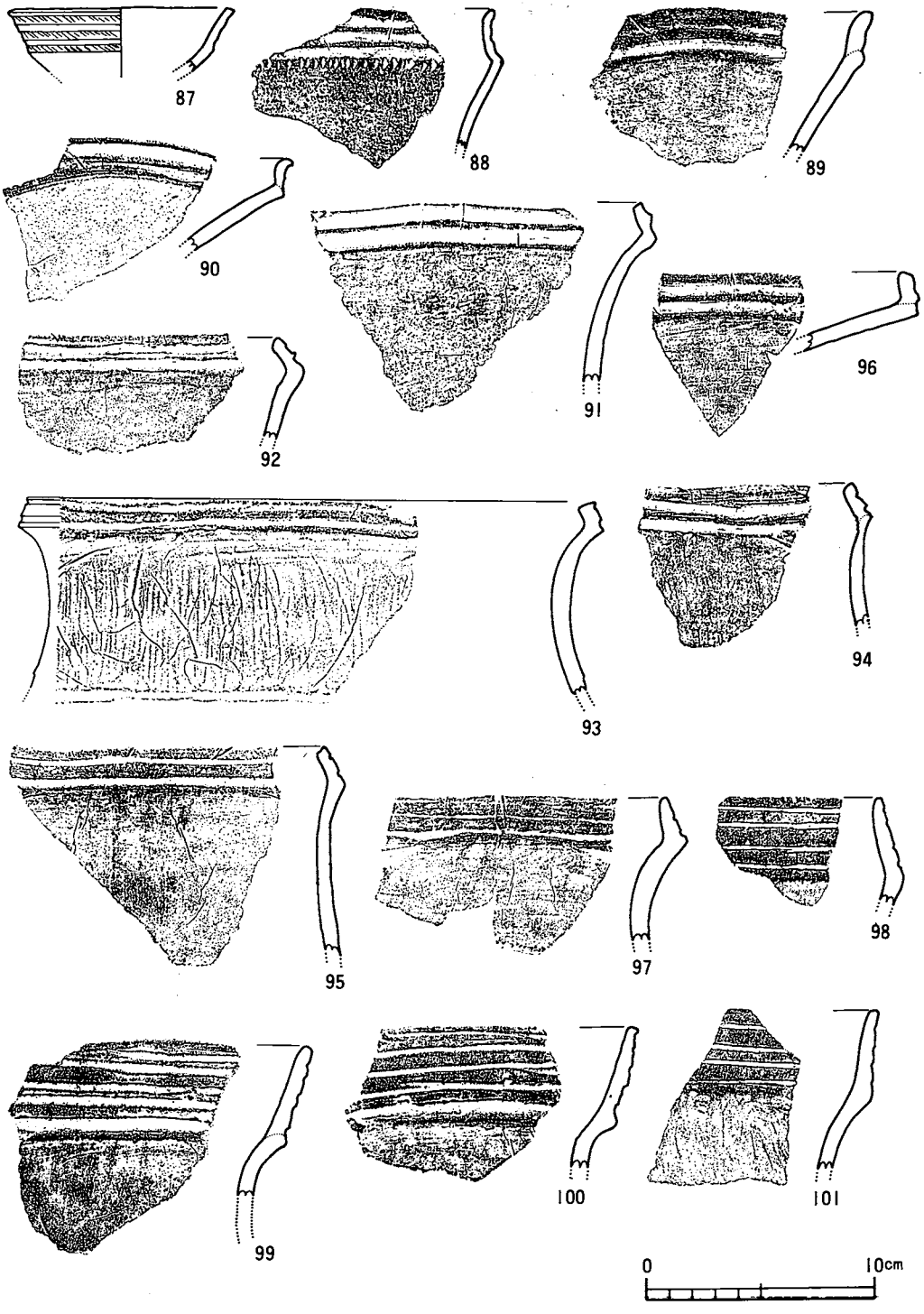
第12図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図（Ⅶ類）



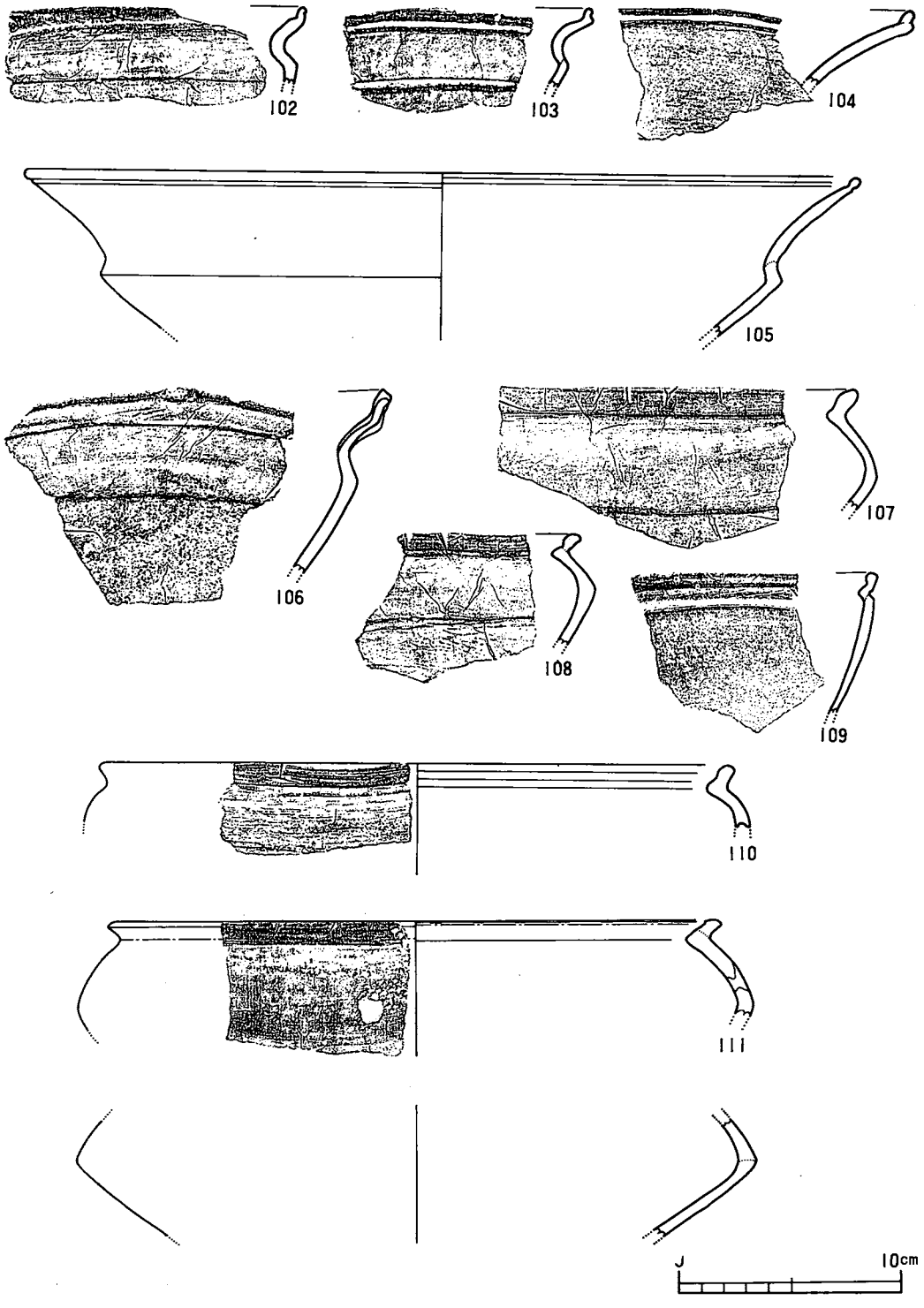
第13図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図（Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ類）



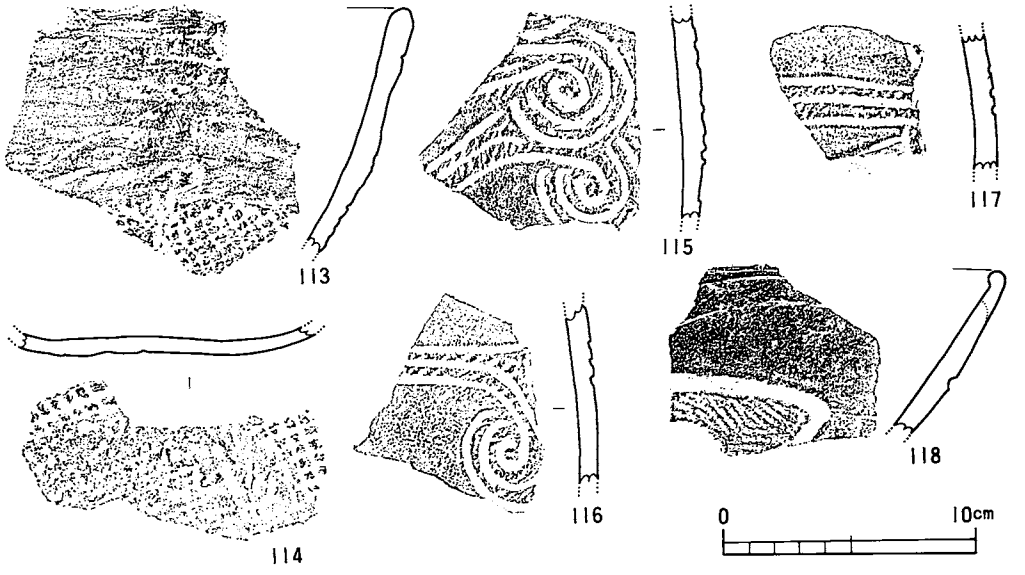
第14図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図（Ⅺ類）



第15図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図（XI・XII・XIII類）



第16図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図（XVI・XV類）



第17図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図（XVI類・類不明）

ある。

天岩戸VI類（第11図32～35）

口縁部は肥厚して外反し、口縁部に文様帯をもつもの。文様は粘土貼付による所謂逆W字文の他は、ヘラ状施文具による斜行線あるいは綾杉状文である。

天岩戸VII類（第11図36～42、第12図43～53、第13図54）

口縁部は内弯し、口縁部及び頸部に文様帯を有する。文様はヘラ状施文具による幾何学文、擬縄文、擬縄文と幾何学文の組合せがあり、稀に口唇部に押圧により凹凸がみられる。体部内外面はヘラ磨きが施されるものが多いが、貝殻条痕を残すものもある。この類はさらに細分の必要があると考えられるが、ここでは一括しておいた。

51～54は、VII類の口縁部に接続する胴部と考えられる。いずれも擬縄文や幾何学文が施される。50はあるいはVI類の胴部の可能性がある。

天岩戸VIII類（第13図55・56）

内外面研磨され、磨消縄文や渦巻文を施す。色調は黒褐色を呈する。

天岩戸IX類（第13図57～60）

口縁部に山形の突起を有し、深い沈線による幾何学文が施される。口唇部に刺突を連続し、胎土・焼成ともに他の土器とは全く異なっている。

天岩戸X類（第13図61～64）

磨消縄文に渦巻文が組合せられるもので、頸部には連点文が施される。内外面ヘラ磨きが施

され、口縁部は波状をなす。

天岩戸XI類（第13図65～69、第14図70～86、第15図87～91）

X類とほぼ共通性を有するが、渦巻文が消え、代って2個単位の押点やx字文が施される。細線平行文や、口縁部に凹線を施したものも含まれる。この類は現在細分作業が進められていると聞く。

天岩戸XII類（第15図93～96）

くの字に屈曲する口縁を特徴とし、口唇は角ばる。口縁部に平行文が描かれる。他は文様がない。内外面はヘラ磨きが施される。

天岩戸VIII類（第15図97～101）

XII類との相違点は、口唇部が丸味をおびることと、口縁部の平行線の描き方に相違がみられることである。口縁部がわずかに外反するものがある。

天岩戸XIV類（第16図102～106）

内外面の研磨が著しく、口縁部の屈曲は萎縮化し、文様も沈線が施されるにすぎない。わずかに波状口縁をなし、頂部にわずかに押圧を施すものである。胴部には強い屈曲がある。

天岩戸XV類（第16図107～112）

口縁部の屈曲は簡略化し、口縁部外面の沈線も消える。内外面の研磨が著しく、黒色を呈することはXIV類と同様である。

天岩戸XVI類（第17図113・114）

筵状圧痕を有する組織痕文土器である。体部上半はヘラ削りされ、中位から底部にかけて筵状の圧痕を有する。

類不明の精製土器（第17図115～118）

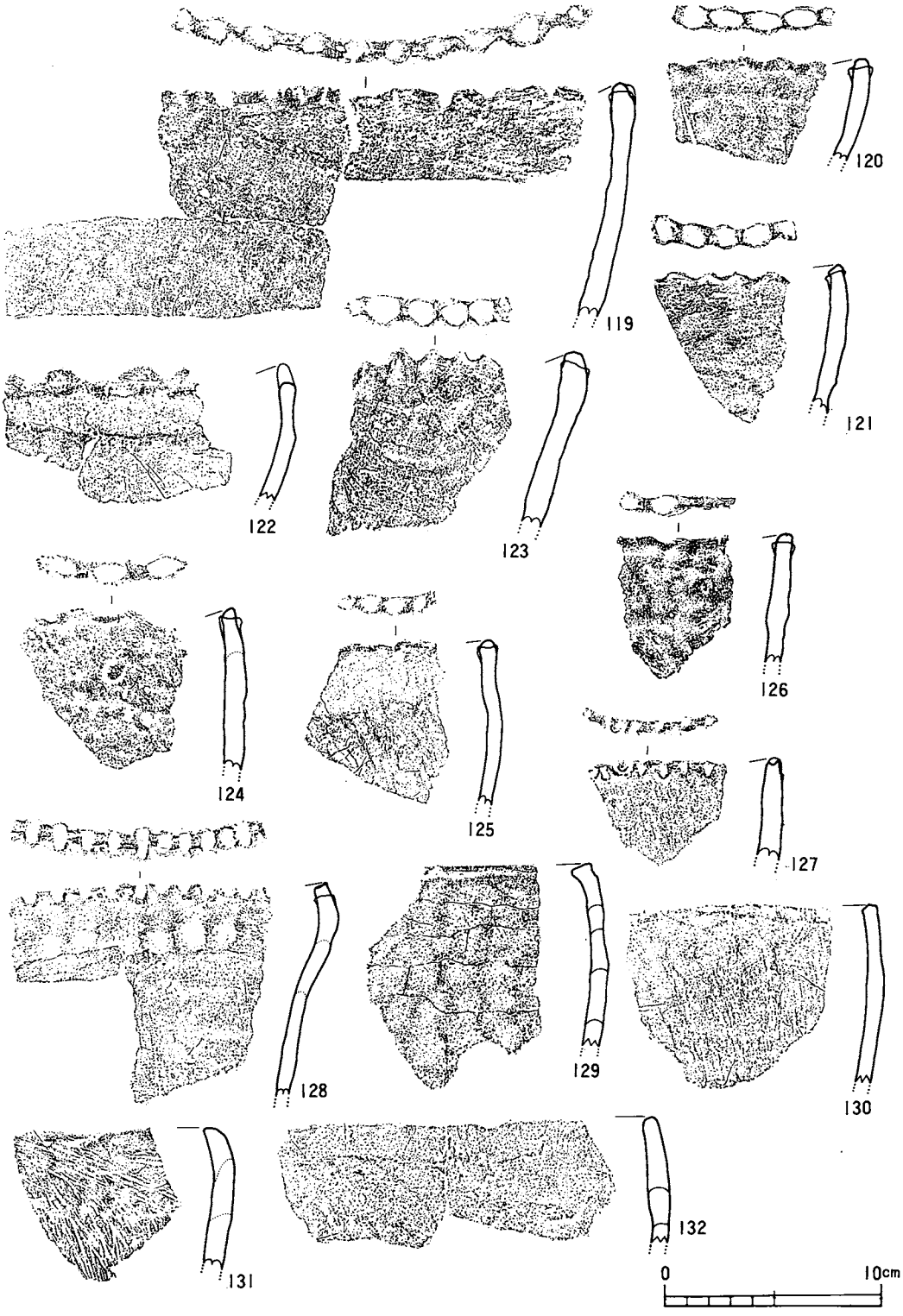
著者の知識では類別できないものである。磨消縄文を施し、渦巻文などが施される。

粗製土器

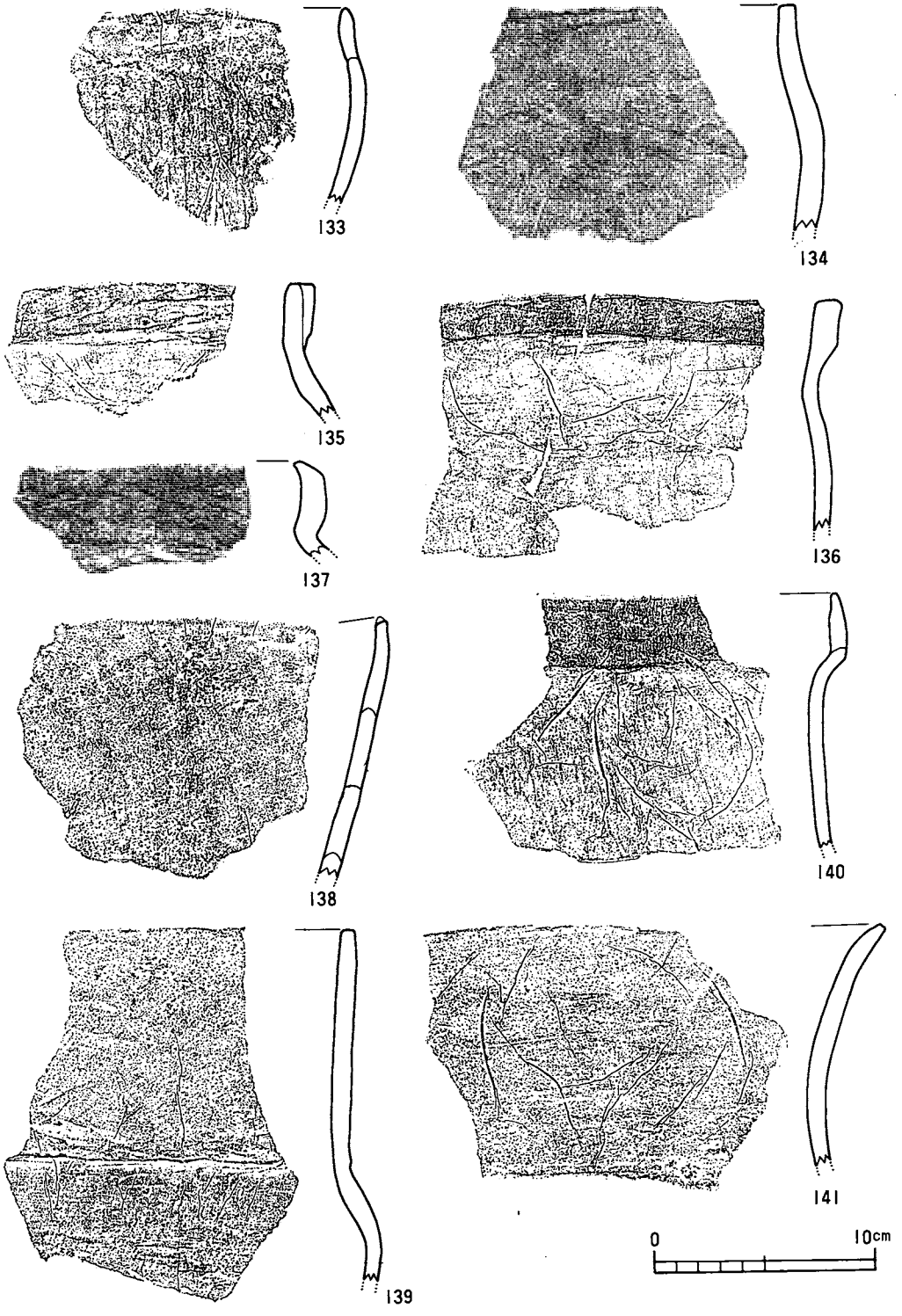
以上が精製土器の類別であるが、次に粗製土器について、精製土器の類別に対照して説明を加える。

粗製土器のうち、口唇部に指あるいは棒状施文具で押圧を加え、凹凸をなす一群（第18図119～128）がある。これらの大半はIII類・IV類に伴うものと考えられるが、127・128はやや後出の可能性がある。さらに、口唇部が平坦なものの中には、129・157・158のように、III類・IV類に伴うものがあげられる。130～134もIII・IV類に伴う可能性が強い。

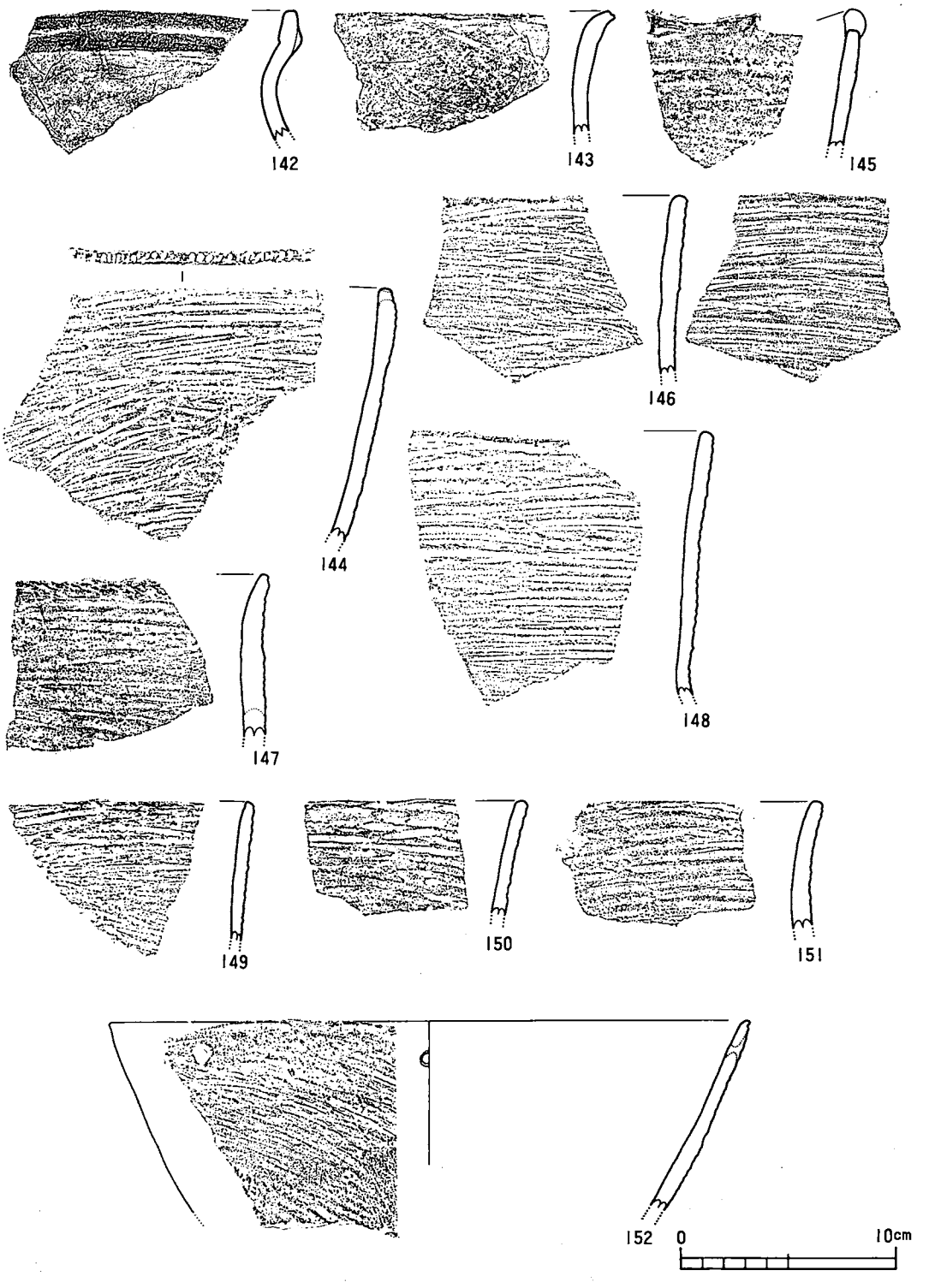
135・136は口唇部が肥厚し、体部外面はヘラ削りされ、IV類に伴うものと考えられるが、VI類に伴なう可能性もある。137は口縁部の形態からみるとVII類に伴うと考えられる。138は無文であるが、わずかに山形の突起が認められ、胎土焼成・器面の調整はV類に酷似する。159～162は器面の調整や胎土・焼成から、VI・VII類に伴うと考えられるが、現状では細分不可



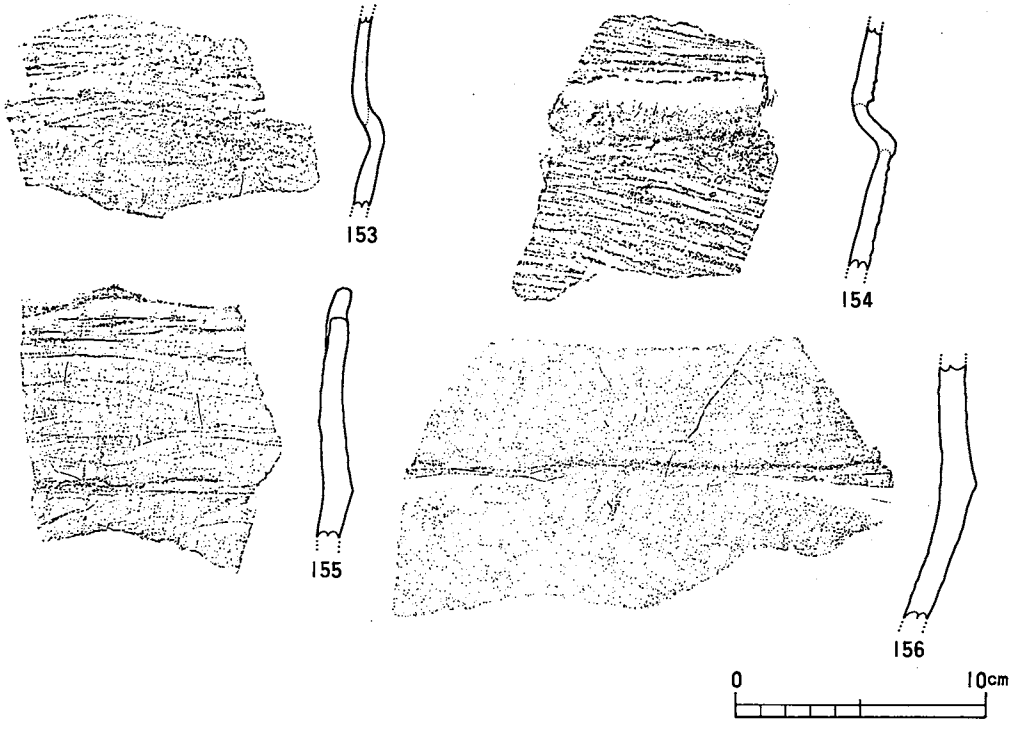
第18図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図



第19図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図



第20図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器



第21図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図

能である。

139は三万田東原遺跡に類例がみられ、XI類に伴うものと考えられる。140～143はXII類に伴う無文土器である。(註1)

144～154は外面には貝殻条痕を施し、口縁部は直行あるいはわずかに外反し、体部は153・154のような屈曲をみる。144は口唇部にも押圧が加えられ、口縁部はわずかに内弯する。やや先行する形態と考えられる。この類には俵状の突起を有するもの（145）があり、XV類に伴うものであることが推測される。155・156は外面がヘラ削りされ、明瞭に屈曲がみられる。155はわずかに波状口縁をなす。XIV・XV類のいずれかに属するかはにわかには決しかねる。

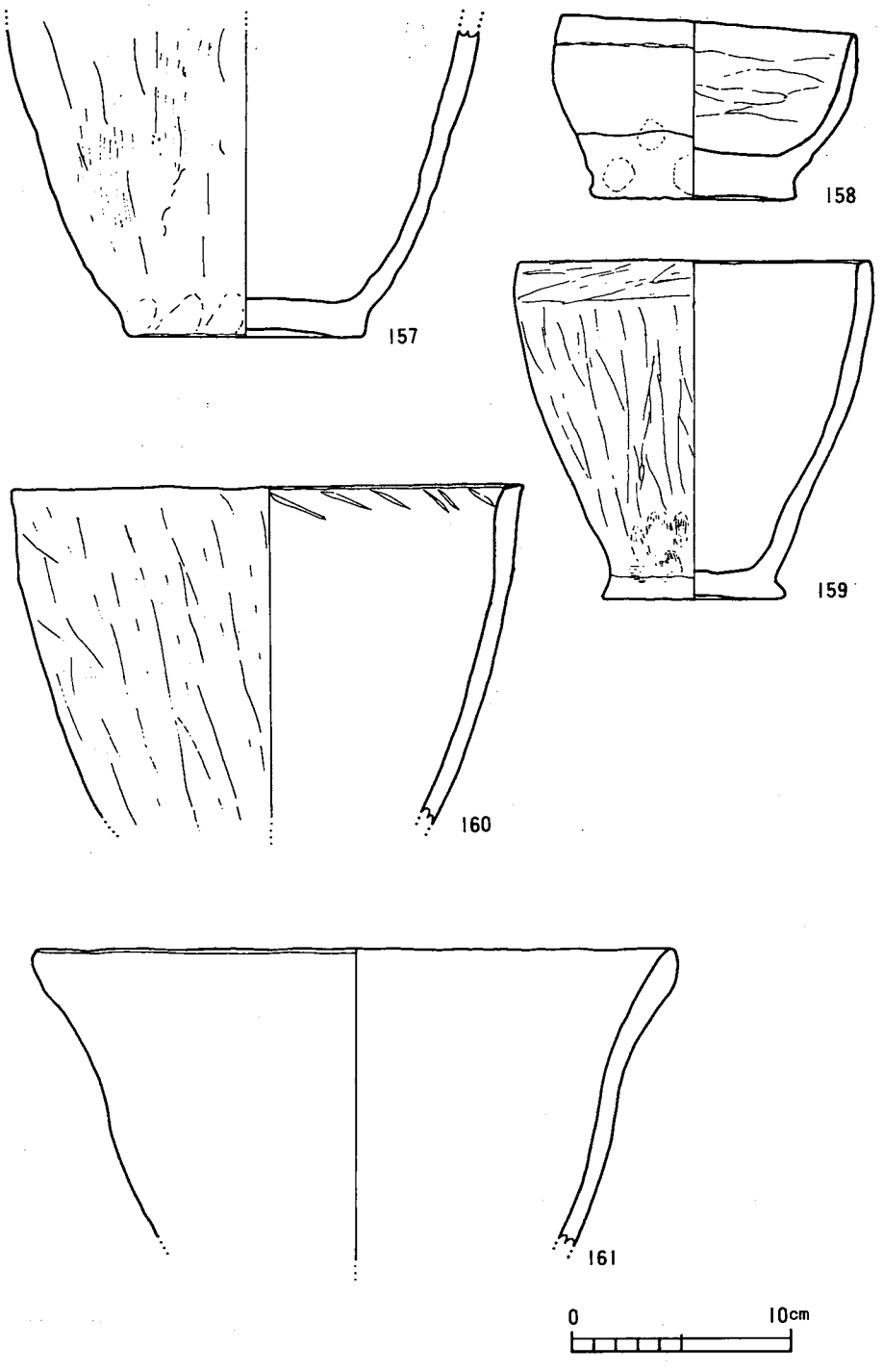
165は小型のもので、全面にヘラ磨きが施される。整形は雑である。胎土・焼成・調整からみてXI類に属すると考えられる。

底部　（第24図166～178）

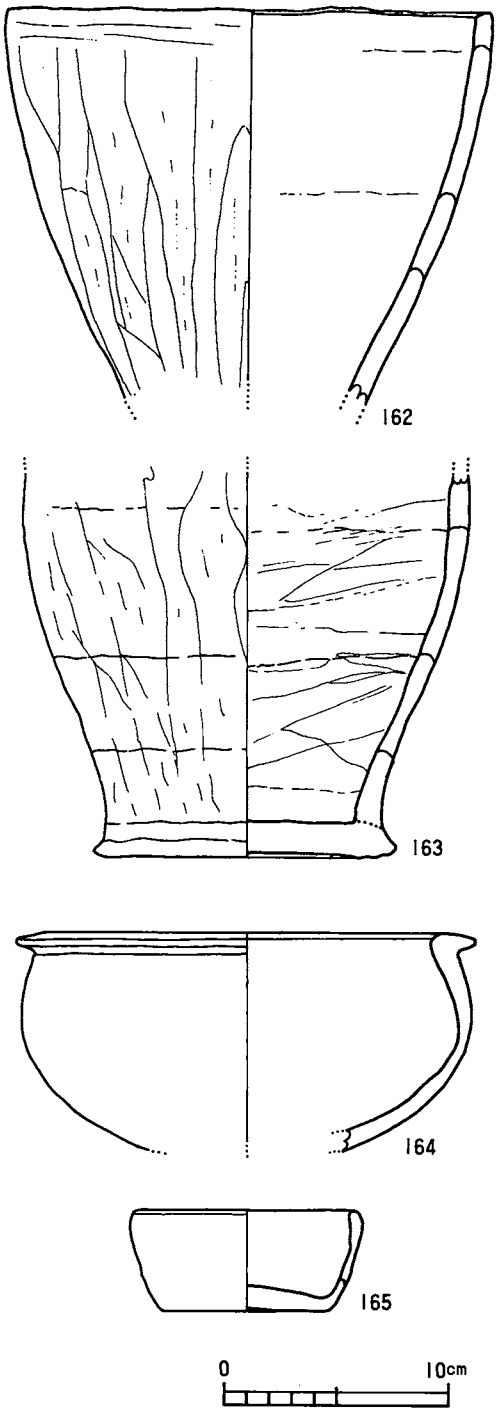
平底・尖り気味の丸底、中窪みのものがある。

これらの縄文土器の位置づけを簡単に記す。

I類としたのは曽畑式土器に該当し、曽畑式の中では比較的新しいものと考えられる。II類は文様形態によって前に配置したが、時期的にはXV類と併行する晩期に位置づけられる。III類は阿高式系の土器で、IV類と共存するが、やや先行するか微妙なところである。IV類は南福寺(註2)



第22図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図



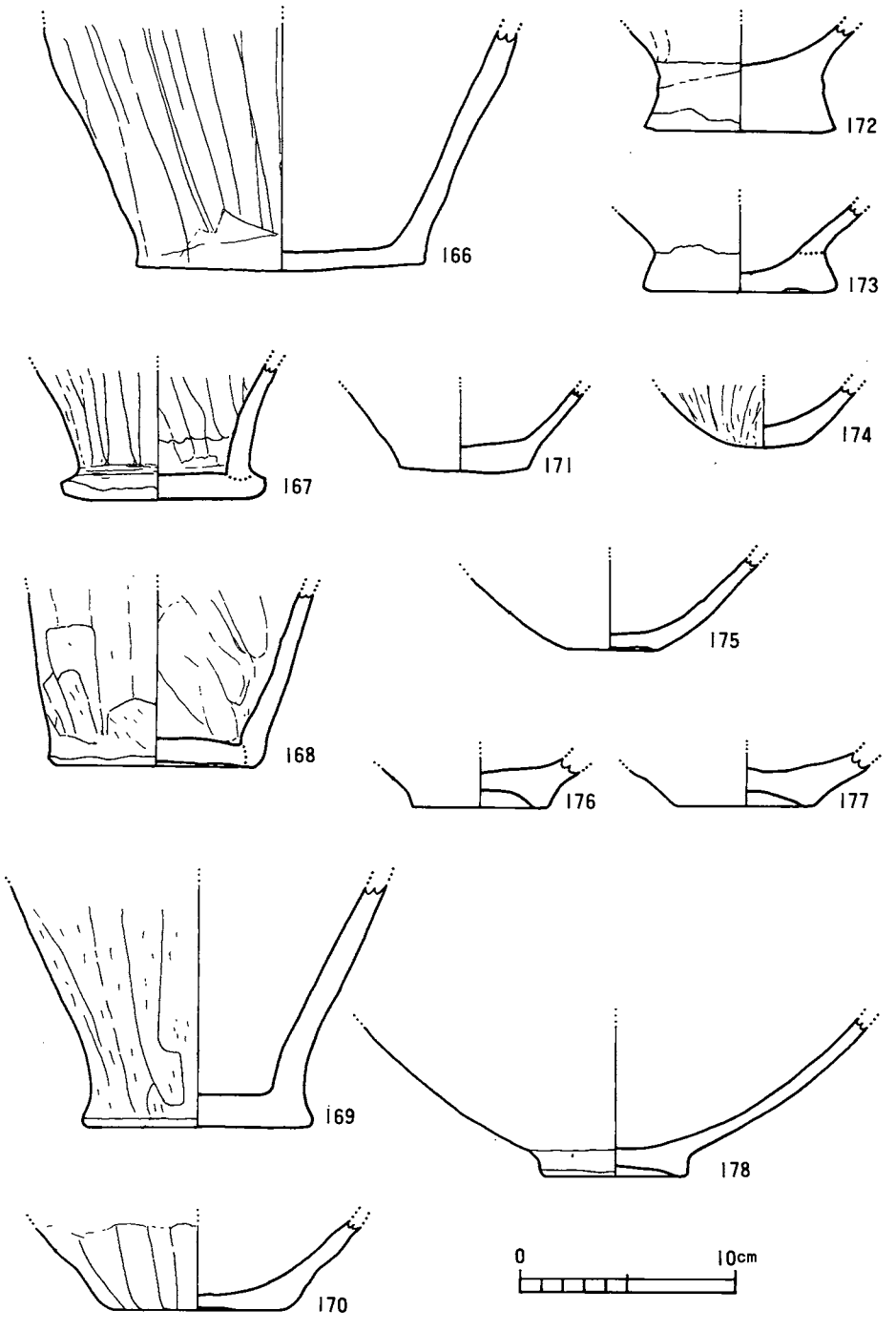
第23図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図

式に該当する。Ⅴ類は特色ある群を形成し、後期前半の御手洗A式である。Ⅵ類は北久根山式で、Ⅶ類もその範疇に含まれると考えられる。Ⅸ類は難解な群であるが、Ⅵ・Ⅶ類と共存する可能性が強い。Ⅹ類は西平式に、Ⅺ類は三万田式に、Ⅻ類は御領式に比定できよう。ⅩⅢ類はⅫ類より後出し、晩期初頭あたりに位置づけられると考える。ⅩⅣ類は御領式に入れるか、黒川式に比定するか、筆者では判定がつかない。ⅩⅤ類は黒川式で、ⅩⅥ類の組織痕文土器を伴う。(註3)

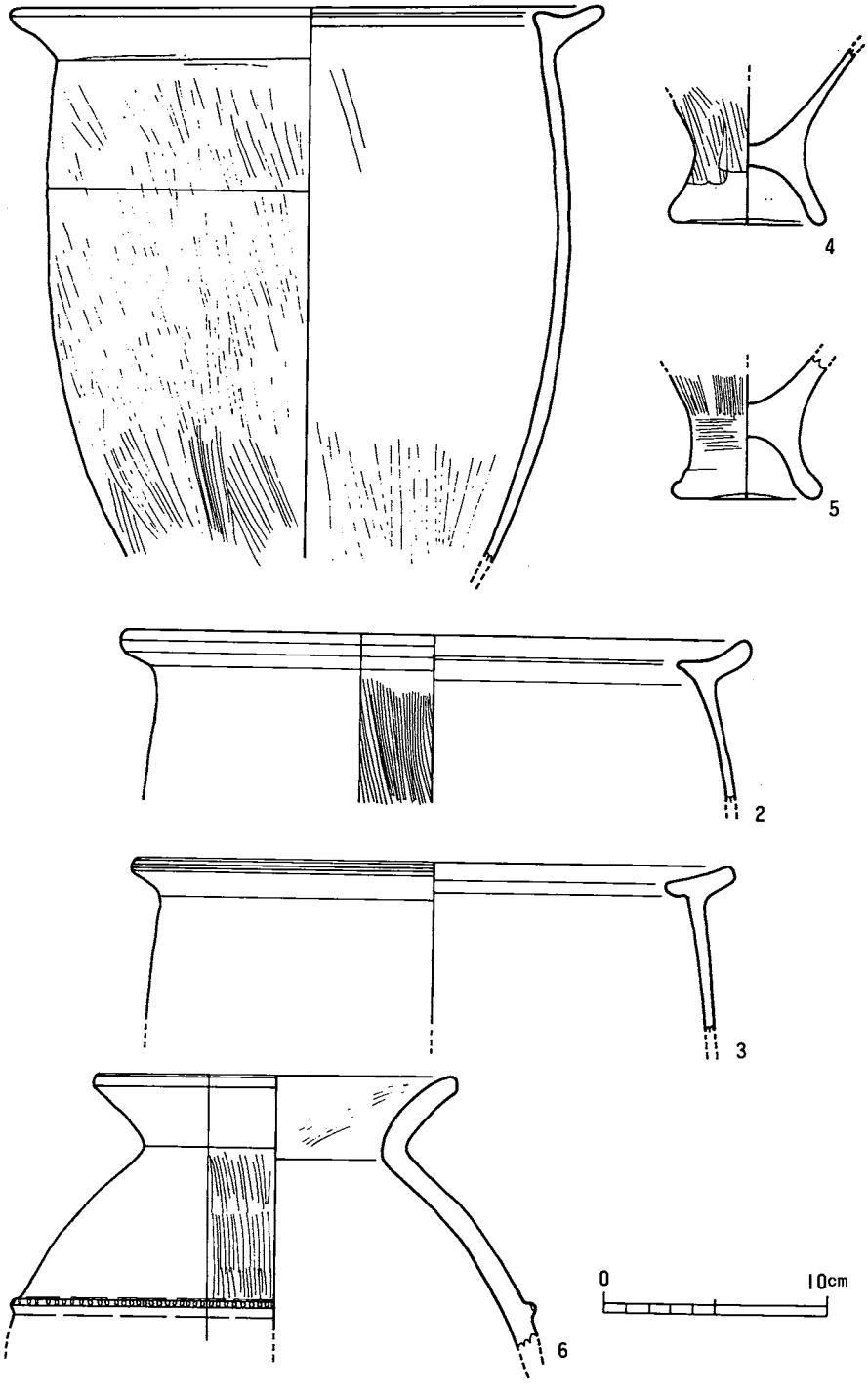
ロ、弥生式土器（第25・26・27図）

弥生中期に編年されている黒髪式土器と、(註4)弥生後期の野部田式土器の他、前期の凸帯文土器が1点出土した。

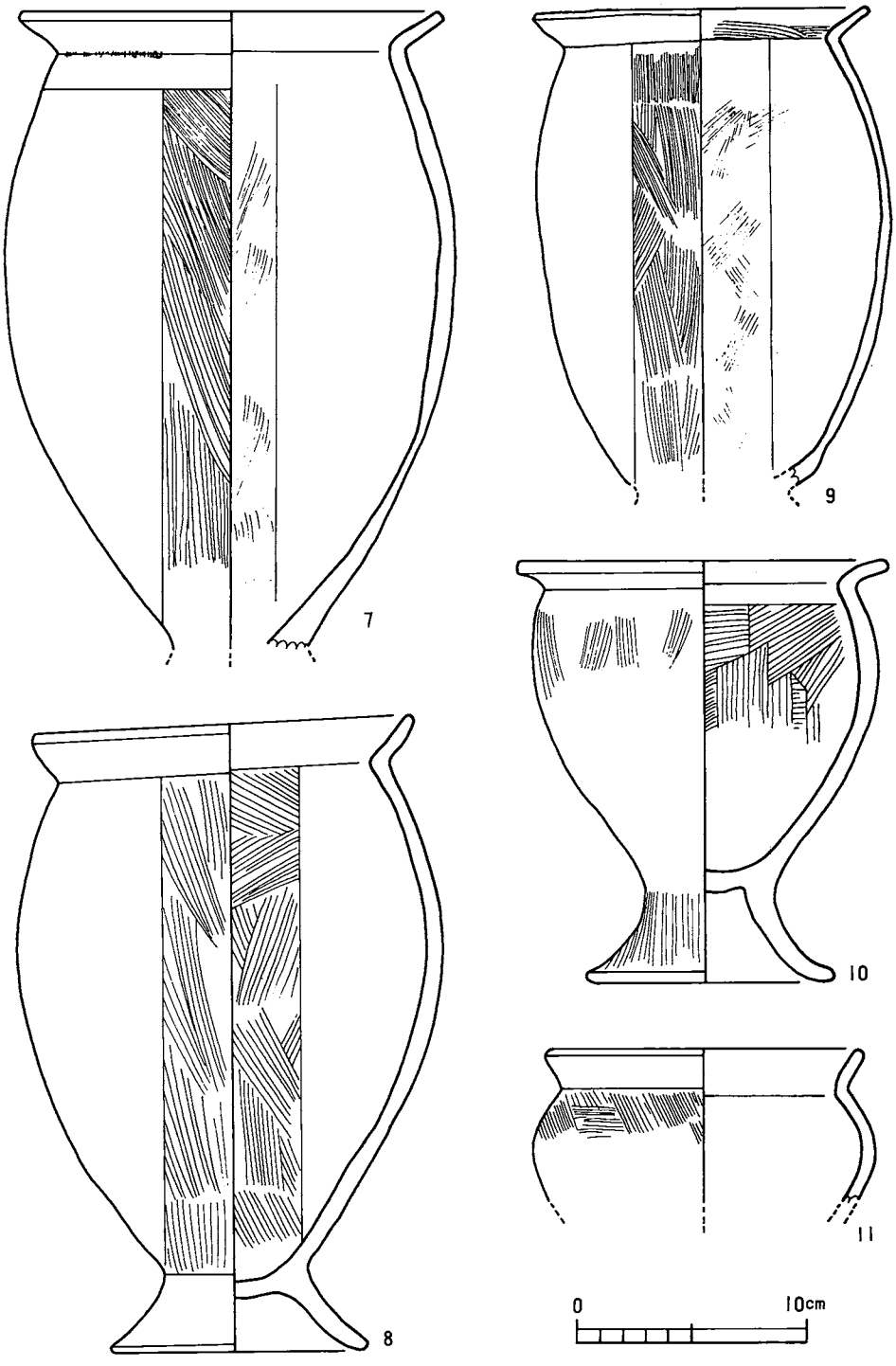
黒髪式土器は甕（第25図1～3）と壺（第25図6）がある。甕はT字形の口縁に特色があり、体部外面に刷毛目がよく残るもの(2)、刷毛目の上をナデて、薄く残るもの(1)、ナデ調整で刷毛目が残らないもの(3)があり、相違点がみられる。口縁形態でも、1と2は類似点があるものの、3は異なった様相を呈する。やや古い時期の様相か。1の頸部より約6cm下に1条の浅い沈線



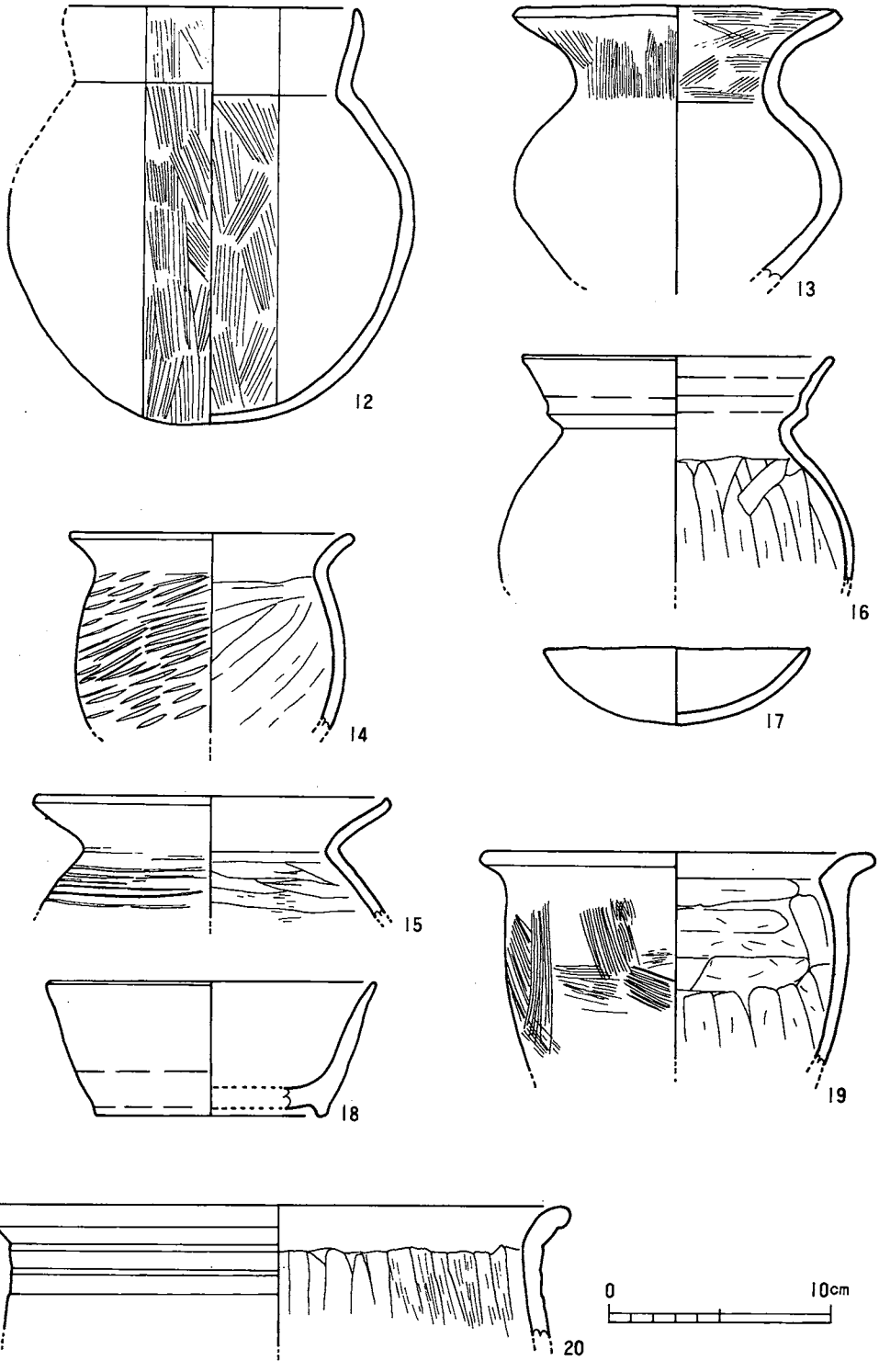
第24図　天岩戸岩陰遺跡出土縄文式土器実測図（底部）



第25図　天岩戸岩陰遺跡出土土器実測図



第26図　天岩戸岩陰遺跡出土土器実測図



第27図　天岩戸岩陰遺跡出土土器実測図

がめぐる。器壁はいずれも薄く、体部内面はナデ調整であるが、1の内部下半には削り気味のかきあげがある。甕には4・5のような上底の底部が付く。壺は甕に比べると量が少ない。6のように突帯をめぐらすものの他に、頸部下に鉤状の貼付文を付す細片も出土している。

野部田式土器にも甕と壺があるが、甕の方が圧倒的に多い。甕（第26図7～10）には大・中・小があり、図示しているような脚台付のものの他に、尖り気味のわずかな平底を呈するものが共存し、野部田式でも弥生終末期に編年できよう。甕のほとんどには外面にススが付着する。体部には内外面刷毛目、あるいは刷毛目の上をナデ調整が施される。壺（第26図11、第27図12・13）はそれぞれ器形の異なったものが3種出土している。

ハ、土師器（第27図）

量的には少ないが、古墳時代前期・古代の土師器が出土している。

古墳時代の土師器（第27図14～17）には甕・壺・盌がある。甕（14・15）の外面にはタタキ目が顕著に残り、内面はヘラ削り調整。いずれも器壁は薄く、15の口縁端は軽く上方につまみ上げられ、古式の相を呈している。14は復原口径12.8cm、15は16cmを測る。16は複合口縁の壺で、体部下半を欠失する。器壁はきわめて薄く仕上げられている。玉名郡岱明町・山下遺跡出土の古式土師器に類似し、甕の様相と合わせて、古く編年できよう。

奈良時代と考えられる(註5)土師器には、高台坏（第27図18）・甕（第27図19・20）がある。甕はやや器壁が厚く、頸部でわずかにくびれて口縁部へと続く。18の頸部には、箍で締め付けたような痕跡が認められる。この時期の遺物は少ない。

ニ、石器（第27～32図）

各種の石器・石製品が出土している。これらの石器は、すべてではないにしろ岩陰内で自給的に製作されており、後に述べるように原石・未製品・石屑等が多量に出土した。

磨製石器

磨製石斧と弥生時代の磨製石鏃がある。

2・3には敲打痕が残り、4は刃部だけに研磨を加えた局部磨製である。6は小型のノミ形石斧で、研磨は丁寧である。

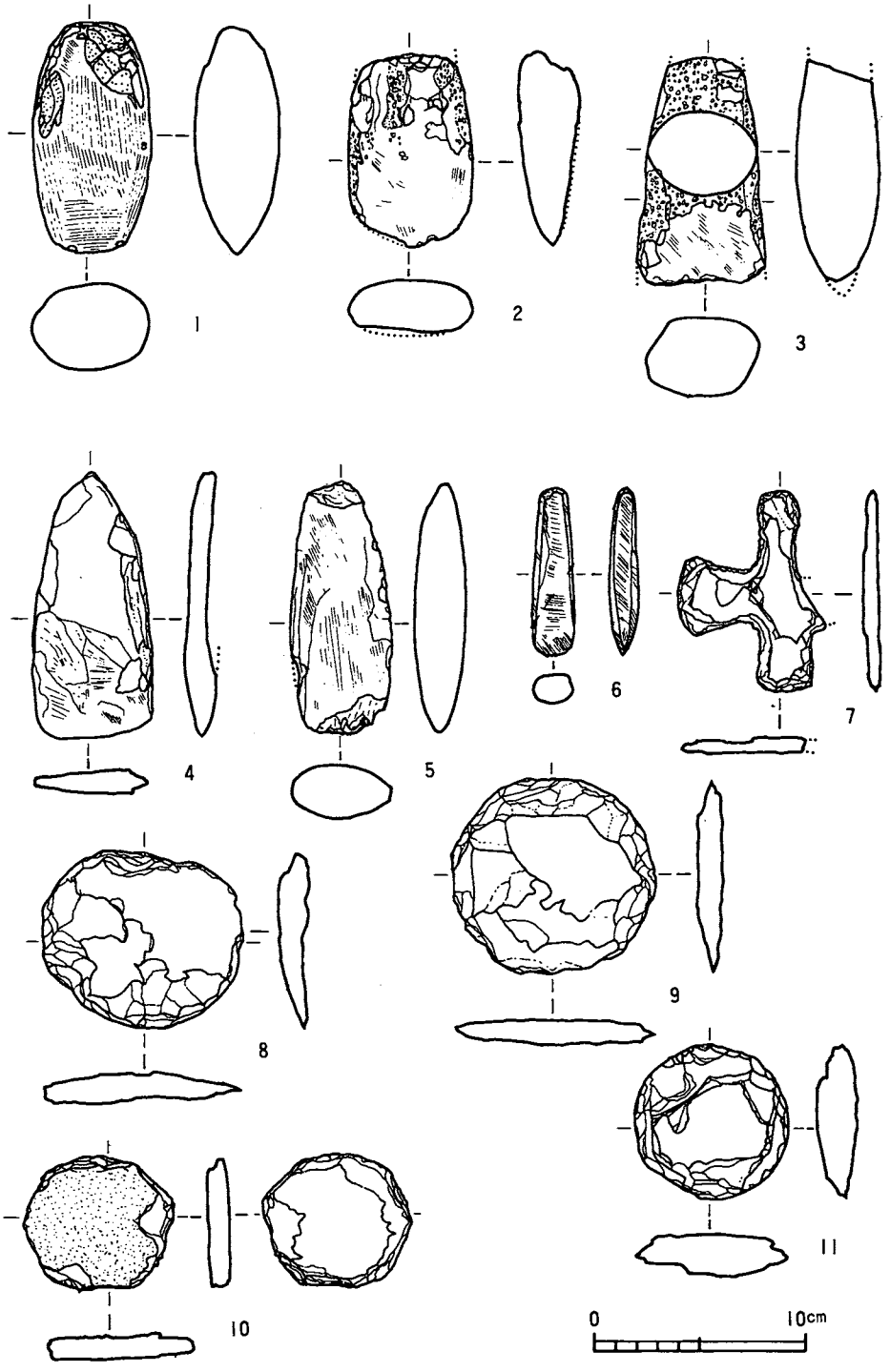
打製石斧

十字形石器・円形石器・扁平打製石斧・包丁形石器・石鏃・石錐・石匕・刃器（掻器）がある。

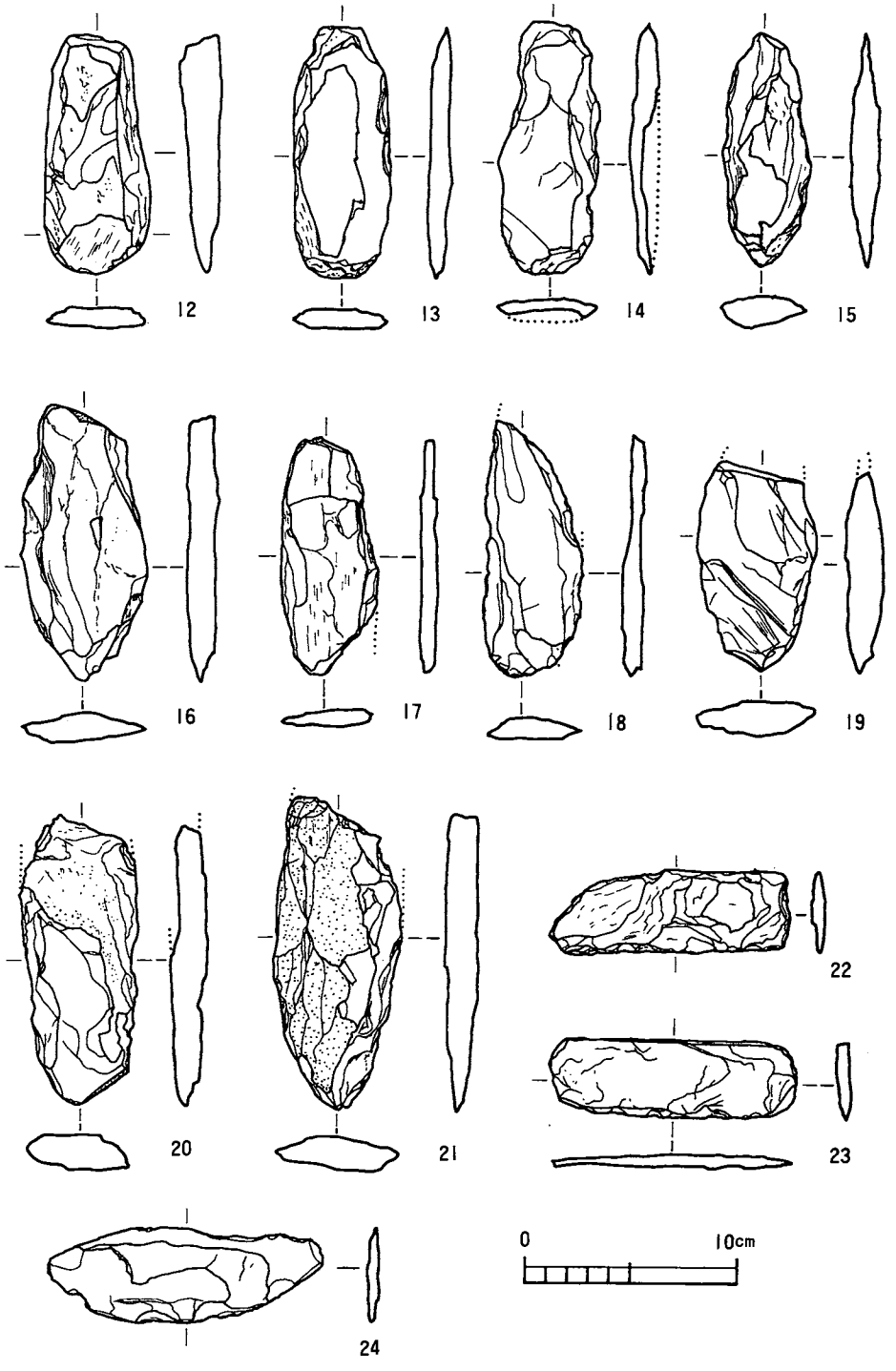
円形石器は円縁の全部あるいは一部に荒い打調を施す。包丁形石器としたものは緑色変岩製の横長の石器で、下部に刃部を調整する。

石鏃はきわめて少なく、図示したものの他に断面壁崩土より採集した2点を加えて計4点のみしかみられなかった。石器組成上の特色といえる。

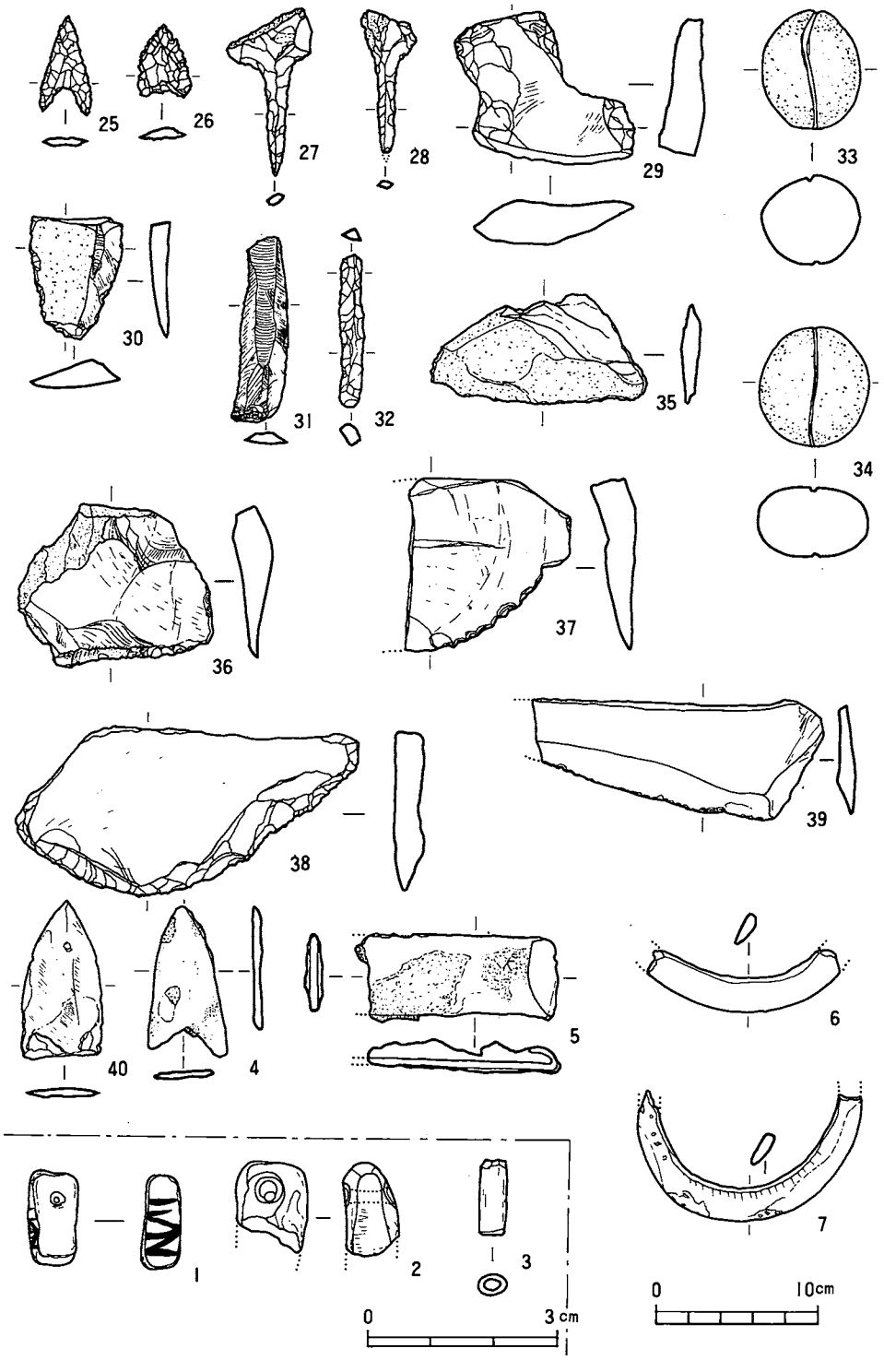
刃器は黒曜石・安山岩製のもので、30・31のように定形的な石刃もある。35・36は用途的に



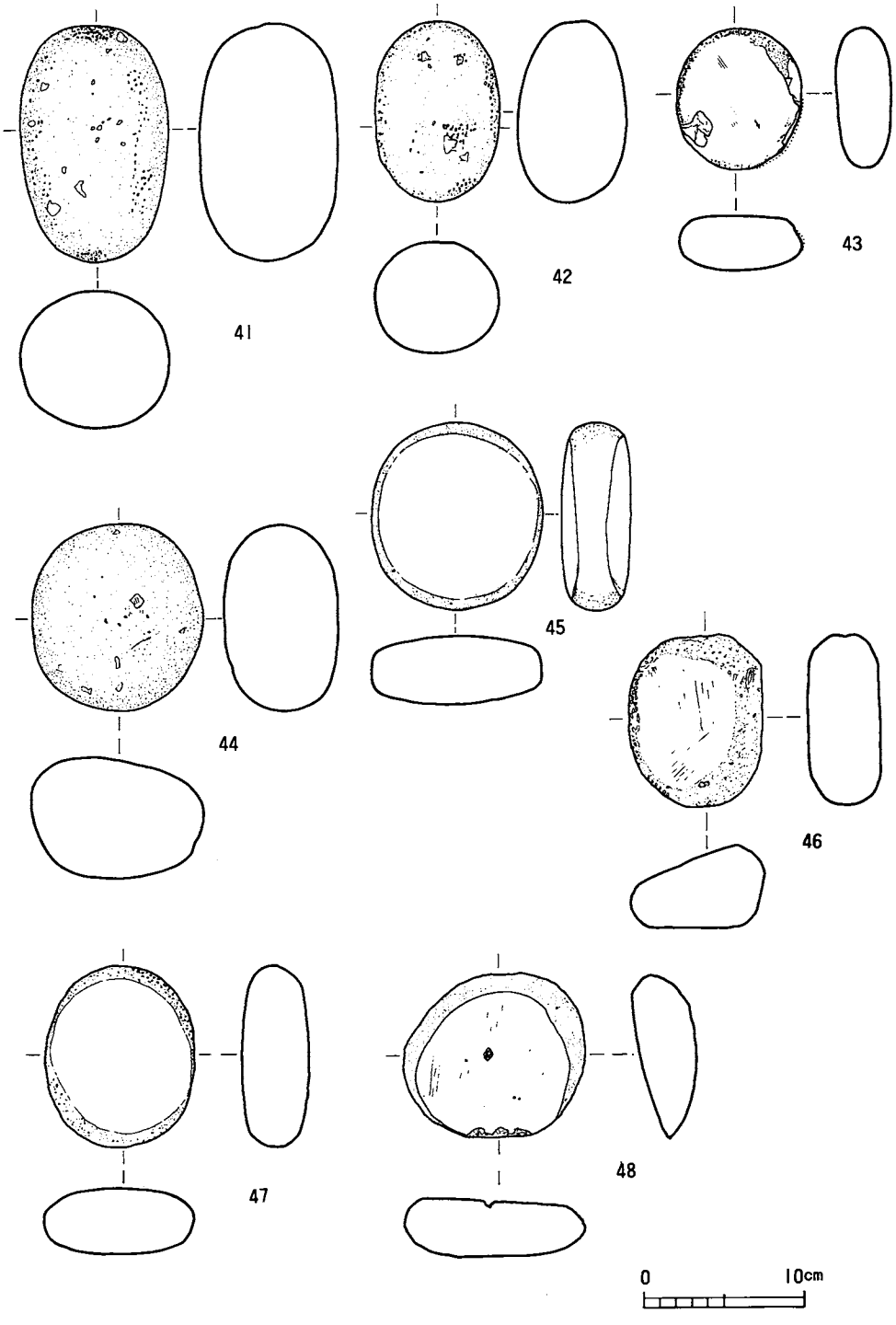
第28図　天岩戸岩陰遺跡出土石器実測図



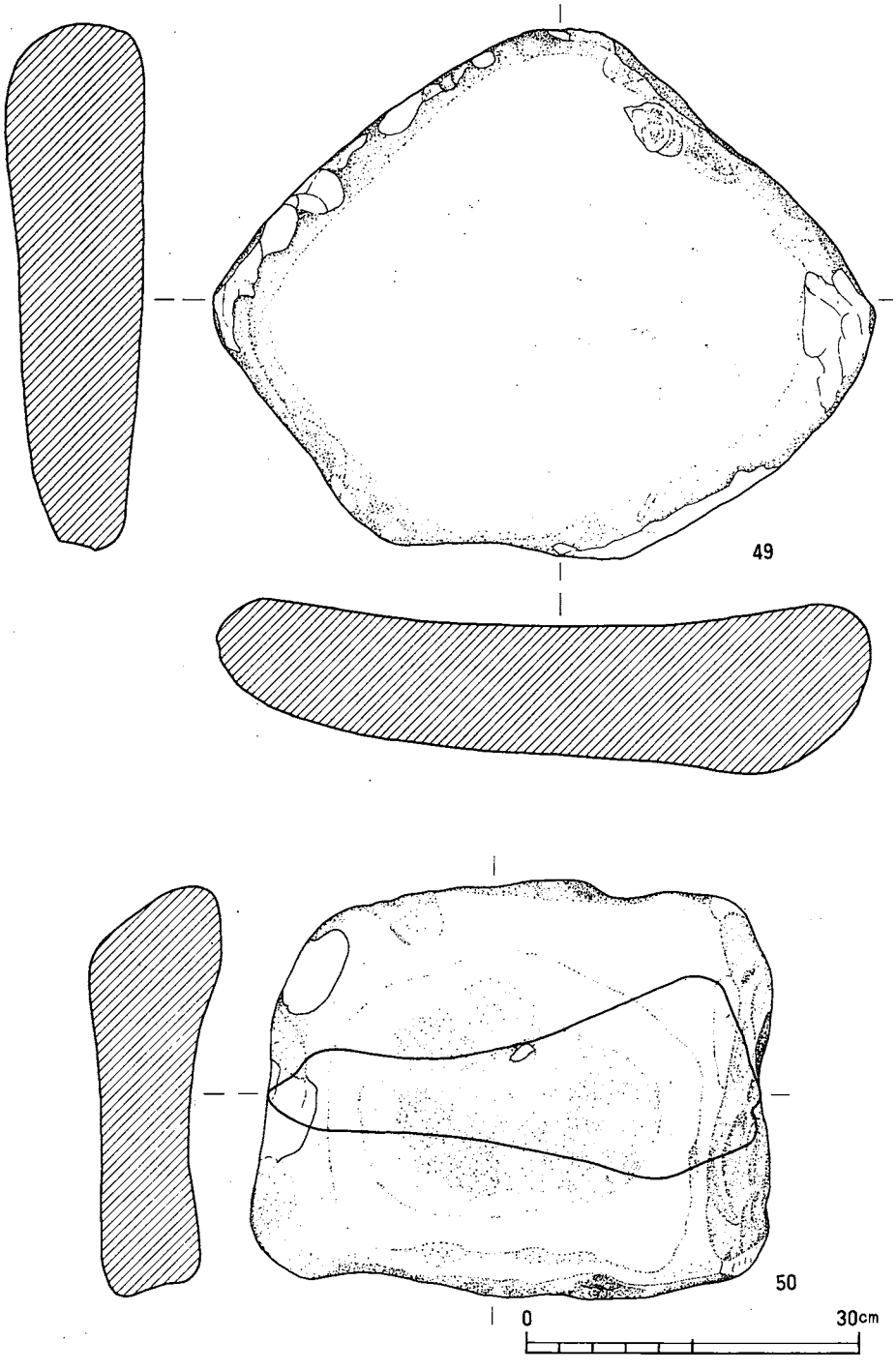
第29図　天岩戸岩陰遺跡出土石器実測図



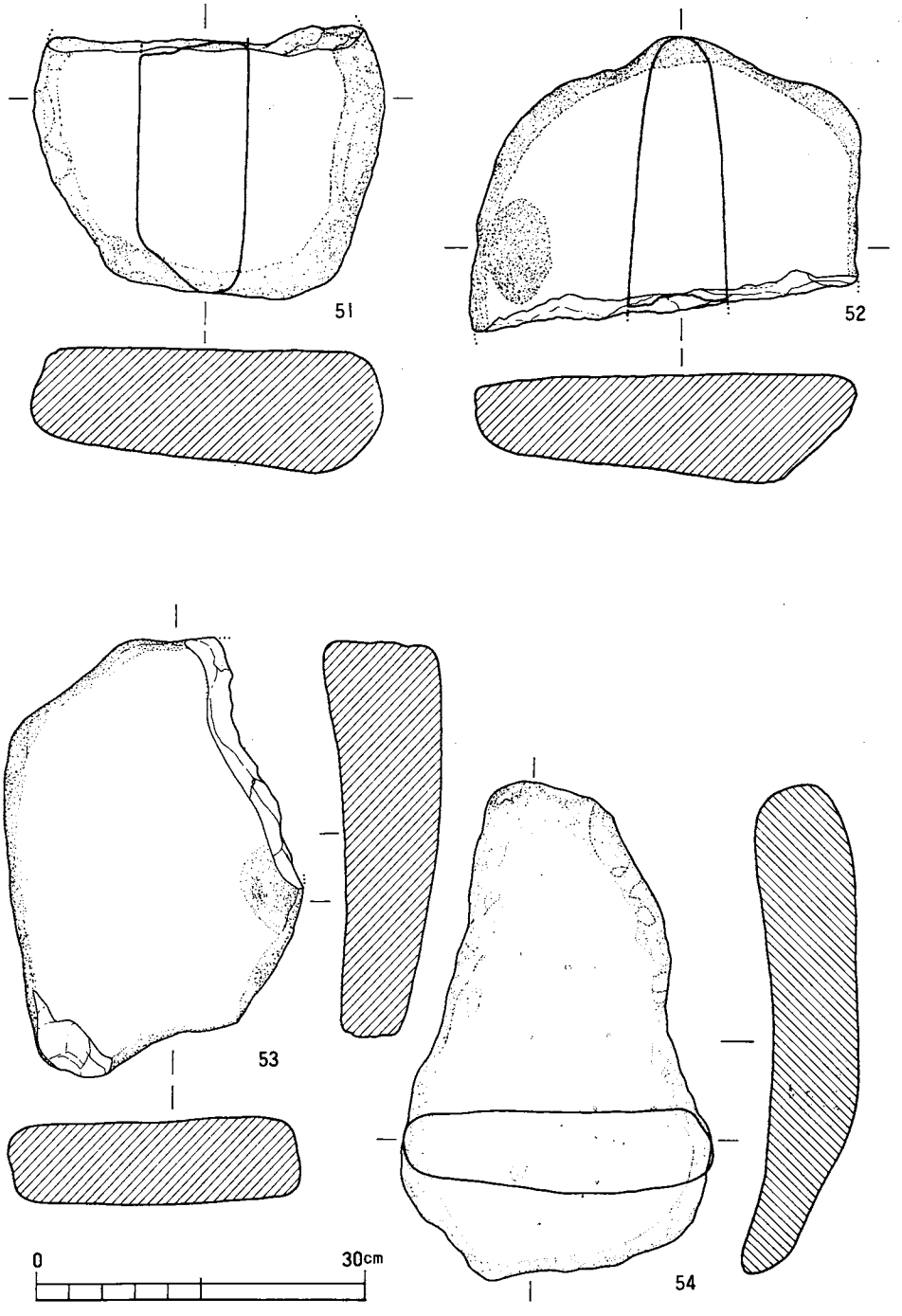
第30図　天岩戸岩陰遺跡出土石器・石製品・鉄器・骨角器・貝輪実測図



第31図　天岩戸岩陰遺跡出土石器実測図



第32図　天岩戸岩陰遺跡出土石器実測図



第33図　天岩戸岩陰遺跡出土石器実測図

は掻器と考えられるがここに一括した。

その他の石器

安山岩の自然礫に溝を切り込んだ石錘33・34や用途不明の棒状石器（33）、敲石（磨石）・石皿がある。敲石には敲いて使用したもの、平行移動しながら使用したもの、回転させながら使用したものがあり、これらが複合した使用状況を示すものがある。石皿もこれに対応して比較的平面的に磨り減ったものと、窪みがみられるものがある。

第1表　天岩戸岩陰遺跡出土石器一覧表

	図版番号	石器の種類	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	石質	出土区・層	特徴	備考
1	第28図—1	磨製石斧	10.8	5.5	331	砂岩	A—1凹—4	蛤刃。研磨調整は丁寧。	
2	〃 —2	〃	(9.0)	5.9	(225)	粘板岩	A—2—6	上部には敲打痕が残る。使用擦痕。	
3	〃 —3	〃	(10.4)	6.1	(351)	砂岩	A—3—5	体部は敲打。刃こぼれが多い。	
4	〃 —4	〃	15.3	5.7	123	粘板岩	A—1凹—3	局部磨製。体部は薄く剝離。	
5	〃 —5	〃	11.6	4.8	200	輝緑岩	B—1凹—2	やや不整形。刃こぼれあり。	
6	〃 —6	〃	7.8	2.0	34.0	蛇紋岩	B—3—5	小型ノミ形石斧。斜めの使用擦痕。	
7	〃 —7	十字形石器	9.3	(6.9)	(39)	緑色片岩系	B—1凹—2	厚さ5～6㎜。	
8	〃 —8	円形石器	9.4	8.1	145	緑色片岩	A—1凹—2	やや不整形。	蛇紋岩質。
9	〃 —9	〃	9.4	9.1	165	〃	A—1凹—6	全周に刃部調整。	
10	〃 —10	〃	7.0	6.2	80	結晶片岩	A—2—6	刃部未調整。	未製品か。
11	〃 —11	〃	7.2	7.2	125	安山岩	A—1凹—2	最大厚み1.9cm。	
12	第29図—12	扁平打製石斧	11.2	4.9	156	緑色片岩	B—1凹—2	局部磨製。自然礫利用。	
13	〃 —13	〃	11.6	4.6	78	〃	B—3—4	薄い。	
14	〃 —14	〃	11.6	4.8	(68)	〃	〃	裏面剝落。整形やや雑。	
15	〃 —15	〃	10.9	4.0	68	〃	B—2—3	上下端尖る。	蛇紋岩質。
16	〃 —16	〃	12.8	5.8	138	〃	B—3—4	下端は尖る。	
17	〃 —17	〃	(11.0)	4.5	56.1	〃	〃	薄い。	
18	〃 —18	〃	(12.0)	4.6	76.3	〃	〃		
19	〃 —19	〃	(9.7)	(5.5)	(121)	〃	〃	調整雑。最大厚 1.7cm。	
20	〃 —20	〃	(13.5)	5.4	(158)	〃	A—1凹—2	最大厚1.7cm。	
21	〃 —21	〃	(14.6)	5.9	(175)	〃	〃	自然面を多く残す。先端は尖る。	
22	〃 —22	包丁形石器	11.2	3.6	45	〃	A—2—5	下部に刃部調整。	
23	〃 —22	〃	11.5	3.6	45	〃	B—3—5		
24	〃 —24	〃	12.8	4.5	45.9	〃	A—2—6	やや不整形。	扁平打製石斧か。
25	第30図—25	石鏃	3.1	1.6	0.9	安山岩	A—2—4		
26	〃 —26	〃	2.2	1.6	1.6	〃	A—2—6		

27	第30図－27	石　　錐	5.2	2.6	5.2	安山岩	A－1凹－6	自然面を残す。	
28	〃　－28	〃	(4.3)	1.8	(3.1)	〃	A－3－6	〃	
28	〃　－29	石　　匕	5.1	(4.5)	(29.1)	〃	A－2－6	刃部欠失。	
30	〃　－30	石　　刃	(3.7)	2.8	7.7	黒曜石	A－1凹－6		
31	〃　－31	〃	5.8	1.5	3.9	〃	A－1凹－2		
32	〃　－32	用途不明石器	4.8	0.8	3.1	〃	B－1凹－2	横断面形は三角形四角形。乳濁色。	姫島黒曜石。
33	〃　－33	石　　錘	3.6	3.0	38.8	輝石安山岩	B－1凹－4	自然礫を加工。	有溝石錘。
34	〃　－34	〃	3.6	3.4	37.5	〃	A－1凹－2	〃	〃
35	〃　－35	刃器(掻器)	6.8	3.3	15.5	安山岩	B－1凹－5	剝片加工。	
36	〃　－36	〃	6.0	4.9	26.1	黒曜石	A－1凹－2	〃	
37	〃　－37	〃	(5.0)	5.3	(30.8)	安山岩	A－2－5	〃	
38	〃　－38	〃	10.7	5.1	60.0	〃	B－3－4	〃	
39	〃　－39	〃	(9.1)	3.7	(22.1)	〃	A－1凹－5		
40	〃　－40	磨製石鏃	4.8	2.5	4.9	変塩基性岩系	B－1－3	無茎。	黒髪式土器共伴。
41	第31図－41	敲石(磨石)	14.8	9.3	1673	輝石安山岩	B－1凹－4	敲打と回転磨り。	
42	〃　－42	〃	11.2	7.9	890	〃	〃	敲打と磨り。	
43	〃　－43	〃	8.7	7.8	403	安山岩	A－1西壁崩土	〃	
44	〃　－44	〃	11.5	10.7	1250	輝石安山岩	B－1凹－4	使用は顕著ではない。	
45	〃　－45	〃	11.7	10.7	910	〃	B－3－6	磨り。表裏面平滑。	
46	〃　－46	〃	10.6	8.3	665	〃	A－3－5	わずかに敲打と磨り。磨滅すすむ。	
47	〃　－47	〃	11.3	9.4	720	閃緑岩	〃	敲打と磨り。	又ははんれい岩。
48	〃　－48	〃	11.5	10.1	493	輝石安山岩	A－1凹－4	片面は磨滅すすむ。	
49	第32図－49	石　　皿	45.6	45.3	—	〃	B－2－5	片面磨滅。	
50	〃　－50	〃	46.5	36.6	—	〃	A－2－4	両面使用。	配石遺構。
51	第33図－51	〃	(22.8)	31.8	—	〃	?	〃	注記消え。
52	〃　－52	〃	(24.6)	34.5	—	〃	B－1凹－3	片面使用。	
53	〃　－53	〃	39.0	26.4	—	〃	?	〃	注記消え。
54	〃　－54	〃	45.3	28.5	—	〃	A－1凹－4	〃	

備考1.（　　）の数値は現存値。
2. 出土区・層の凹は壁ぎわの凹地を示す。
3. 石質同定は千藤忠昌氏（熊本大学理学部教授）による。

ホ、石製品（第30図１・２）

石製の玉が２個出土した。１は安山岩製で表面は粗い。側面には６条の沈線を刻む。長さ1.5cm、幅８mm。２は滑石製で下半を欠失する。残存長1.4cm、幅1.15cm。

へ、鉄　　器（第30図４・５）

弥生後期（野部田式）に伴うと考えられる鉄器が２点ある。

第30図５は手鎌で、一端は欠失する。現存部の長さ約６cm、幅2.5cm前後を測る。鉄板の両端を折り曲げた通有の形で、わずかに木質部が遺存する。錆のためかなりの変形がみられるが、鉄板の厚みは２mm弱である。Ａ―１凹―２出土。鉄鏃（第30図４）は無茎の三角形で、最大長5.1cm、最大幅2.5cm、重量4.95ｇを測る。遺存状態は良好である。Ａ―２―３壁出土。

ト、貝 製 品（第30図６・７、図版９）

貝輪が２点と貝杓子が１点出土した。

貝輪は二枚貝を加工したもので、いずれも破損している。第30図７は約$\frac{1}{2}$大の破片で、表面及び刳り貫き面は磨いている。Ａ―１凹―３出土。６は表面にカルシウム分が固着し、細部の観察はできないが、７と同様の加工と思われる。Ｂ―３―７出土。貝の種類はベンケイガイである。

貝杓子は（図版９）はイタヤガイを利用して、柄を装着・固定するために２孔を穿っている。縄文晩期（黒川式）の土器片と共存したが、後世の混入の疑いが強い。Ａ―１―３出土。

チ、骨角器・牙製品（第34図・第30図３）

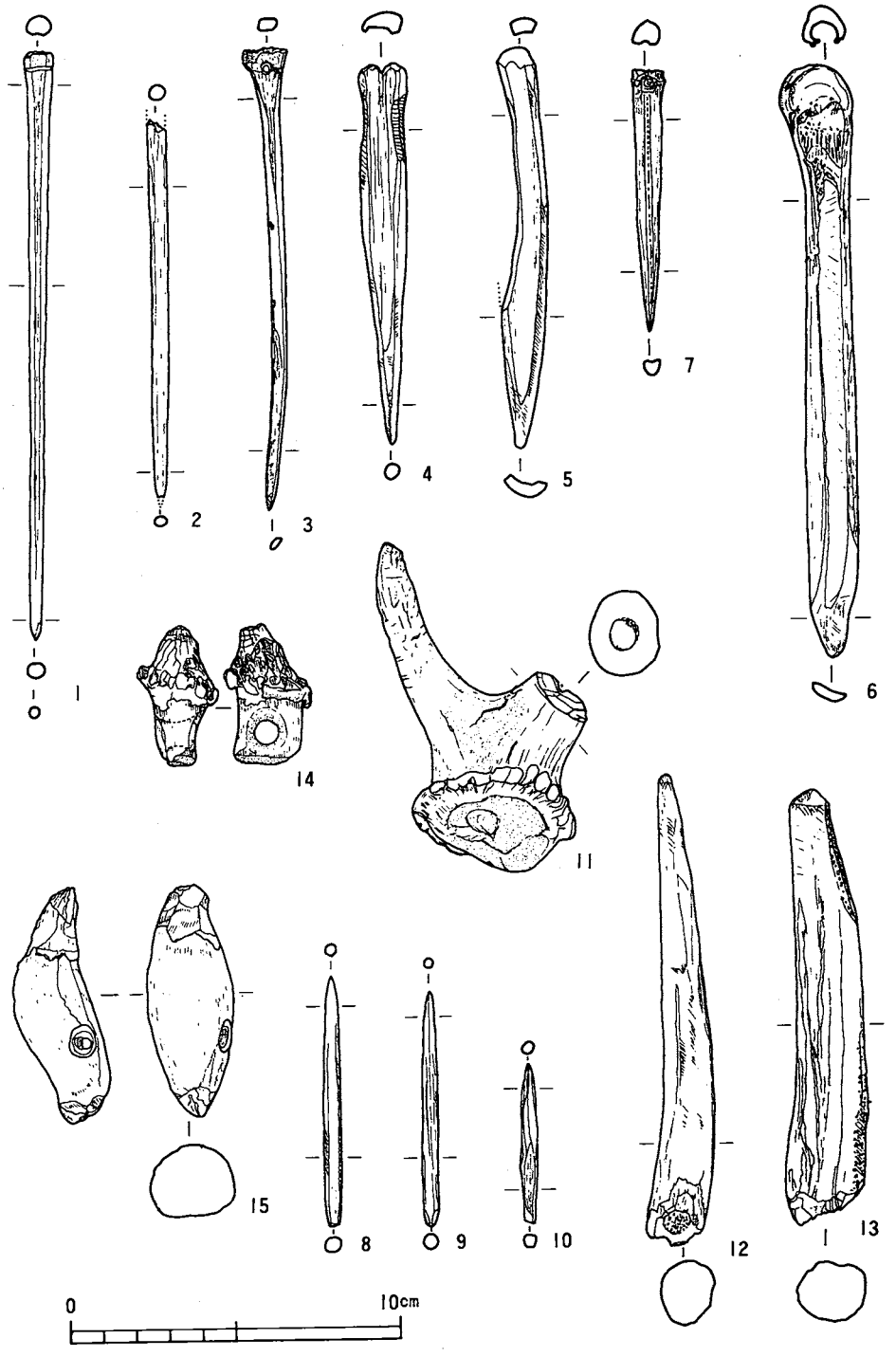
岩陰が形成されているのは凝灰岩壁であるが、他の獣・魚骨等とともに骨角器類の遺存はきわめて良好であり、各種の骨角器を出土した。

１・２は細い棒状のもので、断面形はほぼ円形を呈する。１は完形品で、全長17.7cm。頭（図の上方）の部分がやや太く、下端は鋭く尖る。頭の部分には横に１条の沈線がめぐる。１・２とも表面は丁寧に研磨され平滑である。２は破損品である（現存長10.9cm）が、１と同形と考えられる。１はＢ―１―５出土。２はＢ―１―４出土。

３は頭の部分が扁平で幅広く加工され、円孔を有する。下端はわずかに反り気味であるが、鋭く尖る。下端部約1.5cm位は焼けている。全長13.9cm。Ａ―２―６出土。北久根山式と伴出した。

４は刺突具で、先端は尖る。上端近くの両側にはわずかに抉り込みがみられる。下端部の磨きは丁寧で、平滑である。全長11.4cm、最大幅1.4cm。Ａ―１―５出土。７も刺突具と考えられるが、加工の跡はみられない。頭の部分に孔を有する魚骨で、下端は鋭く尖る。Ａ―２―６下出土。中期の土器群に混在していた。

５・６はヘラ状の工具と考えられる。いずれも下端は竹ベラ状に加工されている。６はシカの肢骨を半裁し、頭部に関節部を残している。５は一部破損しているが、遺存状態はきわめて良い。５は全長12.1cm、最大幅1.3cm。６は全長17.8cm、最大幅2.1cm。５はＢ―２―５の出土で三万田式に伴うと考えられる。６はＢ―１凹―５の出土で、落石と壁との間隙から出土し、年代比定は困難である。



第34図　天岩戸岩陰遺跡出土骨角器実測図

8～10は短い棒状のもので、一端は鋭く尖る。骨鏃と考えられるが、8・9は刺突具かもしれない。8・9は類似し、一端は鋭く尖り、他端はわずかに細くなるが尖らない。8は7.5cm、9は7cmを測り、全面平滑に磨かれる。8はB—1凹—1出土で時期不明。9はA—2—5出土で、後期の土器と伴出した。10は全長4.8cmで、削りにより多面体を呈する。全体が焼け、やや黒変している。A—1—3出土で、後期～晩期の所産と考えられる。

11～13は鹿角製品である。11は角座と第1尖で、角幹は切断されている。第1尖の先端に使用痕が認められるところから、これ自体も骨角器として利用したと考えられる。A—2—4出土。12・13は棒状の工具で、12は刺突、13は刺突と敲打に利用されている。12は一端を欠失するが、現存長12.4cm、最大幅1.7cmを測る。中程から上半は研磨が施され、先端を中心に使用痕が多い。A—3—2出土（時期不明）。13は全長13.1cm、最大幅2.4cm。一端は無雑作に折ったままを使用し、他端（図の上端）は丸く磨り減る。図の側面には敲打の跡が残り、使用状況を思わせる。A—3—2出土（時期不明）11～13の工具は、後述する石器製作の問題と関連して興味ある資料である。

14は鹿角の垂飾で、角座骨の部分に穿孔がみられる。角座は最大径2.5cm程で、角幹も1.5cm強で、角座・角幹ともに萎縮した感を受ける。金子浩昌氏は、千葉県・西広貝塚の出土例を報告、同県・姥山貝塚、貝の花貝塚出土例を示し、「成育の著しく阻害されたためにできた奇形の角」としている。〝奇形〟ということに大きな意義があると言えよう。B—3—5出土で、後期と考えられる。(註6)

15は所謂牙玉であるが、全長7cm、最大幅2.6cmを測る。象牙質の部分に穿孔する。詳しい同定は得ていないが、海獣の一種と考えられる。B—2—6出土、後期と考えられる。

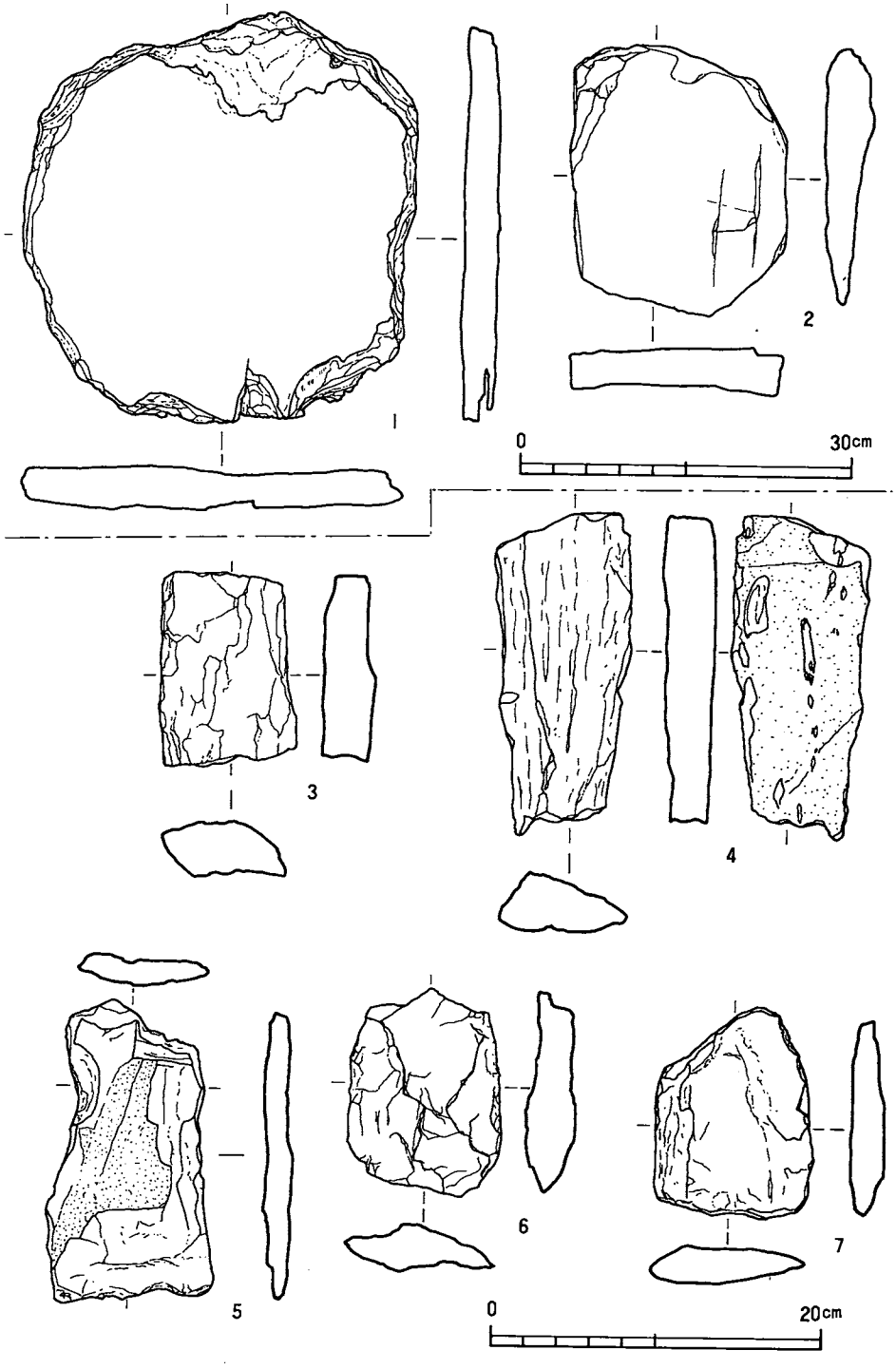
第30図3は鳥骨を切断したもので管玉と考えられる。一端には切断痕を残し、一端は磨かれている。長さ1.2cm、径4.5mmを測る。

リ、石器原材・未製品（第35図、図版19・21）

岩陰内において石器製作が行われており、原材・未製品、多量の石屑が出土した。

石器の原材と考えられるものには二者がある。一つは結晶片岩系の板状原材（第35図1・2）で、緑色片岩が多い。最も大きいものは35×36cm、厚さ3.5cmの 円盤状を呈する。表裏面は比較的平らで、周縁は荒割りされている。この種の原石の山地は判然としないが、北側の筑肥山地に産するものと考えられる。他の一種は変塩基性岩の一群で、前者に比べると硬質で、剝離性には欠ける。この一群のなかには、自然磨滅面を残すものがみられ、河川から採集されたことを物語っている。岩陰遺跡の直前を流れる山内川にはこの種の原石は見出すことができなかった。山内川の本流、内田川との合流点までは約1.8kmの距離があるが、内田川から採取されたものと考えられる。

これらの原材により製作された石器は、未製品の存在や使用石材から考えて、打製石斧・円形石器・包丁形石器で、すべて打製石器である。



第35図　天岩戸岩陰遺跡出土石器原材・未製品実測図

未製品や、製作途中での破損品、さらには石屑が多量に出土し、これらを整理すれば石器製作過程の復元が可能であると考えられるが、整理期間の関係で果せなかった。この石器製作は、縄文時代後期後半を主体とし、一部晩期に及ぶものと考えられる。

縄文時代における石器製作遺跡としては、菊池郡西合志町・二子山石器製作跡が著名であり、(註7)玉名郡玉東町・大谷石器製作跡も同様性格の遺跡と考えられている。二子山石器製作跡は、二子山で産する玄武岩質安山岩を原材として主に打製石斧が製作され、この原石を用いた石器は半径約15～16kmの範囲内に供給されているとの調査結果がでている。

天岩戸岩陰遺跡の場合は上記例とは様相を異にし、近在の石材を使用し、自給的に石器製作が実施され、当時代における石器製作の一側面を示している。ただ、ここで明らかになったのは石器組成の一部についての自給的生産であり、他の石器類についての需給については不明である。

ヌ、自然遺物

貝類・獣魚骨、炭化した植物種子がある。

貝類ではカワニナが最も多く、各層から出土した。その他の貝類としてはハマグリ・シオフキ・ハイガイ・アワビなどの海水産貝があり、ハマグリ・シオフキが多くみられた。

獣魚骨は量が多く、特に各層の水洗により小動物や魚骨が多量に採集できた。総量は約8kgに及び、目下整理中である。

炭化した植物種子と思われるものも数点出土している。未だ同定は行っていない。

4．小　結

天岩戸岩陰遺跡は新発見の遺跡であったが、調査の結果有力な岩陰遺跡であることが判明した。

時期的にみると、包含層の最下部から曽畑式土器を出土し、岩陰利用の初源は縄文時代前期まで遡ることが確認された。その後、縄文中期・後期・晩期、弥生前期・中期・後期、古墳前期、古代にかけて岩陰利用が断続し、さらには近・現代に及んでいる。

各時期の遺物量も全般的に豊富で、とくに縄文中～晩期、弥生後期の土器量が多い。

各時期の土器については、縄文後期前半の土器群に特色があり、今後の編年検討の好資料となろう。また、晩期・黒川式の一括資料も本県では数少ないものである。縄文後期前半に比定される北久根山式土器については、天草郡五和町・沖の原貝塚資料による坂田邦洋氏の型式設定があるが、その欠落部分を補うに足る資料が含まれている。(註8)

弥生後期の土器は従来から野部田式とされているものであるが、資料的にも増加しており、細分の必要を感じる。少なくとも、野部田式土器は3類に分類されるべきで、そのうち2類は

弥生式に、他の１類は古式土師器に含まれると考えられる。甕を基準にして考えるならば、通有の脚台付と尖り底の共伴（１類）から、弥生終末の段階になると尖り気味のわずかな平底（II類）が加わり、さらに尖り底気味の丸底（III類）へと転化していくものと考えられる。

骨角器の遺存度の良いことも当遺跡の特色の一つであり、各種の骨角器が出土した。これらの骨角器の中には、石器製作に使用されたと考えられる工具類も含まれている。

石器製作についてはすでに述べたが、二子山石器製作跡とは対照的な石器製作の一側面を示しているといえる。

出土した縄文晩期の人骨は、壮年の女性と判定され、さらに両側上顎犬歯に風習的抜歯が認められた。

岩陰内には灰層（植物灰及び火山性シラス状土壌）が間層状に堆積していた。この灰層は、岩陰の壁ぎわには認められず、岩陰の中央部中心に分布している。すなわち、岩陰の奥の壁ぎわには、幅１ｍ内外の凹地があったものと考えられ、この部分には黒色土が堆積している。これらの植物灰や火山性シラス状土壌は、岩陰内の居住性を高めるために施されたものと考えられる。この灰層は結果的には、攪乱の多い岩陰の発掘の層位確認の絶好の目安ともなった。

本県においては洞穴（岩陰）遺跡の調査は遅れており、遺跡数も少ない。球磨郡相良村・初神洞穴(註９)、同郡球磨村・高沢洞穴(註10)、同・大瀬洞穴(註11)が球磨川流域に知られている程度であり、地域的にも偏在していた。

天岩戸岩陰遺跡の発見以来、古閑三博・池田知義氏、菊水町教育委員会の努力によって、菊池川流域における探索が続けられ、有力な洞穴・岩陰の発見があった。いずれも菊池川流域の凝灰岩壁に発達したもので、立地や規模の上からは遺跡の可能性(註12)はきわめて高いと考えられる。今後、確認調査の必要があろう。

註１　賀川光夫「縄文後期黒色磨研土器」『考古学論叢』３、昭和50年。

註２　杉村彰一「曽畑式土器論考」『九州考古学』第24号、昭和40年。

　　杉村彰一「曽畑式土器考」『九州の原始文様』佐賀県立博物館、昭和52年。

註３　鏡山猛「原生期の織布―九州の組織痕文土器を中心に―」『史淵』84・86・89号、昭和36～37年。

註４　乙益重隆「黒髪式土器」『藤尾支石墓群』旭志村教育委員会、昭和33年。

註５　松本健郎「中九州における古式土師器の新資料」『考古学雑誌』第60巻第３号、昭和49年。

註６　金子浩昌「骨・角・牙・貝製品」『西広貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告III、昭和52年。

註７　三島格・井上兼利他『二子山石器製作址』西合志町教育委員会、昭和46年。

註８　坂田邦洋「北久根山式土器の設定」『考古学論叢』３、昭和50年。

註９　乙益重隆氏によって発見され、弥生式土器が採集されている。

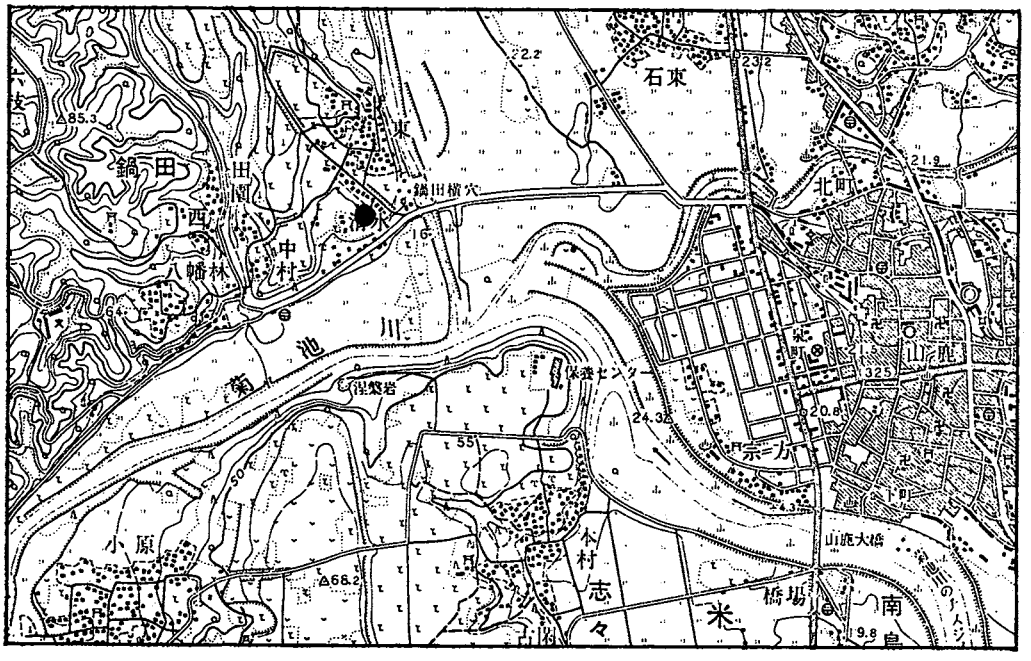
註10　球磨郡教育支会『球磨郡誌』昭和16年。

註11　昭和45年、熊日調査団によって調査。押型文土器と晩期の土器が出土したという。未報告。

註12　玉名郡菊水町に４ヵ所が確認され、その内２ヵ所はきわめて可能性が強い。

第２節　東鍋田遺跡

１．位置と概要（第36図）



第36図　東鍋田遺跡位置図（$\frac{1}{25000}$）

山鹿市大字鍋田字西原に位置する。当遺跡の周辺の集落を通常東鍋田と呼ぶところから遺跡名を命名した。

岩野川と菊池川の合流点の北方約 420 m の岩野川右岸、鍋田台地の南端に位置する。鍋田台地は標高40～60mの熔岩台地で、周縁部にはいたるところに凝灰岩の露頭断崖がみられる。この凝灰岩壁に鍋田横穴群や城横穴群が存在する。(註１)

昭和41年２月、当遺跡の一画にブドウを植え付けるためにトレンチ状に溝を掘削した際、多くの遺物が出土し、報を受けた山鹿高校考古学部（顧問隈昭志・杉村彰一）により緊急調査が実施された。この結果、古代・縄文の包含層が確認され、多量の遺物が出土した。とくに縄文後期（三万田式）・縄文早期（押形文）の良好な包含層として報告されている。(註２)しかし、調査は部分的なものであり、遺跡の範囲等については不明確であった。

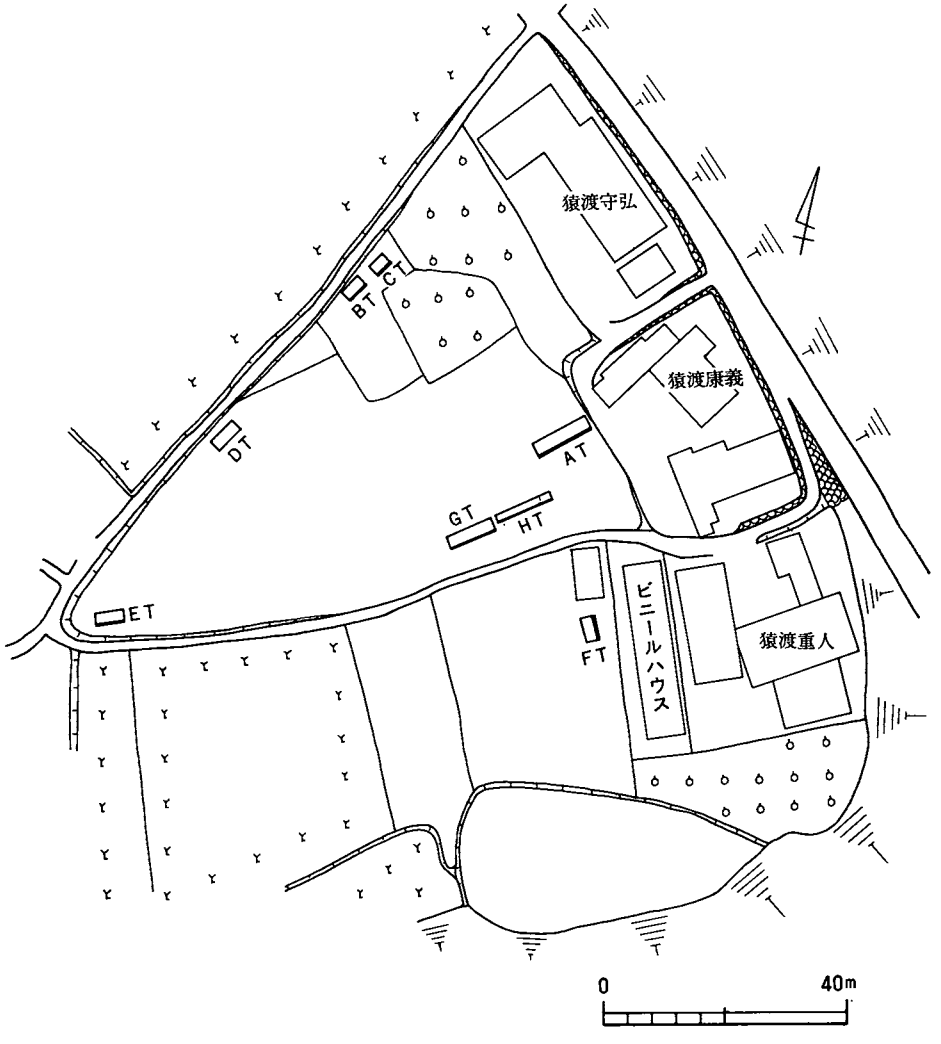
昭和50年、当台地を踏査した際、耕作者等の話から、かなり広範囲に遺物の出土がみられること、弥生時代の遺物を出土すること、さらには礎石群の埋没している地点があることなどを(註３)

聞き、51年度調査地として選定し、範囲確認を中心とする調査を実施した。

2．調　　査（第37・38図）

調査は昭和51年８月６日～25日までの15日間実施した。当遺跡一帯は桑園が多く、トレンチの設定場所も限定され不充分であるが、第37図に示すとおり、Ａ～Ｈの８ヵ所にトレンチを設定し、遺物の出土状況、遺構の有無について調査を実施した。次に各トレンチの層序と遺物の包含状況・遺構について述べる。

(1)　トレンチの概要（第37・38図）



第37図　東鍋田遺跡地形図及びトレンチ配置図
（トレンチ壁の太線は断面図を示した箇所）

Aトレンチ　幅２ｍ、長さ10ｍ。層序は第１層耕作土、第２層黒褐色土、第３層褐色土、第４層黄褐色土である。第３・４層は漸移的に変化する。第１層には各時代の遺物をわずかに含む。第２層にも縄文早期・後期・晩期、弥生中期のものが混在し、土師器片もわずかに含まれる。第３層にも押形文が含まれるが三万田式が主体を占める。ごく細片であるが、全面に縄文を施したものも１点出土した。４層は押形文の包含層である。

トレンチの中央部に、Ａトレンチと直交してブドウ植栽溝がある。土地所有者の話を総合すると、この地点が41年の調査地の１つである。

Bトレンチ　幅２ｍ、長さ４ｍ。第２層の褐色土は古墳時代の良好な包含層で、土師器・須恵器が多量に出土した。木炭の細片、焼土もわずかに認められ、住居址の可能性が強い。

Cトレンチ　Ｂトレンチと２ｍの間隔をおいて設定した。幅２ｍ、長さ３ｍ。Ｂトレンチと同様、第２層（褐色土）に古墳時代の遺物を出土するが量は少ない。約70cmで黄色ロームに達する。

Dトレンチ　幅２ｍ、長さ５ｍ。第２層に押形文・厚手無文土器・弥生中期・須恵器・歴史時代の土師器・石器類が混在する。遺物の量は少ない。

Eトレンチ　幅２ｍ、長さ５ｍ。第１層（耕作土）から青磁・白磁の細片出土。第２層（黒褐色）には押形文・縄文後期・弥生中期・須恵器・土師器・青磁・白磁・石器類を混在する。中世に攪乱された層である。約50～75cmで黄色のローム層に達する。ローム層の上面には凹凸がある。

Fトレンチ　幅２ｍ、長さ４ｍ。第２層（褐色土）は押形文の単純層であるが、量は多くない。60～70cmで黄色ロームに達する。

Gトレンチ　幅２ｍ、長さ８ｍ。Ａトレンチと同様の層序を有する。第２層（褐色土）には各時期の遺物が混在し、第３層には三万田式を主として包含する。第３層下部から４層（黄褐色土）にかけて、早期の土器を出土する。トレンチの中央部第４層上面に配石遺構を検出した。２層から３層にかけての掘り込みが多い。

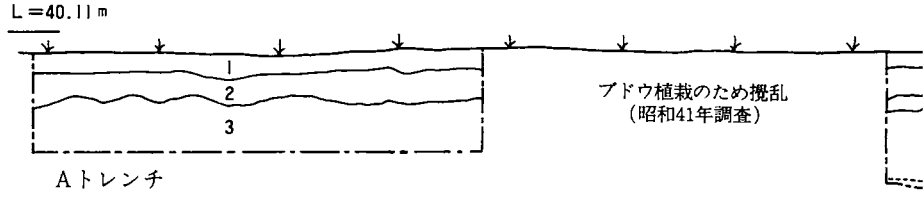
Hトレンチ　幅１ｍ、長さ10ｍ。Ｇトレンチの東に１ｍの間隔で設定した。層序ならびに遺物包含状況はＡ・Ｇトレンチと同じであるが、西端に住居址状の遺構、東側に御領期のカメ棺を検出した。

(2) 遺　構

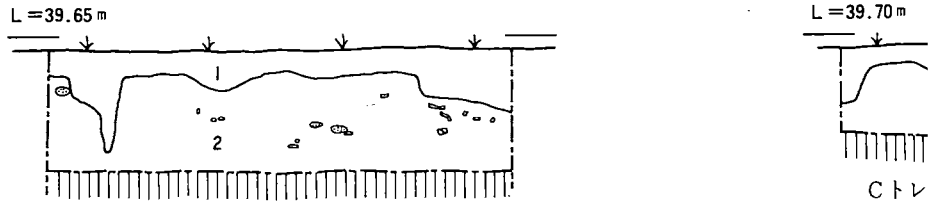
検出した遺構は、Ｇトレンチの配石遺構、Ｈトレンチの住居址状の遺構、カメ棺である。

Ｇトレンチ第４層上面に検出した配石遺構は、縄文早期のものである。遺構の遺存状態は悪く、本来の形や用途について正しい判断は下せないが、自然礫を意図的に配置したものと考えられる。

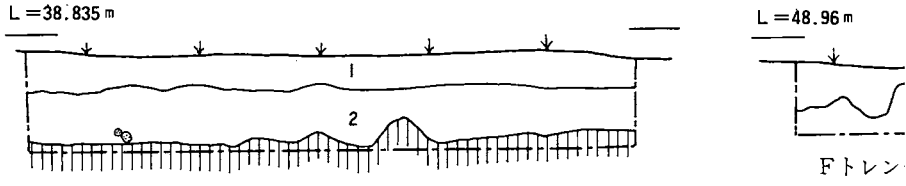
Ｈトレンチの住居址状遺構は、第３層に掘り込む（第38図）。掘り込み面からの深さは30cm前



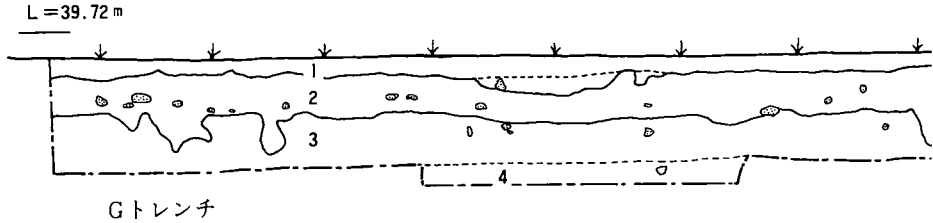
Aトレンチ



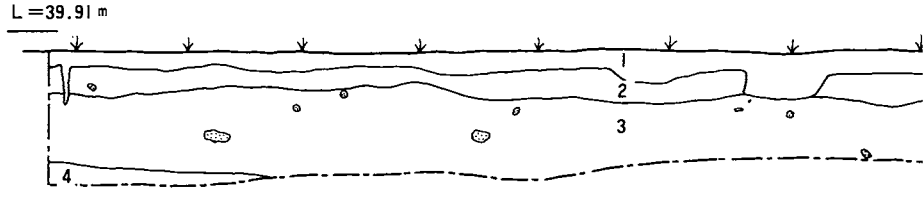
Bトレンチ　Cトレ



Eトレンチ　Fトレン

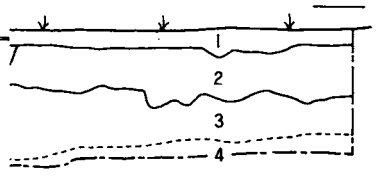


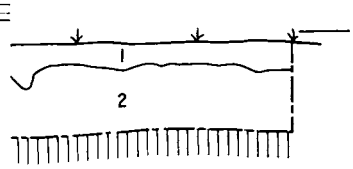
Gトレンチ

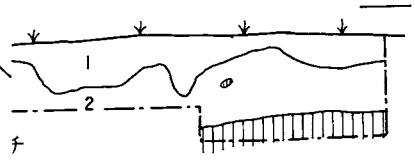


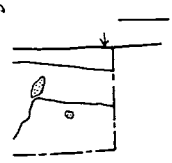
Hトレンチ

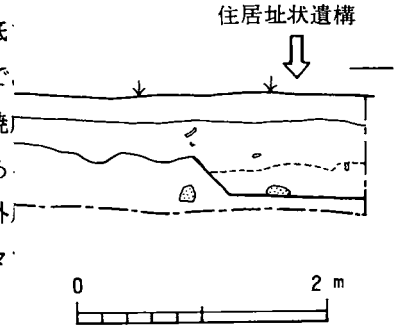
第38図　東鍋田遺跡トレンチ断面図

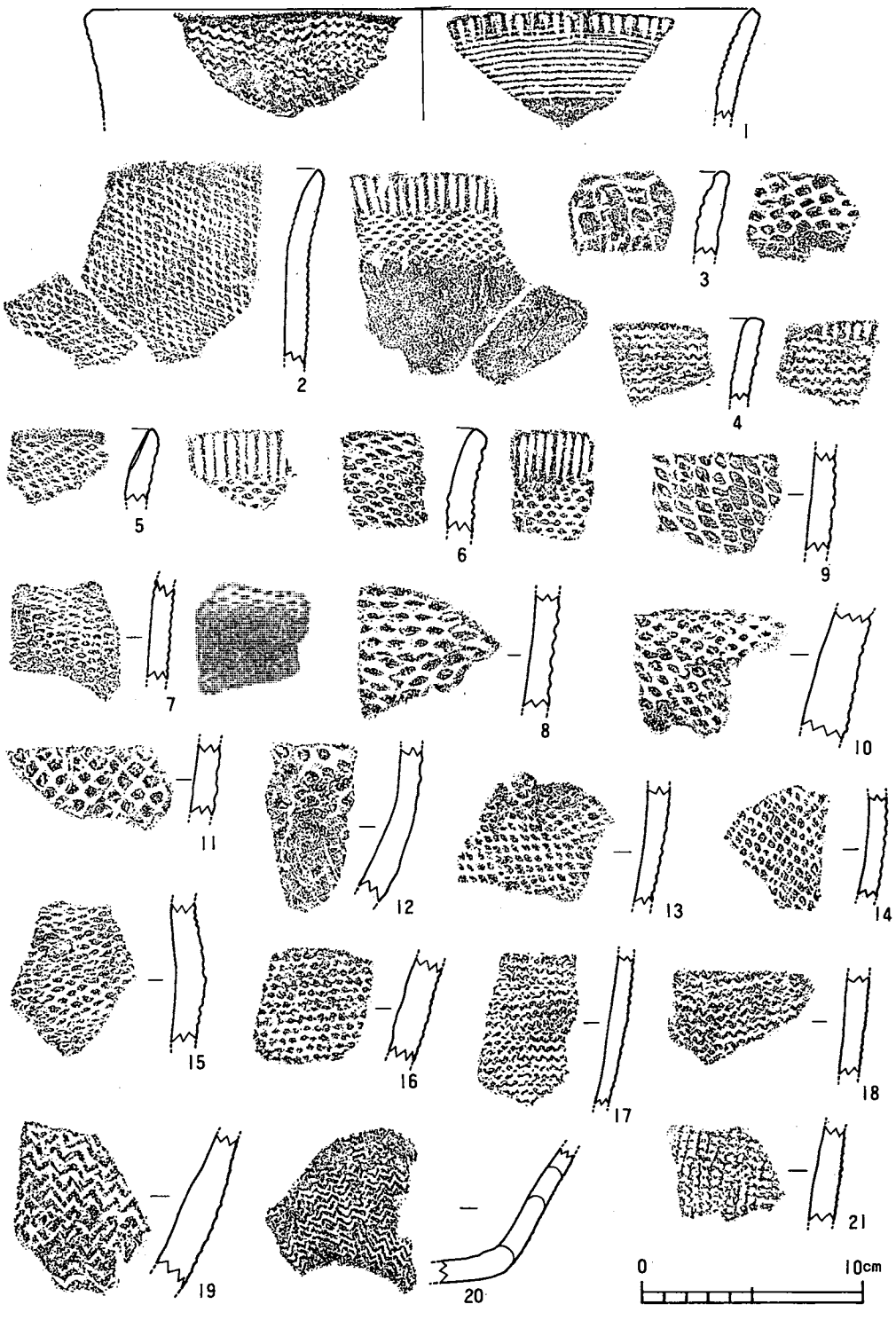

1
2
3
4


1
2

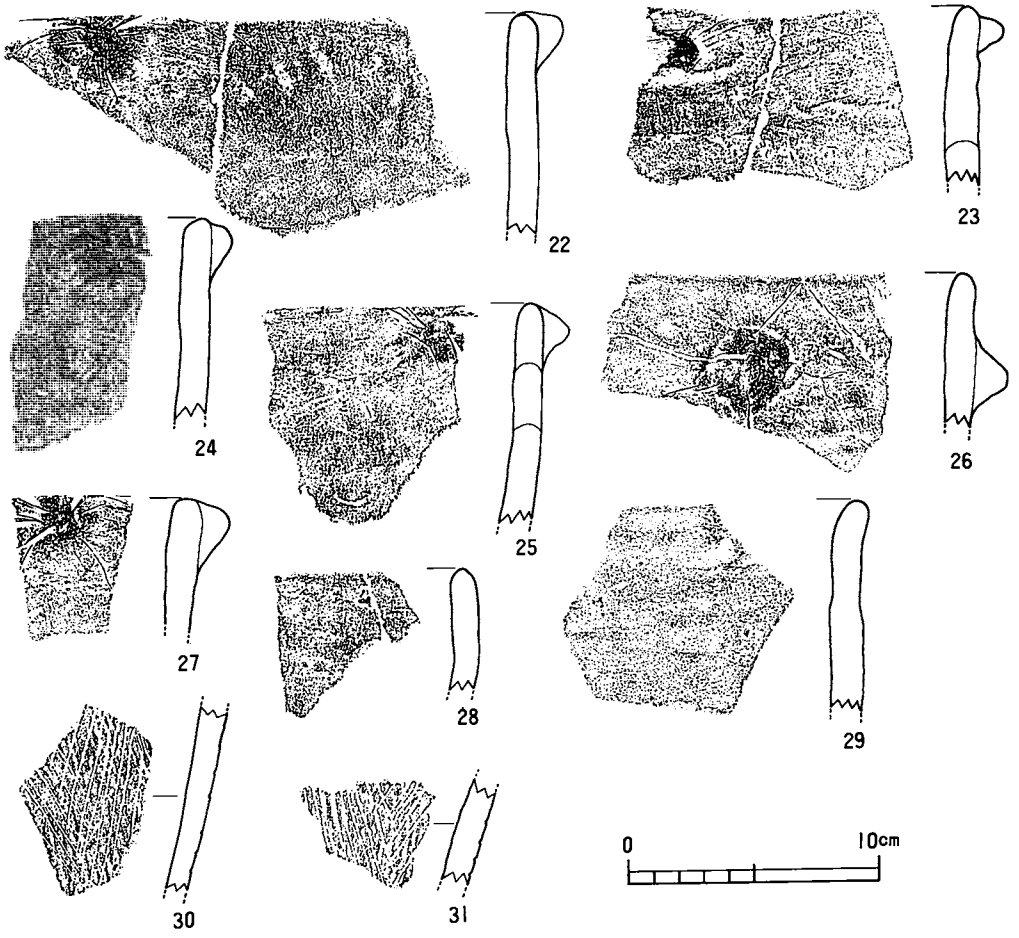

1
2




住居址状遺構
0
2 m



第40図　東鍋田遺跡出土縄文式土器実測図（Ⅰ類）



第41図　東鍋田遺跡出土縄文式土器実測図（II・III類）

沈線は極めて細い。胎土荒く、砂粒を含む。

東鍋田Ⅳ類（第42図32～51、第43図52）磨研土器の一群で、細線羽状文・磨消縄文・凹線文が施され、無文土器も含まれる。文様形態により４類に細分できる。

Ⅳａ類（第42図32～33、第43図52）細線羽状文を施すものである。

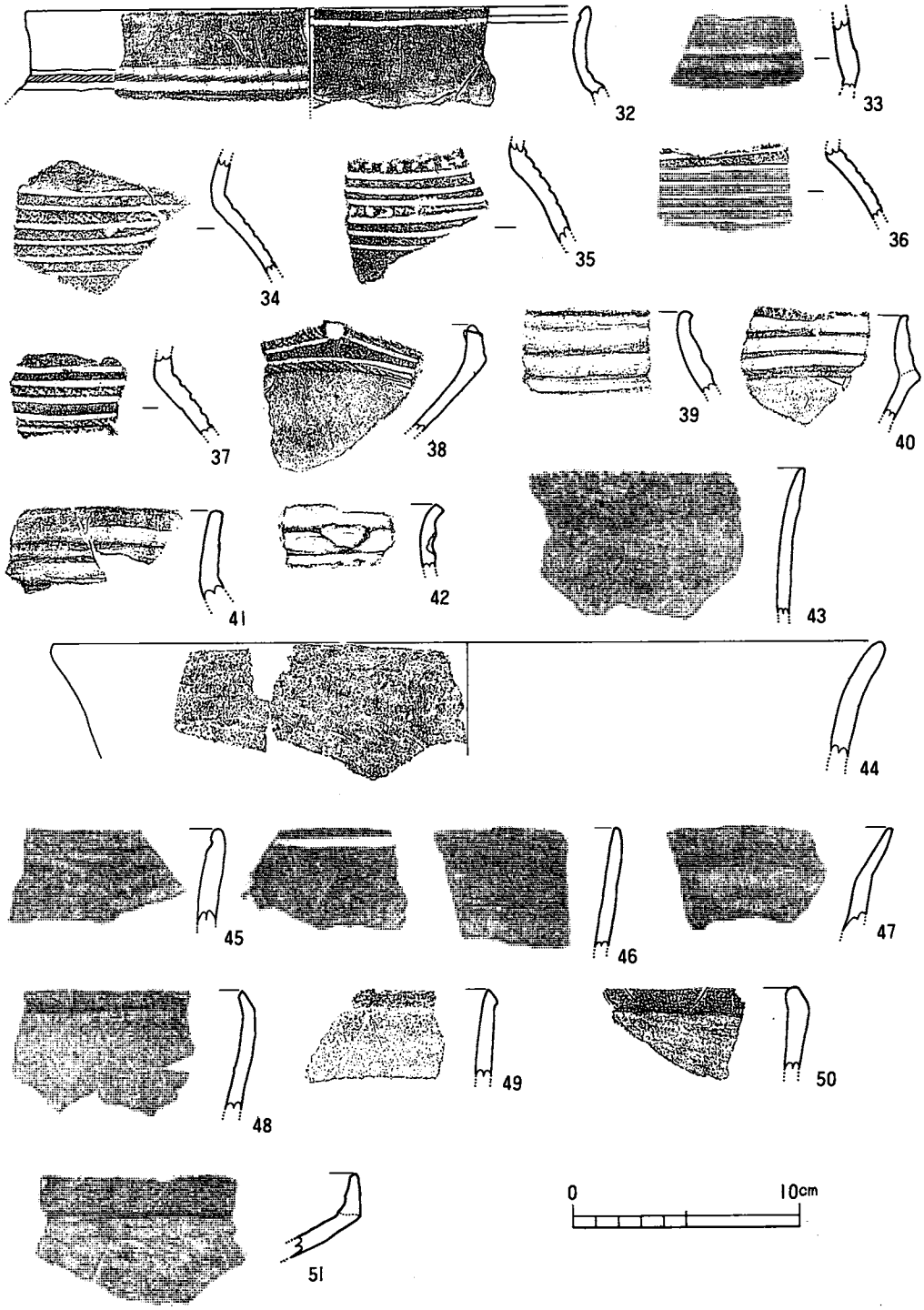
Ⅳｂ類（第42図34～38）磨消縄文を施すもの。

Ⅳｃ類（第42図39～42）口縁部が屈曲し、太目の凹線を施すもの。

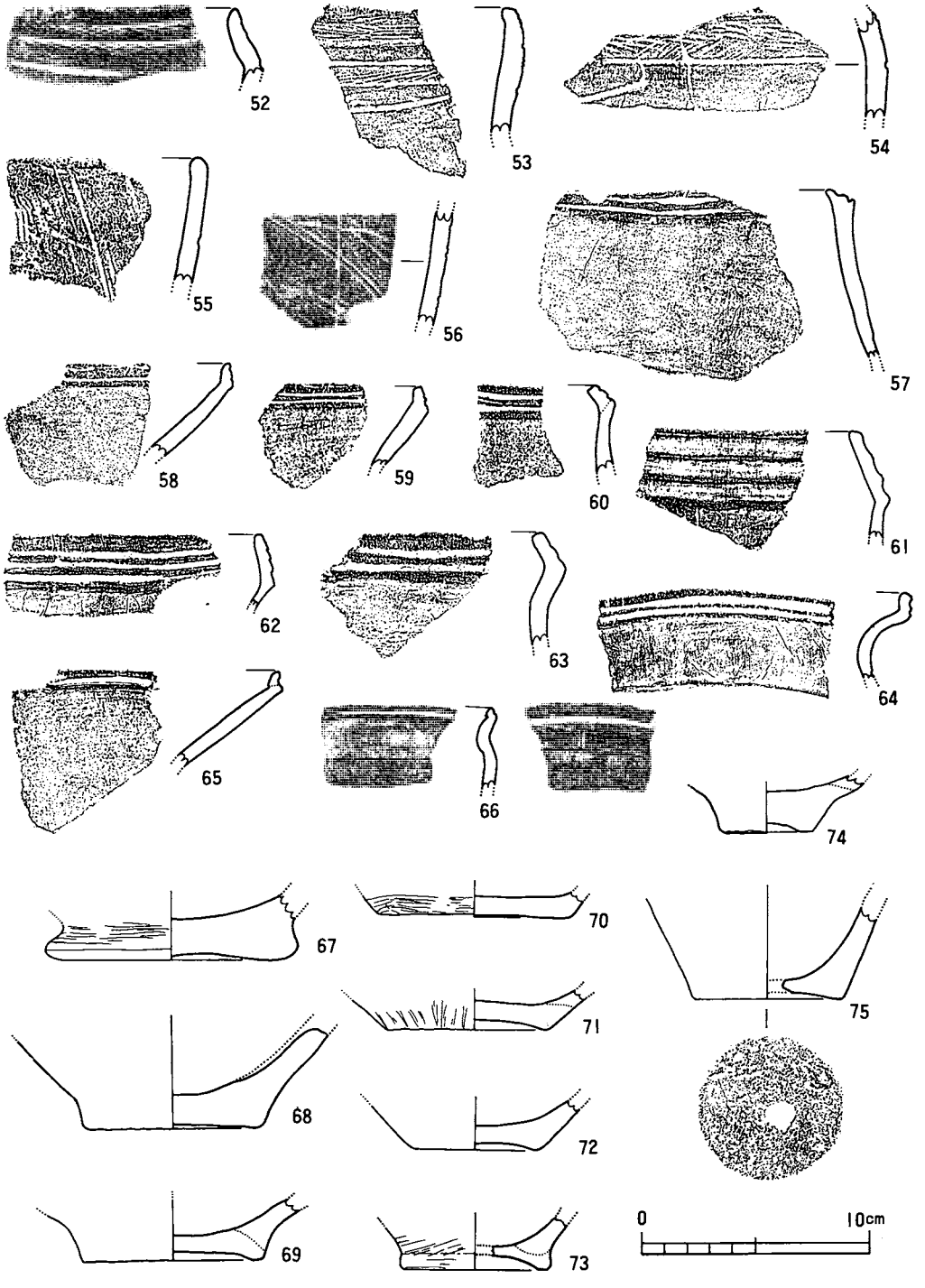
Ⅳｄ類（第42図43～51）ヘラ研磨を加えただけの無文土器、口縁部は外反するもの、直行するもの、くの字に折れて内傾するもの等変化に富む。一般に器壁は薄い。

東鍋田Ⅴ類（第43図52～56）ヘラによる沈線、斜行線、綾杉文が施されるもので、54には二枚貝腹縁の圧痕が加わる。Ⅳ類に比べるとヘラ研磨が雑で、55・56はヘラ削り気味のヘラナデ調整である。

東鍋田Ⅵ類（第43図57～63）くの字に屈曲する口縁で、口縁部に凹線・沈線を施す研磨土器。



第42図　東鍋田遺跡出土縄文式土器実測図（Ⅳ類）



第43図　東鍋田遺跡出土縄文式土器実測図（Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ類、底部）

第２表　東鍋田遺跡出土縄文式土器一覧表

土器番号	出土トレンチ・層	形態上の特色	技法上の特色	文様	類別	備考
1	H—３	復原口径30.5cm。 口縁部はわずかに外反する。	内外面施文。	外面…山形押形文 内面…貝殻条痕、凹線文	Ⅰ類	胎土に砂。焼成良。 暗褐色。
2	〃	復原口径約30cm。 口縁部はわずかに外反する。	〃	外面…楕円押形文 内面…楕円押形文・凹線文	〃	胎土に砂、焼成やや不良。 黒褐色。
3	G—４	口縁部はわずかに外反する。	内外面施文。 外面の押圧不充分。	外面…楕円押形文 内面…楕円押形文	〃	胎土に砂、焼成やや不良。 暗褐色。
4	F—２	〃	内外面施文。	外面…山形押形文 内面…山形押形文・凹線文	〃	胎土に砂、焼成やや不良。 暗黄褐色。
5	H—３	〃	〃	外面…楕円押形文 内面…楕円押形文・凹線文	〃	胎土・焼成良。 暗黄褐色。
6	A—４	〃	〃	〃	〃	〃
7	G—３	〃	内外面施文。 器壁は薄い。	外面…楕円押形文 内面…楕円押形文(凹線文)	〃	胎土に砂、焼成良。 暗褐色。
8	A—３下	胴部破片。	大粒の楕円文。 内面は削り気味のナデ。	楕円押形文	〃	胎土・焼成良。 暗褐色。
9	〃	〃	大粒の楕円文。	〃	〃	胎土に砂、焼成良。 黒褐色。
10	H—２	胴部破片(底部近く)。	大粒の楕円文。 器壁はきわめて厚い。	〃	〃	胎土に砂、焼成良。 暗褐色。
11	A—３	胴部破片。	大粒の楕円文。	〃	〃	胎土・焼成良く堅緻。 茶褐色。
12	G—２	胴部破片(底部近く)。	大粒の楕円文。 底部近くは不施文。	〃	〃	胎土・焼成良。 褐色。
13	E—２	胴部破片。	器壁は薄い。	〃	〃	胎土・焼成良。 黄褐色。
14	H—３	〃	〃	〃	〃	〃
15	A—３下	〃 わずかにくの字に屈曲する。	器壁は厚い。	〃	〃	胎土・焼成良く、堅緻。 暗赤褐色。
16	G—３	胴部破片。	〃	〃	〃	胎土・焼成良。 褐色。
17	A—３	〃	器壁は薄い。 内面ナデ調整。	山形押形文	〃	胎土良、焼成不良。 褐色。
18	G—４	〃	施文は雑。	〃	〃	胎土良、焼成不良。 外面黄褐色、内面黒色。

19	F—2	胴部破片（底部近く）。	単位の大きな山形文。 器壁は厚い。	山形押形文。	I　類	胎土に砂、焼成やや不良。 暗褐色。
20	G—3	底部破片。 丸底気味の平底。	輪積み痕観察。 底部無文。	〃	〃	胎土に砂、焼成良。 黄褐色。
21	G—4	胴部破片。	器壁はやや厚い。 施文は雑。	格子目押形文。	〃	胎土に砂、焼成良。 暗褐色。
22	G—3、H—3	復原口径約50～55cm。口縁部に貼瘤を有する。口縁部直行。	瘤は貼付。	無文。	II　類	胎土に砂、焼成良。 褐色。
23	G—3	口縁部に瘤を有する。 口縁部直行。	瘤はつまみ出し。	〃	〃	胎土に砂、焼成良。 暗黄褐色。
24	〃	口縁部に貼瘤を有する。 口縁部は直行。	瘤は貼付。	〃	〃	胎土に砂、焼成良。 黄褐色。
25	〃	〃	〃	〃	〃	胎土に砂、焼成良。 暗黄褐色。
26	〃	口縁よりやや下に貼瘤。 口縁部は直行。	瘤は貼付。 貼瘤から左へ沈線。	沈線。	〃	胎土に砂、焼成良。 暗赤褐色。
27	〃	口縁部に貼瘤。 口縁部は直行。	瘤は貼付。	無文。	〃	胎土に砂、焼成良。 暗黄褐色。
28	〃	口縁部はわずかに内弯。	内外面ナデ。	〃	〃	胎土に砂、焼成良。 赤褐色。
29	〃	口縁部はわずかに外反。	内外面指圧とナデ。	〃	〃	胎土に砂、焼成良。 黄褐色。
30	H—3	胴部破片。	施文はヘラにより、細い。	斜行沈線。	III　類	胎土に砂、焼成良。 褐色。
31	A—3	〃	〃	〃	〃	〃
32	A—2	口縁部はわずかに外反。復原口径25cm。口縁部内面にも沈線。	内外面丁寧なヘラ磨き。	細線斜行文・沈線。	IV a 類	胎土・焼成良。 黒褐色。
33	H—2	頸部に軽く段がつく。	〃	細線斜行文・凹線文。	〃	〃
34	〃	頸部でくびれ、口縁部は外反する。	内外面ヘラ磨き。磨きはやや雑。	磨消縄文。	IV b 類	胎土・焼成良。 褐色。
35	G—2	〃	内外面ヘラ磨き。内面の磨きは雑。	磨消縄文・連点文。	〃	胎土・焼成良。 黒褐色。
36	A—2	〃	内外面ヘラ磨き。	沈線。	〃	胎土・焼成良。 茶褐色。
37	Hトレンチ 住居跡状遺構	〃	〃	磨消縄文。	〃	胎土・焼成良。 暗褐色。
38	H—2	浅鉢。わずかに山形口縁をなす。	内外面やや雑なヘラ磨き。	磨消縄文。	〃	胎土・焼成良。 茶褐色。

土器番号	出土トレンチ・層	形態上の特色	技法上の特色	文様	類別	備考
39	A—2	口縁は内傾したのちわずかに外反。	内外面ヘラ磨き。内面の磨きは雑。	凹線文。	Ⅳc類	〃
40	H—2	口縁部はわずかに外反。	内外面ヘラ磨き。	〃	〃	胎土・焼成良。赤褐色。
41	H—3	口縁部はわずかに外傾する。	内外面密なヘラ磨き。	〃	〃	胎土・焼成良。黒褐色。
42	〃	口縁部はわずかに外反。	〃	〃	〃	胎土・焼成良。赤褐色。
43	A—2	〃	内外面雑なヘラ磨き。器壁は薄い。	無文。	Ⅳd類	胎土・焼成良。黒褐色。
44	H—2	復原口径36.7cm。口縁部はわずかに外反する。	外面はわずかなヘラ削りとナデ。内面ヘラ磨き。	〃	〃	胎土・焼成良。褐色。
45	A—3	口縁部はわずかに外傾する。口縁内面に沈線。	内外面ヘラ磨き。	〃	〃	〃
46	A—2	口縁部は直行気味にわずかに外傾。	内外面わずかにヘラ磨き。	〃	〃	胎土・焼成良。暗褐色。
47	A—3	口縁部は屈曲して外傾する。	外面ヘラ磨きとナデ。内面ナデ調整。器壁は薄い。	〃	〃	胎土・焼成良。茶褐色。
48	H—3	口縁部は内弯気味に内傾する。	内外面密なヘラ磨き。器壁は薄い。	〃	〃	胎土にわずかに砂、焼成良。茶褐色。
49	A—2	口縁部は直行し、先端は尖る。	内外面わずかにヘラ磨き。	〃	〃	胎土にわずかに砂、焼成良。暗茶褐色。
50	A—3	口縁部は直行したのち内傾する。	内外面ヘラ磨き。器壁はやや厚い。	〃	〃	〃
51	H—2	浅鉢。	内外面薄いヘラ磨き。内面はナデ併用。	〃	〃	胎土・焼成良。暗褐色。
52	A—2	口縁部は内傾する。	外面わずかにヘラ磨き。施文はヘラ状のものによる。	斜行線・凹線。	Ⅴ類	胎土・焼成良。明褐色。
53	G—2	口縁部はわずかに内弯する。	外面ヘラミガキ。内面ナデ。	斜行線・沈線。	〃	胎土にわずかに砂。暗褐色。
54	〃	胴部破片。わずかに丸く湾曲する。	〃	綾杉文。沈線。	〃	胎土・焼成良。褐色。
55	A—3	口縁部はわずかに外傾し、先端はわずかに内弯する。	外面は荒いヘラ削り。内面はナデ。	沈線。	〃	胎土に砂、焼成良。黒褐色。
56	〃	胴部破片。	〃	〃	〃	〃
57	A—2	口縁部は内傾。	内外面ヘラ磨き。器壁は薄い。	〃	Ⅵ類	胎土・焼成良。褐色。

58	H—3上	浅鉢。	内外面わずかにヘラ磨き。	沈線。	Ⅵ 類	胎土・焼成良。 明褐色。
59	H—2	〃	内外面ヘラ磨き。	〃	〃	〃
60	〃	口縁先端は屈曲し、わずかに内傾する。	〃	〃	〃	胎土・焼成良。 暗褐色。
61	A—3上	口縁部は内傾する。	外面ヘラ磨き。 内面は器面荒れ、調整不明。	凹線。	〃	胎土・焼成良。暗褐色。 Ⅳc類に近い。
62	G—2	〃	内外面ヘラ磨き。 器壁は薄い。	沈線。	〃	胎土・焼成良。 明褐色。
63	H—2	〃	内外面ヘラ磨き。	〃	〃	胎土・焼成良。 褐色。
64	〃	口縁部は大きく屈曲し、先端は直行する。	内外面密なヘラ磨き。 器壁は薄い。	〃	Ⅶ 類	胎土・焼成良。 黒褐色。
65	〃	浅鉢。口縁部は直行する。	〃	〃	〃	〃
66	G—2	口縁部はS字状に屈曲する。 口縁内面にも沈線を施す。	〃	〃	〃	胎土にわずかに砂、焼成良。 黒褐色。
67	H—2	底部破片。平底。 底径約11.1cm。	外面には指ナデ痕観察。		底 部	胎土・焼成やや不良。 明褐色。
68	A—2	底部破片。平底。 底径約8cm。	器面荒れ、調整不明。		〃	胎土にわずかに砂、焼成良。 褐色。
69	〃	底部破片。わずかに上底。 底径約8cm。	外面ヘラ磨き。 内面は器面荒れ。調整不明。		〃	胎土・焼成良。 明褐色。
70	H—3	底部破片。平底。 底径約8.7cm。	内面ナデ。外面は密なヘラ磨き。		〃	胎土にわずかに砂、焼成良。 黄褐色。
71	A—2	底部破片。上底。 底径約7.4cm。	内外面ヘラ磨き。		〃	胎土・焼成良。 明褐色。
72	H—2	底部破片。上底。 底径約5.6cm。	外面ヘラ磨き。内面はナデ。		〃	胎土・焼成良。 暗赤褐色。
73	〃	底部破片。上底。 底径約6.7cm。	外面密なヘラ磨き。 内面はヘラ磨きとナデ。		〃	胎土・焼成良。 暗黄褐色。
74	A—3	底部破片。径の小さい上底。 底径約4.1cm。	内外面ナデ調整。 整形・調整ともにやや雑。		〃	胎土・焼成良。 暗赤褐色。
75	B—2	底部。平底。底径約6.6cm。 焼成後の穿孔がある。	器面荒れ、調整不明。		〃	胎土にわずかに砂、焼成やや不良。赤褐色。

内外面に研磨が施されるが、Ⅳ類・Ⅶ類に比べると雑である。

東鍋田Ⅶ類（第43図64～66）くの字に屈曲する口縁であるが萎縮化し、沈線も１～２条となる。研磨は丁寧で、黒褐色を呈する。器壁はきわめて薄い。この類は量的には多くない。

底部（第43図67～74）平底・上底があり、底径も大小様々である。75には焼成後の穿孔がある。

これらの縄文式土器を、従来の編年や出土状況等から型式比定を行えば、Ⅰ・Ⅱ類は縄文早期に、Ⅳ類は三万田式土器に、Ⅵ類は御領式に、Ⅶ類は黒川式に比定できよう。Ⅴ類は施文や調整方法において三万田式に類似はするが差異も認められ、三万田式に先行するものであろう。

ロ、弥生式土器

細片で、量も少ない。ジョッキ形土器や、黒髪式土器が出土した。聞取り等によれば、本年度調査地点より東側に弥生時代の包含層がある可能性が強い。

ハ、須恵器・土師器（第44図）

Ｂ・Ｃトレンチを中心に、古墳時代後期の須恵器・土師器を出土した。出土状況から住居址の可能性がきわめて強い。

須恵器は坏で、６世紀前半代に比定できるものである。底部はすべてヘラ削りが施されている。１は口径13.2cm、器高4.3cm。２は口径13.2cm、器高4.3cm。３は口径13.4cm、器高4.2cm。いずれも胎土・焼成良く、灰色を呈する。

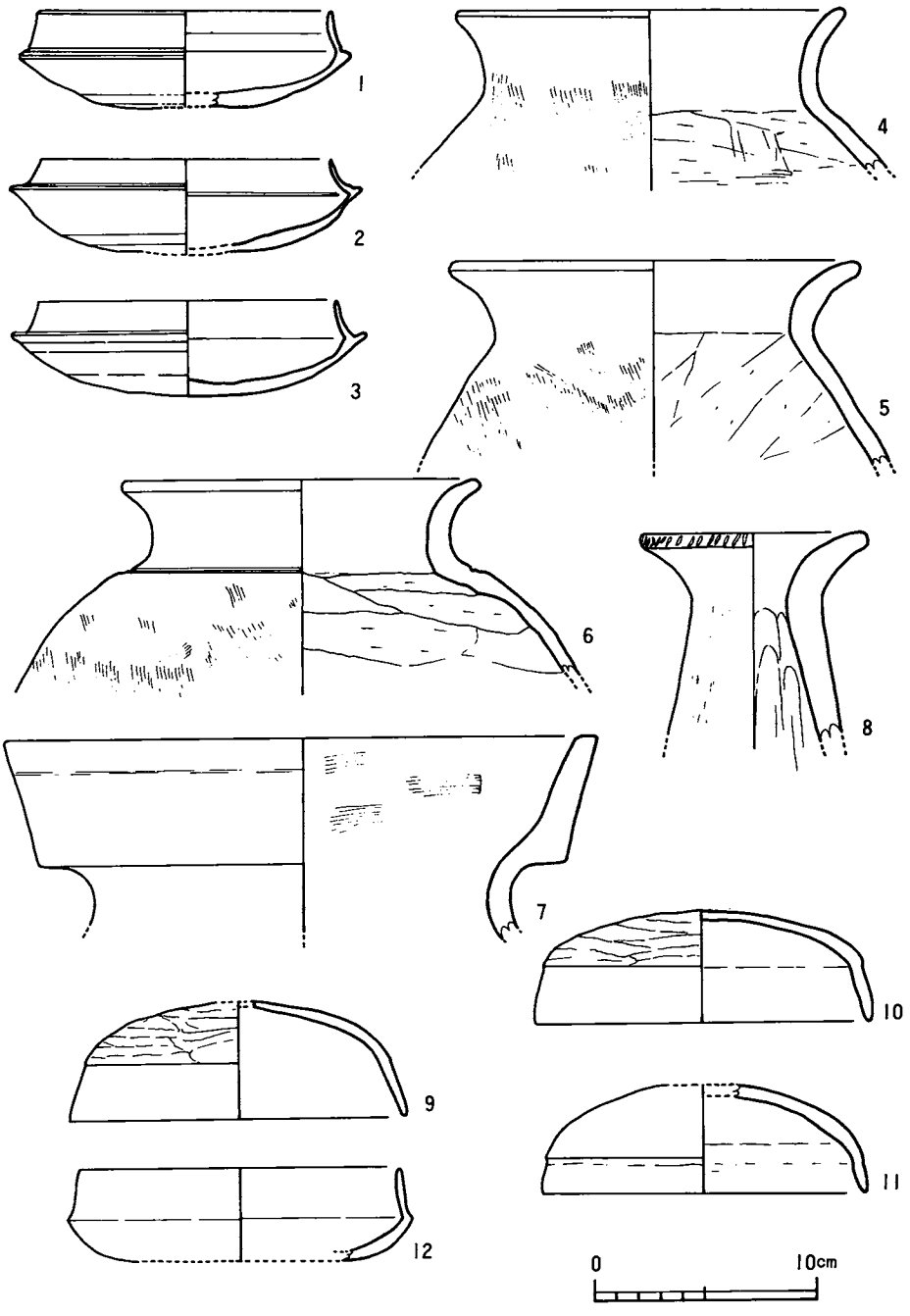
土師器には甕・壺・器台・坏がある。甕の形態にはわずかな差異がみられるが、時期差を示す程ではなく、出土状態からも同時期と言える。体部外面は刷毛目の上をナデ、内面はヘラ削り調整。破片が多く、全形を窺えるものはない。胎土は精選され、焼成も良く堅い。４は復原口径17.4cm、５は同じく18.4cm、６は16cmを測る。７は壺の口縁部破片。復原口径26.6cm。複合口縁の退化した形状を示す。口縁部はわずかに外傾し器壁は厚い。外面ナデ、内面は刷毛目の上をナデ。８は器台。口唇に刻目を連続する。外面は刷毛目の上をナデ、内面には指圧痕が残る。９～11は坏蓋。天井部はヘラ削り（11は器面荒れで不明）し、外面には漆を塗布する。天井部と体部の境は軽く有段をなす。器壁は薄く、胎土・焼成も良い。９は復原口径15.2cm、10は15.1cm、11は14.5cmを測る。12は坏身。復原口径14.4cm、復原器高4.2cm。体部は比較的扁平である。内外面に漆を塗布する。

ニ、青磁・白磁

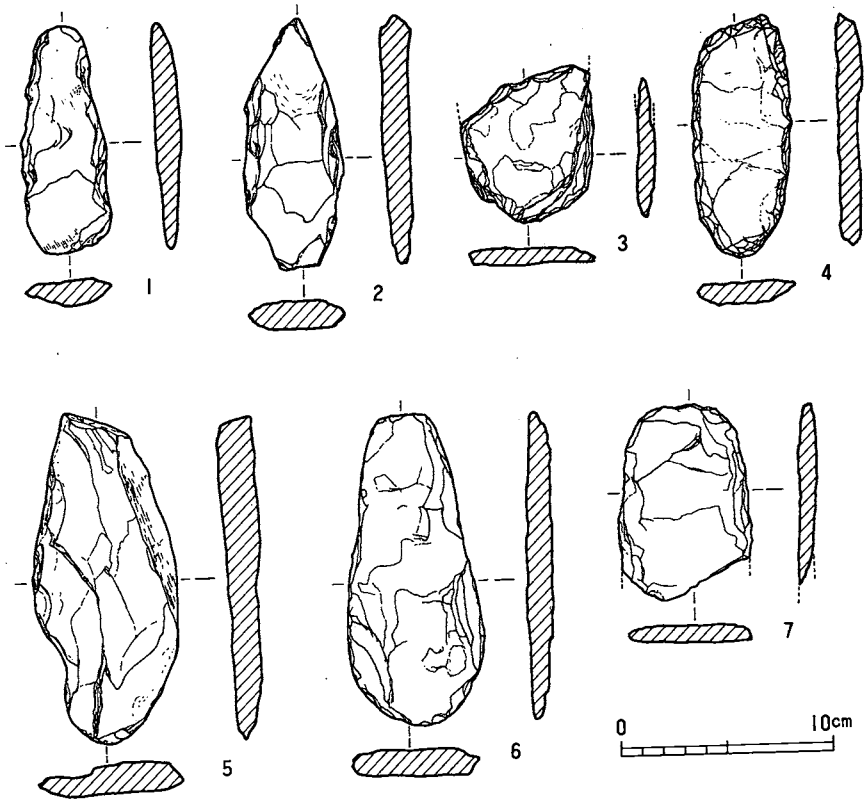
細片で図示できないが、両者含めて約10点出土した。青磁は宋代竜泉窯系のもので、白磁も同時期と考えられる。管状土錘の出土とともに、当遺跡の一面を示すものである。

ホ、石器・石製品（第45～47図）

緑色変岩系の打製石斧が破片も含めると10数点出土した。完形品及び大きな破損品を第45図に掲げる。１は刃部の一部に研磨を加えたものである。最大長10.6cm、最大幅４cm、重量75ｇ。



第44図　東鍋田遺跡出土須恵器・土師器実測図



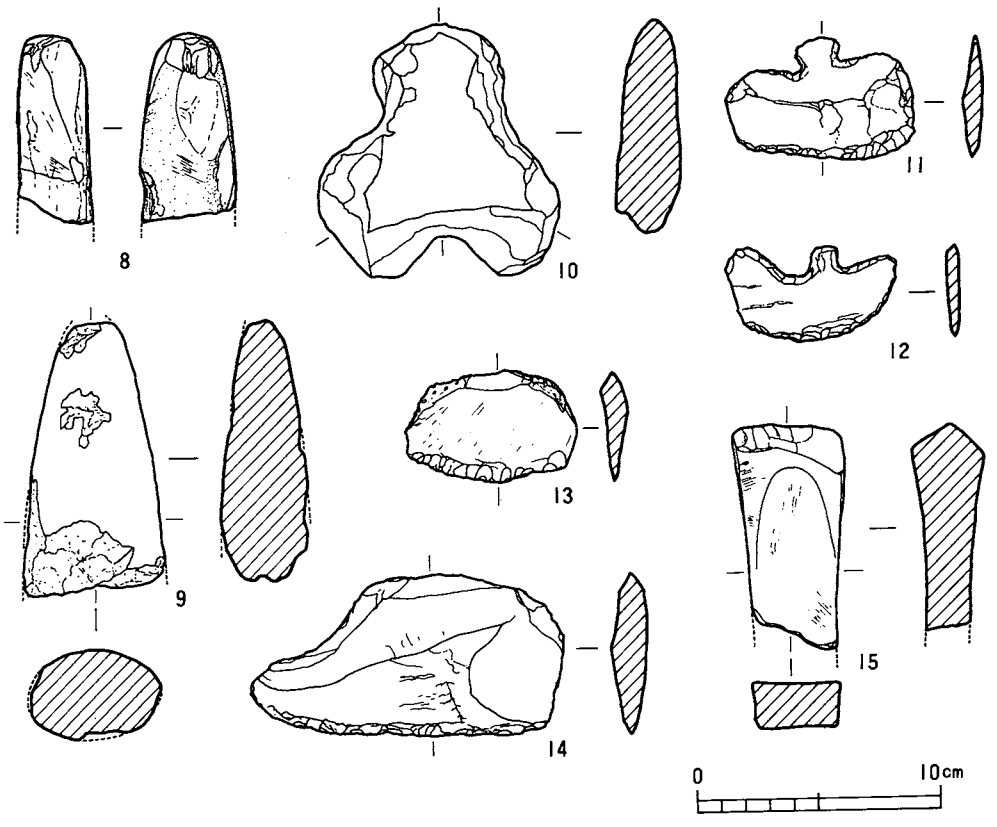
第45図　東鍋田遺跡出土石器実測図

2は上下端は尖り気味で、刃部の調整は不充分である。最大長11.6cm、最大幅4.8cm、重量115g。1・2は表採品である。3は下半（又は上半か）の破損品。最大幅6.3cmで、やや幅広く、薄い。D—2出土。4は形よく調整されているが、上下端はかなり厚めである。最大長11.2cm、最大幅4.6cm、重量90g、E—2出土。5は自然面を多く残し、整形は雑である。刃部は尖り気味で、全体に厚く重量がある（225g）。H—2出土。6は形も整い、最大長14.5cm、最大幅9.5cm、重量180gを測る。上端はわずかに平らで、刃部は丸味をもつ。H—2出土。7は破損品で、3と同様薄い。

8は硬質砂岩製の抉入石斧。下半を欠失するが、整形調整はやや雑である。抉の部分の側面観は真横方向ではなく斜めに削り込まれる。撹乱層からの出土であるが、黒髪式土器に伴った可能性が強い。H—2出土。

10は凝灰岩製の十字形石器の変形品。軟質の凝灰岩で、3個の突起を削り出す。この抉り込みのうち、図の左上のものには擦痕があるが他には認められない。180gを測り、A—3出土。三万田式土器と共伴して出土した。

11・12は横型の石匕。ともに安山岩で、つまみ以外の外周は全面に交互剝離による刃部を調



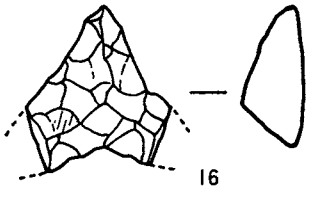
第46図　東鍋田遺跡出土石器・石製品実測図

整する。12は三ヵ月状を呈する。11は32ｇ、G—２出土。12は15ｇ、H—２出土。

13・14は安山岩製の刃器。いずれも図の下面に刃部を調整する。13は7.2×4.6cm、H—２出土。14は大型で、12.9×6.6cm、F—２出土。

15は乳濁色の所謂天草砥石。４面ともよく使用され、研ぎべりがある。H—２出土で、中世のものであろう。

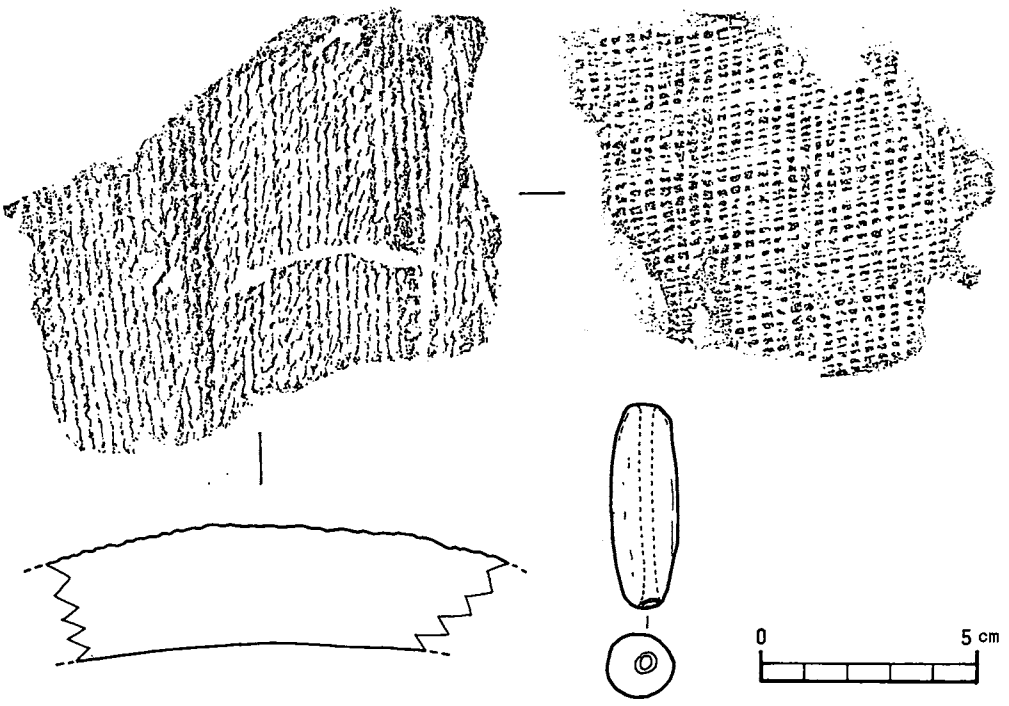
第47図16は用途不明の石製品。(註４)石英質の乳濁色の石材で、三菱状を呈する。一端は遺存するが、他の二端は先端が欠失する。厚みがあり、石鏃ではない。D—２出土。



第47図
東鍋田遺跡出土石器実測図
(実大)

へ、土製品（第48図）

表採品であるが、布目瓦が１点ある。平瓦の破片で、凸面には縄目、凹面には荒い布目がある。同じく表採品で、管状土錘が１点ある。長さ4.7cm、最大幅1.6cm、重量9.03ｇ。整形は雑である。



第48図　東鍋田遺跡表採布目瓦・土錘実測図

3．小　　結

昭和41年の調査において、東鍋田遺跡の性格はある程度明らかにされていた。それによると三万田式、押形文の良好な包含層があり、布目瓦の出土することも指摘されている。

今回の調査においても、量的に多いのは押形文土器・三万田式土器であるが、その後の時代の遺物も得ることができ、遺跡の年代の幅を知ることができた。出土遺物にみられる年代は、縄文早・後・晩期、弥生中期、古墳後期、古代、中世である。

縄文早期においては貼瘤文土器を伴出し、三万田式期と考えられる住居址状遺構、御領期のカメ棺が検出された。(註5)弥生中期や古墳時代後期の土器が出土したことは従来の所見に新たな視点を加えたものと言える。とくに古墳後期については、同台地上の古墳や遺跡の直下の凝灰岩壁に営まれた鍋田横穴群(註6)等との関連において重要な所見である。礎石埋没地点は調査不可能(註7)（ビニールハウス）であったが、山鹿地方における数少ない布目瓦出土地(註8)でもあり、機会を見て追跡調査の必要があろう。

なお、当遺跡についての花粉分析、プラント・オパール分析を専門調査員の畑中健一（北九州大学）・藤原宏志（宮崎大学）氏に依頼して実施した。

花粉分析の結果については、当該地が火山灰上壌であるため、花粉の遺存はみられなかった。プラント・オパール分析の結果については、資料を整えたうえ、改めて発表する予定である。

註１　浜田耕作・梅原末治『肥後に於ける装飾ある古墳及び横穴』京都帝国大学考古学研究報告第１冊、大正６年。

註２　隈昭志・杉村彰一「東鍋田遺跡（略報）」『チブサン』第５号、昭和41年。

隈昭志「熊本県山鹿市東鍋田遺跡」『日本考古学年報』19、昭和46年。

註３　当地で活動している坂本正幸氏の教示による。園芸用ビニールハウス設置の際偶然に礎石が現われ、ボーリングの結果４～５個の礎石が確認されたという。

註４　石鏃に形が類似するが、厚みがある。類例として植木町採集の石器（古財誠也氏採集・蔵）がある。

註５　県下では熊本市・カブト山遺跡、上益城郡御船町・久保遺跡に類例がある。大分県では類例が多く、賀川光夫氏らの報告がある。

東光彦・平岡勝昭「カブト山Ａ遺跡」熊本市文化財調査報告書Ⅱ(北部地区)、昭和46年。

髙木正文「縄文時代の遺構と遺物」『久保遺跡』熊本県文化財調査報告書第18集、昭和50年。

髙木正文「無文土器」『稲荷山遺跡緊急調査』大分県文化財調査報告第20・21集、昭和45年。

賀川光夫・清水宗昭他『東台遺跡』臼杵市教育委員会、昭和49年。

註６　鍋田台地には墳丘の遺存する古墳はないが、石棺や石蓋土壙が調査されている。

倉原謙治「東鍋田石蓋土壙発掘調査手記」『チブサン』13号、鹿本高校考古学部、昭和43年。

註７　装飾古墳として著名で、古く国指定となっている。

浜田耕作・梅原末治『肥後に於ける装飾ある古墳及び横穴』京都帝国大学考古学研究報告第１冊、大正６年。

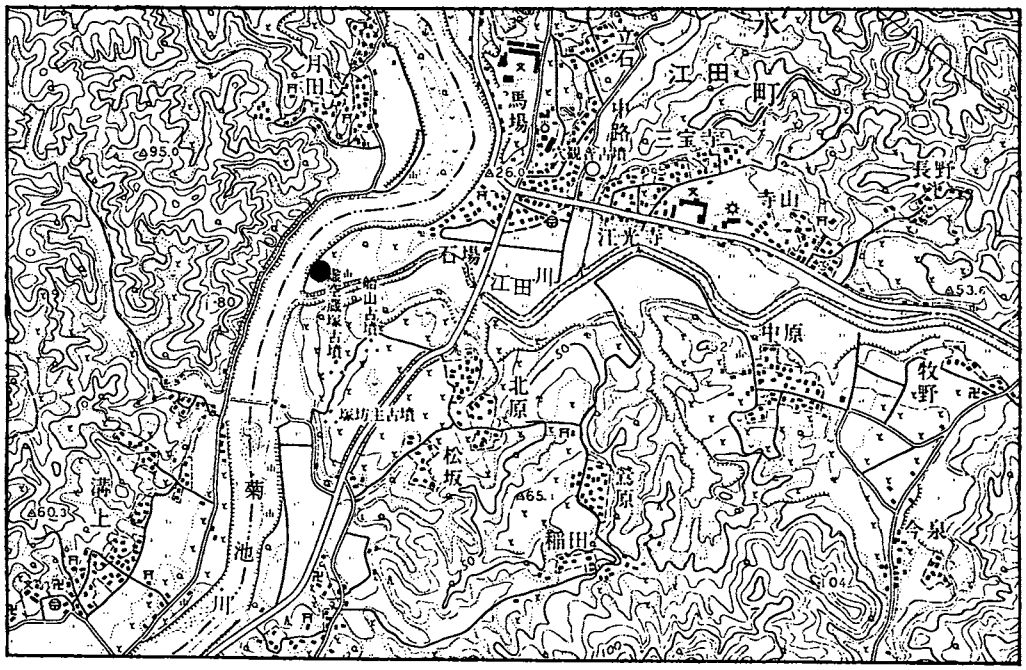
下林繁夫・上妻博之「熊本県下に於ける内務大臣指定の史蹟と天然記念物」熊本県史跡名勝天然記念物調査報告第４冊、昭和２年。

なお、横穴群の基数については、従来54基とされていたが、昭和52年８月の伊藤奎二氏らの調査により、破壊されたもの、新発見のものを含めて４～５基増える可能性が強いという。

註８　この地域の布目瓦出土地としては中村廃寺と桜町遺跡がある。

第3節　若　園　貝　塚

1．位置と概要（第49・50図）

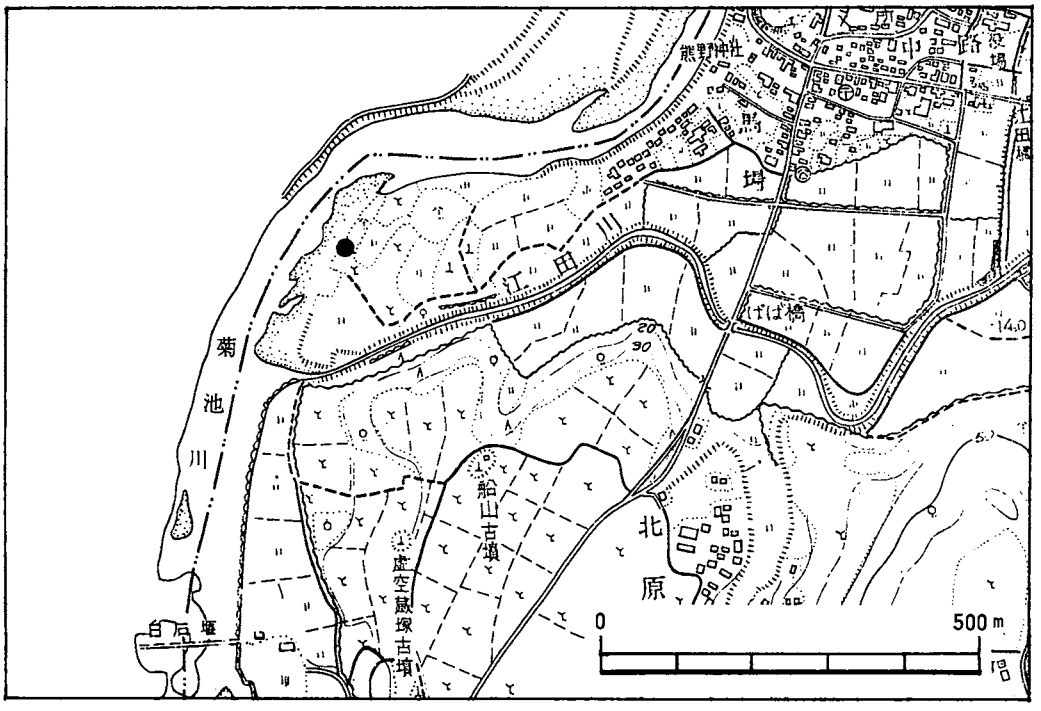


第49図　若園貝塚位置図（$\frac{1}{25000}$）

玉名郡菊水町大字江田字若園、江田川と菊池川の合流点の上流約180ｍの菊池川左岸に所在する。北方を菊池川、南方を江田川で限られ、細長く延びた丘陵の先端部に立地し、丘陵裾部から3段の段丘状地形を経て菊池川に接する。貝塚は菊池川水面から数えて2～3段目に分布し、後述するように、さらにその上方の丘陵斜面まで拡がる可能性がある。2～3段目の標高は海抜10～11ｍを測る。

若園貝塚は古くからその存在を知られ、菊池川流域最上流に位置する海水産貝類の貝塚として注目されていたが、基本的な調査や(註1)公表された資料は皆無に等しかった。

昭和50年12月、トンカラリン調査の際、菊水町教委・前川一丸氏と(註2)共に当貝塚を踏査したところ、従来桑畑であった貝塚一帯に杉とミカンが植栽されていることを知った。樹木の大きさ等から、ここ1～2年の間に植付けられたものであろうと推測された。このような事情によっ



第50図　若園貝塚周辺地形図

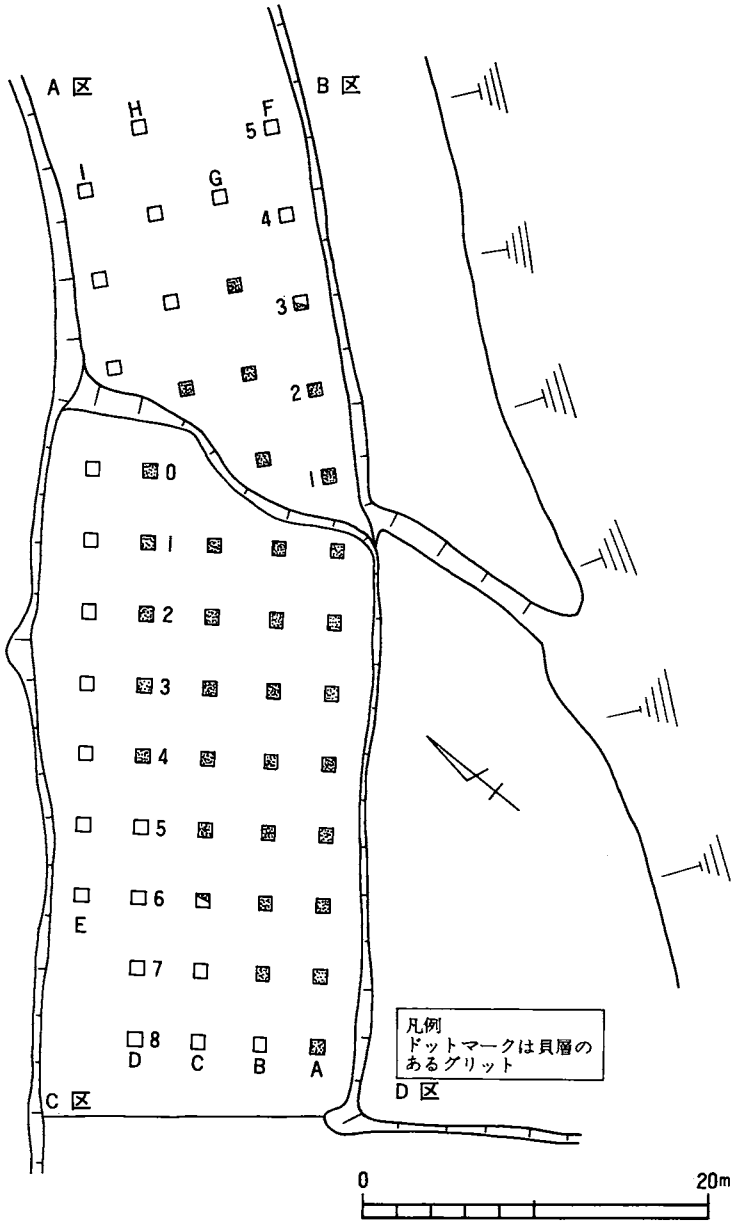
て、昭和51年度調査地の一つに当貝塚を選定し、範囲確認を主とする調査を実施した。

2．調　　査

昭和52年３月５日から同30日にかけて、グリットによる調査を実施した。

グリットの配置は第51図に示すとおりである。

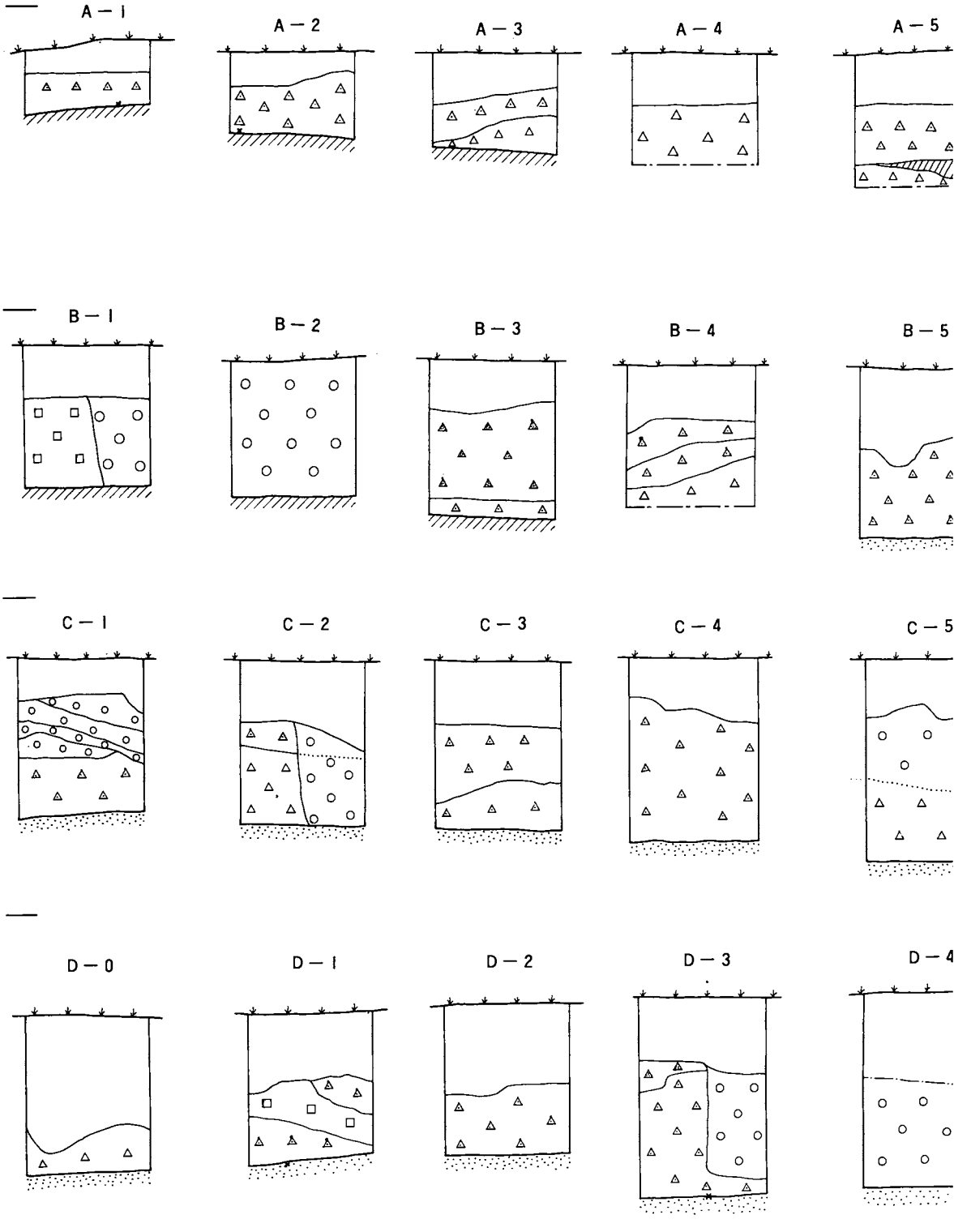
当初Ａ区に主眼をおき、横５列、縦９列を設定し、縦列は右から左へＡ～Ｅ、横列は上から下へ０～８とし、２桁でその位置を示す。尚Ａ－０・Ｂ－０・Ｃ－０・Ｅ－７・Ｅ－８は設定しておらず、Ｂ区に設定したグリットの総数は40ヵ所である。調査の後半、作業状況をみて、Ａ区にも横４列のグリットを設定し、右から左へＦ～Ｉとし、縦列は下から上へ１～５とした。これらのグリットは、杉の植林の間隙に設定しなければならず、その間隔（グリット中心間の距離）も3.4～５ｍと不統一である。各グリットの大きさも限定され、70～90cm平方で掘開した。いくつかのグリットは貝層上面の検出で掘開を中止したが、大半のグリットについては基底面まで掘開した。



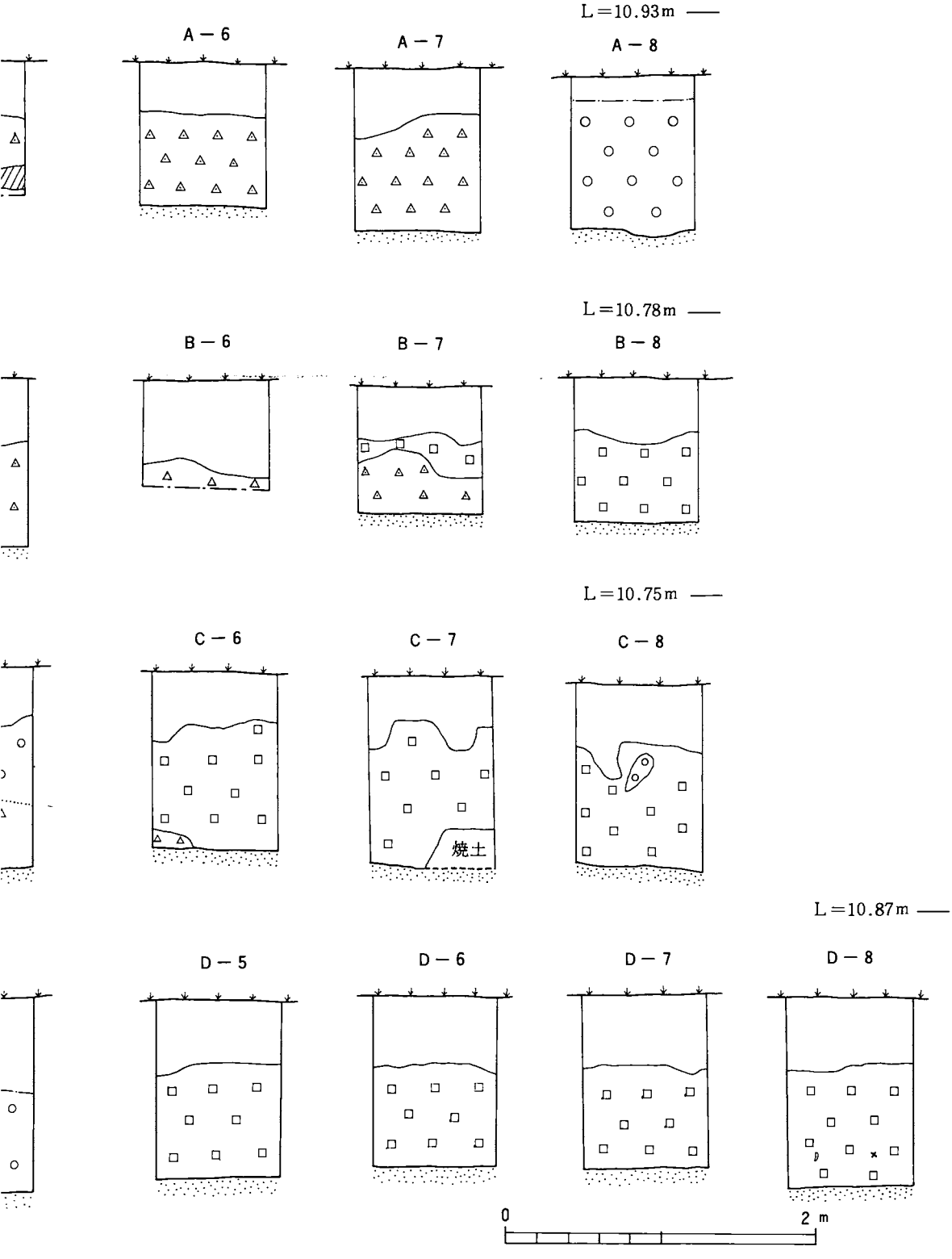
第51図　若園貝塚グリット配置図

(1)　貝層と層位

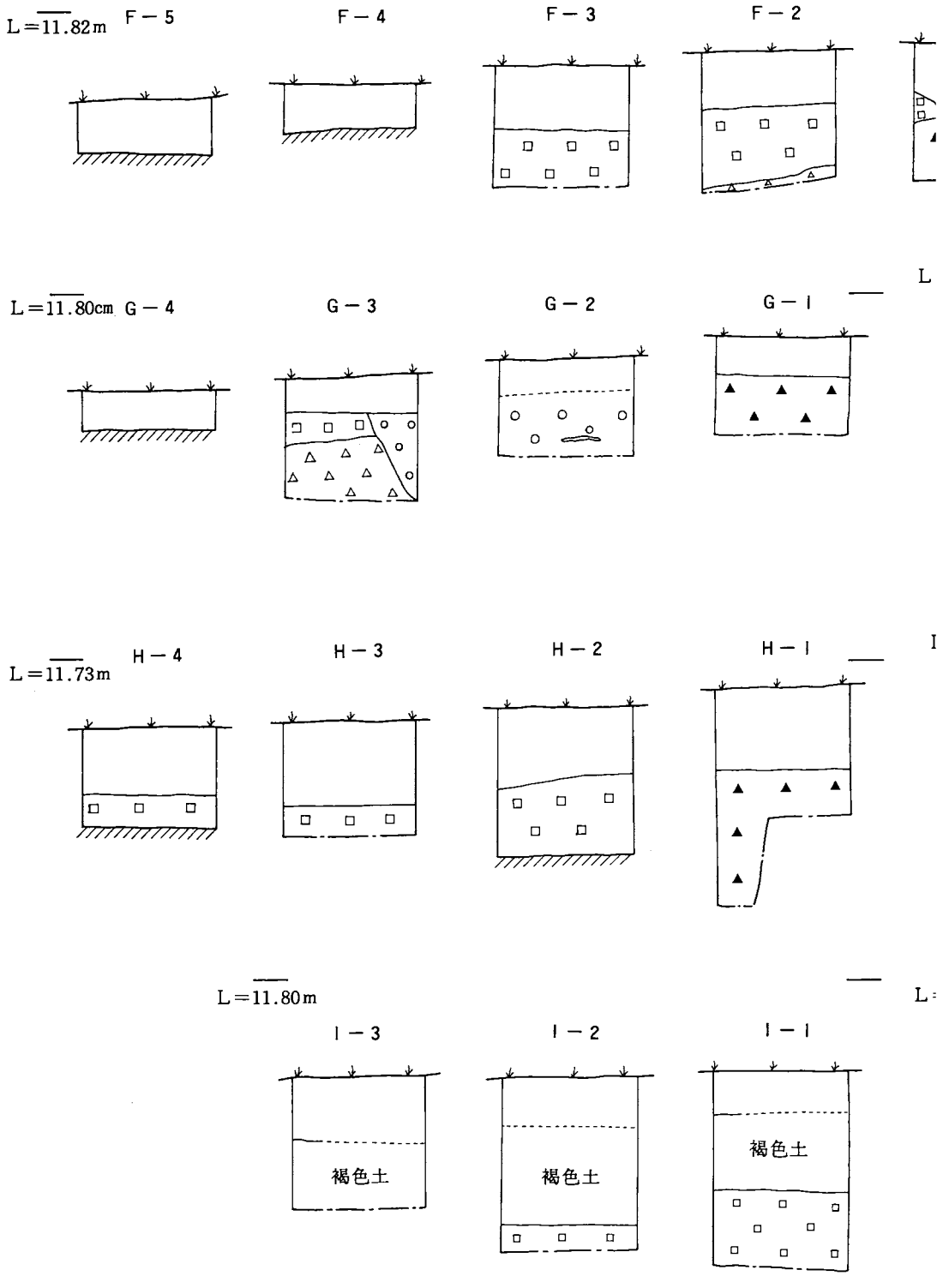
貝層が存在するグリットは、A区で26ヵ所、B区で7ヵ所、計33ヵ所を数える（第51図）。この平面的な分布状況、地形・層序を総合して考えると、東北・北西地方へのこれ以上の広がりは考えられない。東南方向へはさらに広がる可能性が強く、その方向にのびた丘陵の裾部、あ



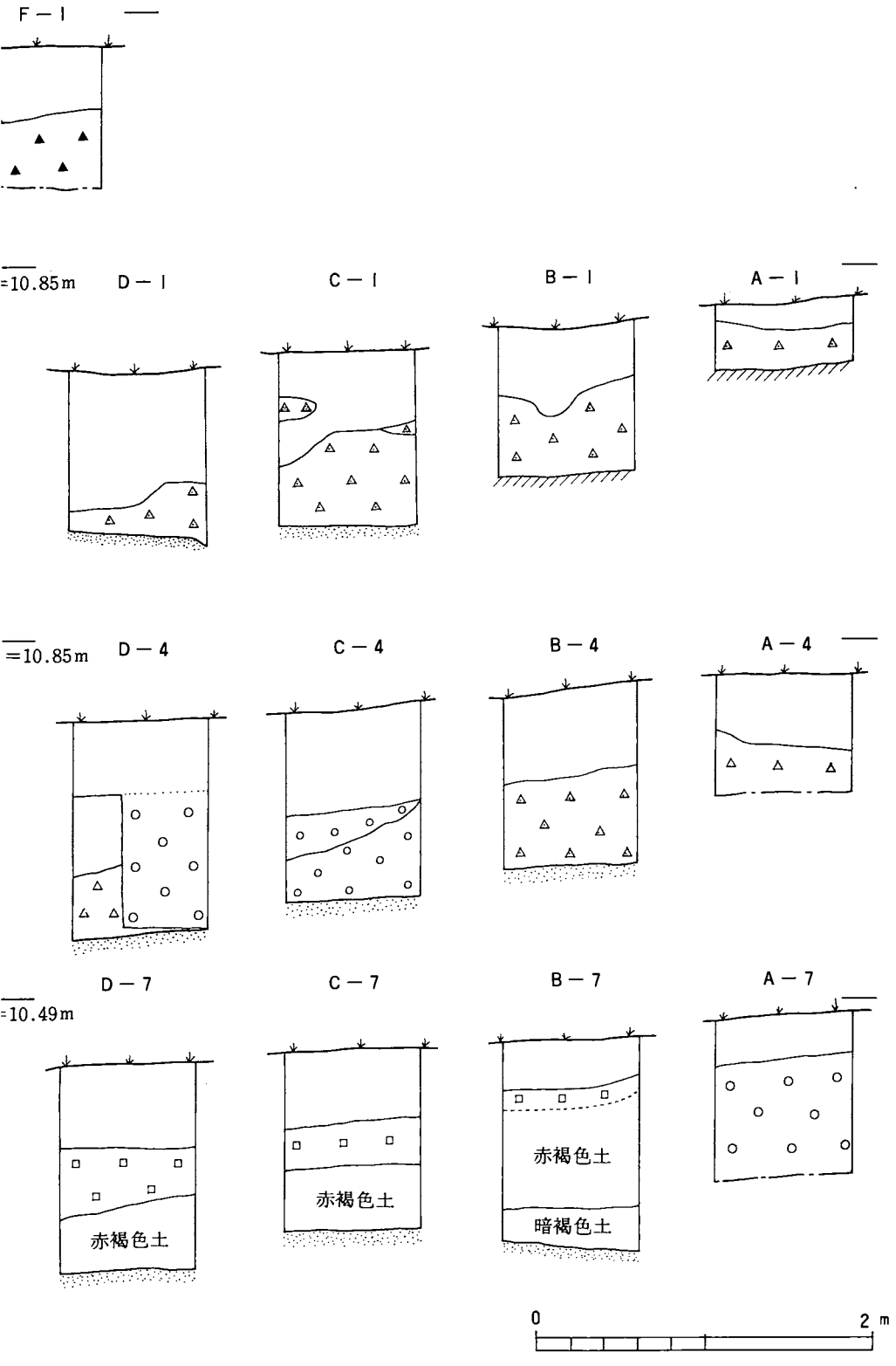
第52図　若園貝塚グリ



ット断面図（断面はすべて東南壁）



第53図　若園貝塚グリット断面図　（F－1～F5、G－1～G－4、H－1～H－4，I－1～



I－3は東南壁，A－1～D－1，A－4～D－4，A－4～D－7は北東壁）土層記号は52図に同じ

るいは丘陵の斜面まで続く可能性があるが、B区・D区については未調査である。

確認した貝層の広がりは、最大長約44ｍ（A—8とG—3間の距離）、最大幅約12m（A—1とD—1間の距離）を測る。さらにB区・D区への拡大を考えるならば、実際の大きさはその1.5～2倍の面積に及ぶものと考えられる。

貝層は大部分が混土貝層であるが、F—1・G—1・H—1グリットにおいてはほとんど土を含まない純貝層がみられた。次いでA—4・A—5区に良好な貝層が認められた。とくにH—1グリットにおいては、80cm以上の純貝層があり、最も遺存状態の良好な地点である。

層序は地点によって異なるが、浅い所では現地表下30～40cmで赤土に達する。深い所は120～130cmで黄褐色の砂層に達する。一般的に東側の丘陵側が浅く、西側の菊池川よりの方が深くなっている。

貝層はおおむね1層であるが、部分的には2～3層に区分される。さらに純貝層・混貝土層に大別されるが、純貝層のみられるのはF—1・G—1・H—1に限られ、大半は混土貝層もしくは混貝土層である。さらにC区の貝は破砕されたものが多い。

2～3年前まで桑畑であり、施肥などのため深耕されたせいか、いたるところに攪乱があり、深いものは1ｍにも及ぶ。また、発掘（盗掘）抗と考えられる地山に達する掘り込みも数ヵ所に認められた。さらにB—3・C—1・D—3区においては比較的上層に焼けた貝の二次堆積層がみられた。

包含層の下の自然層（基底面）は赤土か砂層である。砂層は黄褐色を呈し、粒子はきわめて細かい。

(2) 遺　構

発掘面積が限定されていたため、確実な遺構の検出はない。ただ、C—7区において砂層の直上に焼土が検出され、住居址の可能性が考えられる。（第52図）

(3) 遺　物

土器・石器等の人工遺物、貝類・獣魚骨等の自然遺物、さらには断片であるが人骨の出土がある。

時代的にみると、攪乱層においては近世以降の陶磁器類も数点出土するが、大半は縄文時代に層するものである。次いで古墳時代・中世の遺物をわずかに出土した。

イ、縄文式土器

出土遺物の大半を占める。中期後半～後期前半に及ぶが、攪乱も多く、すべてが層位的に把握されたものではない。したがって、ここではその形態により6類に類別して説明を加える。

若園Ⅰ類（第54図1～11）曲線的な凹線文をもつ土器の1群である。文様帯は口縁下10cm未

満に限られ、胴部は無文である。文様帯の下はナデあるいはヘラ削りが施される。文様は指による所謂太形凹線ではなく、ヘラ状の施文具で描かれている。口唇部は指頭あるいは棒で押えられ、凹凸を有する。胎土には滑石を混入したものがある。口縁は直行するものが多いが、わずかに外反するものもある。また、体部にわずかに屈曲を有するもの（第54図11）も1点含まれる。あるいは細分の必要か。

若園Ⅱ類（第55図12～17）直線的な凹線文を主体とする。文様帯はやはり体部上面に限られ、Ⅰ類よりもさらに幅が狭くなり、その部分はわずかに肥厚する。器壁はやや厚手で、口唇は指により平坦にナデつけられる。

若園Ⅲ類（第55図18～26）無文土器。体部外面はヘラ削りされたものが多い。口縁部はわずかに内弯気味に直行する。全般的に器壁は薄い。口唇部の形態により、さらに3類に細分できる。Ⅲａ類（第55図18～22）は、口唇部に凹凸を有するもの。Ⅲｂ類（第55図23～24）はナデにより平坦なもの。Ⅲｃ類（第55図25～26）は粘土帯貼付による断面Ⅴ字形の突起を付すもの、低い山形突起を交互に斜行させるものである。

若園Ⅳ類（第55図27～29、第56図30～32）深鉢形の器形の口縁部（Ⅳａ類）や頸部（Ⅳｂ類）に単純な文様帯をもつもの。

口縁部に文様をもつものはヘラによる斜行平行文と、所謂逆W字文とヘラ斜行文の組合せがある。

頸部に文様をもつものには細めの沈線文と擬似縄文による磨消縄文がある。この類は量的には少ない。

若園Ⅴ類（第56図33）1点のみの出土であるが、棒状施文具により直線と曲線を組み合わせる。器形は浅目の鉢で、焼成は堅緻である。Ⅱ類かもしくはⅣ類に含まれると考えられるが一応別記する。

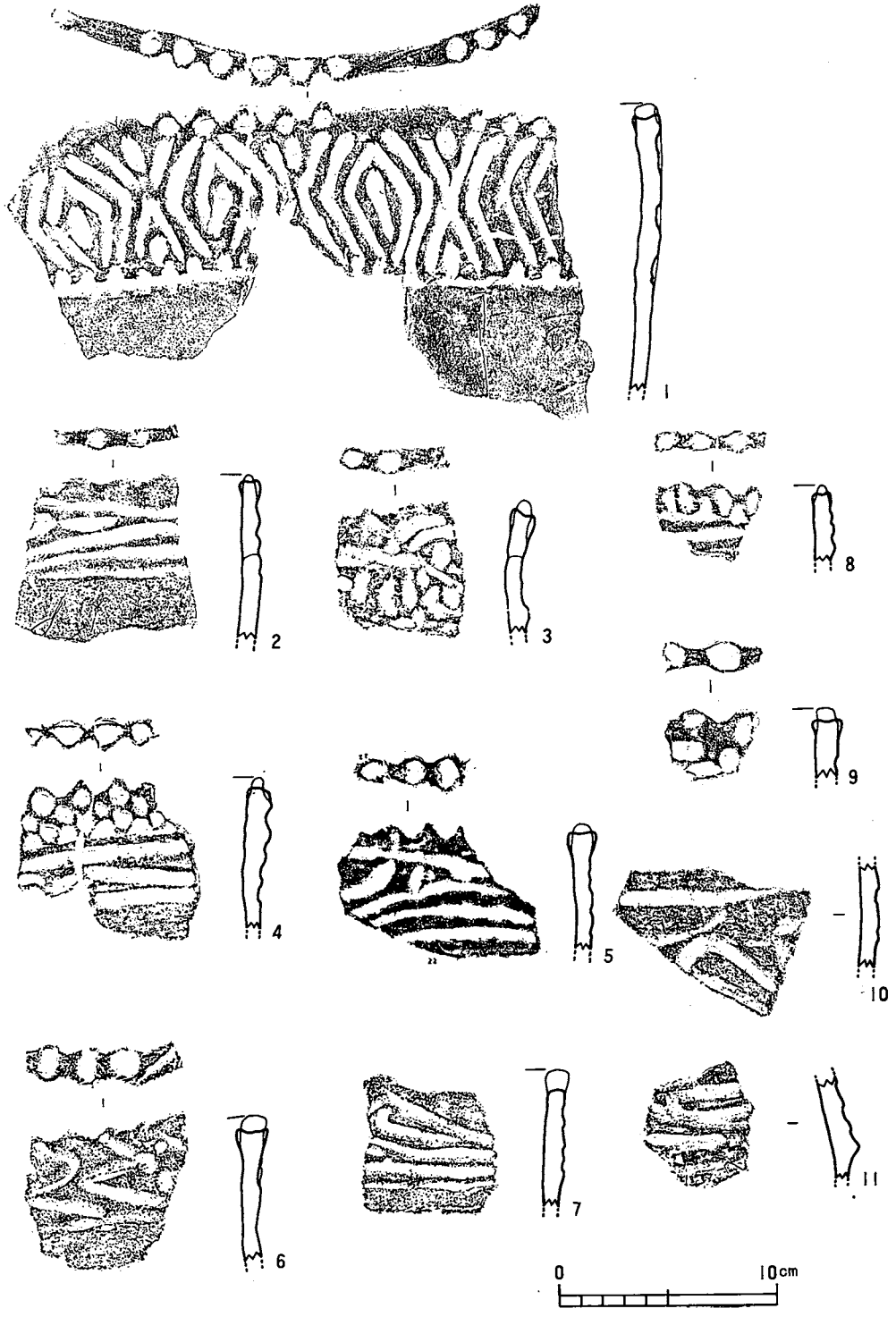
若園Ⅵ類（第56図34～40）ヘラあるいは棒状施文具による直線・曲線を主体とし、刺突文・磨消縄文の手法を混じえる。口縁部が肥厚するもの、胴部が強く屈曲するもの、口縁部がわずかに内傾するもの等、器形に変化がある。図示していないが、曲線文を付した把手や、赤色顔料を塗布したものが含まれる。

若園Ⅶ類（第56図41～42）棒状施文具による連続した刺突文や、貼付凸帯に刻目を有するもの。口縁部の直行する単純な器形。

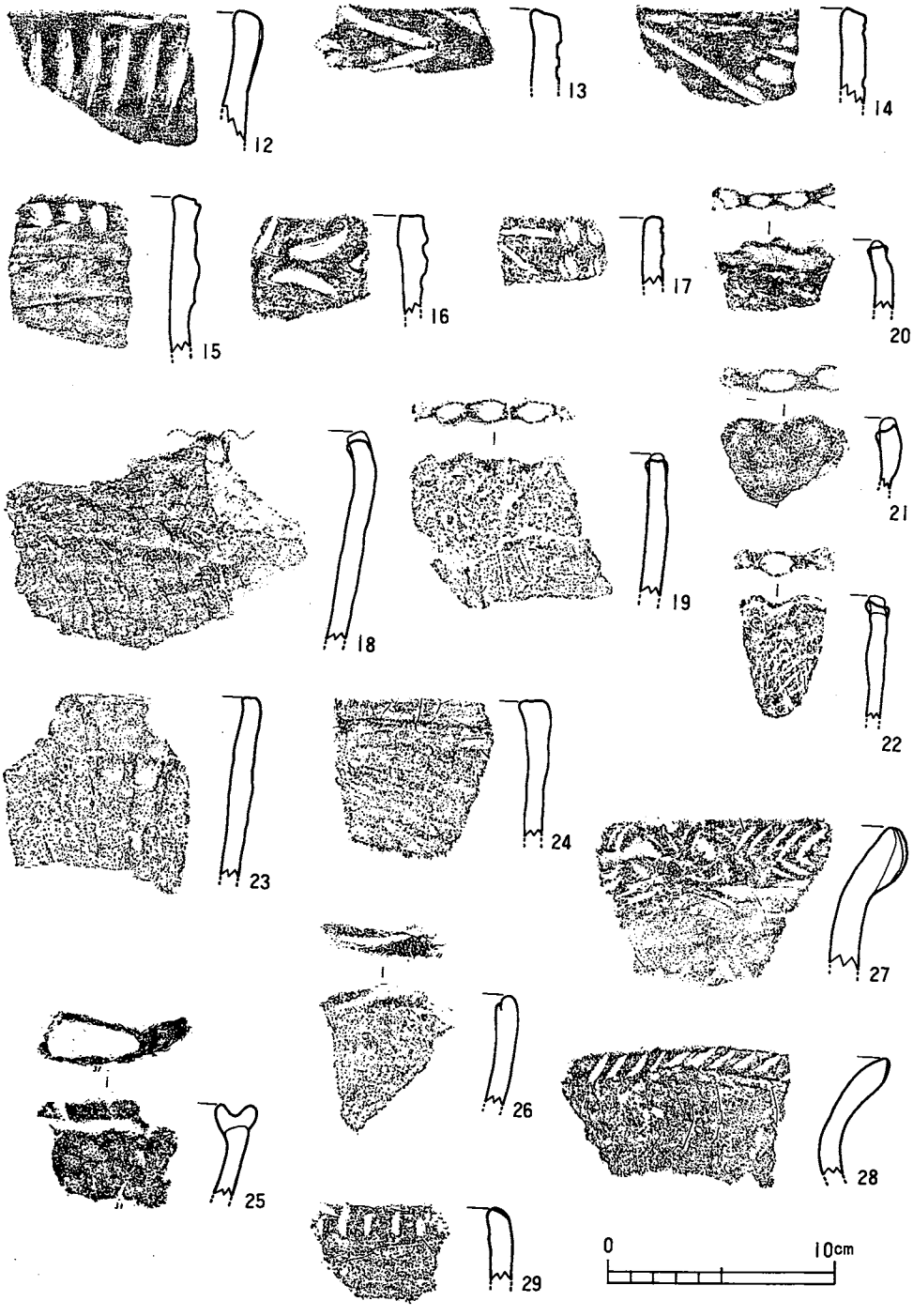
底部（第56図43～45、第57図46～49）平底と高台状の底部がある。

平底のものには、底径が10.5～12cmの大き目のものと、8.5cmの小径のものがある。第57図46の内底面には多くの指圧痕が、47の下底面には鯨骨状圧痕が認められる。これらの平底の底部は胎土・焼成・調整からみると、Ⅰ～Ⅲ類に伴うもの(註3)と考えられる。

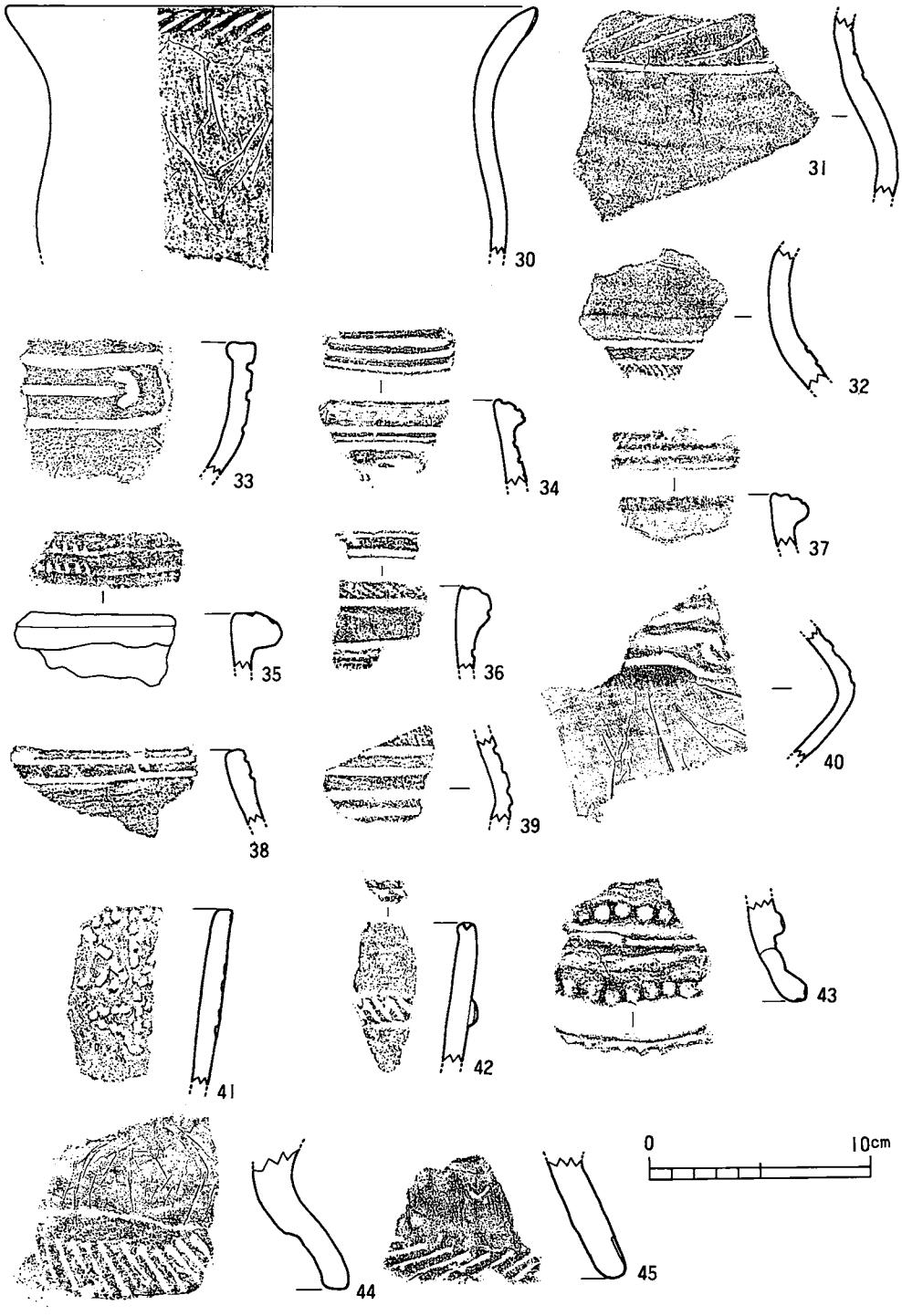
高台状の底部には、ヘラによる斜行平行文を付すもの(第56図44・44)があり、これはⅣ類の



第54図　若園貝塚出土縄文式土器実測図（Ⅰ類）



第55図　若園貝塚出土縄文式土器実測図（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類）



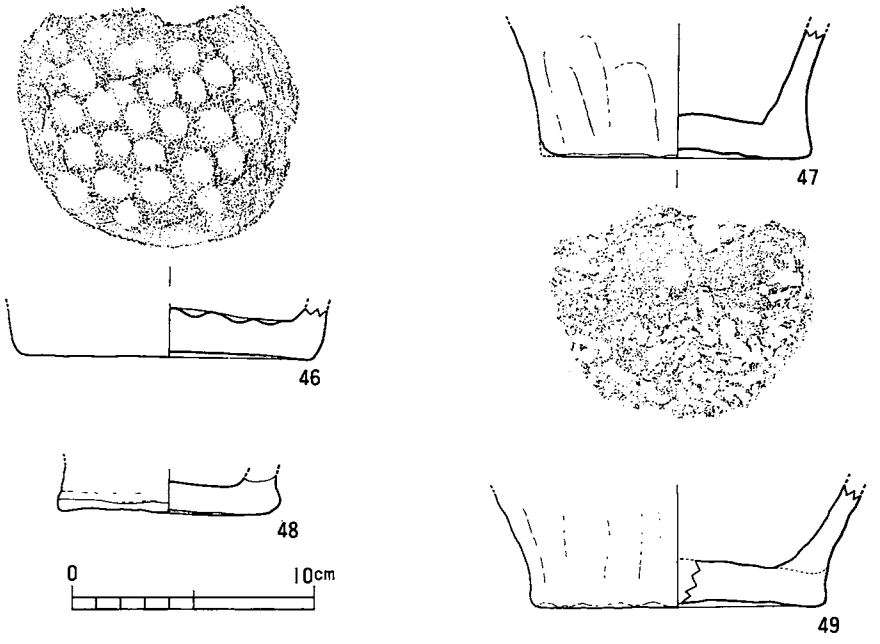
第56図　若園貝塚出土縄文式土器実測図（Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ類，底部）

第３表　若園貝塚出土縄文式土器一覧表

土器番号	出土区・層	形態上の特色	技法上の特色	文様	類別	備考
1	D—1—4	復原口径35cm。 口縁は内弯気味に直行。 口唇部は押圧による凹凸が断続。	文様帯以下はヘラ削り・ナデ。 内面はナデ調整。 施文具と指による文様。	凹線文・押点文。	Ⅰ類	胎土・焼成良。 暗赤褐色。
2	D—4—2 （攪乱）	口縁は直行。 口唇部は凹凸。	文様帯以下はナデ調整。 内面はナデ調整。 文様は施文具による。	凹線文。	〃	胎土・焼成良。 暗褐色。
3	A—6—2	口縁部はわずかに外反。 口唇部は凹凸。	内面はナデ調整。 文様は施文具による。	凹線文・押点文。	〃	胎土・焼成良。 暗褐色。
4	C—7—2	口縁部は直行。 口唇部は凹凸。	〃	〃	〃	胎土に滑石を多く含む。 焼成良。黒褐色。
5	D—5—7	〃	内面はナデ調整。文様は施文具による。施文は浅い。	凹線文。	〃	胎土・焼成良。 暗赤褐色。
6	A—7—2	口縁部は直行。 口唇部は凹凸。 山形突起が付くか？。	文様帯以下はヘラ削り。 内面はナデ調整。 文様は施文具による。	凹線文・押点文。	〃	胎土・焼成良。 赤褐色。
7	A—8—2 （攪乱）	口縁部は直行。 山形突起が付く。	文様帯以下はヘラ削り。 文様は施文具により浅い。	凹線文。	〃	〃
8	D—5—2	口縁部はわずかに内弯。 口唇部は凹凸。	内面はナデ調整。	凹線文・押点文。	〃	胎土・焼成良。 褐色。
9	C—5—3	口縁部は直行。 口唇部は凹凸。	〃	押点文。	〃	〃
10	C—7—2	胴部破片。	内面はナデ調整。 文様は施文具による。	凹線文。	〃	胎土に滑石を含む。 焼成良。赤褐色。
11	B—4—2	胴部破片。くの字に屈曲する。	〃	〃	〃	胎土・焼成良。 暗赤褐色。
12	H—2—2	口縁部はわずかに外反する。 口唇部は指ナデにより平坦。	文様は施文具による。	〃	Ⅱ類	胎土・焼成良。 黄褐色。
13	D—6—2	口縁部は直行。 口唇部は指ナデにより平坦。	〃	〃	〃	胎土・焼成良。 褐色。
14	C—5—3	〃	内面はナデ調整。 文様は施文具による。	〃	〃	胎土・焼成良。 赤褐色。
15	F—2—2	〃	文様は施文具と指による。	凹線文・押点文。	〃	胎土に砂粒を含む。 暗黄褐色。
16	B—8—2	口縁部は内傾気味に直行。 口唇部はナデにより平坦。	内面ヘラ削り。 文様は施文具による。	凹線文。	〃	胎土に砂粒を含む。焼成良。 黄褐色。
17	D—3—4	口縁部は直行。 口唇部はナデにより平坦。	文様は施文具による。 内面はナデ。	凹線文・押点文。	〃	胎土に砂粒を含み、焼成不良。 暗褐色。

18	C—1—6	口縁部は内弯する。 口唇部は押圧により凹凸。	外面はヘラ削り。 内面はナデ。	無文。	Ⅲ a 類	胎土に砂粒を含む。 外面はスス付着。黒褐色。
19	C—6—2	口縁部は直行。 口唇部は凹凸。	〃	〃	〃	胎土に砂粒を含む。 暗赤褐色。
20	C—5—3	口縁部はわずかに内弯。 口唇部は凹凸。	外面はヘラ削り。	〃	〃	胎土・焼成良。 暗褐色。
21	C—1—6	口縁部は内弯気味に直行。 口唇部は凹凸。	内外面ナデ調整。	〃	〃	胎土・焼成良。 黄褐色。
22	A—7—2	口縁部は直行。 口唇部は凹凸。	内・外面ナデ調整。 外面には浅い条痕が斜行。	条痕？	〃	胎土・焼成良。 暗褐色。
23	B—5—2	口縁端部はわずかに内弯。 口唇部はナデにより平坦。	外面はヘラ削りとナデ。 内面はナデ。	無文。	Ⅲ b 類	胎土・焼成良。 褐色。
24	C—5—3	口縁部は肥厚し、わずかに内弯。口唇部はナデにより平坦。	外面ヘラ削り。 内面はナデ。	〃	〃	胎土・焼成良。 暗褐色。
25	D—6—2	口縁部は内弯気味。 断面U字形の突起が付く。	突起は貼り付け。	〃	Ⅲ c 類	胎土・焼成良。 二次的な強熱を受けている。
26	C—5—3	口縁部をつまみ上げ、山形突起が付く。	内外面ナデ。器壁は薄い。	〃	〃	胎土良・焼成不良。 黒褐色。
27	E—3—2	口縁部は肥厚し外反する。 器壁は厚い。	外面の文様帯以下はヘラ削り。文様は粘土帯貼り付けとヘラによる刻線。	逆W字貼付文・綾杉文。	Ⅳ a 類	胎土・焼成良。 暗黄褐色。
28	C—6—2	口縁部はわずかに肥厚し、外反する。	外面の文様帯以下はヘラ削り。	平行刻線文。	〃	胎土・焼成良。 茶褐色。
29	C—5—3 (撹乱)	口縁部は肥厚せず、わずかに内弯。	内・外面ナデ。	〃	〃	胎土に砂粒を含む。 焼成良。暗褐色。
30	B—8—2	復原口径24.1cm。頸部でわずかにくびれ、口縁部は外反する。	外面は縦にヘラナデ。 内面下半はヘラ削りとナデ。	〃	〃	胎土・焼成良。 茶褐色。
31	C—5—2 (撹乱)	頸部でくびれ、文様を付す。	内・外面ナデ。 棒状施文具。	沈線。	Ⅳ b 類	胎土・焼成良。 暗褐色。
32	C—6—2	31と同器形。	内・外面ナデ。	擬縄文・沈線。	〃	〃
33	A—8—2 (撹乱)	体部中位は内弯し、口縁部は直行。口唇部はナデにより平坦。	焼成は堅緻である。 文様は深い。	曲線文(凹線文)。	Ⅴ 類	胎土・焼成良。 黒褐色。
34	B—8—2	口縁部は肥厚し、わずかに内傾。	内・外面ナデ。 口唇部にも施文。	沈線。	Ⅵ 類	胎土・焼成良。 赤色顔料塗布。
35	F—2—2	口縁部は肥厚する。	口唇部にも施文。	沈線・刺突文。	〃	胎土・焼成良。 黄褐色。
36	C—6—2	〃	口唇部にも施文。 内面ナデ。	磨消縄文。	〃	〃
37	F—2—2	〃	口唇部に施文。	沈線・刺突文。	〃	胎土にわずかに砂粒を含む。 焼成良。黄褐色。

土器番号	出土区・層	形態上の特色	技法上の特色	文様	類別	備考
38	B—8—2	口縁部は内傾する。	内面はナデ。	沈線。	Ⅵ類	胎土・焼成良。 黄褐色。
39	〃	胴部破片。 ゆるやかに屈曲する。	文様は棒状施文具により深い。	〃	〃	〃
40	C—7—2	胴部破片。 くの字形に強く屈曲する。	文様帯以下の外面はヘラ磨き。 内面はナデ。器壁は薄い。	曲線文(沈線)	〃	胎土・焼成良。 暗赤褐色。
41	D—4—2 (撹乱)	口縁部はわずかに外傾する。	内・外面ナデ。	刺突文。	Ⅶ類	胎土・焼成良。 暗褐色。
42	D—3—3 (撹乱)	口縁端はわずかに内弯。	内・外面ナデ。 口唇部にも施文。	凸帯文・刺突文。	〃	胎土・焼成良。 暗赤褐色。
43	C—5—3	底部破片。上底。下端は外反する。凸帯を貼り付ける。	内・外面ナデ。	押点文。	—	胎土・焼成良。 褐色。20と伴出。
44	D—6—2	底部破片。上底。 下端は内弯。	下端部内面は薄いヘラ削り。 文様はヘラ状のもので斜行線。	平行刻線文。	—	胎土良。焼成やや不良。 黄褐色。
45	〃	底部破片。上底。 直線的にのびる。	内・外面ナデ。	〃	—	胎土にわずかに砂粒を含む。 暗褐色。
46	B—6—2	底部破片。平底。 底径約12cm。	内底面に指圧痕。	—	—	胎土にわずかに砂粒を含む。 暗褐色。
47	A—8—2 (撹乱)	底部破片。平底。 底径約11.3cm。	底部に鯨骨状の圧痕。 体部内外面ナデ。	—	—	胎土・焼成良。 暗赤褐色。
48	C—5—3	底部破片。平底。 底径約9cm。	粘土接合面で離脱。	—	—	〃
49	A—7—2	底部破片。平底。 復厚底径約12cm。	内・外面ナデ。	—	—	胎土に砂粒を含む。 焼成良。暗赤褐色。



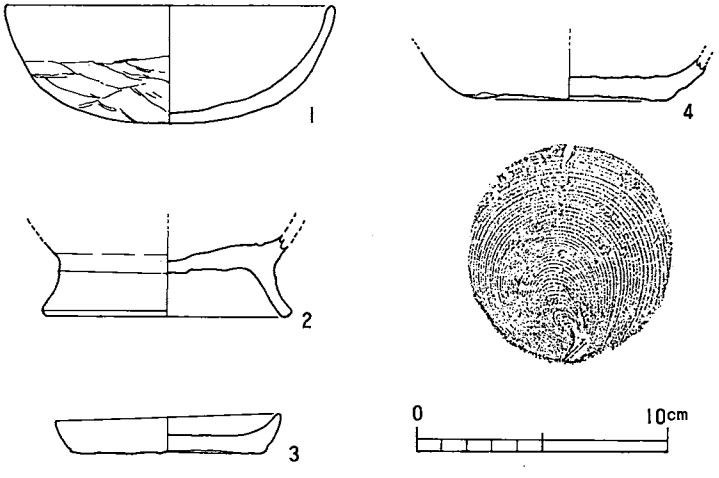
第57図　若園貝塚出土縄文式土器実測図（底部）

口縁の施文に酷似する。43は胎土・焼成も前者とは異なり、凸帯及び下端に刺圧文を施す。

以上類別した土器を既知の編年にあてはめると、Ⅰ類～Ⅲ類は阿高式系に、Ⅳ類は北久根山式に、Ⅵ類は鐘ヶ崎式系に、Ⅶ類は御手洗A式に該当する。なおⅤ類の土器に近似したものは、別項で述べる天岩戸岩陰遺跡でも出土しており、Ⅳ類に共伴する可能性が強い。

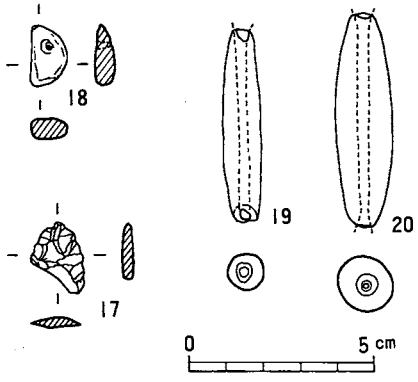
ロ、土師器（第58図）

E列・F列・I列の、貝層の認められない地区を中心として数十点が出土している。いずれも細片で、図示できるものは数少ないが、古墳時代のものと中世のものとの2種がある。



第58図　若園貝塚出土土師器実測図

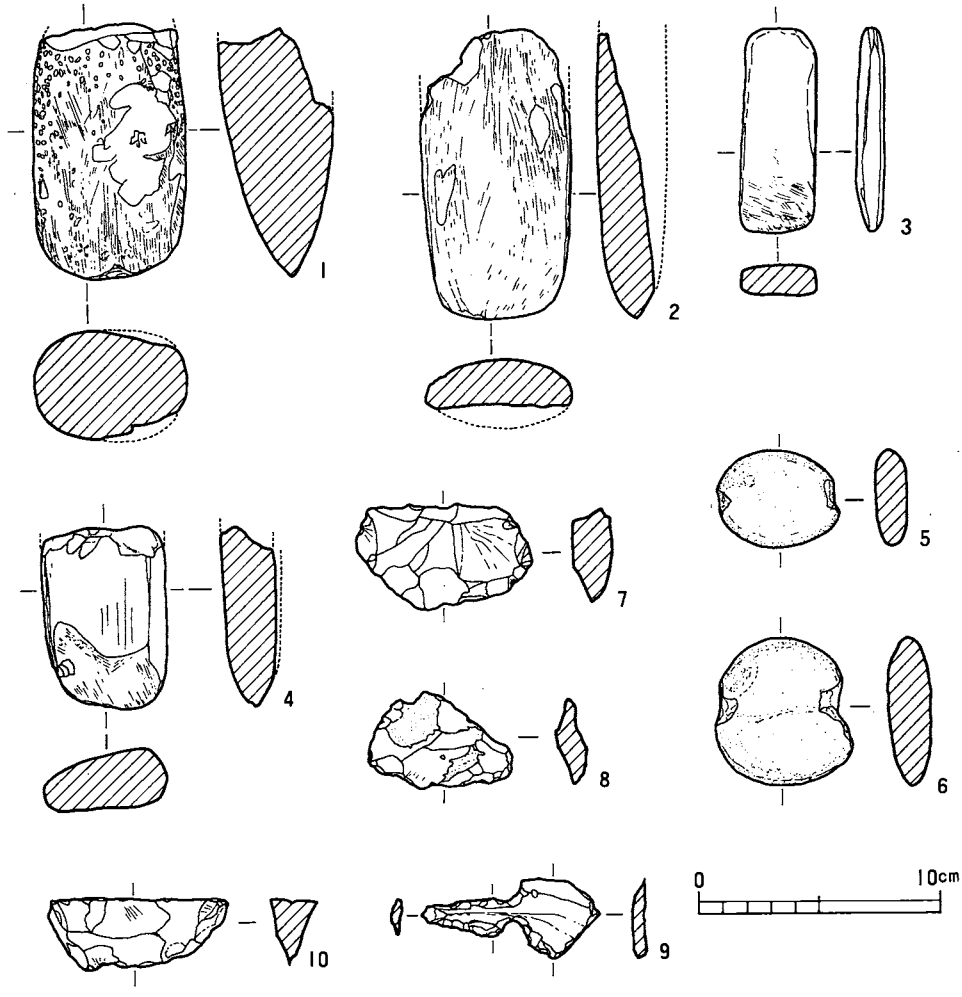
古墳時代のものには甕と盌があるが、甕はいずれも細片で図示できるものはない。第58図1は¼大の破片か



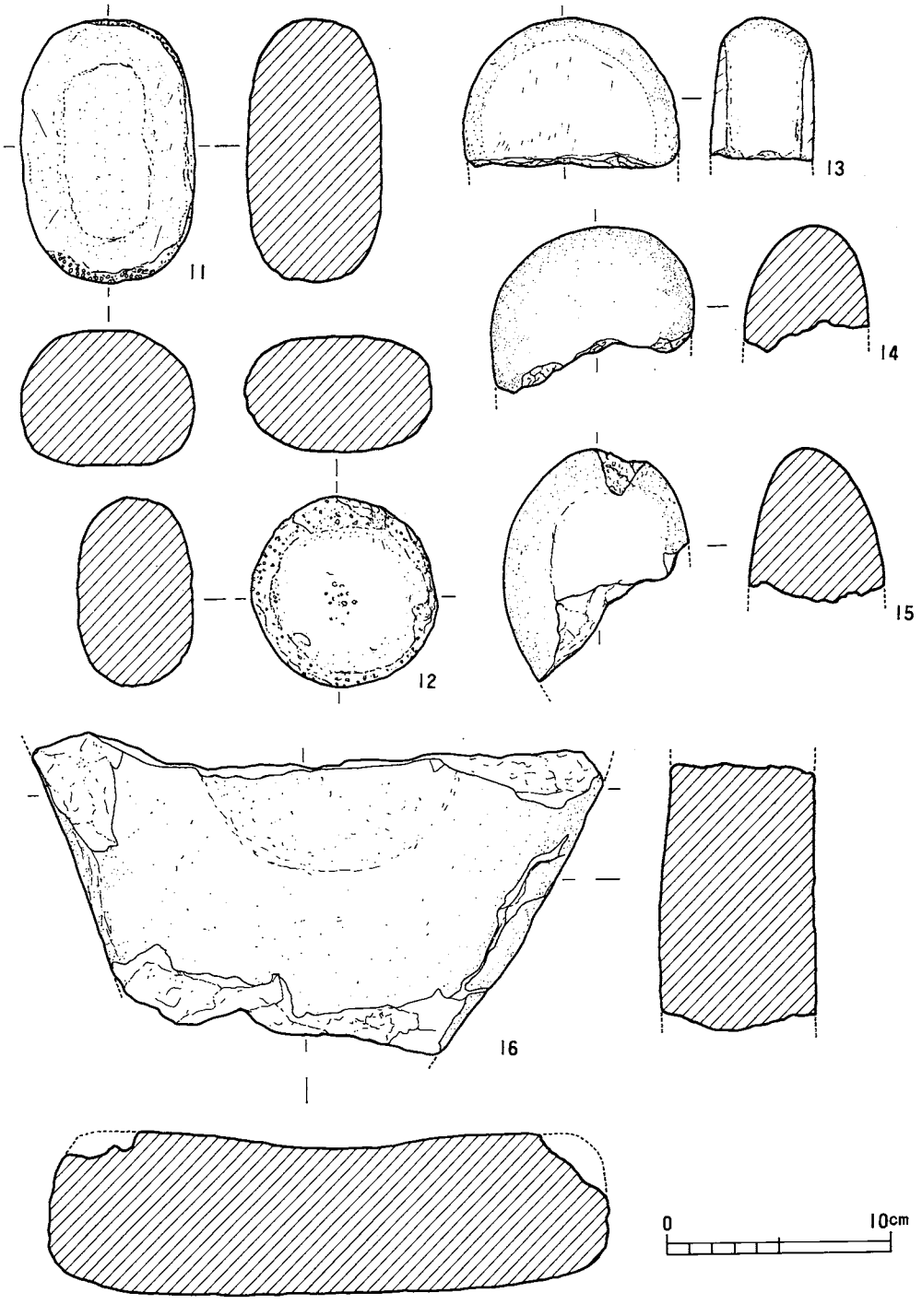
第59図　若園貝塚出土遺物実測図

らの復原図である。体部中位から底部にかけての外面はヘラ削りで、他の部分はすべてナデ調整が施されている。胎土・焼成とも良い、甕などと関連して古墳後期に比定される。

中世の土師器には皿・坏・高台坏がある。皿・坏ともに糸切り離しである。2は径9cmの皿で、整形は雑である。底部は糸切り離しの後、糸切り痕が消え去る程ナデている。3は坏底部の破片。糸切り痕が明瞭に残る。4は高台坏。



第60図　若園貝塚出土石器実測図



第61図　若園貝塚出土石器実測図

坏部は大半を欠失する。高台は外開きの安定したものである。これらの中世の土師器は、青磁(註4)・白磁（いずれも細片で図示不可）、滑石製石鍋、管状土錘と共伴し、鎌倉時代と考えられる。

ハ、石器

石鏃・磨製石斧・石錘・打製石器・敲石・石皿等が各区より出土している。

石鏃（第59図17）破損品が１点だけ出土した。黒曜石製でD—６—２出土。

磨製石斧（第60図１～４）４点出土した。１・２は蛇紋岩製で、いずれも破損品である。１には敲打痕が残り、刃部には主軸方向と平行に使用擦痕がある。重量420ｇ。A—１—２出土。２は全体に研磨がなされ、使用擦痕が２方向に認められる。重量228.8ｇ。C—８—２出土。３は自然礫に加工を加えたものであるが、刃部は加工不充分で分厚く、未製品とも考えられるが使用擦痕も観察される。重量60.2ｇ。D—４—２（攪乱層）出土。４も安山岩の自然礫に加工を加えたもので、自然面を多く残す。裏面は剥離後、再調整・研磨を施す。刃部には斜め方向の使用擦痕が認められる。重量146.6ｇ。D—７—２出土。

石錘（第60図５・６）自然礫の両端を打ち欠いたもので、５は37.1ｇ、６は75.2ｇを測る。５はD—３—３最下層出土で、Ⅰ類土器に伴う。６はC—６—２出土。

刃器（第60図７～９）すべて安山岩で、全体に調整は雑である。７は断面三角形を呈する。８は剥片を利用したものである。７はB—８—２、８はC—５—３（攪乱）出土。10は縦型の石匕の一種と考えられるが、刃部が小さい。C—５—３（攪乱）出土。

石核（第60図10）安山岩の石核で、断面三角形を呈する。上面には自然面を残す。C—６—２出土。

敲石（第61図11～15）敲石・すり石の両者があるが一括して扱う。

11は側面に敲打痕が多く、表裏面は滑らかにすりへる。860ｇを測り、A—６—２出土。12も側面に敲打痕が多い。表裏面はやや凹凸のある自然面を残す。520ｇ、D—６—２出土。13は表裏面は平滑にすりへる。472ｇ、D—０—２出土。14・15は使用痕は顕著ではない。14は400ｇ、C—７—２出土。15は520ｇ、E—５—２出土。

これらの敲石類はすべて安山岩で、自然の円礫を利用したものと考えられる。

石皿（第61図16）安山岩製の石皿の破片で、上面は使用のためくぼむ。厚さ７cm前後を測る。A—４—２出土。

ニ、石製品・土製品

翡翠製の玉と滑石製石鍋片、管状土錘がある。

翡翠の玉（第59図18）は長さ1.6cm、幅１cmで、一端に穿孔する。表面は平滑であるが、自然に磨滅したものを利用したものか、研磨したものかは不明である。質はきわめて悪く、緑色味は薄く、乳濁色を呈する。D—７—２出土。

滑石製石鍋片が１点ある。細片で図示不能。

管状土錘（第59図19～20）は２点ある。19は細身で一端をわずかに欠く。4.35ｇ、Ｅ－２－２出土。20は完形で長さ5.7cm、最大幅1.5cm、11.9ｇ。Ｄ－７－２最上層出土。

翡翠の玉は貝層からの出土ではないが、出土層位からみても縄文時代の貝塚に伴う年代と考えられる。滑石製石鍋と管状土錘は、糸切り底の土師器や青磁・白磁と伴うもので、鎌倉時代と考えられる。

ホ、自然遺物・人骨

貝類には鹹水産と淡水産があるが、鹹水産の占める割合が圧倒的に多く、なかでもマガキが７割以上におよぶ。

人骨はＡ－４区・Ｄ－４区から頭骨片等を出土したが、攪乱を受けており、発掘面積も狭く、埋葬状態等については不明である。

貝類・獣魚骨・人骨についての調査結果については付論を参照されたい。（註５）

３．小　結

杉・ミカンの植栽を知り、基本的な資料を得るために実施した調査であったが、貝層の範囲と層序、出土遺物による貝塚形成の年代、貝類・獣魚骨の組成など、ほぼ所期の目的を達することができた。

貝層の範囲については、当初の予想より広範囲に分布することを確認した。貝層が形成された年代は、出土した土器から、縄文時代中期後半～後期前半と推定される。さらに、量的には少ないが、古墳時代後期、鎌倉時代の遺物を出土し、断続的な生活があったことを示している。貝類・獣魚骨の組成については、専門調査員の先生方のご協力で、付論に掲げるような結果を得ることができた。

貝塚を形成した集落については未調査であるが、Ｃ－７区において検出した焼土は住居址の可能性も考えられる。さらに周辺の地形的な観察等によれば、貝塚の東側の台地上に集落が営まれた可能性が極めて強い。当該地は標高30～40ｍで、かなりの平坦面もある。従来畑地であったそうであるが、現在は植林あるいは荒地と化している。

Ｃ－５－３採集のマガキを試料として、日本アイソトープ協会に依頼し^{14}C年代測定を実施した。その結果は下記のとおりである。

試料採集区・層	試　　料	測定コード	^{14}C　　年　　代（註６）
Ｃ － ５ － ３	マ　ガ　キ	Ｎ－2860	3830±70ＹＢＰ（3720±65ＹＢＰ）

当貝塚の今後の最大の問題点は、近年植え付けられた杉・ミカンの成育であり、これらの樹根等によりさらに貝層が変貌することを恐れる。

註１　『熊本県埋蔵文化財遺跡地名表』、熊本県教育委員会、昭和38年。

註２　三島格氏は、「縄文文化」『熊本県史・総説編』昭和40年の中で、菊池川流域の貝塚分布を示し、海進海退の問題に言及されている。

さらに、金子浩昌氏は、「貝塚と食料資源」『日本の考古学Ⅱ』、昭和40年で、日本各地の貝塚を総括し、九州地方の有明海沿岸の貝塚として若園貝塚の紹介がある。ただ、主要貝種をシジミ類とし、その他ハイガイ・カキ・ハマグリを挙げている。

註３　三島格「鯨の背稚骨を利用せる土器製作台について」『古代学』第10巻１号、昭和37年。

註４　鎬蓮弁を削り出した碗の破片で、南宋代竜泉窯系の所産である。白磁も同時期と考えられる。

註５　貝類のブロックサンプルについて、Ｈ－１区について付論３（菊池報文）と付論４（米村報文）にそれぞれ計数値を出しているが、付論３のものは貝層上面から30cmの深さまでのサンプル。付論４のものはその直下30cmの深さから採取したものである。付論４掲載のサンプルについては、主に獣魚骨出現率調査のためのものである。

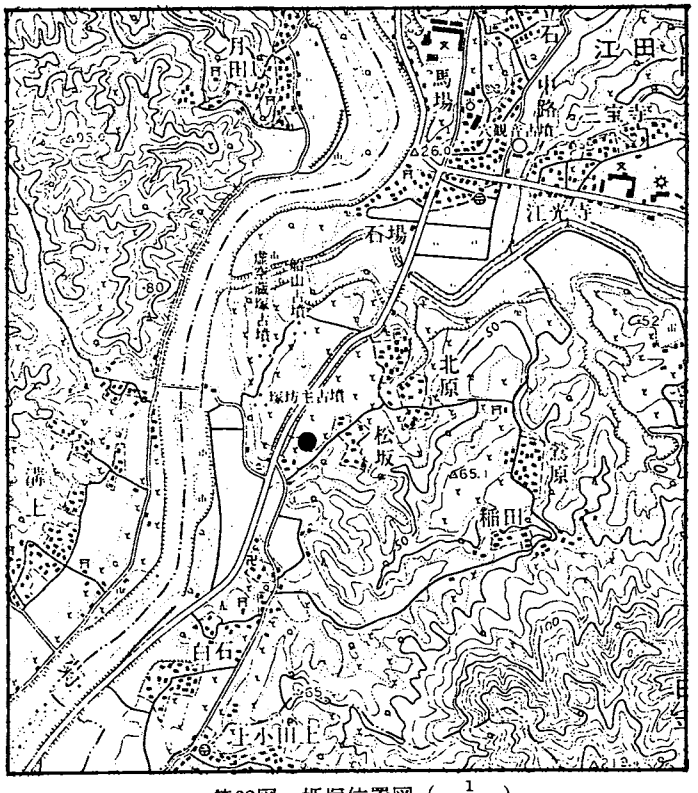
註６　年代は^{14}Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西歴1950年よりさかのぼる年数（year B.P）として示されている。

第4節　姫　　塚

1．位置と概要（第62図）

玉名郡菊水町大字瀬川字松坂原に所在する。

江田船山古墳、塚坊主古墳、虚空蔵塚古墳等の所在する清原（北原）台地の東南端に、姫塚と呼ばれ、古墳があったと伝える場所がある。現地には菊水町教育委員会による「姫塚」の木製標柱が立っている。



第62図　姫塚位置図（$\frac{1}{25000}$）

当該地は畑の畦畔にあたり、他の部分よりわずかに幅が広く、地主により献花されている程度で、何ら古墳らしき形跡はみられない。地主の老婆の話では、「以前はもう少し盛りあがりがあったが、次第に削られなくなってしまった。昭和になってからここを掘った人がおり、宝物を持って行ってしまった。」という。また、大正12年に編纂された『玉名郡誌』(註1)にも

（前略）付近には三箇の高塚古墳あり。虚空蔵王、塚坊主、姫塚と言ふ。接ずるに何れもこの船山を主墳とする培塚ならんと。

と記載され、当時は墳丘もある程度遺存していたものと考えられる。

今回の調査は、この消滅した姫塚の確認が第1の目的であった。さらに近くの切通しの断面に古代の土器片が包含されており、日置氏銅板墓誌出土地との関連もあり(註2)、トレンチによる調査を実施した。

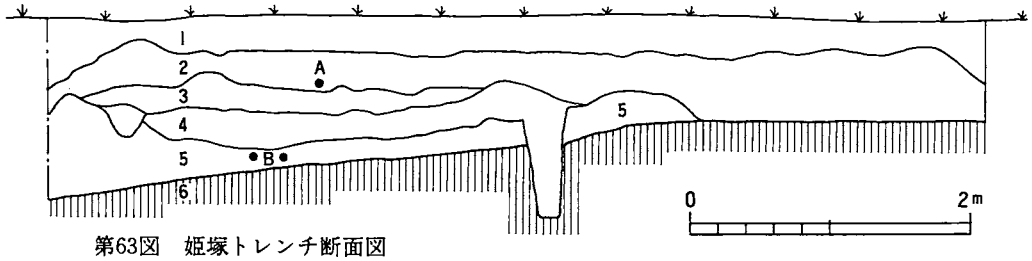
2. 調　　査

前述したように、調査の目的は姫塚の確認と古代土器包含状況の確認にあった。周辺は桑園・菜園・宅地（自動車整備工場）となっており、トレンチの設定も限定されてしまったが、姫塚があったと伝える東南の畑に、幅２ｍ、長さ14ｍのトレンチを設定、掘開した。

調査は昭和51年９月26日～30日、５日間実施した。調査の結果、以下述べるように、古墳と直結する遺構の検出はなかったが、柱穴の他、縄文～古代の土器を出土し、当台地に埋蔵される文化財の一端を知ることができた。

(1) 層　　序（第63図）

トレンチの東側の一部の断面を図示（第63図）する。層序は１～６層に区分できる。第１層は耕作土。第２層は褐色土で硬い。東側（図の右）は厚く、西側は薄い。第３層は黒色土で、レンズ状に広がる。第４層は暗褐色土で、柱穴の中の土と同質のものである。第５層は黄褐色土で、その上面は凹凸がある。第６層は黄褐色の粘質土で、八女粘土層に相当する。



第63図　姫塚トレンチ断面図

A須恵器壺　　B土師器壺

遺物は第１層、第２層、第４層、第５層に含まれる。第１層は耕作による撹乱のため、縄文・土師器とともに近・現代のものを含む。第２層が須恵器壺、土師器甕にみられるような、古代の土器包含層である。第４層には縄文土器の細片がわずかに含まれるが、層序からみても明らかに混入である。第５層は古墳時代前期の包含層で、土師器を出土する。この層にもわずかに縄文が混入する。

(2) 遺　　構

古墳の存在を証明する遺構、主体部・周溝等の検出はなかった。ただし、このことは、姫塚の存在を否定するものではない。

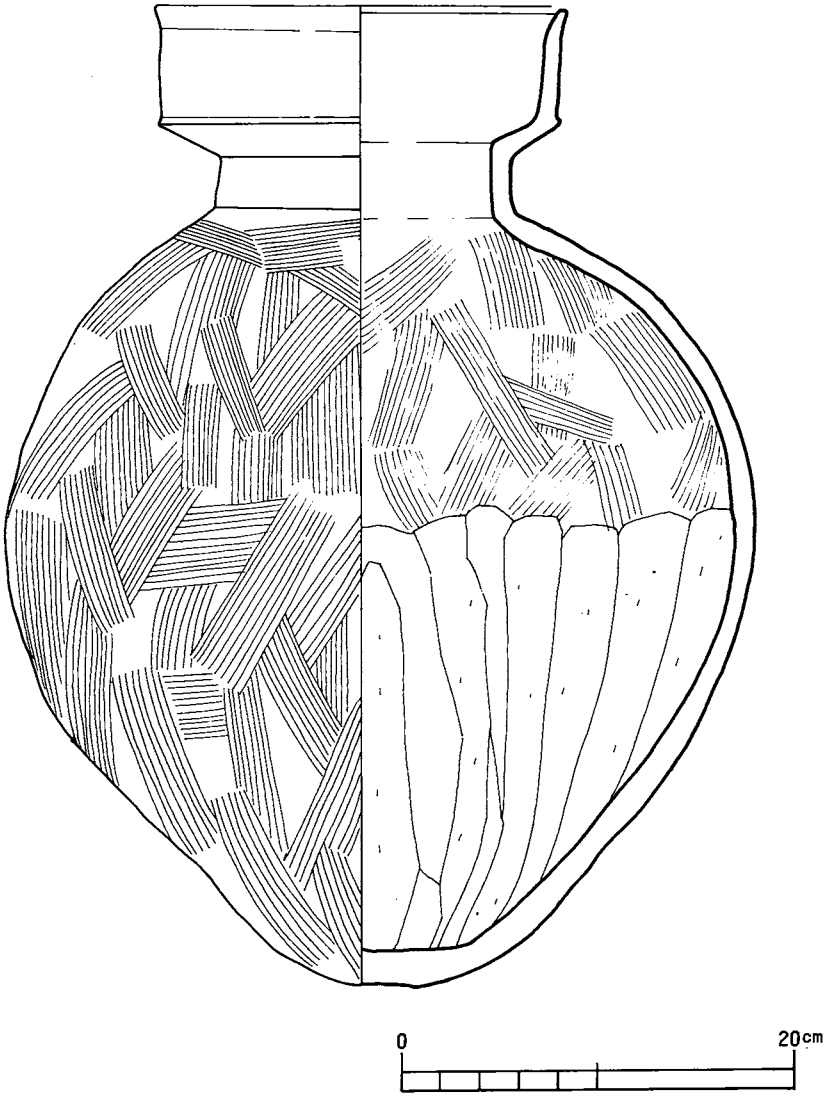
検出した遺構には、竪穴住居も含めた広義の建物に伴うと考えられる柱穴群がある。発掘面積が狭く、その配列や建物の規模については知る由もないが、計18個を確認した。柱穴の平

面形は円形ないしは楕円形である。浅いものは掘り込み面から15cm、最も深いものは105cm、40～80cmの深さのものが多い。

(3) 遺　物（第64・65図）

縄文式土器、土師器、須恵器があるが、いずれも量的には少ない。

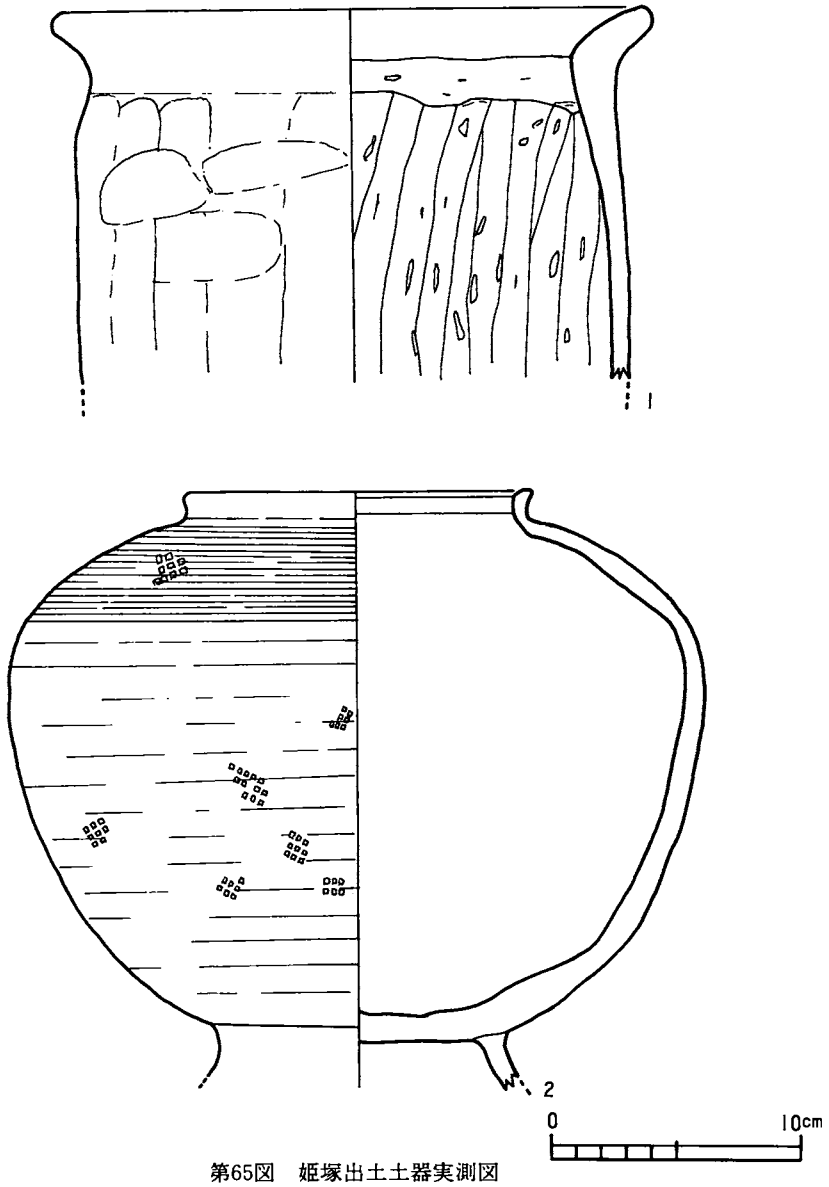
縄文式土器はいずれも細片で、図化できるものはない。黒色磨研のもので、縄文後・晩期に比定できる。(註3)



第64図　姫塚出土土師器実測図

土師器は２個体分を復原することができ、その内１個体はほぼ完形に復原することができた。

壺（第64図）は大型の二重口縁壺で、玉名市・山下古墳出土の壺に類似する。(註４)口径20.9cm、胴部最大径37.5cm前後、器高49.6cmを測る。底部は尖り底ぎみの丸底で、胴の中位に最大径がある。頸部は直立し、斜め上方にのびてさらに直立し、口縁端はやや尖りぎみに外反する。胴部外面には刷毛目が、内面の下半はヘラ削り、上半には刷毛目がみられる。胴部中位以下の整形は雑で、器壁に凹凸がみられる。甕（第65図１）は口径24.3cm、胴部下半を欠失する。頸部はほとんどくびれず、口縁は外反する。体部外面はナデ、内面はヘラ削り調整。頸部から口縁



第65図　姫塚出土土器実測図

にかけての器壁はきわめて厚い。胎土には砂粒を含み、色調は暗赤褐色を呈する。

須恵器（第65図２）は台付壺で、約$\frac{2}{3}$大の破片である。復原口径14cm、胴部最大径27.7cm、高台の下端を欠失するため器高は不明であるが残存高24.3cmを測る。高台は外に開き、胴部は肩が張る。頸部は大きくくびれて、短くわずかに外反する口縁へと続く。胴部の肩部より上には横方向のカキ目、肩部より下は全面横方向のヘラ削りが施されている。胴部外面には格子のタタキ目の痕跡がわずかに残る。胴部内面の上半はタタキ目（青海波状文）の上をナデ、下半は強いナデによる整形。器形からみると蔵骨器の可能性が強いと考えられるが、攪乱を受け散乱して出土した。

これらの遺物は層位的に出土したものではなく、遺物包含層である２～５層にわたって出土し、攪乱による層位の逆転等もみられたが、２・５層は奈良時代・古墳時代の良好な包含層である。

３．小　　結

以上の所見により、姫塚を遺構の面から確認することはできなかったが、出土した土師器壺が姫塚に伴うものであるとすれば、姫塚の年代は江田船山古墳に先行する年代が与えられ、重要な知見となるが、姫塚に伴うものであるとの確証はない。

また、奈良時代と考えられる須恵器壺は、攪乱を受けて本来の位置を保っているものではないが、器形からみると蔵骨器の可能性が強く、日置氏銅板墓誌出土地との関連で興味ある事項である。

出土した土器類から、縄文晩期、古墳時代、古代にわたる遺物が包含されることが判明した。縄文・古墳時代については従来より指摘されている事項であるが、新たに古代を加えたことは当台地の性格を考えるうえで、重要な所見を呈示したことになろう。

柱穴の年代については、柱穴内からの遺物の出土がなく、第４層に包含される土器からもその年代を知ることはできない。層序的に言えることは、古墳前期よりも新しく、奈良時代より古いということができる。

註１　熊本県教育会玉名支部『玉名郡誌』大正15年。

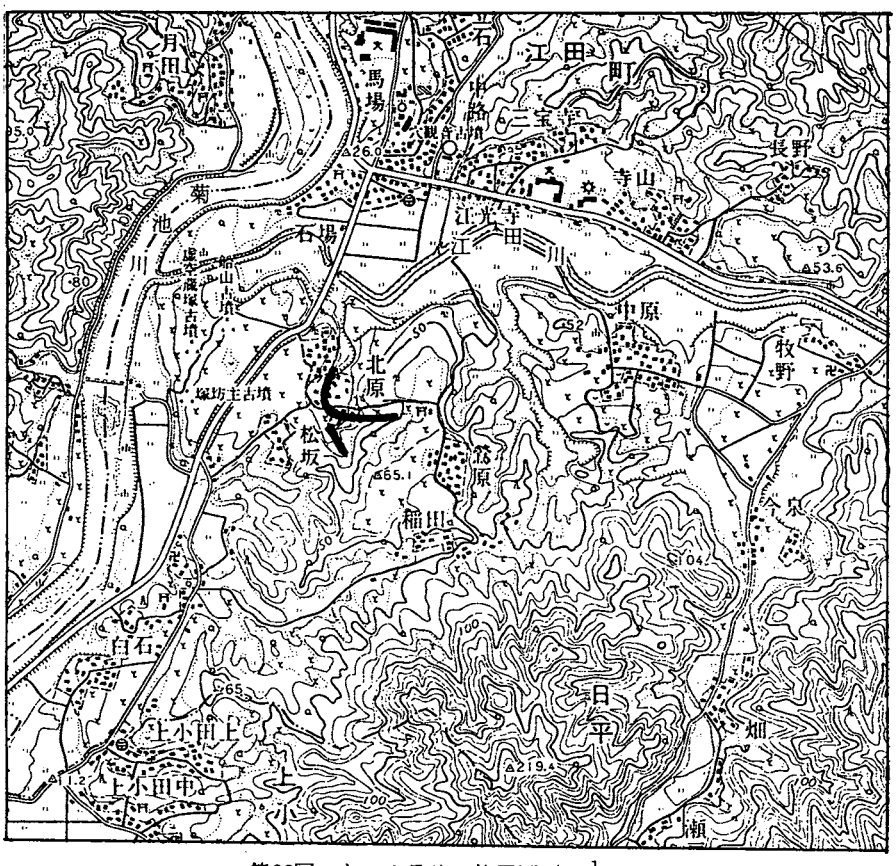
註２　隣接する鶯原台地にあり、寛政６年（1794）に銅板墓誌が出土している。本調査の一環として追跡調査を行い、「請村墓誌説」等の資料により、銅板墓誌が出土したことは確実であり、銘文についてもある程度知ることができた。本報告に収録の予定であったが紙数の都合で除外せざるを得なかった。別途発表する予定である。

註３　姫塚に隣接する「九州旭産業株式会社」敷地は有力な縄文遺跡で、工場建設に伴い昭和45年に調査されている。後・晩期の遺物を多量に出土している。

註４　三島格・伊藤奎二他「熊本県玉名市山下古墳調査概報」『熊本史学』第50号、昭和52年。

第５節　トンカラリン

１．位置と概要（第66・67図）



第66図　トンカラリン位置図（$\frac{1}{25000}$）

玉名郡菊水町大字瀬川字北原・長刀（ちょうりき）に位置する。

船山古墳・塚坊主古墳等がある清原台地の北東斜面に開析された谷に沿って築かれた隧道遺構である。

トンカラリン問題についての経緯はすでに述べた（第１章第１節）ので、ここではトンカランについて説明を加える。

トンカラリンとは地元でいつの頃か命名され語りつがれた名称である。全長約464ｍに及び、字構と石積みの隧道が谷の斜面に沿って築かれており、規模や構造は地点によって差異が認られる。谷の上方から順に説明を加える（第67図）。

Ａ—Ｂ間は約22.2ｍで、現在は完全に埋没しているが、Ａ・Ｂ１、Ａ・Ｂ２トレンチの掘開

により原形が確認された（第69図）。A'の方向にもU字溝がのびるが、B地点から3m強で消滅する。

B—C間は石組みの隧道であるが、幅50cm前後、高さ60cm前後と、小さなものである。B地点・C地点よりの個所でほぼ直角に折れ、その中間地点は40°の急傾斜をなす。約21.1mを測る。

C—D間は軟質凝灰岩が浸蝕されて形成された地隙に、人工的に天井石を架した隧道で、現在の床面から天井までの高さは4.5～7mにも及ぶ。幅は50～90cmと狭く、屈曲が多い。約38m。

D—E間は通常の溝であるがかなり埋没している。約58.4m。

E—F間はまた地隙に天井を架した部分であるが、高さは80cm～2.5mと、C—D間に比べると低い。幅は狭く、屈曲が多いことはC—D間と同じである。約23.5m。

F—G間は通常の溝であるが、かなり埋没している。約61mを測る。

G—H間は石積みの隧道であるが、幅60cm前後、高さ80～90cm程の大きさである。H地点には8段におよぶ階段状の施設がある（図版33）。また開口部が認められ（第70図）出入できるようになっている。G—H間は約37m。

H—I間はさらに石組みのトンネルが続く。現在の民家の納屋の下を通過する。約16.6m。

I—J間は通常の溝で、広狭がある。広い所では幅12mにも及び、深さも3mにも達する部分がある。

J—K間は石組みの隧道で、幅0.8m前後、高さ1.2m前後を測り、これまでの石組み隧道部分よりも幅・高さともに大きくなる。一直線ではなく、わずかにカーブする。J点からK点に向って左側に2ヵ所、右側に1ヵ所の取水口状の分岐がある。また、ほぼ中間点の両側壁に縦に溝を切り込む。K地点もまた天井石が架せられない部分があり出入ができる。J—K間は約50.3m。

K—L間も石組みのトンネルであるが、凝灰岩を刳り抜いて溝とし、それに天井石を架した部分もみられる。幅0.8m前後、高さ1.2m前後を測り、L点寄りで屈曲する。約36m。

L点は「タンタン落し」と呼ばれる地点で、やはり天井石のない部分があるが、底面までの深さは約3mあり、ここからの出入はできない。隧道の上にも1つ導水口（図版34）があり、これから水が落されていたという。この水は西南方約50mの地点にある湧水から導かれていたことが判明した。現在は谷口に養漁場が営まれ、そちらの方に取水するため、途中を塞いであり、この導水口からは水が落ちていない。

L—M間も石組みの隧道で、M点近くで屈曲がみられる。

M点から北側は通常の溝となり、直線距離で約250mで江田川に注ぐ。

このように、溝・地隙に天井を架した隧道・石組みの隧道が谷の斜面に沿って連続しているのがトンカラリンと呼ばれる遺構である。本来、C—D間の天井石のはずれた地点から石を落せば「トンカラリン」と音がすることが語源といわれ、とくにC—D間をトンカラリンと呼ぶ

こともあるが、ここではA—M間をトンカラリンと総称することにする。

トンカラリンの南方、字辰崩(たつぐえ)にも石組み隧道が存在することが判明し、これをトンカラリン辰崩地区とする。

辰崩地区の方は、隧道の規模も小さく、幅30～40cm、高さ40～70cmの石組み隧道が約70mにわたって続く。この隧道が埋設されている地点は、トンカラリンのある谷から派生した小さな谷状地形で、この谷の斜面に沿って築かれている(第67図)。

2. 調　　査

現地調査は、昭和50年度～52年度の3ヵ年度に亘って実施した。このうち、50・51年度はトンカラリンを、52年度はトンカラリン辰崩地区を主な対象とした。調査内容は、地形図の作成、トレンチによる発掘、石組み構造の観察・記録、周辺の文献・金石の調査、民俗調査である。発掘調査は松本が担当し、文献・金石・民俗調査には高木端穂・安田宗生・佐藤征子・後藤早苗(県文化課)、斉木義男氏らの援助を受けた。また、県文化財専門委員の方々から、調査に対する指導を仰ぎ、現地調査もお願いした。

(1) 地形図作成の成果(第67図)

地形図を作成し、周辺地形との関係、トンカラリンの全長、A地点・M地点間の比高差の測定、土地利用状況とトンカラリンの関係等を観察した。

主な所見を記す。

イ、トンカラリンは谷の斜面に沿って築かれ、全長約464.6m。内訳は隧道部分269m、溝の部分195.6m。A・M間の高低差は37.35m。全体の配置は谷の地形に制約され、弓なりになる。

ロ、現在、耕作地・宅地として利用されている地点においては隧道が多く、土地の境界等においては溝の部分が多い。このことは単なる明渠の連続ではなく、隧道構造の説明として有効であると考えられる。

ハ、辰崩地区のものは全長約67m、高低差は約5.5mを測る。トンカラリンとは直接連結しない。この隧道の延長線上に、鶯原台地の斜面が侵食されたU字溝状の凹地がのびており、この凹地と深い関係を有するものと考えられる。しかし、関心の接触点は狭い畦畔となっており、確認ができなかった。

谷と隧道の関係はトンカラリンと類似する。

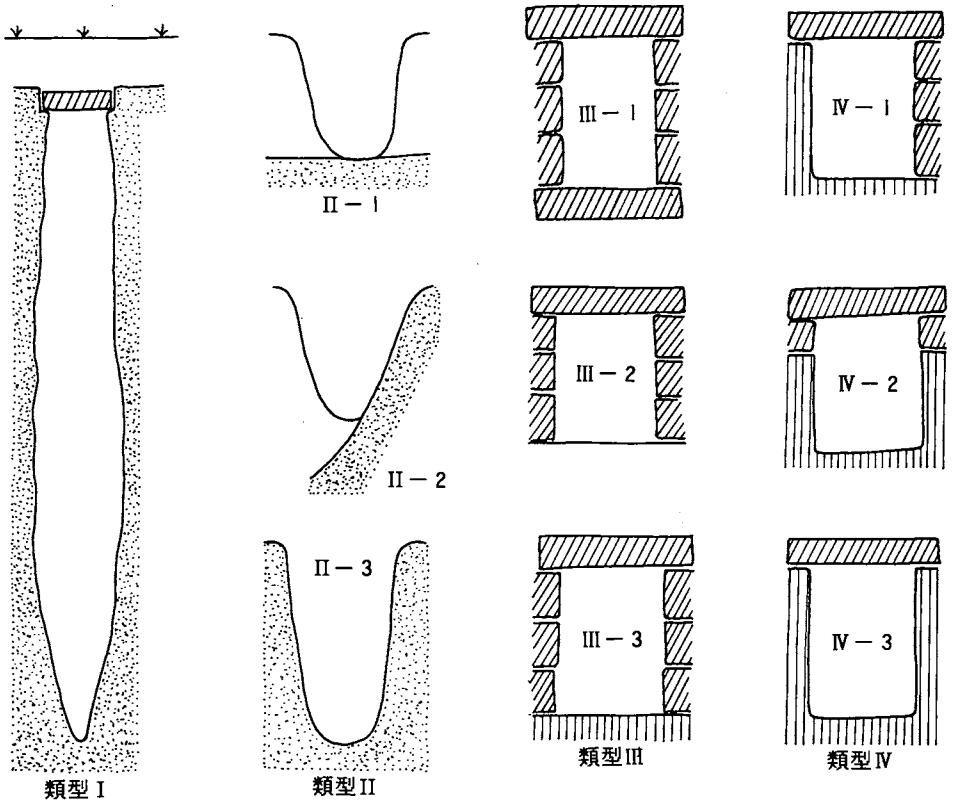
(2) トンカラリンの構造

M
⑩
L
K
J
I
H
⑨
G
⑧
⑦
GT
HT
FT
ET
DT
CT
BT
AT

第67図トンカラリン周辺地形図

①A・B1トレンチ　②A・B2トレンチ　③B・C1トレンチ　④C・D1トレンチ
⑤C・D2トレンチ　⑥D・E1トレンチ　⑦E・F1トレンチ　⑧F・G1トレンチ
⑨G・H1トレンチ　⑩L・M1トレンチ

※トンカラリンの幅は実際より大きく表示している。



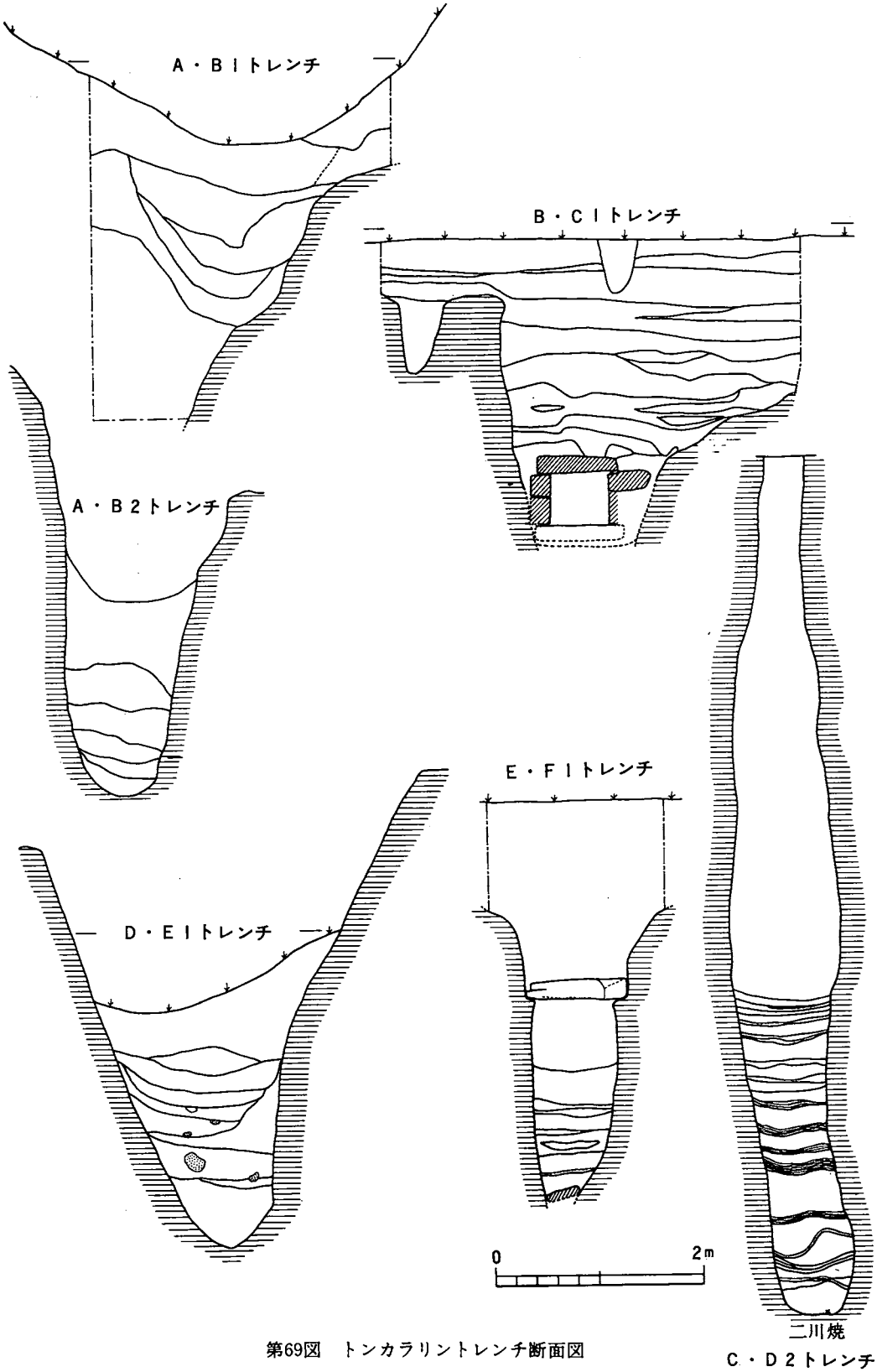
第68図　　トンカラリン構造模式図

類型I　自然浸食によって形成された地隙に天井を架したもの
II　U字状溝。軟質凝灰岩が浸食されて形成されたものが多い。軟質凝灰岩との関係でさらに3種に分かれる。II－3類型が最も多くみられ、稀にII－1，II－2類型がある。
III　石組み構造の隧道。床の処理の方法によりさらに3類に分かれる。
IV　凝灰岩刳り抜きと石組みの組合せで、3種に分かれる。全般的には局部的にみられる類型である。

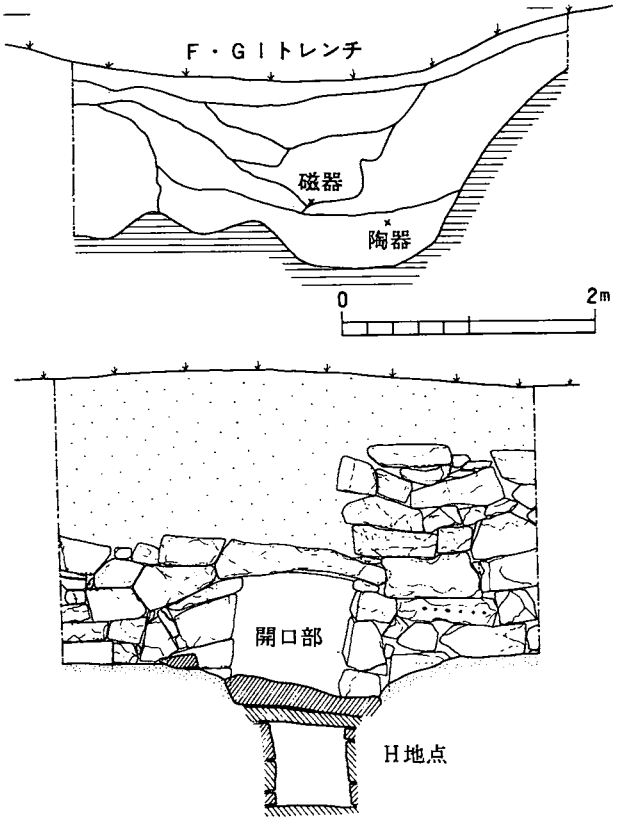
石組みの観察・記録・トレンチの掘開による所見を記す。トレンチ数はトンカラリンに16ヵ所、辰崩地区に8ヵ所である。

イ、トンカラリンの構造は、第68図に模式的に示すように、大略3類型がみられ、さらに10類型に細分される。この構造は、該当地点の地形・地質に応じて合理的に築造されている。さらに石組み構造の類似から、上から下まで一貫して構築したものと考える。

ロ、使用された石材はほとんど凝灰岩で、つめ石として軽石が使用されている程度である。石材は割り石と思われるものもあるが、ほとんどが切石である。この場合矢を使用してお



第69図　トンカラリントレンチ断面図



第70図　トンカラリントレンチ断面図・H地点石組実測図

り、その痕跡は至るところに残される。石材の表面加工は、鋭利な尖った工具で調整され、したがって表面には多くの擦痕を残す。

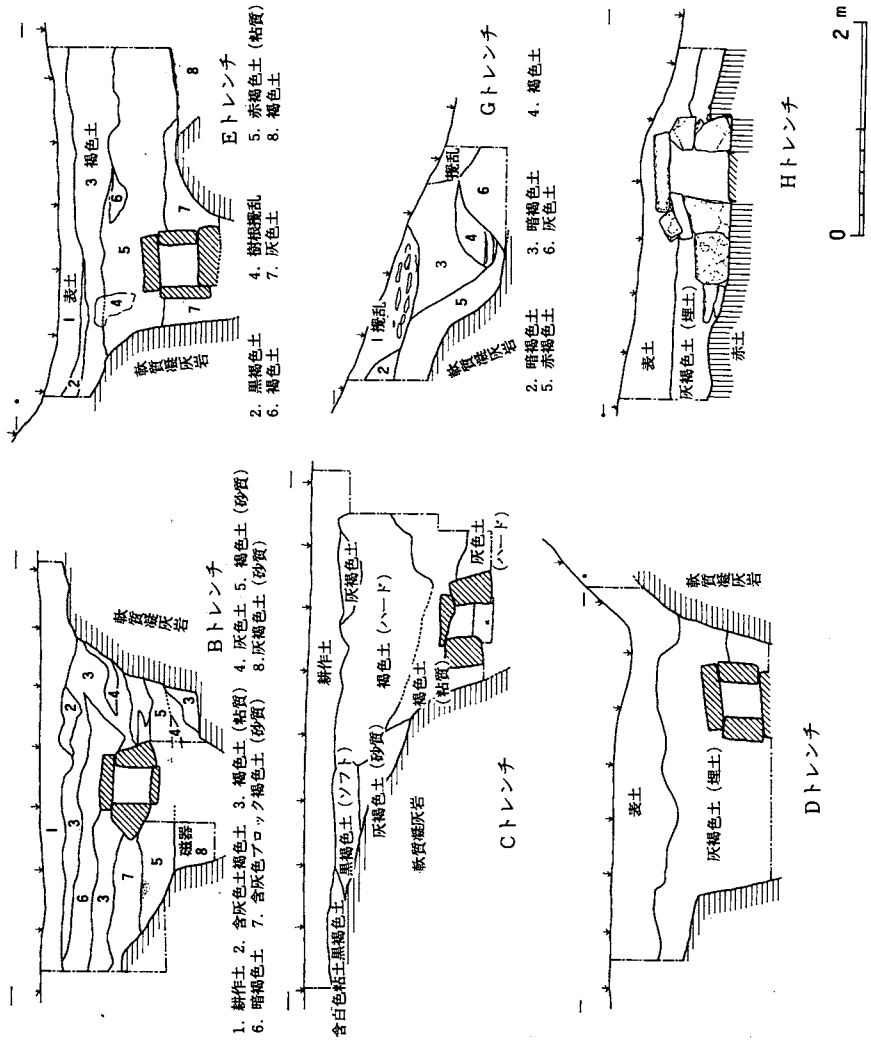
ハ、U字溝の部分、地隙に天井を架した部分についてはかなりの埋没がみられる。例えば、A・B1、A・B2トレンチ、C・D2トレンチ、D・E1トレンチ、E・F1トレンチ、F・G1トレンチの断面図でも明らかなとおり、深い所は約3m、浅い所でも約 1.2mの埋没がみられる。

トレンチにおける土層堆積状況により、明らかに水流があったことが推定される。例えばC・D2トレンチにおいては鏑状堆積が明瞭に観察される。しかも砂層・粘土質土壌の交互堆積がみられ、水流に強弱があったことを物語っている。

ニ、H・K・L地点における石組みは、左右に連なる石垣と同時に構築されている。この石垣は、その上方の平坦地の保全のためであろうことは明らかである。したがって、隧道構築のみが目的ではなく、同時に平坦地形成が実施されたといえる。

ホ、隧道構築と平坦地形成が同時的であることは、トンカラリン・トンカラリン辰崩地区のトレンチ調査による土層観察でも明らかである。(B・C1トレンチ、G・H1トレンチ、辰崩B～Eトレンチなど、第69・71図参照) すなわち、平坦地が形成された後に、溝を掘り込み、その中に石組みを築いて埋め戻しをしたのであれば、当然その掘り方が検出される筈であるが、そのような状況が観察できるトレンチはない。

トレンチに現われた石組み隧道と現地表たる平坦地の関係は、自然の侵食によって形成されたと考えられる凹地に石組みをし、その上に土盛りをして平坦面を得ている。このことは、ニで指摘した石垣との同時構築とも合致する。



第71図　トンカラリン（辰崩地区）トレンチ断面図

へ、トレンチより出土した遺物で、攪乱層からの出土を除けば次のとおりである。（図版34・35）

トンカラリンC・D2トレンチ……二川焼陶片1点。

トンカラリンF・G1トレンチ……近世陶器片1点、明治時代の磁器片1点。

辰崩Bトレンチ……染付磁器片1点、近世陶器片2点、粘土瓦片1点。

辰崩Cトレンチ……近世陶器片8点、青銅製品1点。

C・D2トレンチ出土の二川焼（図版34）は現地表下約3mの地点で出土し、溝底まで ―

は約20cm程である。F・G1トレンチからの出土品はいずれも溝内堆積土からの出土であるが、各時期における埋没過程を示すものといえる。

辰崩地区のものは、いずれも石組みの裏側から出土したものであり、明らかに石組み構築の時期を示すものと考えられる。惜しいかな、細片のみ（図版35）であるが、築造年代を知る重要な資料である。

ト、辰崩地区の築造年代について、隣接して営まれた近世墓地（第67図、図版35）は、石組みを構築し、埋土をして平坦面を形成した後に営まれたと考えられる。したがって、墓地は石組みよりも新しい。墓石の中で最も古いものは享保6年（1721）であり、これは石組みの下限を示すものと考えられる。さらに上限については、近世陶磁器等の出土から、近世を遡ぼることはない。すなわち、江戸時代前半期の可能性が強い。

(3) 文献・金石調査の概要

トンカラリンについての文献・金石調査を実施した。トンカラリンについて直接記述したものは発見できなかった。その他の所見について2・3列記する。

トンカラリン周辺の墓地の調査では、近世墓地として最も古いものが元禄12年（1699）で、享保頃になるとやや増加し、さらに幕末のものが多い。

トンカラリンの北方約50mのところに斉木久左衛門の供養碑がある。高さ約2.3m（台石とも）の凝灰岩製で、次の刻銘がある。

〔正面〕法号　釈了然

〔裏面〕久左衛門以下一族の系図（略）

〔右側面〕坂本城主伊豆将監貞光苗裔斉木久左衛門尉通武雖為八代長岡家知音無望仕藩閑居此地貞享三丙寅年正月廿一日卒次代為農民維時天保六乙未年于百五十回忌埋古墓石新刻立之

斉木久左衛門の追跡調査は実施できなかったが、宝暦12年(1762)の検地帳（県立図書館蔵）には、裏面の系図に示されている一族のうち4名の者が本百姓として名を連ね、碑文の如く、農民として定着していることを物語っている。

近世の築造であれば、細川家文書に記事がある可能性が強いとの助言を得たが、その史料は莫大な量にのぼり、時間の制約もあって実施できなかった。

(4) 民俗調査の概要

民俗調査は昭和52年12月8日より同月23日までの期間、トンカラリンのある北原地区を中心に旧請村全域にわたって実施した。

調査は(イ) トンカラリンと何らかの形で関連するような儀礼行事等が認められるか、(ロ) ト

ンカラリン周辺の地域の民俗のなかに修験道的影響をみることができるか。といった点に留意して行った。

しかし、調査期間が短く、調査対象地域が広いということもあり、調査不十分といわざるを得ない。従って、以下の報告は資料的に制約されていることを明記しておきたい。

(イ) タンタン落しと呼ばれる所は湧水点となっており、かっては地区の重要な井川であった。ここには水神さんが祀られている。新暦1月25日にイガワ祭りが行われている。この祭りは座の形式でなされている。座元は毎年交替する輪番制で、各戸から1名が参加することになっている。新たに転入してきた家は次の年の座元を務めなければならないきまりになっている。

25日の午前中、青年がふんどし一本で井川のなかに入って掃除をする。この時に特別の儀礼はみられなかったとされる。それから座元の家に集まって祝宴となる。座元の家で神仏を拝むといったようなこともない。

トンカラリンと接続する地点の祭りはこのイガワ祭りだけである。このイガワは毎月1日と15日に輪番で掃除をしている。

それから、このタンタン落しの所に殺した蛇の死骸を置いておくと罰があたるといって叱られたといわれる。これはここが貴重な水源であることと関連しているからと考えられる。

(ロ) 修験道関連の行事及び伝承

民俗行事のなかに明確に修験道との関連を示す行事はきわめて少ない。ただ、正月頃(明確な日時は不詳)、山伏が3～4人やってきて、軒先におかれた桶の水をかぶって歩いていた。この山伏はミズカカリヤンボシと呼ばれていた。各家では桶と一緒に薪を軒先戸口に出しておき、その上にお礼のお金をおいておくのが習しであった。薪は山伏が車に積んでいき大字江田字馬場の河原に集め周囲にしめ縄を張り、御祈禱をした後に火渡りをしていた。御祈禱をしているから火傷はしないとされていた。この火渡りは大正5～6年頃まで行われていた。この山伏が何処からやってきていたかについては筑後方面からとも英彦山からやってきていたともいわれるがはっきりしていない。

このような正月における水掛り山伏というのは県下において広くみられたものであり、菊水町特有の行事とはいえない。山伏は正月以外にも時折やってきていたといわれる。祓い、厄よけなど、災難よけに山伏に御祈禱をしてもらうということは行われていた。けれども、その活動の内容についてはほとんど聞くことができない。

この山伏と関連して、皆行原という地区にはかつて皆行院という山伏の道場があったと伝えられている。これが何処にあったのかということも定かではないが、旧請村に数ヶ所ある山伏の墓、峰入りの途中で死んだとされる山伏の話など、山伏との関係を示す伝承が

残されている。

それから、北原地区における行者について触れておきたい。北原地区には明らかに真言系の行者と考えられる人々が存在していた。それら行者の家には弘法大師、不動明王が祭られていたといわれる。また、高野山のお礼も配って歩いていたという。これらの行者は、方角占い、地鎮祭、といったようなことから、病気直し、口寄せ、憑物をおとすということに関与していた。御祈禱は部屋をしめきり、ロウソクをともし線香をあげるなかで行われた。登場する神としては不動、弘法大師、菅原天神、猿田彦といったものが代表的なものであったという。これらの行者は高野山において修行することもあったが、北原を中心としてその周辺地域においても修行をしていた。中原地区にある滝にうたれること、墓地、あるいはお宮においてのこもりの行、それから両手に太いロウソクを立ててのロウソクの行等もやっていたという。その修行のなかで、タンタン落しの所で水をとる行も寒中になされていたとされる。このトンカラリン周辺の山際には自然の洞穴がいくつもみられるが、タンタン落し付近の穴にはかつて山伏が多くやってきてこもりの行をやっていたともいわれている。

また、禿石においても行がなされていたという伝承がある。禿石には彦岳社と刻された石碑があり、英彦山との何らかの関連のあったことを示している。この山の途中の林野で極めて小さな仏像が発見されている。そういったことから、禿石も修験道と無関係とはいい切れない。しかし、禿石を対象とする行事のなかに修験道的色彩をもったものは認められない。

(ハ) その他

旧請村は県下における有数の売薬業の盛んな地域である。これら売薬に従事する人々は神農様を祭祀の対象としている。これは各戸で祭るものではなく、数軒で祭られるものであった。同時に、午頭王を祀る例も知られている。しかし、この売薬業の開始は従来の説によれば江戸末期であるとされる。この説に従うと、これらの信仰もそれ程古くはないということにもなる。ただ、この説が妥当なものかどうかなお検討を要する。それを調査する時間的余裕がなかった。

それ以外に、古い天台系の寺院が存在していたこと、あるいは妙見信仰（日蓮宗とは無関係のものである）といったものが認められる。これらについても今後調査せねばならないと考えている。

3．小　結

トンカラリンは昭和49年８月の発見以来、様々な話題を提供し、それに関する所説もいくつ

か出されている。そしてトンカラリンは、多くの歴史ファンに限りない夢と、歴史パズルの醍醐味を与えてくれた。そこにトンカラリン問題の本質があり、調査担当者の筆者も大いに意義を認めるものである。

現在までに、トンカラリンに対して出された諸説を整理すれば、用途としては信仰遺跡説、水路説（用水路・排水路）、抜け穴説、鉄穴流し説がある。さらに年代的には古くは３～４世紀築造説から近世説までがある。用水路説、抜け穴説、鉄穴流し説は諸点に無理があるとされ、信仰遺跡説、排水路説が残った格好となっていた。偶然か、古代史・民俗学者に信仰説をとるものが多く、考古学者には排水路説が支持されてきた。さらに年代については、信仰遺跡の立場では比較的古く、排水路説を唱える人ば近世築造を主張する場合が多かった。

調査による所見についてはすでに述べたが、この所見の当否は今後諸賢によって検討されなければならない。そして、ここで提示した資料をもとに、さらに活発な議論を期待したい。石組みの構造等については、朝鮮半島との類似や比較の問題、さらには古代史や民俗学の分野ともなると全く無知なるがゆえに、従来の諸説に対しても充分なる検討を加えることなくこの稿を終る。

付論1　天岩戸岩陰遺跡灰層のプラント・オパール分析

藤　原　宏　志（宮崎大学農学部）

1、古代社会におけるイネ科植物

イネ科植物の増加と人類の増加には正相関があるといわれている。これは人為的な森林の破壊跡にイネ科植物が繁茂すること、穀類栽培の開始にともないイネ科栽培植物が増加することによるものであろう。

とくに、主要な穀類、たとえば古来「五穀」として重用された植物（イネ・ムギ・ヒエ・アワ・キビ）はすべてイネ科植物である。

この他にも、モロコシ、ハトムギ、シコクビエ、トウモロコシなどの重要な作物がイネ科植物に含まれている。

また、食糧としてではなく、建材、生活用品材としてイネ科植物の茎葉が多くの場面で利用されてきたことは周知のとおりである。

古代、それぞれの時代にどのようなイネ科植物が存在したかを明らかにすることは、農耕の開始期、農耕の形態あるいは当時の生活様式を知る上に必要である。

従来、古代イネ科植物を探索する方法として埋蔵種子分析法、灰像分析法がもちいられ、貴重な成果を挙げたことはよく知られるところである。しかし、これらの方法は植物器、組織が破壊されずに保存されていた場合に限り適用できるものであり、どの遺跡でも望ましい結果がだせるというものではない。

また、近年盛んになった花粉分析法はイネ科植物を分析対象にする場合、他科植物に較べ花粉形状の属間差が少なく困難がともなうとされている。

プラント・オパール分析法はイネ科植物の葉身に存在する植物珪酸体（cilica body）が土壌中で土粒子の一部となり長期間残留することを利用して古代植生を推定しようとする新しい方法である。

2、プラント・オパール分析の概要

イネ科植物は珪酸植物と呼ばれるように、他科植物に較べ珪酸の吸収量が多い。イネ科植物体内に吸収された珪酸は各組織に万遍なく分布されるのではなく、特定の組織の細胞壁に集中的に蓄積されている。このように珪酸沈積した細胞壁を持つ細胞を植物珪酸体（シリカ・ボディ）と呼ぶ。

イネ科植物には珪酸体をともなう4種の組織がある。その中でも、葉身に存在する機動組織

細胞珪酸体はもっともよく発達した珪酸体である。

しかも、機動細胞珪酸体は、その断面形状が植物種によって、それぞれ異なっている。

一方、イネ科植物が枯死すると、有機物部分は通常酸化分解されてしまう。それに対して、植物珪酸体はいわゆるガラス状のシリカであるため、長年月分解されることなく、すなわち細胞の形状を維持したまま種の植物化石として土壌中に残留する。

土壌学の分野では、このようにしてできた植物起源の土粒子をプラント・オパールと呼んでいる。

プラント・オパール分析は植物種によって珪酸体の形状が異なること、珪酸体がプラント・オパールとして土壌中に残留することを利用して古代のイネ科植物種を推定しようとする方法である。

プラント・オパール分析法は現在のところイネ科植物を対象にするものであり、他科植物については今後の研究に待つところが大きい。

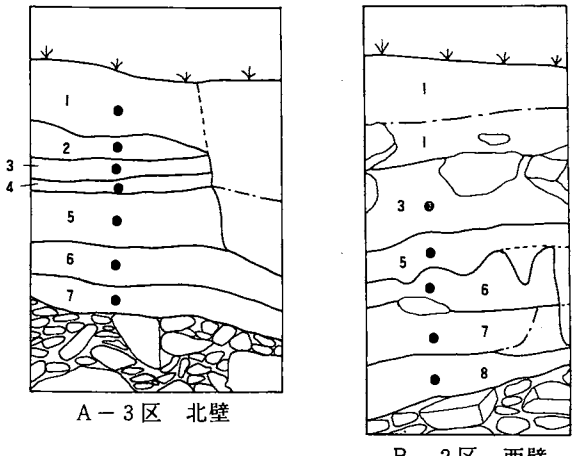
この点では、広汎な植物類を対象にしうる花粉分析法に代替できるものではなく、むしろ、相互に補完しあうものである。

プラント・オパール分析法はプラント・オパールが安定な非晶質珪酸体（ガラス）であるため、土壌条件の如何にかかわらず適用できる利点をもっている。また、プラント・オパールは熱にも強く、少なくとも、800℃の温度には充分耐えうるものであり、この点を利用して、本例のような灰層をも分析の対象にすることができる。

3．分析試料

分析試料は植物灰、腐植質火山灰土、ガラス質火山灰土またはそれらの混合物である。

図にA—3区北壁、B—2区西壁の試料採取点、土層を示した。



A－3区　北壁　　B－2区　西壁

付1－1図　試料採取点

4．分析結果

表に分析結果を一覧した。

イネ機動細胞様プラント・オパールはA－3、B－2区とも第三層まで含まれており、第四層以下では認められない。

A3区第一層にはモロコシ機動細胞様プラント・オパールが認められる。

付１－表１　分析結果一覧表

試　料　番　号	植　　物　　名
Ａ３北１	イネ・モロコシ・ススキ・ヨシ・ジュズダマ
Ａ３北２	イネ
Ａ３北３	イネ（？）・ススキ
Ａ３北４	ススキ・チガヤ・オヒシバ
Ａ３北５	ヨシ・チガヤ・ジュズダマ・モロコシ・ツルヨシ・ススキ
Ａ３北６	ネマガリ（クマザサ）・ヨシ・スズタケ
Ａ３北７	チガヤ
Ｂ２西３	スズタケ・チガヤ・イネ・ススキ
Ｂ２西５	ススキ
Ｂ２西６	なし
Ｂ２西７	チガヤ
Ｂ２西８	スズタケ・チガヤ・ススキ
Ａ３東3.15～3.3(m)	なし（阿蘇シラス）
Ａ３東3.3～3.4　〃	〃　　〃
Ａ３東3.4～4.7　〃	〃　　〃

その他、Ａ―３区第５層にジュズダマ機動細胞様プラント・オパールが検出された。

全体として、とくに植物灰層ではイネ科植物以外の植物に由来すると思われる灰が多く、その中にイネ科植物プラント・オパールが混在していた。

腐植質火山灰にはイネ科植物プラント・オパールが多量に含まれている。

Ａ－３東壁の灰状土層は植物灰ではなく火山起源のガラス性特殊土壌（南九州における、いわゆるシラスに酷似している）であった。

5、考察および結論

(1)　栽培稲に由来すると思われるイネ機動細胞様プラント・オパールが第三層までの各層から検出された。

第三層は弥生後期の土層と比定されている。当時稲が栽培され、何らかの形で稲葉身が本遺跡に持ち込まれたことは充分考えられる。第五層は黒川式土器をともなう縄文晩期の土層である。中部九州地方では他の遺跡で同時期ないしはもう少し古い時期にイネ機動細胞様プラント・オパールが検出された例がある。しかし、その検出例は畑址と推定される場所または貯蔵穴址である。

イネ機動細胞プラント・オパールは前述のように稲葉身に存在する機動細胞珪酸体（シリカ・ボディ）に由来する。

住居址にイネ機動細胞様プラント・オパールが存在すれば、その当時株苅りが行われ稲藁が住居址に持ち込まれていた可能性が濃くなる。逆にいえば、稲栽培が行われていたとしても、穂苅りであれば、住居址にイネ機動細胞様プラント・オパールが残存する可能性は極めて少ないであろう。

一般に、縄文末期には農具等遺物の発掘例からも、株苅りを想定することは難しく、稲栽培が行われていたとすれば穂苅りであったと推定される。

本遺跡の分析結果から、弥生後期以降の土層にイネ機動細胞様プラント・オパールが検出されたことは、同期すでに株苅りが行われていたことを示唆するものであろう。縄文晩期以前については稲の存在を想定する結果は得られなかった。

(2) A—3区第5層（縄文晩期）から、モロコシ機動細胞様プラント・オパールおよびジュズダマ機動細胞様プラント・オパールが検出された。

モロコシはコウリャン・タカキビとも呼ばれ古来、重要な作物とされてきた。（いうまでもなく、トウモロコシとは全く別種である。）

また、ジュズダマはその亜種としてハトムギを含んでいる。プラント・オパール分析では現在のところ両者の区別が困難である。

したがって、ジュズダマ機動細胞様プラント・オパールがジュズダマに由来するかあるいはハトムギに由来するかは詳かでない。

ハトムギは周知のとおり食用作物であるがジュズダマは現在日本では食用にされていない。

しかし、固い包頴に包まれた種子には良質のデンプンが充たされており、外国では食用にされているという報告もある。

縄文晩期灰層にこれらのプラント・オパールが検出されたことは興味深い。

(3) ほとんどの灰層に野草プラント・オパールが含まれていた。ススキ・チガヤおよびササ類（クマザサ、スズタケ）が多く、ヨシも認められた。これらは当時遺跡周辺に自生していたものと思われ周辺植生を推定する場合参考になろう。

(4) 植物灰層にはプラント・オパールも含まれるが大部分はイネ科植物以外の植物に由来する灰である。

(5) A—3東壁の土壌は植物灰のようにも見えるが検鏡の結果、ガラス性火山灰であることがわかった。この火山灰は南九州の「シラス」に酷似している。

(6) プラント・オパール分析は土壌中に残存するプラント・オパールを探索・分析する手法であるが、本例のような植物灰層でも、その中にイネ科植物が含まれている場合は適用できることが明らかになった。これはプラント・オパールの耐熱性によるものである。

プラント・オパール分析法は新しい古代植生分析法であり、今後の追究に待つ所も多い。研究的蓄積がさらに進んだ時点で、本遺跡試料もあらためて再検するつもりである。

付論2　天岩戸岩陰遺跡出土の人骨について

内　藤　芳　篤（長崎大学医学部解剖学第2教室）
坂　田　邦　洋（別府大学文学部考古学教室）

はじめに

天岩戸岩陰遺跡から出土した1体の人骨は、本報告書別欄に述べられているように、考古学的所見より縄文時代晩期に属するものであるが、著者らは本人骨について研究の機会を与えられたので、観察および計測の結果を報告したい。

資　料

人骨は墓壙の中から頭を北にして右側臥屈葬位で見いだされたが、ややうつ伏せ加減であり、腹臥位に近いものであった。

保存状態については、骨質は堅ろうであったが、埋葬後に攪乱されており、頭蓋骨の破砕の他に下肢骨の破損移動があり、その一部は紛失していた。

結　果

1．頭蓋骨

(1)脳頭蓋

脳頭蓋の大部分は破損し、接合できないが、頭蓋冠のうち両側頭頂骨および後頭骨の一部と右側側頭骨の大部分が残っていた。

頭蓋冠の骨壁は一般に薄く、縫合部では内面においてもほとんど癒着は見られない。外後頭隆起の突出もなく、頂線の発達も弱い。また乳様突起も比較的小さい。

(2)顔面頭蓋

顔面頭蓋では両側の頬骨、上顎骨の歯槽突起およびほぼ完全な下顎骨が残っていた。

下顎骨の諸径は余り大きくないが、骨体は厚く頑丈で、顎舌骨筋線はよく発達している。オトガイ孔は両側共に第2小臼歯の下で、骨体のほぼ中高位に存在している。下顎枝は僅かに後方へ傾斜しているが、高さは低くて幅が広く、下顎切痕も浅い。また咬筋粗面は余り目立たないが、内面の翼突筋粗面はよく発達している。

歯

上顎骨歯槽突起がよく残っており、下顎骨がほぼ完全に近い状態であったため、歯の観察が可能であった。その歯式は次のとおりである。

$M_3\ M_2\ M_1\ P_2\ P_1 \times I_2\ I_1$	I_1 ○ × P_1 ○ $M_1\ M_2\ M_3$	× 歯槽閉鎖
$M_2\ M_1\ P_2\ P_1\ C\ I_2\ I_1$	$I_1\ I_2\ C\ P_1\ P_2\ M_1\ M_2\ M_3$	（抜歯）
		○歯槽開存

歯列は整然としているが、余り大きくない。カリエスは全く認められない。咬合型は鉗子状咬合で、咬耗度は弱く、Brocaの1度であり、とくに第3大臼歯(M_3)ではほとんど咬耗の痕が見られない。また右側下顎の第3大臼歯（M_3）は未萌出であり、左側下顎の第3大臼歯（M_3）は水平智歯であった。

また左側上顎の側切歯（I_2）および第2小臼歯（P_2）の歯槽は開存し、死後脱落して紛失したものであろうが、両側上顎犬歯の歯槽は閉鎖し、その部分の陥凹もほとんど認められず、両側の第1小臼歯（P_1）には軽度の捻転が見られ、さらに両側下顎の犬歯（C）は長く伸びており、典型的な抜歯の所見であり、明らかに風習的抜歯の例と断じ得るものである。

2．軀幹骨

椎骨がかなり残っており、また肋骨片若干が見られた。これらのうち椎骨の骨体は平滑で、変形的な所見は全く認め得ない。肋骨では幅が比較的広いのが目立っていた。

3．上肢骨

（1）上肢帯

肩甲骨は両側共に多少の破損はあったが、比較的よく残っており、一般に諸径が大きく、とくに肩峰が著しく大きい。また両側の鎖骨は細いが著しく長い。

（2）上腕骨

上腕骨は両側共によく保存されており、一部補修して最大長の計測も可能であった。主なる計測値は次のとおりである。

	右側	左側
上腕骨最大長	283mm	282mm
上腕骨全長	276mm	276mm
骨体最小周	53mm	51mm
長厚示数	18.73	18.09
中央最大幅	20mm	19mm
中央最小幅	14mm	14mm
骨体断面示数	70.00	73.68

上腕骨は比較的長く、その割りには細い。すなわち最大長が右側283㎜、左側282㎜で、最小周は右側53㎜、左側51㎜であり、従って長厚示数はそれぞれ18.73、18.09に過ぎない。また三角筋粗面などの発達も弱く、全体としてきゃしゃな感じである。次いで中央最大幅、最小幅共にやや小さく、断面示数は右側70.00，左側73.68となり、多少の扁平性がうかがわれる。

(3)前腕骨

撓骨および尺骨は両側共に比較的よく残っていた。いずれも細長く、撓骨粗面および尺骨粗面の発達は弱い。また両骨共に多少の湾曲が認められた。

4．下肢骨

(1)大腿骨

大腿骨は両側共に上、下骨端部が破損しており、骨体を残すに過ぎないが、ほぼ中央と推測される部位を定めて計測した値は次のとおりである。

	右　側	左　側
骨体中央矢状径	(25mm)	(25mm)
骨体中央横径	(21mm)	(21mm)
骨体中央周	(72mm)	(73mm)
骨体中央断面示数	(119.05)	(119.05)
骨体上横径	26mm	
骨体上矢状径	22mm	
上骨体断面示数	84.62	

大腿骨の骨体は比較的細く、多少の湾曲が認められる。中央と推測される部位における矢状径は両側共に25mm、横径は21mmであり、周径はそれぞれ72mm，73mmに過ぎない。またこの部位における断面示数は左右共に119.05となり、かなり大きい値を示しているが、観察的にも幅が小さく、その割りには矢状径が大きくて、柱状形成の傾向を現わしている。しかしながら骨体上部における扁平性は弱く、計測的にも横径が26mm、矢状径が22mmで、上骨体断面示数は84.62となり、比較的大きな値を示している。

(2)脛　骨

右側の脛骨のみで、上、下骨端が破損していたが、中央と推測される部位を定めて計測した値は次のとおりである。

	右　側
中央最大径	(23mm)
中央横径	(18mm)
骨体周	(65mm)
骨体最小周	61mm
中央断面示数	(78.26)

中央と推測される部位における最大径は23mm、横径は18mmで、従って断面示数は78.26となり、比較的大きい値を示し、扁平性は明らかでない。また骨体周は65mm，最小周は61mmであり、他の四肢骨の周径と同じように比較的細いものである

(3)腓　骨

腓骨は両側共に上、下骨端部が破損し、骨体部のみが残っていたが、両側共に湾曲が見られ、長さに比してかなり細く、稜線はやや鋭いが、溝状形成は著明でない。

5．身長推定値

四肢骨のうち最大長の計測が可能であった上腕骨（右側）を用いて、Pearson および藤井氏の両法により、それぞれ身長推定値を算出すれば次のとおりである。

Pearson の方法　　149.41cm

藤井氏の方法　　148.96cm

総　　括

1．人骨の形質

(1) 頭蓋冠は薄く、外後頭隆起、頂線および乳様突起の発達は弱く、また頭蓋縫合は内面においても癒着を認め得なかった。

(2) 下顎骨の諸径は大きくないが、骨体、下顎枝共に頑丈で、とくに顎舌骨筋線および翼突筋粗面の発達が良好であった。

(3) 歯は鉗子状咬合でカリエスは見られず、咬耗度は軽度である。また典型的な抜歯の所見が認められ、両側の上顎犬歯を抜去した風習的抜歯の例と断じ得るものであった。

(4) 上腕骨は細長く、全体的にきゃしゃであるが、骨体の扁平性がうかがわれた。

(5) 撓骨および尺骨も細長く、多少の湾曲が見られた。

(6) 大腿骨は細くて多少湾曲が見られ、骨体中央部では柱状形成の傾向を現わしているが、上骨体部では扁平性を認めなかった。

(7) 脛骨も細いものであるが、扁平性は明かでなく、腓骨はかなり細く湾曲していた。

(8) 右側上腕骨の最大長より身長推定値を算出すると、Pearson の方法では149.41cm、藤井氏の方法では148.96cmであった。

2．性別および年令

(1) 頭蓋骨における外後頭隆起、頂線および乳様突起の形状はいずれも女性の特徴を示しており、また四肢骨の計測値、とくに断面諸径および周径は各時代の女性平均値よりも小さいことを考え合わせるとき、本例は女性骨として差し支えないであろう。

(2) 頭蓋縫合は内面においても末癒着であり、歯の咬耗度は軽く、また椎骨に全く変形が認められないことなどから年令的には壮年期の比較的早い時期で、25～30才位と推定している。

3．時代観

(1) 下顎骨は四肢骨の形状に比して頑丈なものであり、歯は鉗子状咬合でカリエスもなく、風習的抜歯が見られる。

(2) 四肢骨が全般に湾曲しており、また上腕骨の扁平性および大腿骨の柱状形成の傾向など下顎骨や歯の性状と共に縄文人骨の特徴をもつものと考えられ、時代観に関しては考古学的所見と符合するものである。

おわりに

天岩戸岩陰遺跡出土の人骨に関し、その形質について記載したが、本人骨は壮年期の女性縄文人骨と推定され、両側の上顎犬歯を抜去した風習的抜歯の1例であった。

(擱筆するに当たり、本研究の機会を与えていただいた熊本県教育庁文化課ご当局に深甚なる謝意を表します。)

参考文献

1) Martin-Saller, 1957:Lehrbuch der Anthropologie Bd.I.Gustav Fischer Verlag, Stuttgart。

2) 藤田恒太郎, 1959：歯の解剖学. 第4版. 医歯出版. 東京。

3) 鈴木　尚, 1959：人工的歯牙の変形. 人類学・先史学講座・第12巻. 雄山閣. 東京。

4) 藤井　明, 1960：四肢骨の長さと身長との関係について. 順天堂大学体育学部紀要　第3号。

付論３　若園貝塚出土貝類の分類・分析

菊　池　泰　二（九州大学理学部・天草臨海実験所）

若園貝塚のグリット56地点のうち純貝層もしくは混土貝層の認められたグリッドは33地点に及んだ。そのうちＡ－４区、Ｈ－１区の２地点の貝層から30×30×30cmのブロックを各１箇採取した。そのブロック中に含まれる貝類遺骸を洗い出し分類計数した結果を表１に示してある。貝殻の計数の際保存の不完全なものでも、二枚貝では殻頂を含む殻片、巻貝についても螺塔殻軸などから独立した個体と認められるものは数え上げた。他の全種類については計数は容易であったが、マガキの場合基底面に固着している盃状の左殻はやや保存が良いが、扁平な左殻については殻片の完全、不完全の識別も困難であり、さらに多量の計数不能の破片があるので真の個体数の推定は不可能であった。

出土した貝類はいずれも有明海沿岸にふつうに産するものであるが、現在の各種の生息環境の差にもとづき、海産、汽水産（河口産）、淡水産の３群に分け、それぞれの中を二枚貝（斧足綱）と巻貝（腹足綱）に分けて表示してある。二枚貝の場合殻片数と個体数の関係がはっきりしないため組成比率の定量的表現もむずかしいが、全貝類中マガキが圧倒的な首位を占め、全殻片をみな対等として比率を出した場合Ａ－４区で90.6%、Ｈ－１区で80.6%、マガキについては保存の良い左殻を、他の二枚貝については左右殻のうち数の多い殻片数を仮に個体数とみなしたもっとも内輪の推定値でも両サンプルにおいてマガキが70%以上を占めている。両地点のサンプルにおいて第２位以下の種では多少組成の差がめだち、Ａ－４区では海産二枚貝中ハイガイが第２位を占めるのに対しＨ－１区ではわずか１殻片しか出土せず、その代りＡ－４区ではまったく出現しないシオフキが第２位を占めている。そのほか巻貝ではＡ－４区のみでカワニナが22箇出土する一方、この地点では乏しいカワアイとフトヘナタリをＨ－４区では多数産するといった差がみられる。現在生存する貝類の生態分布からみると、マガキは潮間帯および極浅海の転石に付着して多産する。ハマグリは水の交換がよく底質中の有機質含量が少い砂地を好み、シオフキ、アサリは泥まじりの干潟に、ハイガイは有機質含量の高い泥質環境に生息する。干潟にすむウミニナ科の巻貝類のうちではウミニナが砂泥ともっともすみ場所の選好範囲が広く、カワアイは軟泥地、フトヘナタリは汽水域の芦原、オニシバの生える感潮域の草地に多産する。すなわち、この２つのブロックから出土した貝類は幾つかの異った環境からの採集物の混合したものといえる。

貝塚の全含貝層のうちわずか２サンプルの分析結果であり、貝類の組成の場所による偏りが全域の中でどのようになっているかは不明である。しかし成立年代の差などによるとは考えにくい。前述のようにアサリ、シオフキとハマグリ、さらにハイガイは生息環境の特性がやや異っているが、そのような環境の異質性は同一地域の海岸干潟の一日で行動できる範囲内にも隣

付３－表１　若園貝塚出土貝類遺骸の量的組成

			A－4区		H－1区	
（海産）						
二枚貝	ハイガイ	右殻	27	62	0	1
		左殻	35		1	
	マガキ	右殻	854	1112	828	1501
		左殻	258		673	
		破片	＋＋		＋＋＋	
	ハマグリ	右殻	1	1	2	4
		左殻	0		2	
	シオフキ	右殻	0	0	61	127
		左殻	0		66	
	アサリ	右殻	0	0	0	1
		左殻	0		1	
	オキシジミ	右殻	0	1	0	1
		左殻	1		1	
	ウネナシトマヤガイ	右殻	2	5	2	4
		左殻	3		2	
巻　貝	アカニシ			1		2
	スガイ			2		0
	ウミニナ			1		3
	ヘナタリ			0		2
	カワアイ			2		98
	イボウミニナ			0		1
	ツボミ			1		0
（汽水産）						
二枚貝	ヤマトシジミ	右殻	28	44	17	35
		左殻	16		18	
巻　貝	フトヘナタリ			10		83
（淡水産）						
二枚貝	イシガイ			0		1
巻　貝	カワニナ			22		0

接して存在する。菊池川河口における現在の諸種の分布域については調査していないが、筆者が以前調査した同じ熊本県の有明海に面した緑川河口干潟の場合、ハマグリはみお筋の砂質の部分に限定された形で出現し、やや沖の泥まじりの干潟低地にシオフキ、アサリが分布するものの、１人で１日の干潮時間のうちに両生息場所を移動することも可能である。この２地点の採集物組成の差程度の偏りは、同時に浜へ出た数人の人の漁獲物の個人差としても、１人の人の数次にわたる採集の場合の日によるちがいとしても生じ得る程度のものと考えられる。

日本産のシジミ類には淡水産のマシジミと汽水産のヤマトシジミがあるが、現在でも各地で食用としてよく利用されているのは汽水種のヤマトシジミの方である。この種は河口感潮域の砂底にふつうに産する。今回出土したシジミも殻頂部の発達、殻表面の成長脈の弱いことなどからヤマトシジミと判断された。

若園貝塚は、菊池川と江田川の合流点、両河川にはさまれた丘陵の先端部の海抜11m前後の位置に形成されており、菊池川の現在の河口まで直線距離にして約12kmある。しかし菊池川河口付近は近世以降になって干拓による陸化がすすめられており、また別項の調査報告にみられるように、出土したマガキ貝殻の ^{14}C 年代測定の結果、貝塚の成立年代が3830±70年B.P.と推定されていることを考え合わせると、成立当時の海岸線は現在よりかなり内陸側にはいり込んでいたものと推測される。今仮に現海面より４～５ｍの海進を考えると、推定される海岸線は菊池川沿いにずっと陸側へ入り、貝塚の現在位置との距離もわずか３km前後となる。そうだとすれば現地形から考えるより海産貝類の採集、運搬もはるかに容易であったろうし、汽水性のフトヘナタリやヤマトシジミの生息する感潮域は貝塚の現在位置附近にまで及んだことも充分考え得る。

付論4　若園貝塚出土の動物遺存体・人骨

木　村　幾多郎（九州大学医学部）

本遺跡より検出された動物遺存体は、殆んどがシカ（721ｇ）、イノシシ（635ｇ）で、他に少量の小型哺乳動物、魚類等がある。縄文時代中期末から後期にかけての貝塚であるが、層位的に確認するまでにいたっていないということであり、すべての層・区を一括して取り扱う。遺存骨の検出地区は、ほぼ貝層の広がりと一致するが、貝層自体に遺存骨の包含量が多いわけではない。H—1—2のブロック・サンプル（30×30×30cm）の水洗・選別の結果でも、遺存骨はわずか12ｇにすぎなかった。量的には、C—5—3より一番多量の遺存骨が検出されている。

種名の査定されたものは次の通りである。

魚　綱　Class PISCESS

(1)クロダイ　*Mylio macrocephalus*　(BASILEWSKY)

(2)ボラ　*Mugil cephalus* LINNÉ

爬虫綱　Class REPTILIA

(3)ウミガメ科の一種　*Chelonidae gen. et sp. indet.*

(4)スッポン　*Trionyx sinensis japonicus* TEMMINCK & SCHLEGEL

鳥　綱　Class AVES

(5)　?

哺乳綱　Class MAMMALIA

(6)イノシシ　*Sus scrofa leucomystax* TEMMINCK

(7)ニホンシカ　*Cervus nippon* TEMMINCK

(8)タヌキ　*Nyctereutes procyonoides* GRAY

(9)ニホンアナグマ　*Meles meles anakuma* TEMMINCK

(10)ニホンザル　*Macaca fuscata* BLYTH

(11)ヒト

魚　綱

採集された魚骨はきわめて少く、16ｇにすぎない。クロダイ左側歯骨（C—5—3）、ボラ主鰓蓋骨左側（B—1—2下）、同右側（C—6—2）が主なもので、脊椎骨等はない。クロダイ歯骨長は37.1㎜で、そう大きな個体ではないが、他の貝塚でもこの程度の個体が多いよう

である。ボラ主鰓蓋骨は大きく成魚のものと思われるが、4才以上の成魚になると外洋に出て、内湾・河口にはもどってこないとされており、本貝塚付近で捕獲されたものであれば（有明海を含めて）、4才以下の個体と推定されることになる。

爬虫綱

ウミガメ類の腹甲板の右中腹骨板（A—3—3上）・腹甲板片（C—2—3）と、スッポンの各部分がC—5—3より検出されている。ウミガメ類は、産卵期に陸に上る時には容易に捕獲されるもので、食用になる。天草地方では、梅雨の頃アオウミガメ（一名正覚坊）が産卵にくるのが確認されている。日本近海には、アカウミガメ *Lepidochelys olivacea*（ESCH－SCHOLTZ)が多く、九州沿岸にも産卵のために上陸してくる。本標本は部分骨で、どの種類に属するのか査定できなかった。スッポンは、下腹骨板（l.)、中腹骨板（l.)、上腹骨板（r.)、背甲板片、脛骨、腓骨（r. l.)、橈骨（l.）が検出されている。保存状態、大きさも異なり同一個体のものではない。

鳥　綱

右側尺骨骨体部片が、C—5—3より検出されている。イヌワシ *Aguila chrysaëtus japonica* Severtzow の骨格標本と、形状・大きさが類似するが、確定的ではない。

哺乳綱

イノシシ

検出部分は表1の通りであるが、出土層区を無視すれば、四肢骨よりの推定最小個体数は3個体となる。検出されたグリッドはシカより全体的に広がりを見せている。各遺存骨はいずれ

付4—表1　イノシシ四肢骨

部位 / 出土区・層	頭骨	脊椎	肩甲骨		上腕骨		橈骨		尺骨		寛骨		大腿骨		脛骨		距骨		踵骨		中手骨・中足骨
			r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r. l.
A—7—2															1	1					
B—1—2																					指骨 V
B—3—3					1																
B—7—1下		C^2																			足根骨 1
C—1—6																1					
C—5—2			1	1										1							
C—5—3	後頭骨	肋骨3			1									1						2	足根骨 1 指骨 2
C—6—2						1															
D—1—4下						1															
D—3—4		Th^6	1														1				指骨 1
D—4—2						1															
E—3—2																	1				指骨 1
合計		3	2	1	2	3								2	1	2	2			2	

付4—表2　イノシシ歯牙

部位 / 出土区・層	右 上顎 i^1	i^2	i^3	cm	m^1	m^2	m^3				右 下顎 i_1	i_2	i_3	cm	m_1	m_2	m_3				左 上顎 i^1	i^2	i^3	cm	m^1	m^2	m^3				左 下顎 i_1	i_2	i_3	cm	m_1	m_2	m_3			
	I^1	I^2	I^3	C	P^1	P^2	P^3	P^4	M^1	M^2	M^3	I_1	I_2	I_3	C	P_1	P_2	P_3	P_4	M_1	M_2	M_3	I^1	I^2	I^3	C	P^1	P^2	P^3	P^4	M^1	M^2	M^3	I_1	I_2	I_3	C	P_1	P_2	P_3	P_4	M_1	M_2	M_3
C—5—3	(I¹	I²)		(+	P²	+)													(m³	M³)		+	I²	+)																			
C—5—3	2I¹	I²	I³												C♀								I¹																			
C—5—2																				(+	M₃)																				
D—3—4																																										(M₁	M₂	M₃)
合　計	3	1	1			1									1				1	1		1	1	1																	1	1	1

備考　(I¹)　萌出中のもの
(I)　顎骨に植立しているもの
(+)　歯牙の欠失した歯槽

も破損しているが、上腕骨は比較的残りがよい。他は、足根骨・指骨を除いては小破片となっている。D—1—4下より検出の上腕骨（l.）の遠位端外側上顆稜・内側上顆上に横位の刃物によるキズが残っている（明らかに齧歯類によるものではない）。性別の判明するものは、雄獣の犬歯（c|）が確認されているのみであるが、上腕骨・下顎骨など大きなものが多い。年齢的には、C—5—3より生後6～7ヶ月（M¹m³ M¹萌出中）、生後15ヶ月前後（I²| 萌出中）、D—3—4より生後18ヶ月前後（|M³ 萌出中）の個体が認められるが、その他の多くは前述のように成獣と思われる比較的大きな標本である。

付4—表3　シカ四肢

部位 / 出土区・層	頭骨	脊椎	肩甲骨 r.	肩甲骨 l.	上腕骨 r.	上腕骨 l.	橈骨 r.	橈骨 l.	尺骨 r.	尺骨 l.	寛骨 r.	寛骨 l.	大腿骨 r.	大腿骨 l.	脛骨 r.	脛骨 l.	距骨 r.	距骨 l.	踵骨 r.	踵骨 l.	中手骨・中足骨 r.	中手骨・中足骨 l.
A—3—2															2							
A—6—2																						1
B—4—2																					指骨	1
B—7—2下															1					1		1
C—5—3	M²～P²		3			1	1		2				2	2	2			1			中手・中足骨	6
C—5—3	鹿角	肋骨1																			指骨	3
C—1—6																						1
C—4—7																1						
D—3—4	|M¹M²|					1							1								2
D—4—2															1							
D—5—2					1																	
合　計					2	2		2					2	2	7	1		1		1		

シ　カ

量的には、本遺跡では一番多く検出されている（721ｇ）。出土区・層を無視すれば、四肢骨よりの推定最小個体数は７個体である。イノシシと同じようにＣ―５―３よりの出土数が一番多い。各骨体はいずれも破損しているが、比較的遠位端の残りが良い。中手・中足骨は構造上比較的直線的に縦に割れやすい性格を持っており、骨器の原材として利用される例が多いが、本遺跡では破損してはいるが比較的多く遺存している。指骨・足根骨・脊椎骨・肋骨も検出されており解体は遺跡付近で行われたものと考えて良いであろう。成獣が多く、骨端が分離して検出されたものは、橈骨（ｌ.）にすぎない。性別は、Ｃ―５―３より鹿角（ｌ.）第２枝付近が検出されており雄獣と確認されるのみであるが、全体的に大きな骨体を持つと思われるものが多い。なお鹿角は、第Ⅲ区で刃物により切断されている。

タヌキ

Ｃ―５―３より、右側下顎骨２個が検出されている。一方は下顎枝を欠くが下顎結合部から残存し、P^2～M^2が残存植立する。他方は犬歯歯槽部より近側が欠失し、残存歯はない。P^1～M^3歯槽長は、前者が44.1㎜、後者が45.5㎜で、骨体高も後者が大きい。

アナグマ

右側上腕骨の遠位部分の破片である（Ｃ―５―３）。内側上顆に顆上孔を持ち、この小孔を持つものは小形食肉動物に多く、ねこ・てん・いたち・かわうそ等に認められる。

ニホンザル

右側上腕骨（Ｃ―５―３）と、大腿骨（Ａ―４―２）が検出されている。サルは、関東地方では、縄文時代後期貝塚から多く出土するようになるといわれているが、九州では、サルの出土の確認された遺跡は多くないが、今後、貝塚・洞穴等の獣骨の調査がすすめば出土例数は増加するものと思われる。岩下洞穴（長崎県）、天神山貝塚・木月貝塚（福岡県）、轟貝塚（熊本県）、西市来貝塚（鹿児島県）等から出土しており、前期の岩下洞穴を除いていずれも後期に属するものと思われる。中世の高橋南貝塚（熊本市）でも、歯が検出されている。いずれの場合も一遺跡での出土量は少ない。

上腕骨下端幅（上顆幅）	28.5㎜
〃　骨体中央最大幅	12.4㎜
〃　骨体中央最小幅	11.1㎜

ヒ　ト

人骨が、Ｄ―４―２と、Ａ―４―２から検出されている。いずれも部分骨で、埋葬姿勢等は不明である。

Ｄ―４―２　同一個体のものと思われる左右大腿骨骨体部、左側脛骨骨体部、指骨が検出されている。大腿骨粗線は良く発達し、柱状大腿骨の形状を示すが、脛骨とともに全体的に華奢で

ある。年齢・性別は不明であるが、しいていえば、女性的であるといえる。

A—4—2　頭頂骨（r.l.）、後頭骨、頬骨（l.）が検出されている。保存状態から同一個体のものと思われる。部分骨で、年令・性別等は明らかでないが、頬骨の縁結節の突出が弱く女性的である。頭蓋骨矢状縫合の外板は癒合していないが、内板には癒合が認められる。しいていえば、熟年初期の女性と推定される。

H—1—2より採集のブロックサンプル（30³cm）の水洗選別の結果は、表4の通りである。

付4—表4　H－1－2ブロックサンプル（30³cm）中貝類出現率表

貝種＼項目		左右別 r	個体数 l	個体数	各綱毎の出現率(%)	出現率(%)
双殻綱	えがい	0	1	1	0.07	0.05
	はいがい	4	2	4	0.30	0.22
	まがき	1,083	1,208	1,208	90.01	64.98
	はまぐり	3	6	6	0.45	0.32
	あさり	0	1	1	0.07	0.05
	まつかぜ	40	45	45	3.35	2.42
	しおふき	29	36	36	2.68	1.94
	おおのがい	1	0	1	0.07	0.05
	やまとしじみ	32	35	35	2.61	1.88
	まつかさがい	5	3	5	0.37	0.27
双殻綱小計				1,342	99.98	72.18
腹足綱	きさご	1			0.13	0.05
	へなたり	262			50.68	14.09
	かにもりがい	3			0.58	0.16
	てんぐにし	1			0.13	0.05
	かわにな	216			41.78	11.62
	きせるがい類	34			6.78	1.83
腹足綱小計		517			99.88	27.8
総計		1,859				99.98

※すべてを1㎜メッシュを通して水洗し、選別した。

それによれば、マガキが64.98%で、その多くを占め、ヘナタリ・カワニナがこれに次いでいる。他に食料残滓と考えられるものでは、ヤマトシジミを除けば断片的に検出されたにすぎない。これら貝種は、ほとんどが付近の海岸・河川で採集可能なものである。この傾向は、本遺跡より、現在の有明海に近い尾田貝塚でも確認されている（山本1974）。本遺跡で11.62%を占めるカワニナが、尾田貝塚ではほとんど検出されていないのは、本貝塚が菊池川下流域貝塚として一番上流に位置し、玉名平野の縄文時代各貝塚を結ぶ10mの等高線の一番奥に入り込んだ点

から約 3.3kmという地理的条件の違いによるものであろうか。淡水産のマツカサガイの捕食も認められることからもいえる。菊池川上流の一支流に面する天岩戸岩陰からもこの貝の捕食が見られる。

ブロックサンプル中より検出された脊椎動物遺存骨は少なく、全部で12ｇにすぎない。魚鱗も多く、ほとんどがマダイと思われるが、細片のため確認できないものが多い。魚類脊椎骨は、椎長７～1.1mmまで41個検出され、５～６種類に分類できる。イワシ科に属すると思われるもの、ブリの稚魚と思われるものがある。他に、きわめて小さい主鰓蓋骨、前上顎骨各１個が検出された。他に両生綱で、アオガエル程の大きさの右側上腕骨近位部、ヒキガエルの右側寛骨、哺乳綱ではヒメネズミ程の大きさの脊椎骨４個と指骨、イノシシ未節骨と脊椎骨が確認されただけで、他のほとんどは魚綱に属するものと思われる。

以上のように、４綱11種（ブロックサンプル中のものを除く）の脊椎動物が確認されているが、シカ・イノシシがそのほとんどを占めていることは、縄文時代貝塚に普遍的なことといえる。イノシシの幼獣、シカの若獣が検出されているが量的に少なく、狩猟対象としては成獣が多かったと思われる。タヌキも量的には多くないが、貝塚等からはある程度普遍的に検出される動物で、アナグマも同種類の狩猟対象動物であったと思われる。サルは、人間との関係で注目される動物であるが、前述のように九州では、確認例が少なく積極的な狩猟対象物とされていたのか明らかでない。魚類は、ブロックサンプル中のものを加えても採集量は少ない。ほぼ内湾性のもので、貝種の示すところと一致している。魚鱗は、種名同定・年齢推定上注目される遺物であるが、いずれも破損がひどく目的は達せられなかった。

本報告にあたっては、主に九州大学医学部解剖学教室標本を参考にした。なお、ブロックサンプルの水洗・選別にあたって全面的に、九州大学文学部考古学研究室田口真理氏の協力を得た。

付論5　トンカラリン地質調査報告

斉　藤　林　次（熊本県文化財保護審議会委員）

1．緒　言

筆者は昭和50年以来、しばしばトンカラリンの現地を調査した。その間県文化課の調査も実施された。今回、県文化課の協力を得て地質調査を終了したので、ここに報告する。

2．位置及地形

トンカラリンは熊本県玉名郡菊水町大字瀬川にある。江田から玉名に通ずる県道の東側、北原部落からその背後にある標高60m の鷲原神社に至る谷底沿いにある。トンカラリンの西側の丘（北原台地）は前記県道と菊池川の間にある丘陵に連なる。この丘陵（清原台地）には江田船山古墳などの文化財が点在する。この丘頂面は段丘面で、表面は礫・砂・土から成る段丘堆積物から成り、段丘面上に上記の古墳等が点在する。この段丘面は県道沿いに、菊池川と並行して、北原から上・下小田にかけて発達している。

3．地　質

トンカラリン付近及びその隣接地区にみられる地層の層序は下記のとおりである。

7）谷底堆積物（含岩石裂塘内堆積物）
6）河成堆積物…砂・礫・粘土
5）段丘堆積物…砂・礫・粘土
4）阿蘇Ⅳ期凝灰岩
3）礫層
2）花崗岩
1）変成岩（片岩）

上記の層序の内、トンカラリンの丘陵地帯を形成している地層の層序は下記のとおりである。

D）岩石裂塘内堆積物
C）谷底堆積物
B）段丘堆積物
A）阿蘇Ⅳ期凝灰岩

岩石裂塘内堆積物

この堆積物は谷底堆積物の中の岩石裂塘内堆積物で、C－D区間およびE－F区間にみられる阿蘇Ⅳ期凝灰岩の地隙を充填している堆積物で、砂・土の互層から成る。今C－D２トレンチの断面（第69図）を例にとって説明する。

断面の両壁は阿蘇Ⅳ期凝灰岩で、同期凝灰岩の特徴たる拳大の白色軽石を含む。両壁が大体並行し、幅0.6～1m、地隙の底から天井まで垂直8mある。C－D2トレンチの断面の形は、1つの開いた岩石の地隙であることを示している。文化課・松本技師によって、このトレンチの底から二川焼の陶器片が発見されている。

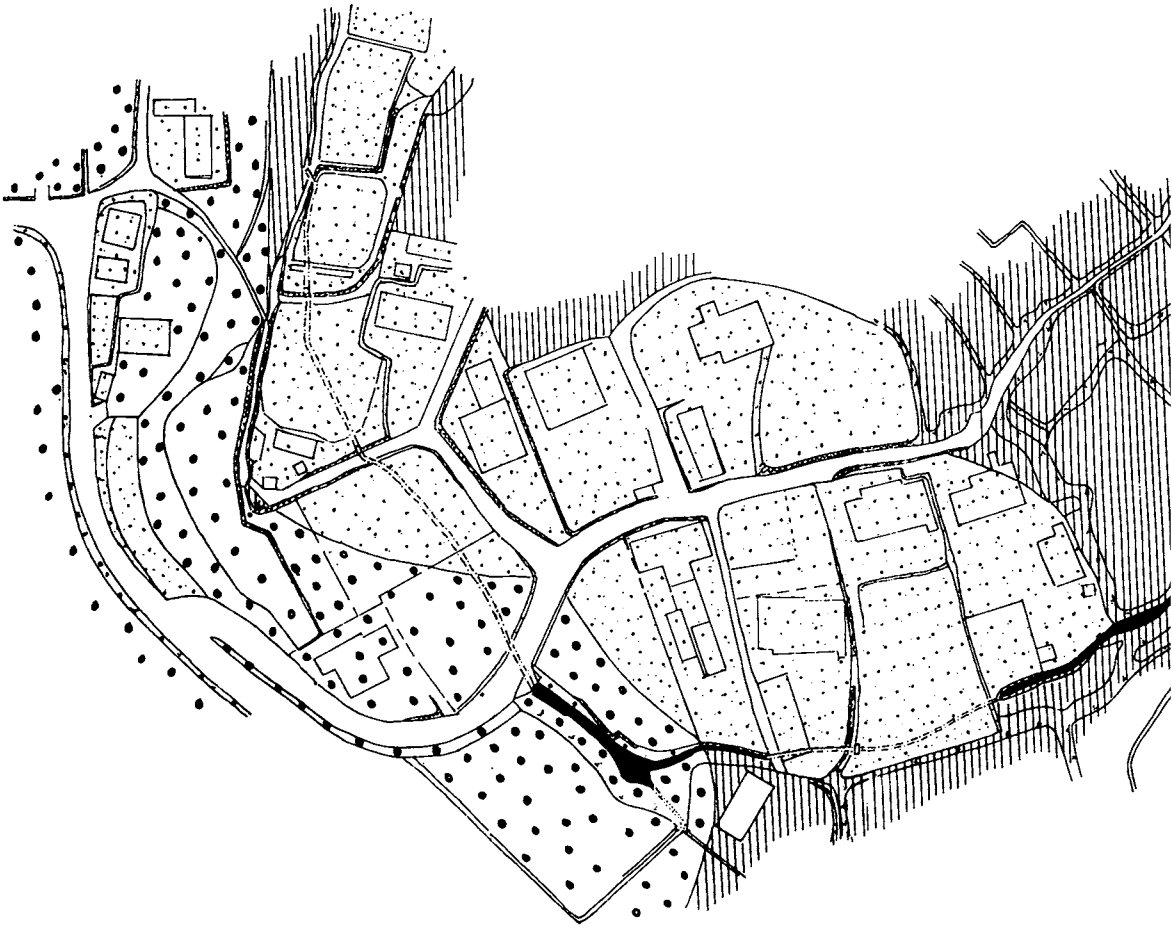
C－D2トレンチの堆積物をみると、砂層に始まり、褐色土に終る堆積の繰返しで、varve構造的な堆積物であり、この堆積物が周期的に堆積したことを示している。

E－F1トレンチは裂墝（隊道）の出口（西口）に設定されている。このトレンチの断面図（第69図）によれば、裂墝の底に天井石と同質の転石（凝灰岩）があり、その直上に1.2mの堆積物が乗っている。この堆積物は砂に始まり褐色土に終る堆積を単位とした堆積の繰返しである。この堆積様式はC－D区間と全く同様で、周期的な堆積を示している。C－D2とE－F1トレンチは第1表のように対比できる（第69図参照）。

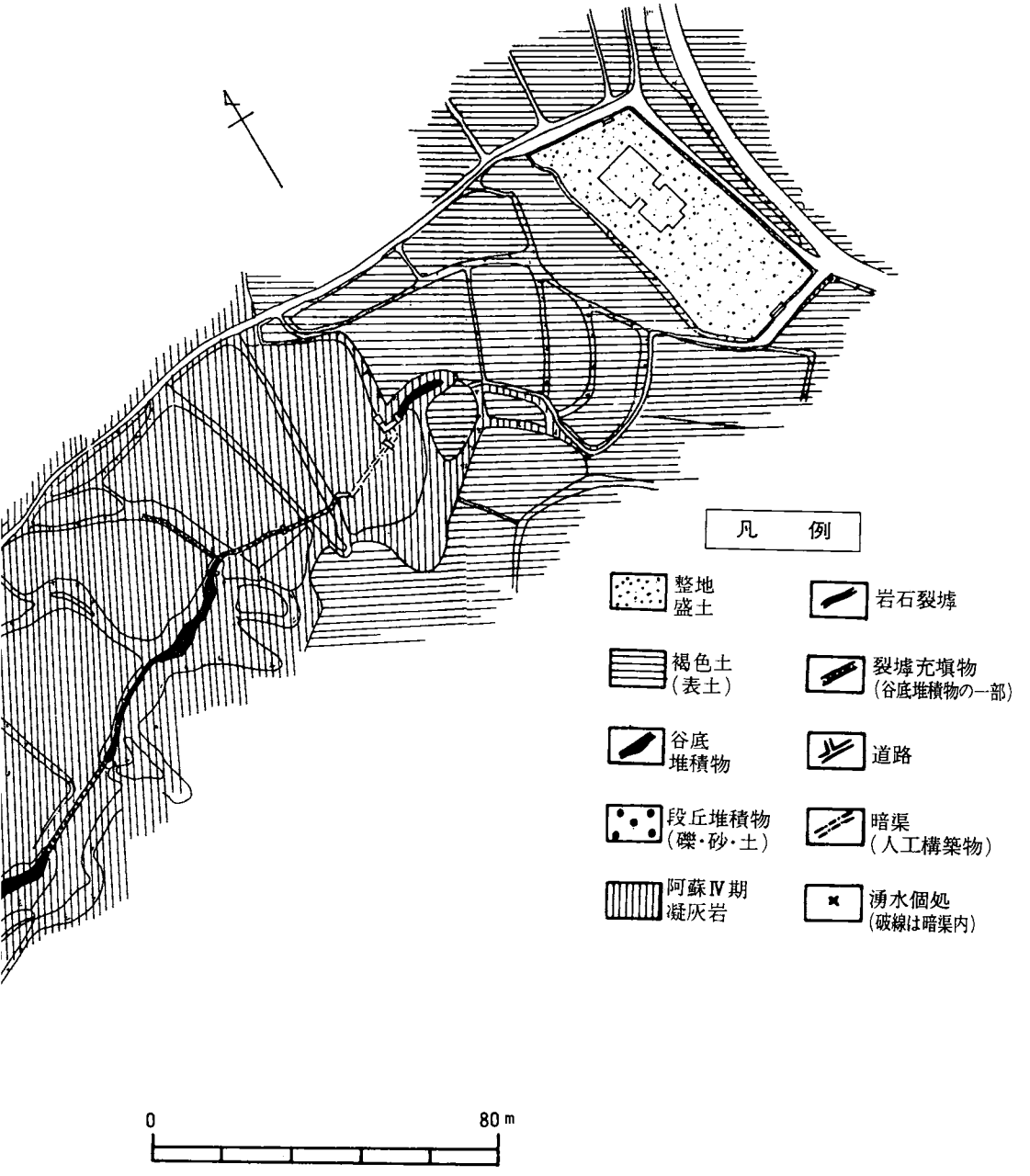
付5—表1　C－D2，E－F1トレンチ堆積状態の対比

周期			C－D2トレンチ	E－F1トレンチ		土地開発	地震	備考
末期	攪乱堆積源		灰色土の堆積	灰色土		鶯原神社及び丘頂部の開発		鶯原神社の現在地遷宮は明治21年
後期	周期性	Ⅴ	褐色土と縞状褐色粘土の交互層	欠？				
中期	バーブ構造（周期性）	Ⅳ	含砂褐色土	周期性	含砂褐色土	鶯原神社トンカラリン間の耕地造成		
					砂			
		Ⅲ	含砂褐色土		含砂褐色土			
			砂		砂			
		Ⅱ	褐色粘土		含砂褐色土			
			砂		砂・粗砂			
初期		Ⅰ	含砂褐色土	褐色土				
			二川焼片	凝灰岩転石		トンカラリン構築期(1724春)	1723年11～12月の地震による岩石裂墝発生	

E－F1トレンチの底にある転石は付近の凝灰岩に較べて、より硬く古期岩層の礫（安山岩緑色変成岩）を含み、又この転石は地隙部分の天井石や石組みの石と同質で、工事用として運



付5－1図　トン


凡　例
整地
盛土
岩石裂墟
褐色土
(表土)
裂墟充填物
(谷底堆積物の一部)
谷底
堆積物
道路
段丘堆積物
(礫・砂・土)
暗渠
(人工構築物)
阿蘇Ⅳ期
凝灰岩
湧水個処
(破線は暗渠内)
0
80 m

ヵラリン付近地質図

搬されて来たものである。この転石は工事の際上から転落したものと考えられる。

このＥ－Ｆ区間が裂罅であることは、その断面の底が契形を呈していることから明らかであり、地隙の側壁の傾斜からも首肯できる。即ち、入口（東口）で南側80°、北側90°、出口(西口）で南側66°、北側80°で、断面の両側壁で非対称であることは、この断面（側壁）が天然の傾斜であり、裂罅であることを示している。

谷底堆積物

Ａ－Ｂ，Ｄ－Ｅ，Ｆ－Ｇ区間の地表にみられる堆積物で谷底（Ｕ字溝）を埋めている。この谷底堆積物は地表下にあるので、観察できないが、トレンチの結果からみると、岩石裂罅内堆積物とは異り、流路は大部分周囲の土砂で埋められ流れにより運搬されてきた土砂の堆積は極めて僅少である。

段丘堆積物

道路の切割にその一部がみられる他は露出があまり見当らない。段丘堆積物は土・礫（火山岩礫）・凝灰質土・砂から成り、トンカラリンのＪ－Ｍ区間、トンカラリン付近の丘陵一帯にみられる。段丘堆積物は阿蘇Ⅳ期凝灰岩を不整合に被い、その境（不整合面）を被って段丘堆積物の基底礫層が発達している。この基底礫層は良好な含水層として、暗渠中（Ｊ－Ｍ区間）及泉として湧出している。この地表での湧水は年中枯渇することがなく、古くから生活用水として利用され集落が営まれたものと考えられる。この湧水の周辺に分布する縄文時代以降の住居址の存在はこのことを物語っている。

阿蘇Ⅳ期凝灰岩

阿蘇Ⅳ期凝灰岩はトンカラリンの丘陵を構成している岩石で、地表の起伏面はこの凝灰岩の削剝面である。この凝灰岩は黒灰色を呈し、白色軽石を含む。風化すると凝灰質土と砂粒となる。軽石は剝理して礫となり、谷底や裂罅充填物に小礫として含まれることがあるが、大部分は砂粒化する。このⅣ期凝灰岩は厚さ少なくとも70m 内外、その基底はトンカラリン付近ではみられないが、江田の菊池川沿いでは礫層がみられる。しかし、このような基底礫層は場所によって欠くことがある。

4．トンカラリンの時代

Ｃ－Ｄ・Ｅ－Ｆ区間でみられるように、トンカラリンの上部は阿蘇Ⅳ期凝灰岩の裂墟を利用していることから、①裂罅形成後の築造である。

Ｅ－Ｆ区間の出口でのトレンチ（Ｅ－Ｆ１トレンチ）の断面から、トンカラリン工事の転石が裂罅の底にみられること、この転石を被って裂罅堆積物があることから、②工事は裂罅堆積物以前である。

Ｃ－Ｄ区間の、Ｃ－Ｄ２トレンチでは裂罅の底近くに二川焼の陶器片が発見された。その上

に裂罅堆積物が集っていることから、この二川焼は工事の時期に近いものと考えられる。

以上述べたことから、トンカラリン築造工事の時期は地質的にみて、

工事の時期═裂罅形成後で裂罅堆積物以前ということになる。

さらに裂罅が形成されると、直ちに堆積物が堆積し始める。その理由は、谷底に出来た裂罅であるから当然谷のgrade に達するまでは堆積は停止せず堆積が続く。このように考えると、工事は裂罅の形成直後に行なわれたと判断せざるを得ない。

トンカラリン築造の時代を地質学的に考察してみる。トンカラリンの岩石裂罅、1）C－D、E－Fは雁行配列を示し（東北東―西南西）、互に斜行している。 2）この裂罅が急激に生じたことから、裂罅は地震によって生じたと判断する。一方、二川焼の出土から徳川中期以後～明治初期が考えられることと堆積周期からの堆積期間等からこの裂罅は1723年の地震に起因するものと推定、その築造はその直後と考えられる。

6．トンカラリン築造の目的

C－D区間でみられるように、トンカラリンの導水路面は現在の地表面より3.2m下の地隙の底面である。今仮りに構築時から現在まで200年とすれば、裂罅を埋めた堆積物は年平均1.5cmの厚さで堆積したことになる。今裂罅の幅が平均0.8mとし、この裂罅を通る水の運搬量と谷の傾斜面を流れる水の速度から考えて、この程度の堆積物は当然考えられることである。この裂罅の下部の幅が0.5m前後で、底部は丸みを帯びるか契形に尖ることなどから、人間がこの裂罅を通過することは不可能であったと考えられる。

一方、このトンカラリンは谷の横断では一番低い位置にある。地表及地表近くの凝灰岩の風化帯に浸透した水は、地形上からもこのトンカラリンに集まり、谷底の傾斜に沿うて流下することになる。

阿蘇Ⅳ期凝灰岩は比較的軟弱で、これを切ったり、堀ったりする工事は比較的容易である。さらに、工事用の凝灰岩も現地近くで容易に入手できることから石組みの暗渠構築も可能である。

生活用水としては前述のように泉（湧水）があり、トンカラリンの水を使用する必要はない。したがって、トンカラリンは祭祝に関係したものではなく、谷の集・排水に利用されたものと考えたい。

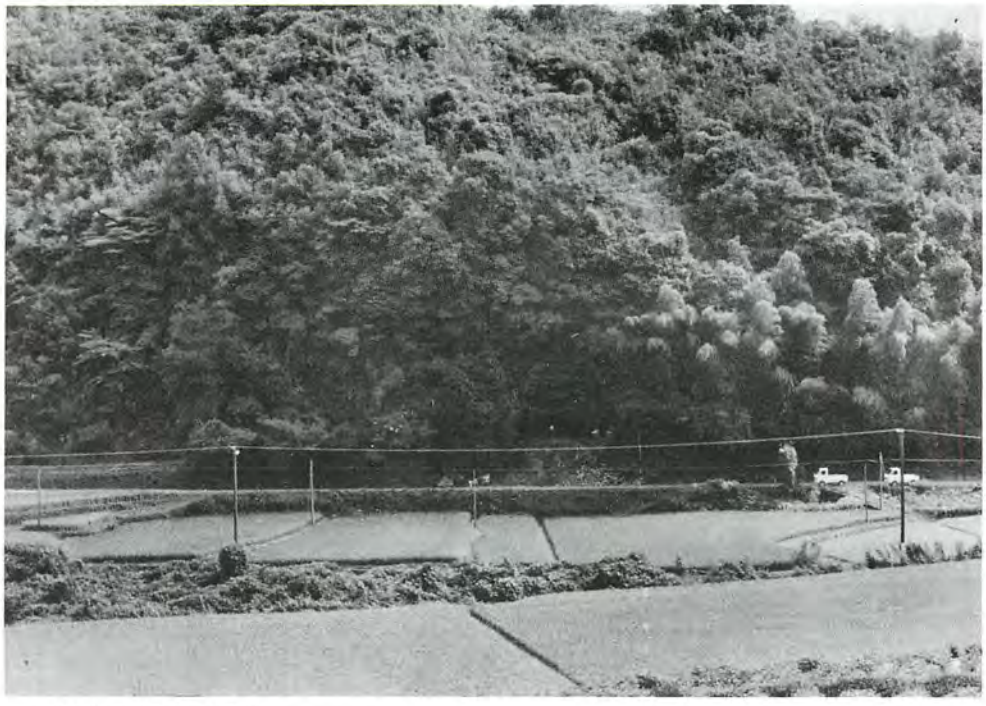
その目的は、新たに谷の集・排水路を設けることによって、旧流路を埋めて耕地とし、その水路の一部を暗渠として、狭い谷に最も効果的な耕地造成を行うことであったと考える。

（昭和51年11月稿、53年3月一部改稿）

図　　版

図版 I　菊水町周辺空中写真

1．若園貝塚　　2．江田船山古墳　　3．姫塚
4．白石前方後円墳参考地　　5．トンカラリン
6．日置氏銅板墓誌出土地



(1)天岩戸岩陰遺跡遠景

(2)岩陰の内部（転石・排棄物除去後）

図版２　天岩戸岩陰遺跡

(1) A－3・B－3区北壁断面

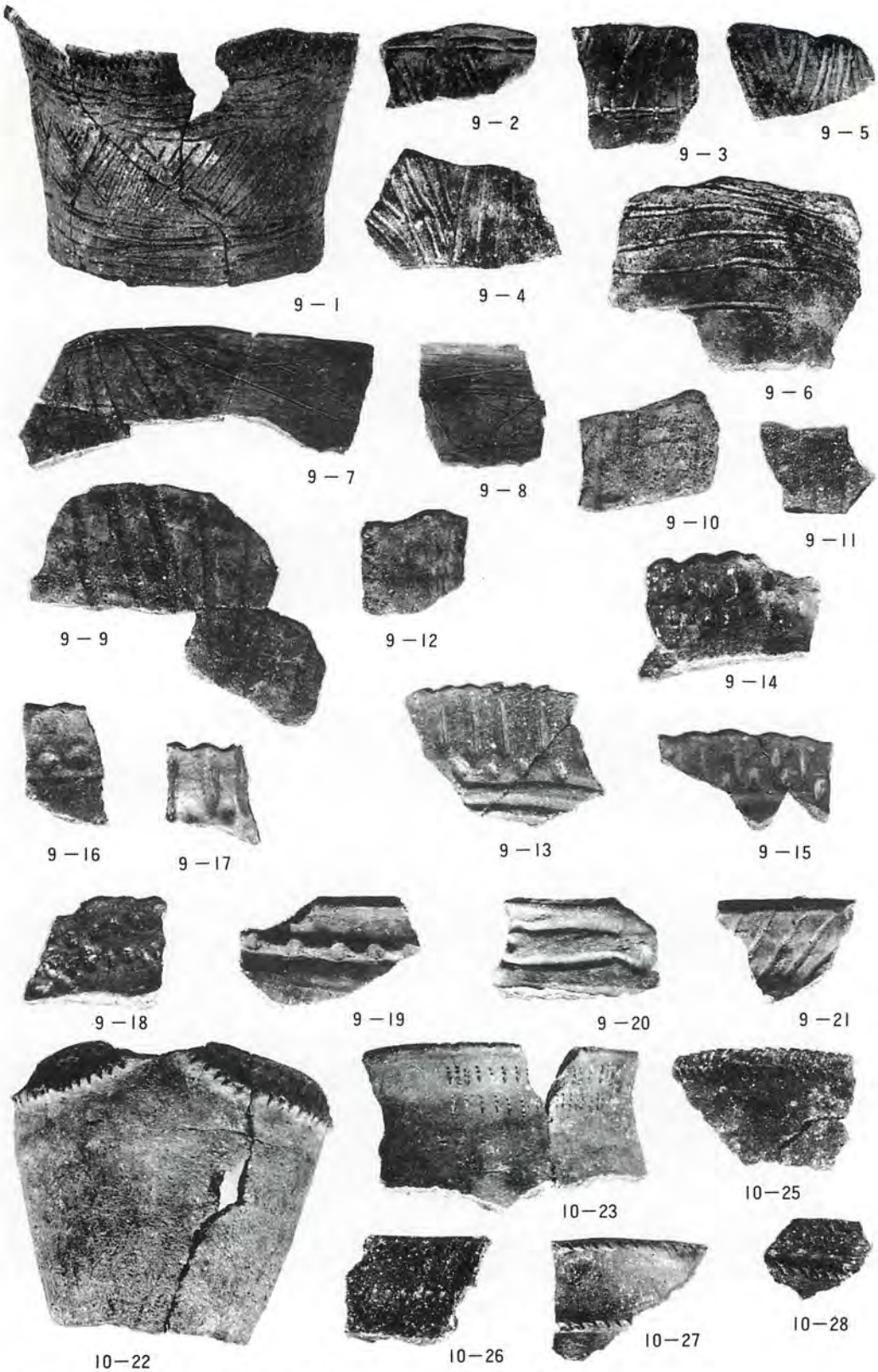
(2)遺物出土状況

図版3　天岩戸岩陰遺跡

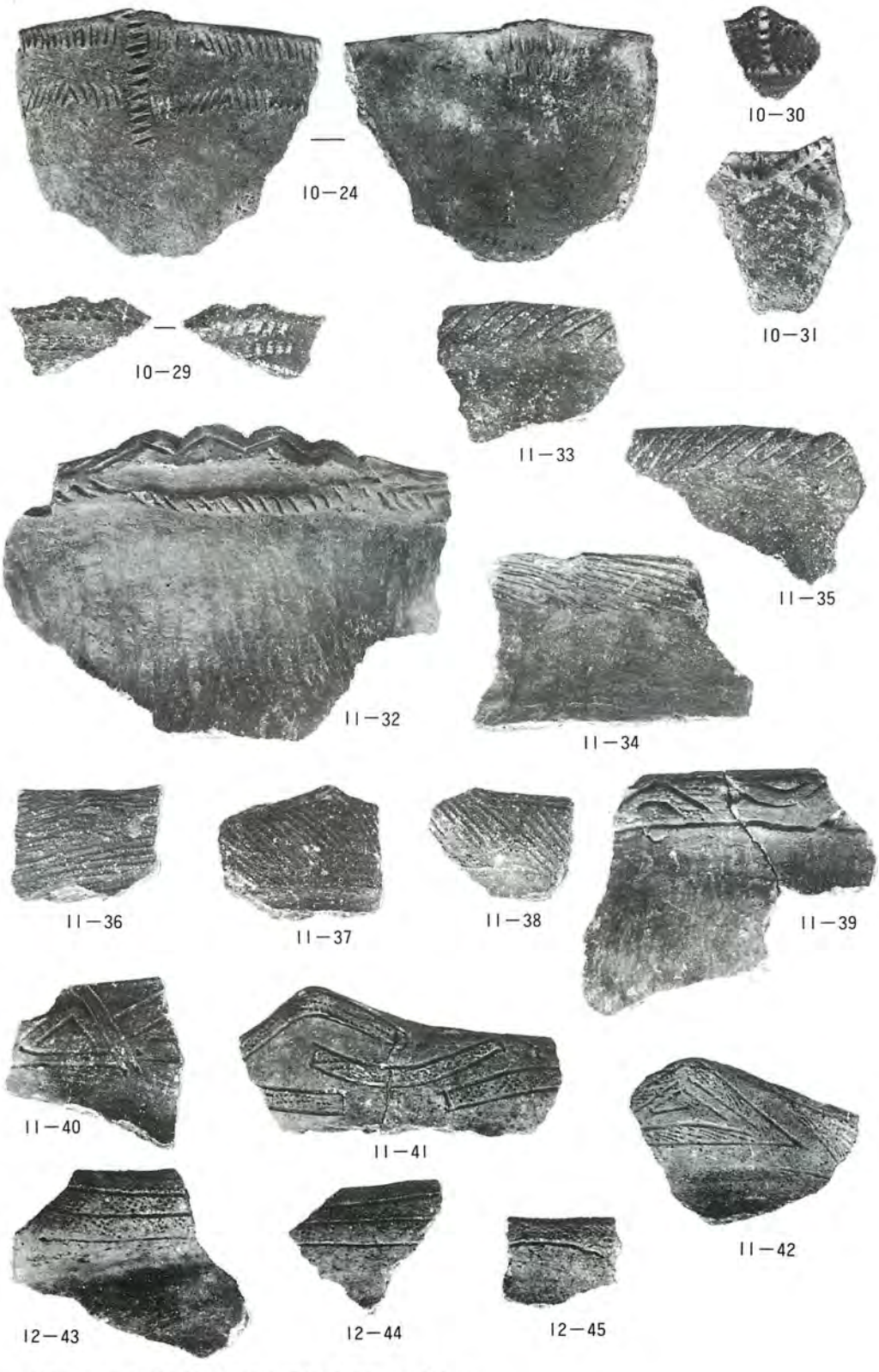
(1)天岩戸岩陰遺跡A－2区　人骨出土状態

(2)天岩戸岩陰遺跡A－2区　配石遺構

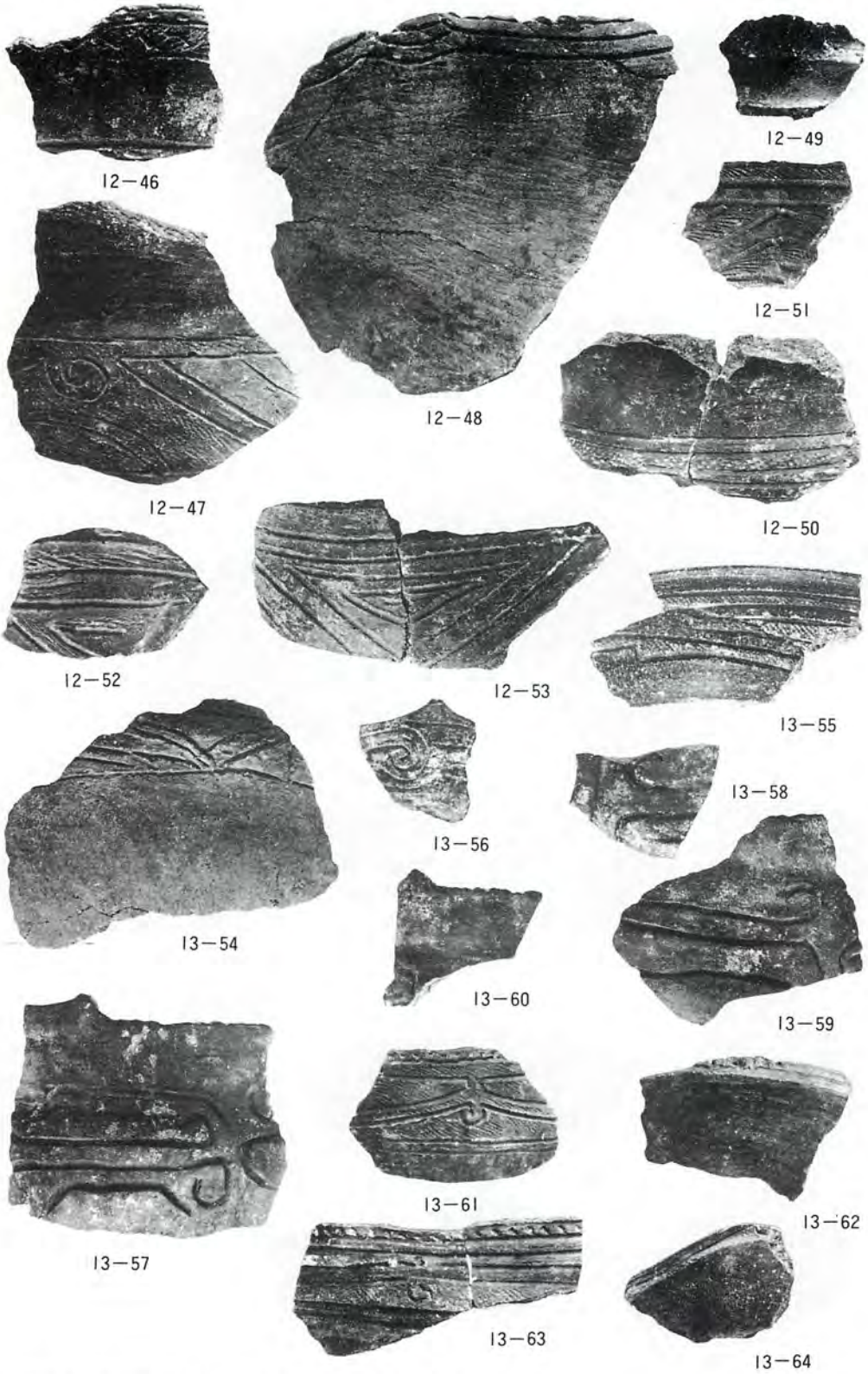
図版4　天岩戸岩陰遺跡



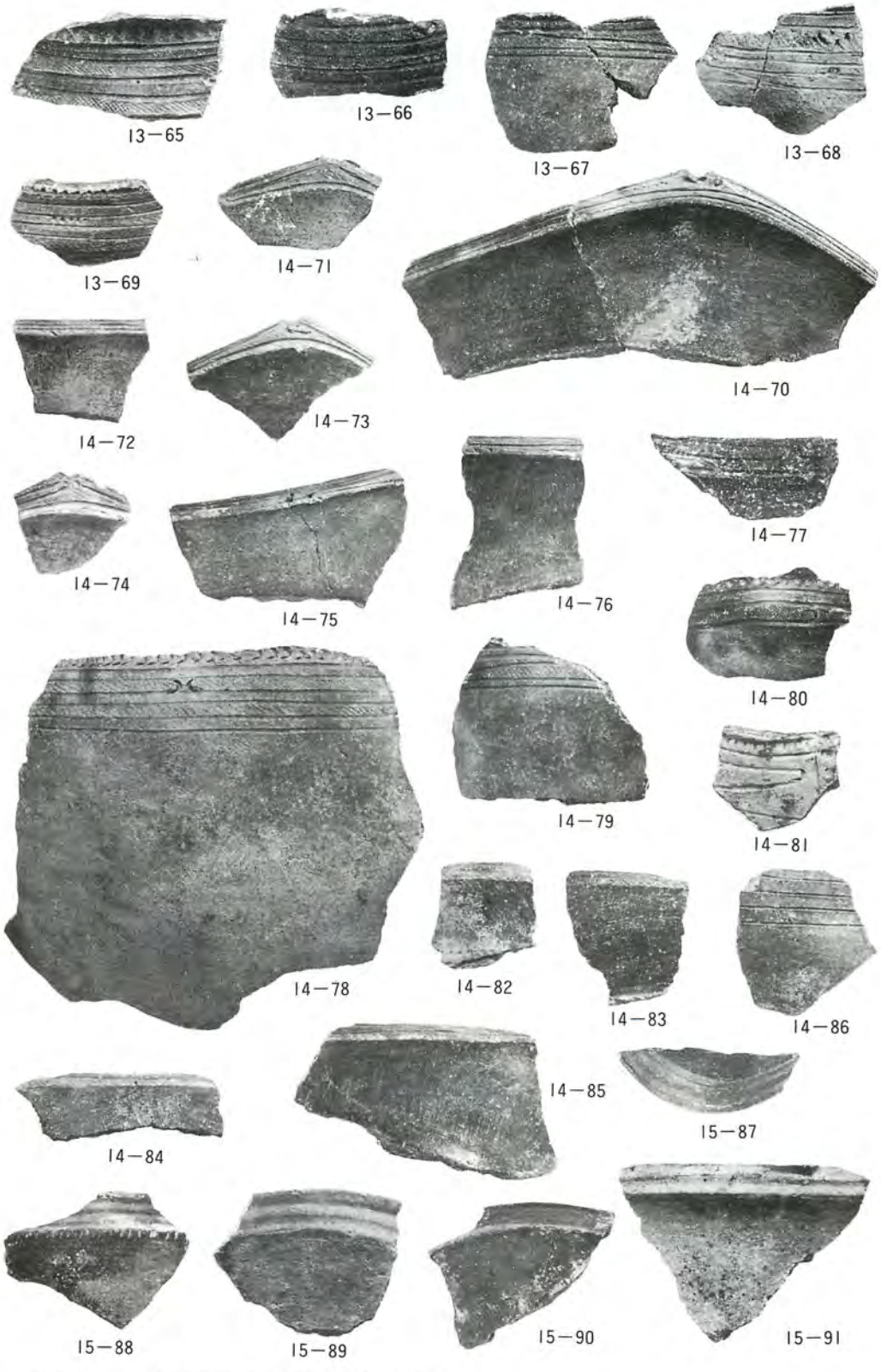
図版５　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（縄文式土器）$\frac{1}{3}$



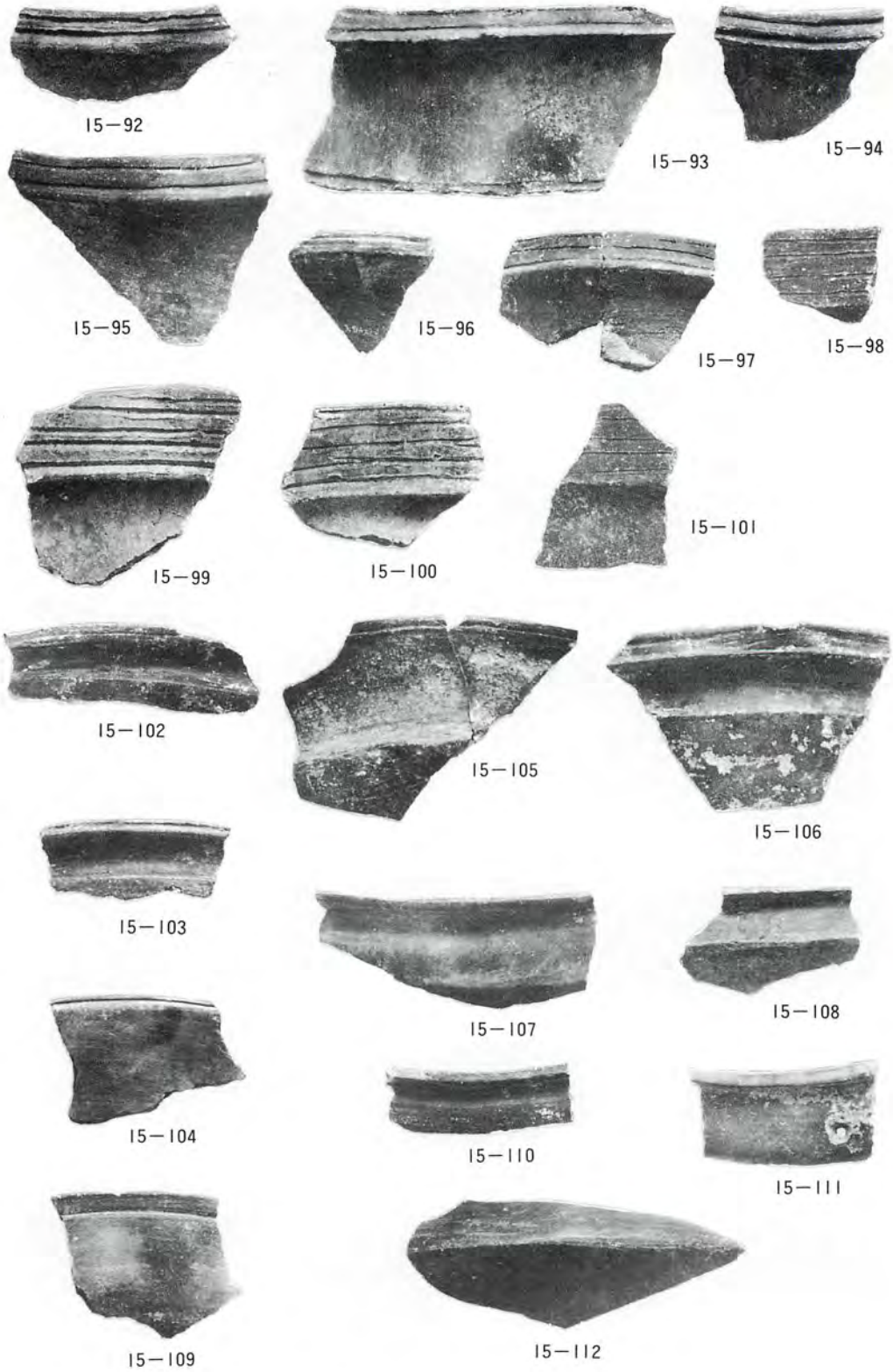
図版 6　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（縄文式土器）$\frac{1}{3}$



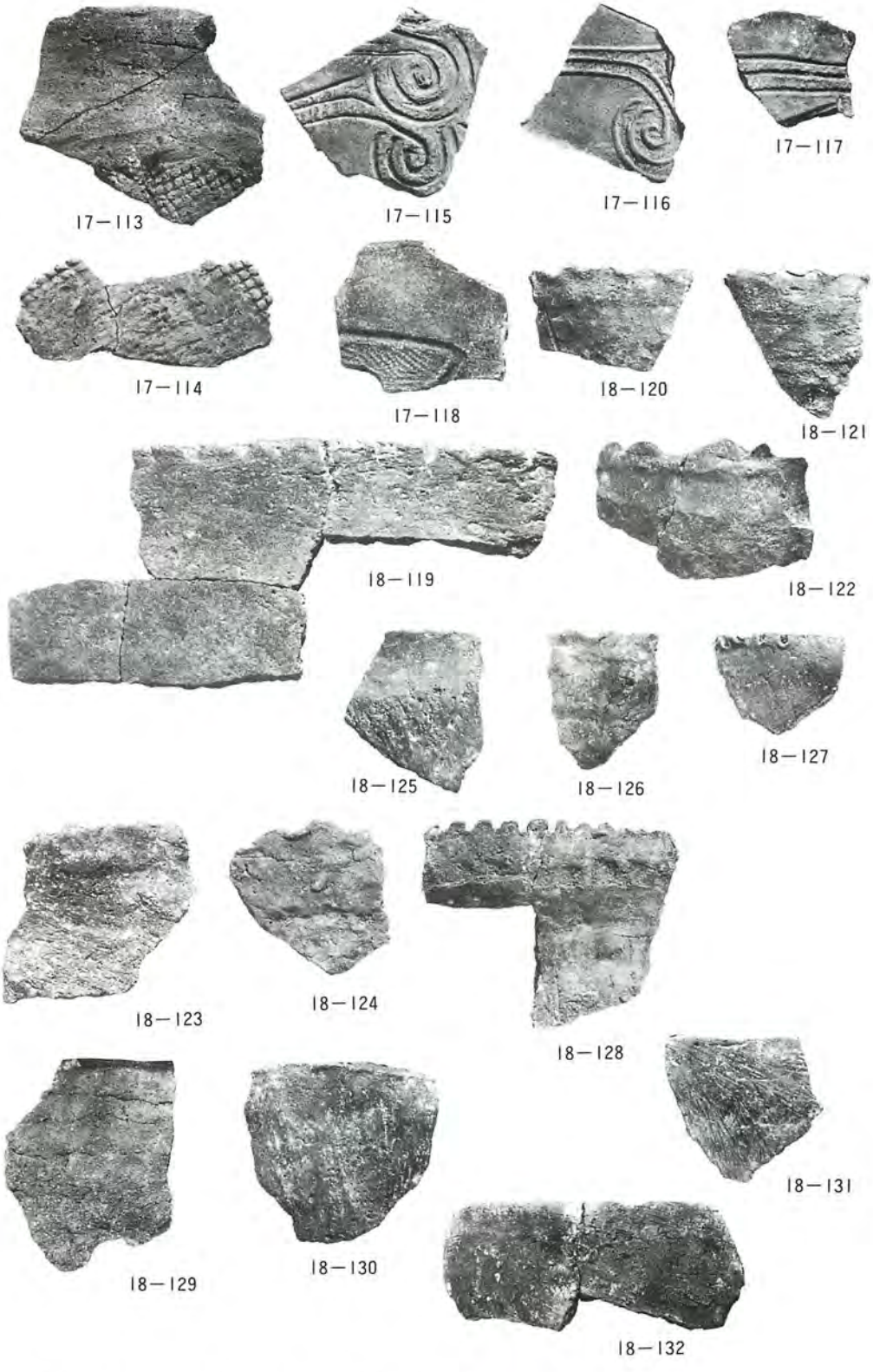
図版 7　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（縄文式土器）$\frac{1}{3}$



図版 8　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（縄文式土器）$\frac{1}{3}$



図版 9　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（縄文式土器）$\frac{1}{3}$



図版10　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（縄文式土器）$\frac{1}{3}$

19－133

19－134

19－135

19－137

19－136

19－138

20－142

19－139

19－140

20－143

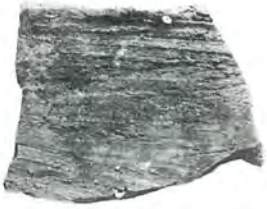
19－141

20－144

20－145

図版11　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（縄文式土器）$\frac{1}{3}$

20－146



20－147

20－148

20－149

20－150

20－151

20－152

21－153

21－154

21－155

21－156

22－158

22－157

24－167

図版12　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（縄文式土器）$\frac{1}{3}$

22－159

22－160

22－161

24－166

23－163

24－168

24－169

24－178

図版13　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（縄文式土器）$\frac{1}{3}$

25－1

26－7

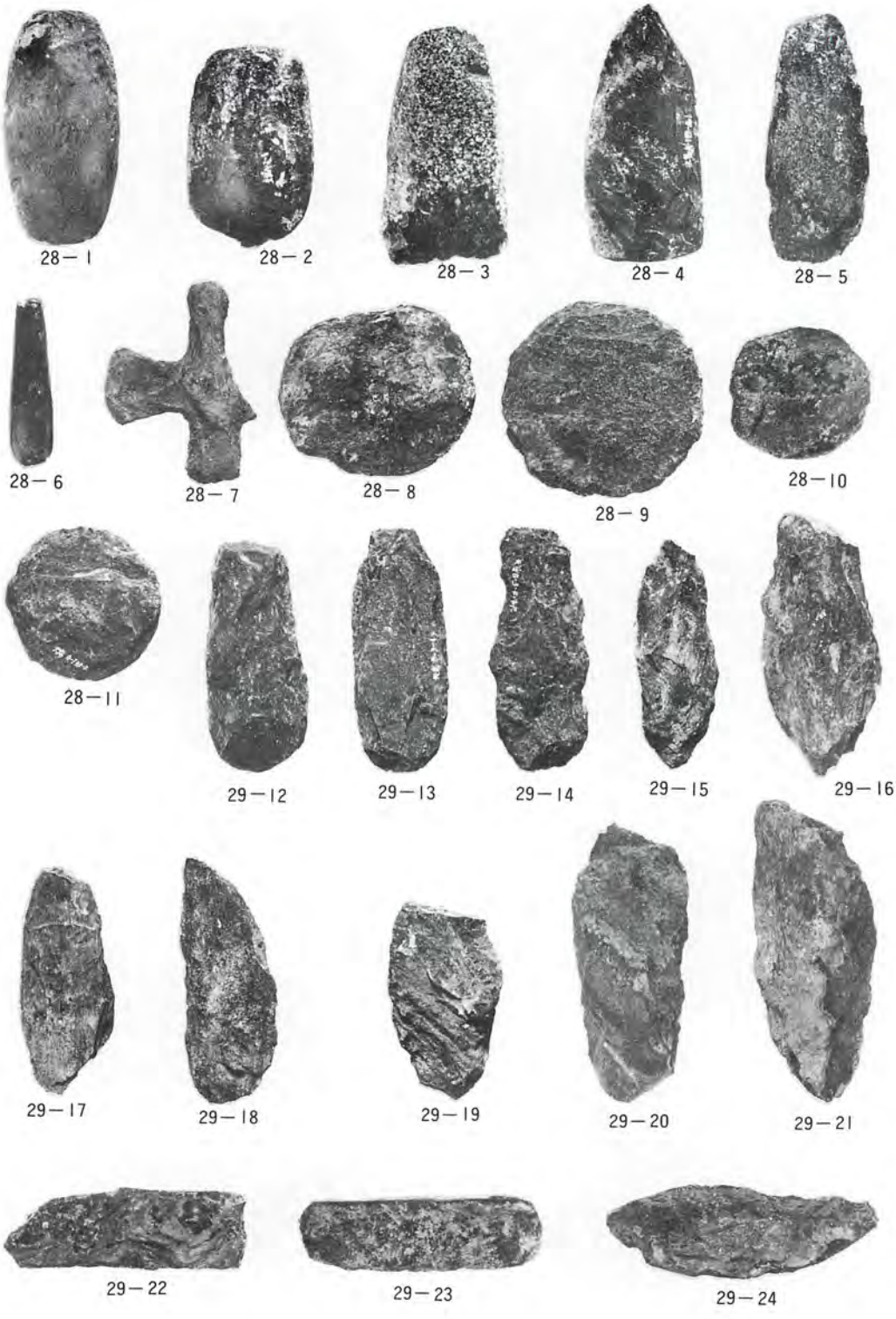
26－8

26－10

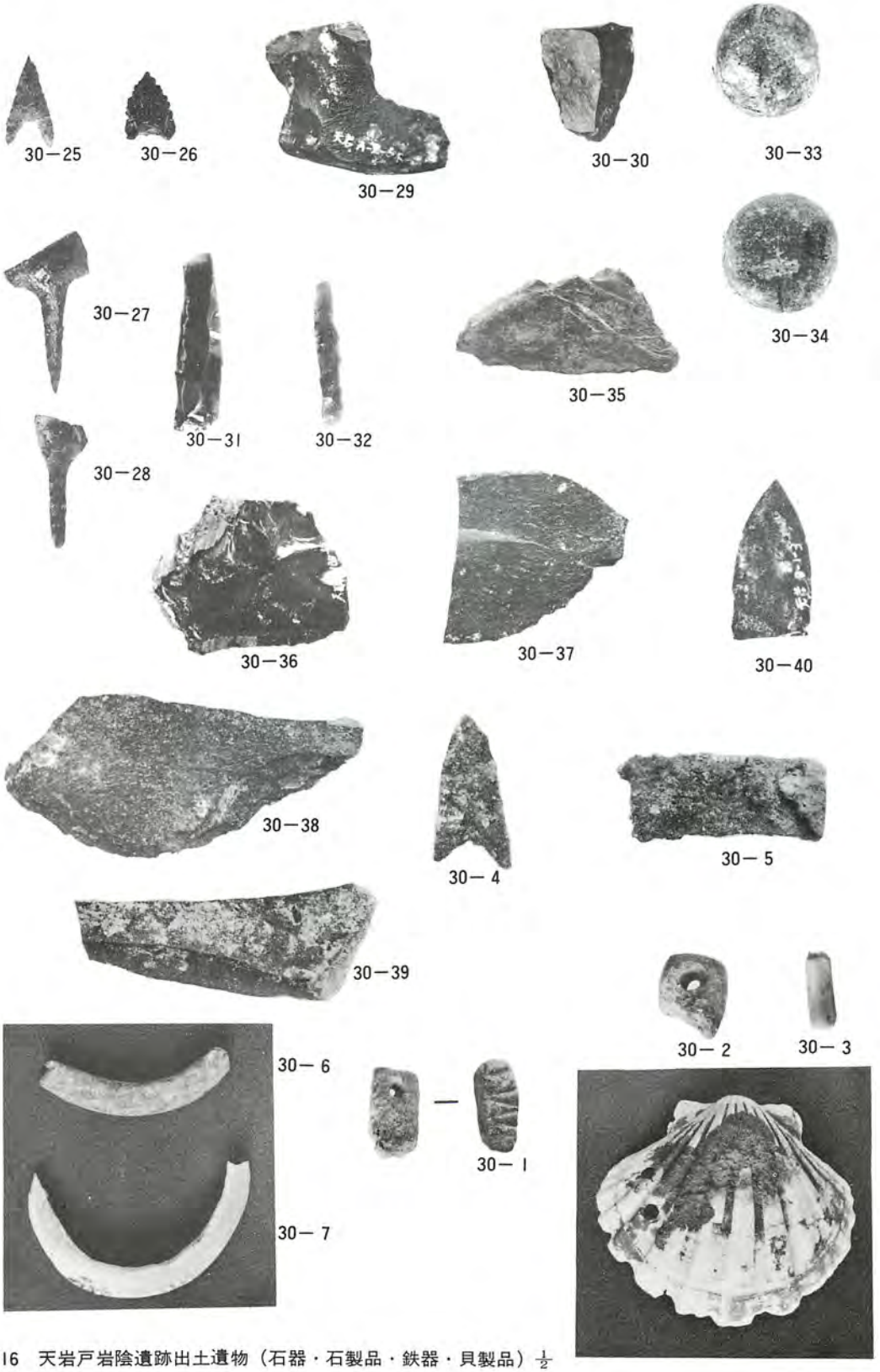
27－13

27－12

図版14　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（弥生式土器）$\frac{1}{4}$



図版15　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（石器）$\frac{1}{3}$



図版16　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（石器・石製品・鉄器・貝製品）$\frac{1}{2}$

31－48

31－49

31－50

31－51

31－52

31－53

31－54

31－55

図版17　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（石器）$\frac{1}{3}$

32－49

32－50

33－51

33－52

図版18　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（石皿）$\frac{1}{6}$

33－53

33－54

35－1

35－2

35－4

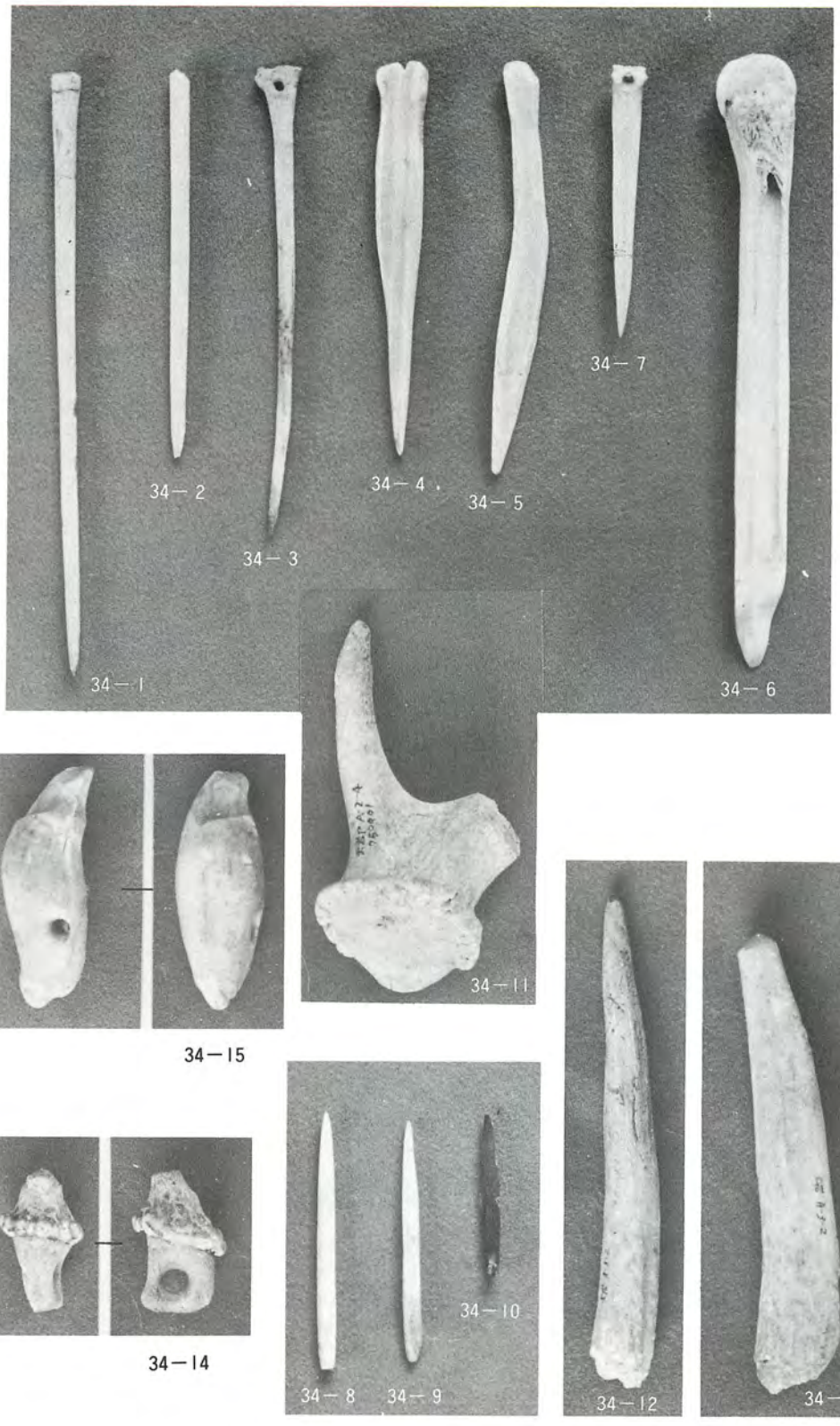
35－3

35－4

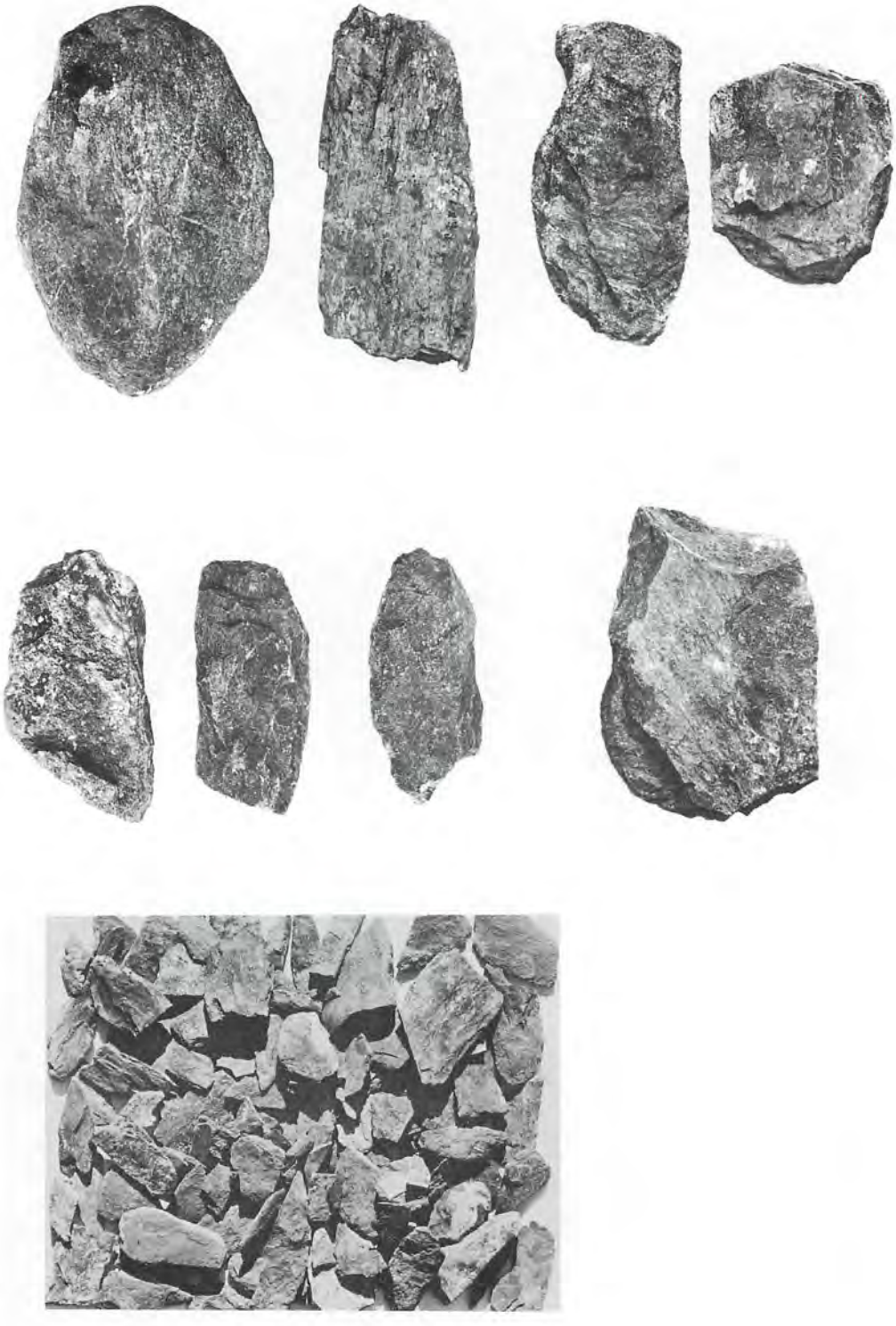
35－7

35－6

図版19　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（石皿・石器原材・未製品）
33－53・33－54・35－1・35－2……$\frac{1}{6}$
他は$\frac{1}{4}$

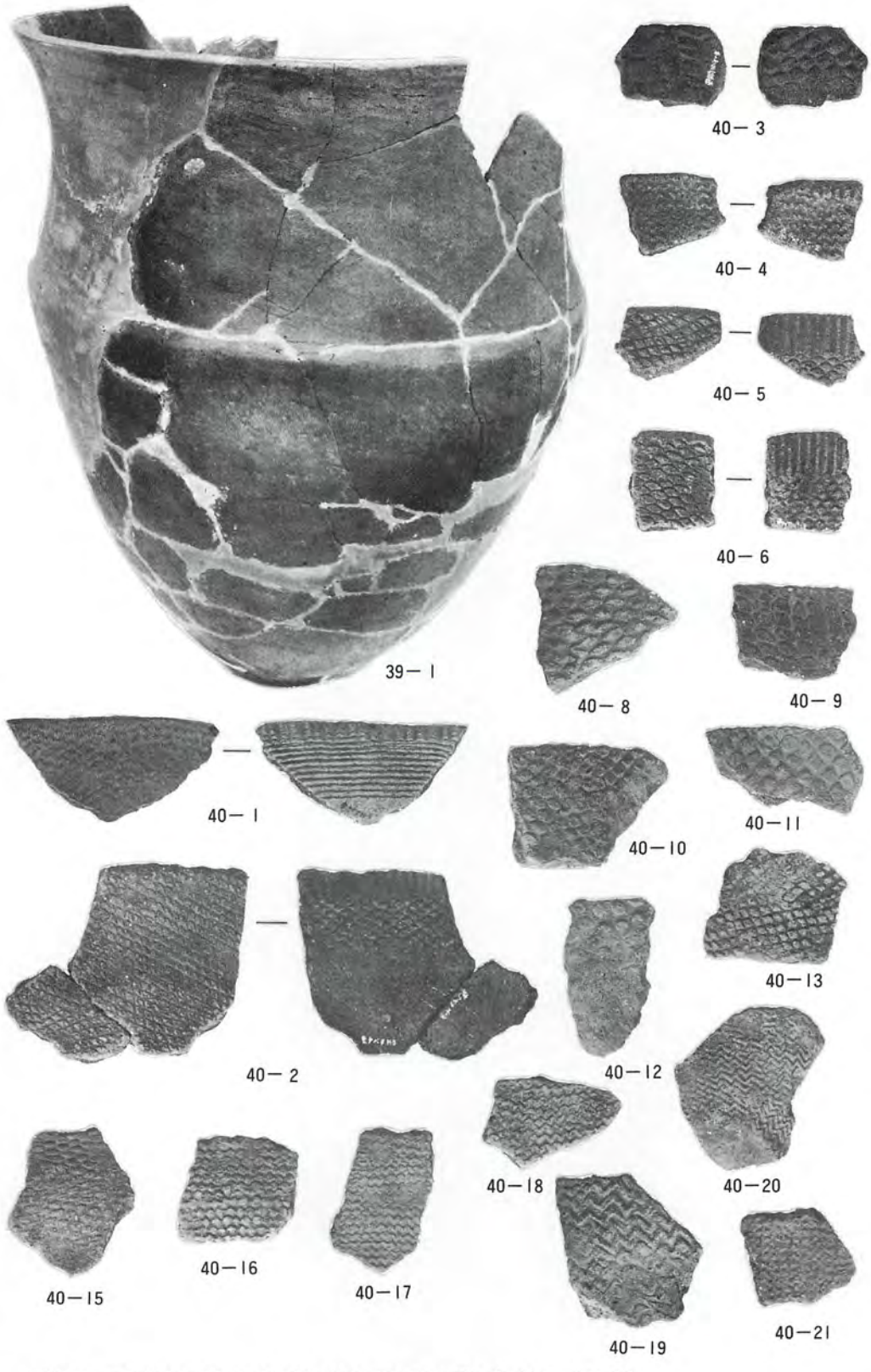


図版20　天岩戸岩陰遺跡出土遺物（骨角器・牙製品）$\frac{1}{2}$

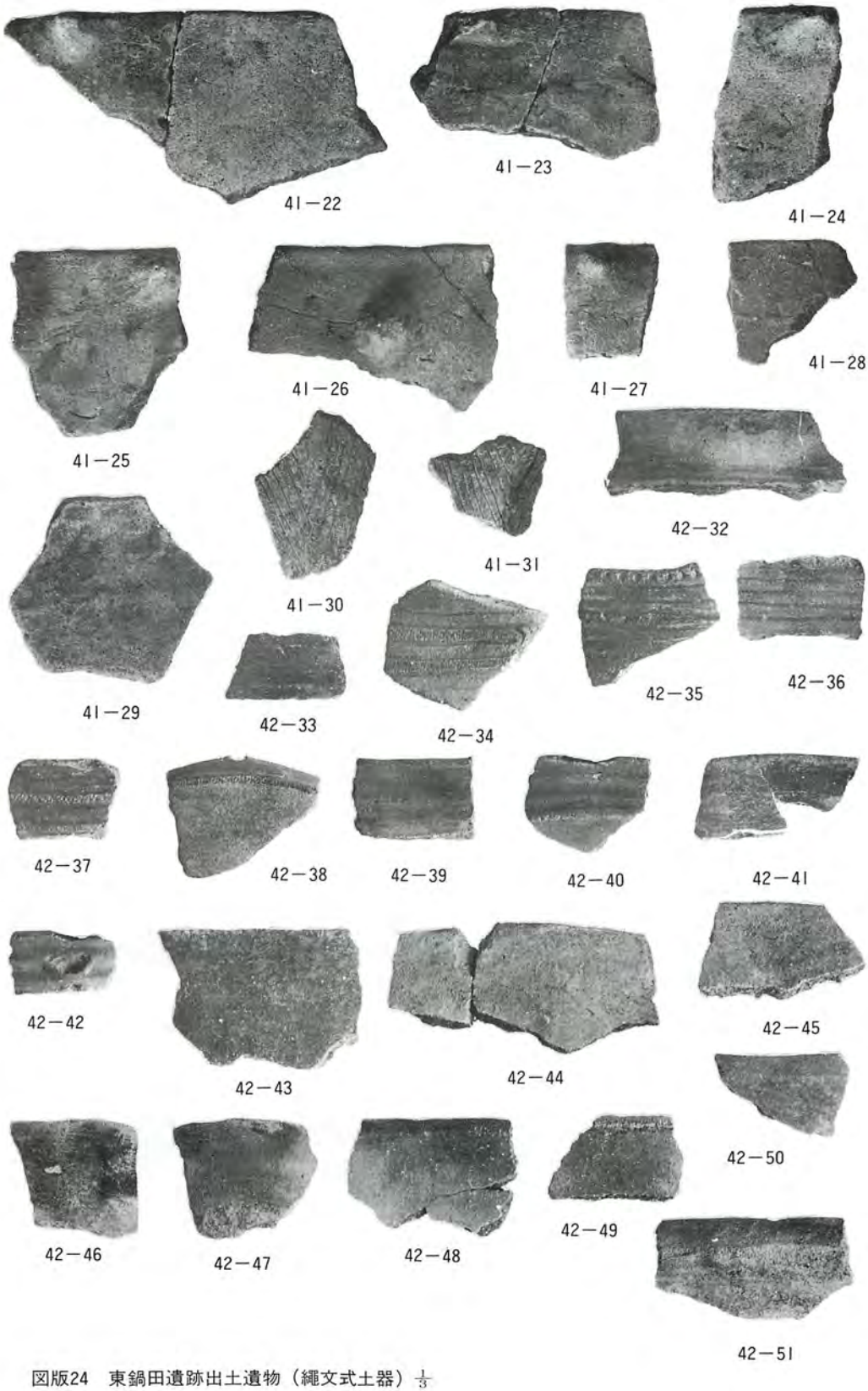


図版21　天岩戸岩陰遺跡出土石器原材・未製品・石屑（上・中段は$\frac{1}{3}$）

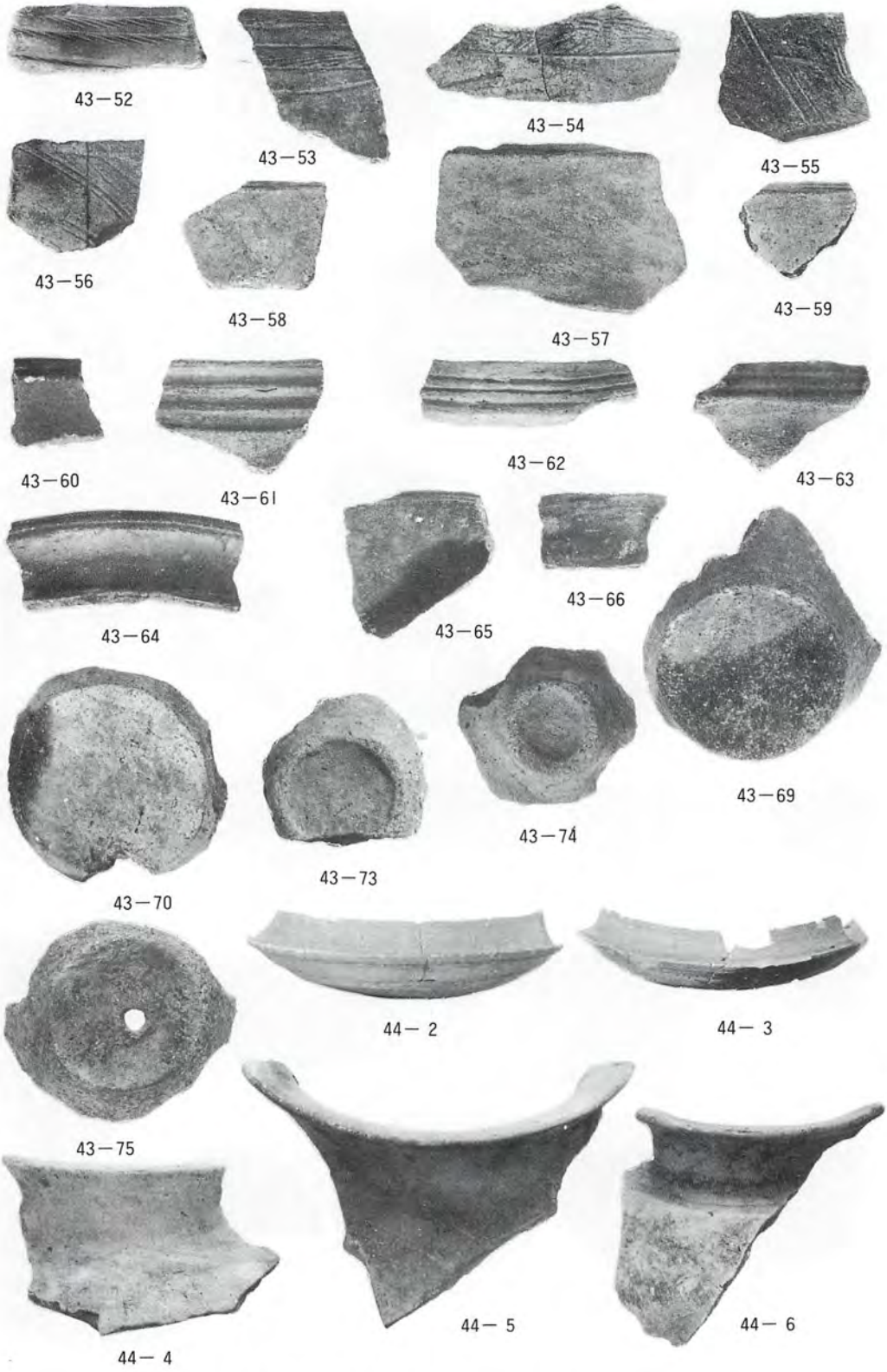
図版22　東鍋田遺跡全景（ビニールハウスの先が遺跡）



図版23　東鍋田遺跡出土遺物（カメ棺・縄文式土器）$\frac{1}{3}$（39－1は$\frac{1}{6}$）

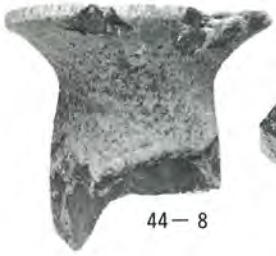


図版24　東鍋田遺跡出土遺物（縄文式土器）$\frac{1}{3}$



図版25　東鍋田遺跡出土遺物（縄文式土器・須恵器・土師器）$\frac{1}{3}$

44－7


44－8

44－9

44－10

44－11

44－12

45－1

45－2

45－3

45－4

45－5

45－6

45－7

46－8

46－9

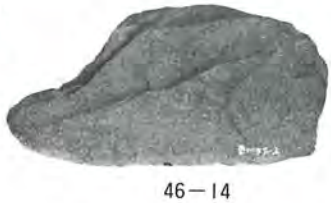
46－11

46－13

47－16

46－10

46－12


46－14

図版26　東鍋田遺跡出土遺物（土師器・石器・石製品）$\frac{1}{3}$（47－16は実大）

▲(1)若園貝塚全景

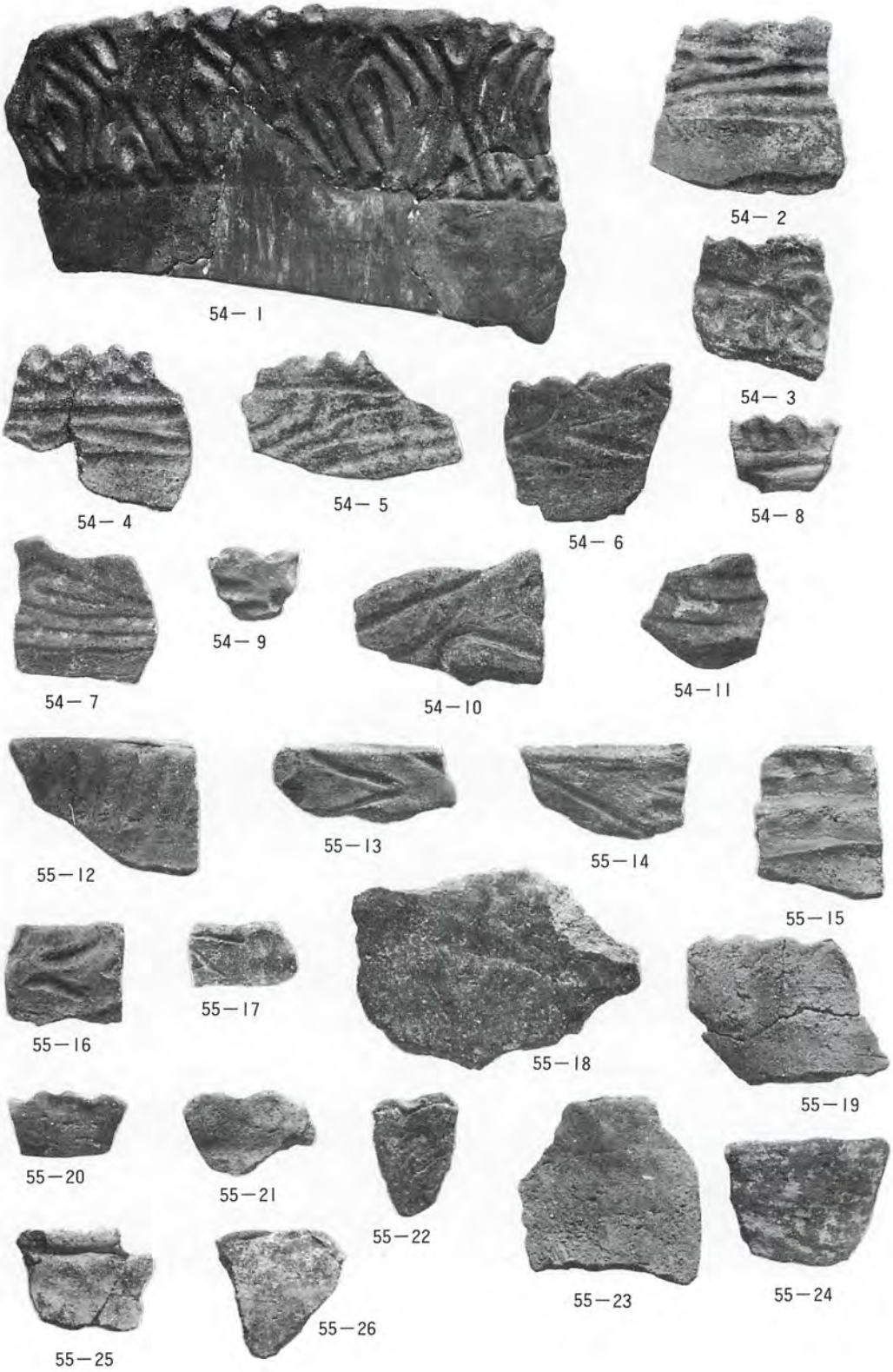
◀(2) A － I 区断面と磨製石斧出土状態

図版27　若園貝塚

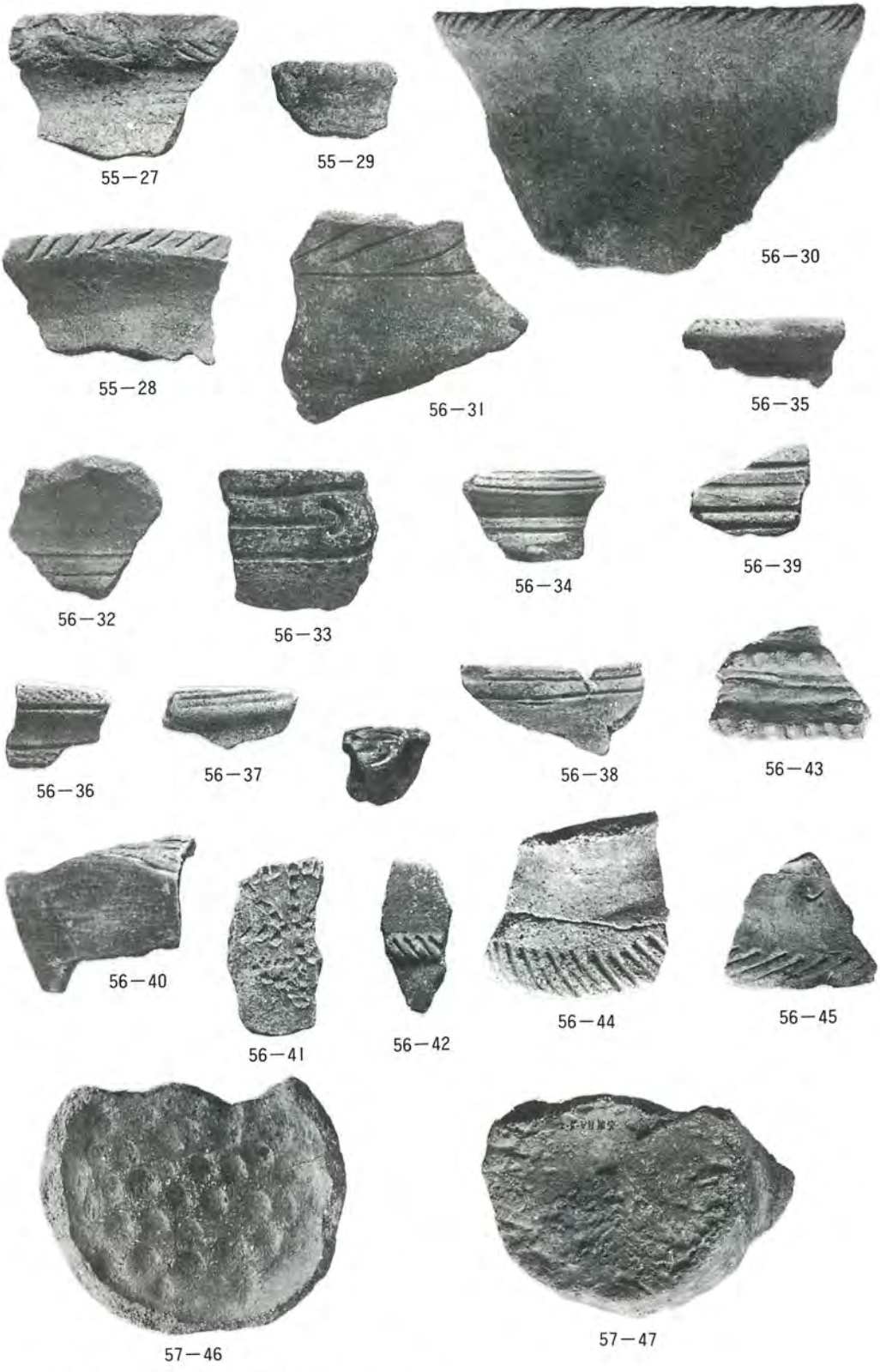
(1)若園貝塚調査地近景

(2)H－I区　純貝層上面

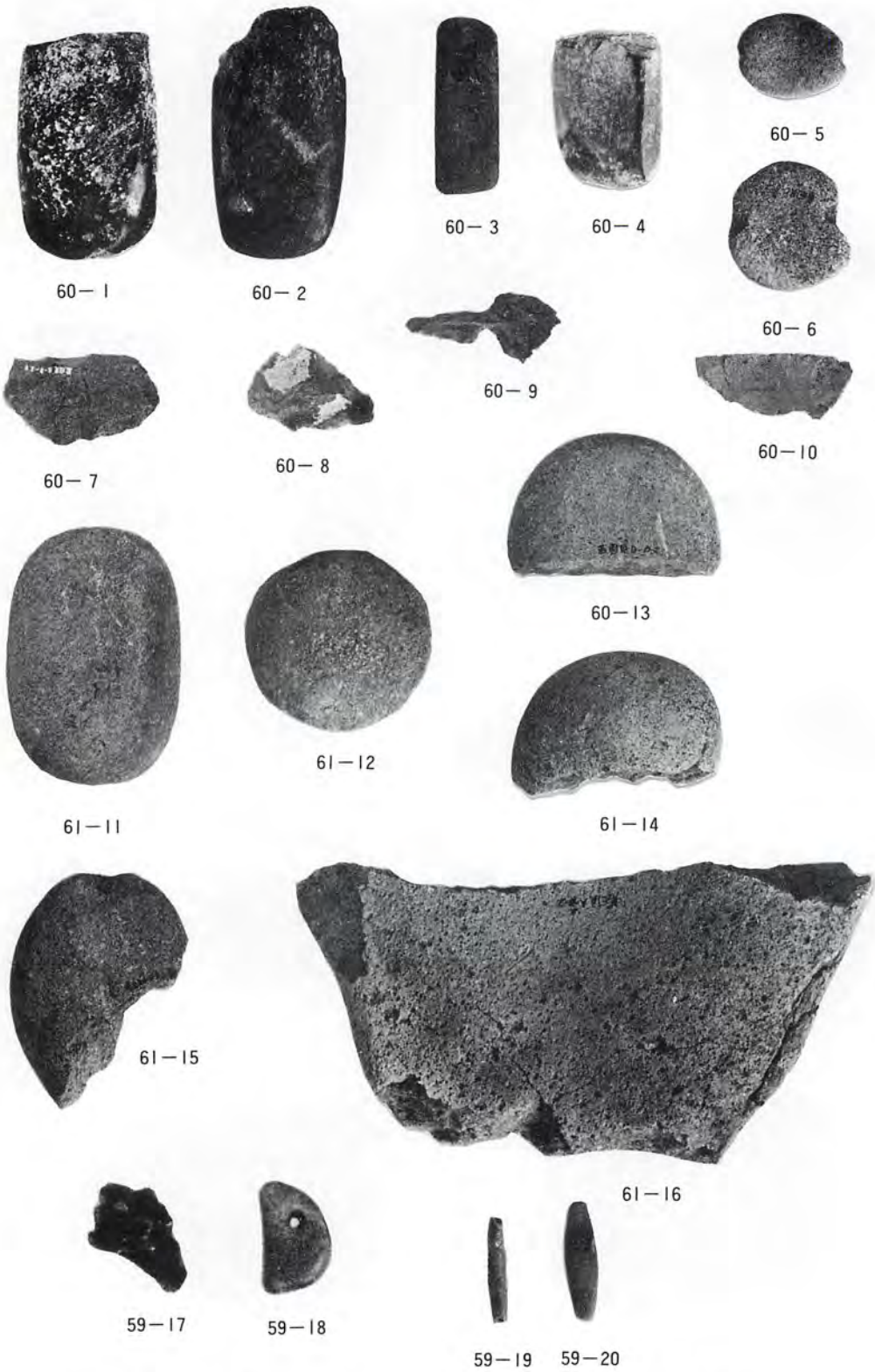
図版28　若園貝塚



図版29　若園貝塚出土遺物（縄文式土器）$\frac{1}{3}$



図版30　若園貝塚出土遺物（縄文式土器）$\frac{1}{3}$



図版31　若園貝塚出土遺物（石器・石製品・土製品）$\frac{1}{3}$（59－17・59－18は実大）

図版32　姫塚と出土遺物

トンカラリン周辺の空中写真　①トンカラリン　②トンカラリン辰崩地区

E～F区間

H地点

図版33　トンカラリン

K～L区間

J～K区間

タンタン落し（L地点）

トレンチ出土遺物
①……C・D2トレンチ出土
②・③…F・GIトレンチ出土

J～K区間

図版34　トンカラリンとトレンチ出土遺物

B・Cトレンチ地点（右手に近世墓地）

Bトレンチ磁器出土状態

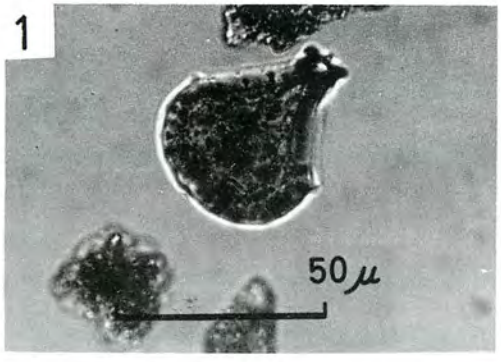
Dトレンチ

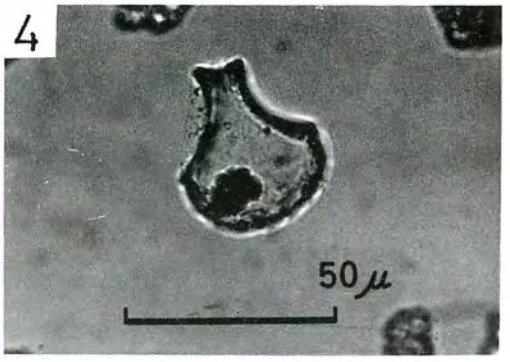
Bトレンチ石組み裏出土遺物（$\frac{1}{3}$）

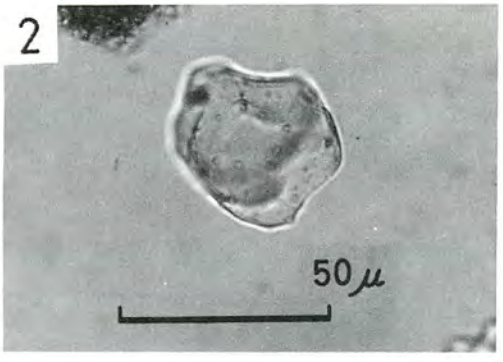
Hトレンチ

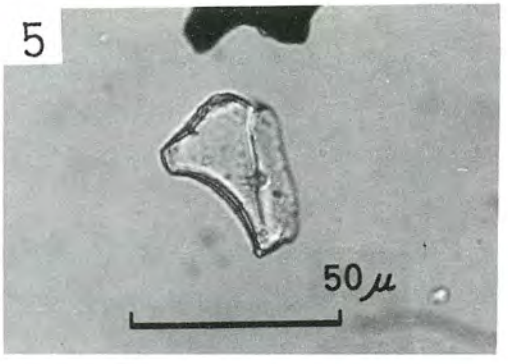
Cトレンチ石組み裏出土遺物（$\frac{1}{3}$）

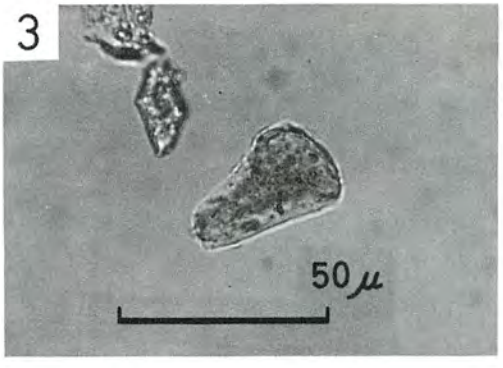
図版35　トンカラリン辰崩地区

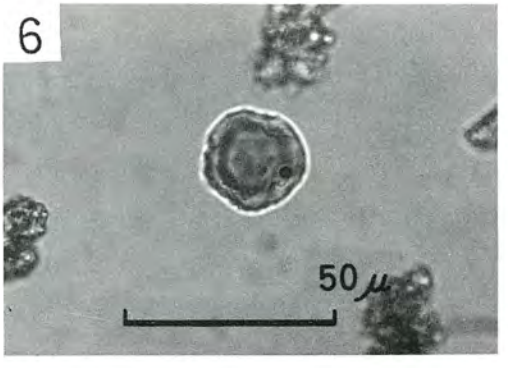








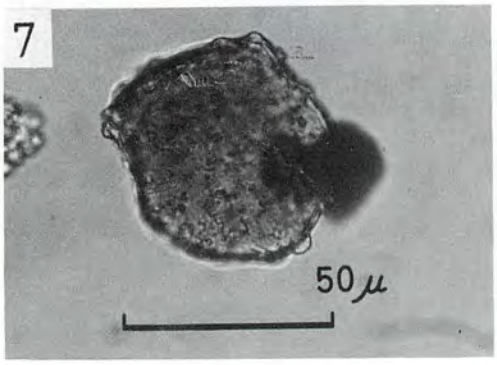


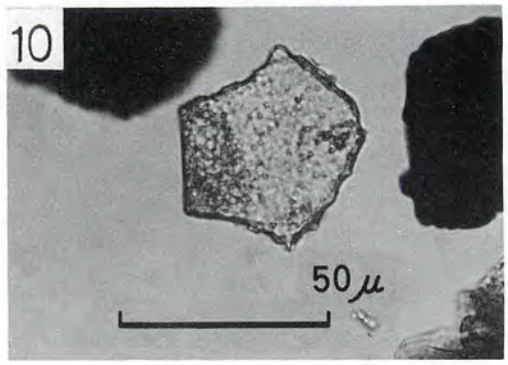


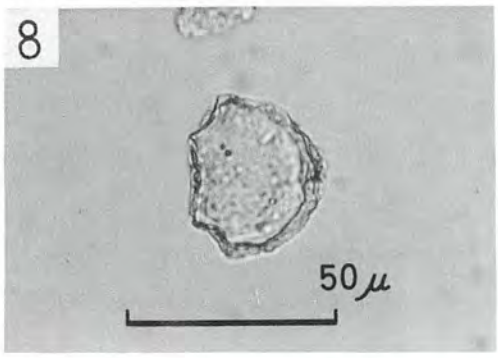
付Ⅰ－図版Ⅰ

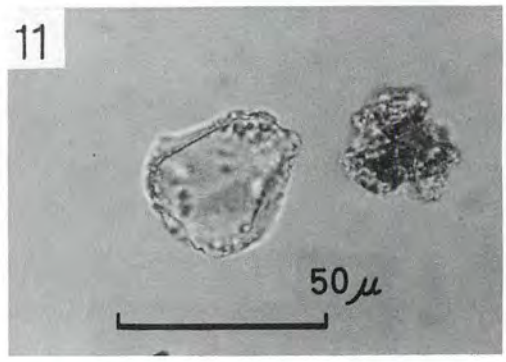
	採取区	プラント・オパール
1	A3北1	イネ機動細胞様プラント・オパール
2	A3北1	モロコシ機動細胞様プラント・オパール
3	A3北1	ススキ機動細胞様プラント・オパール
4	A3北2	イネ機動細胞様プラント・オパール
5	A3北3	ススキ機動細胞様プラント・オパール
6	A3北4	オヒシバ機動細胞様プラント・オパール

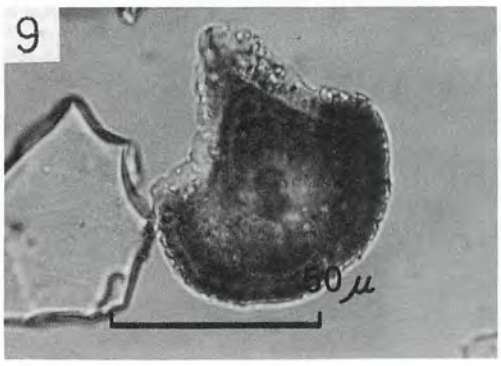
天岩戸岩陰遺跡出土プラント・オパール(1)

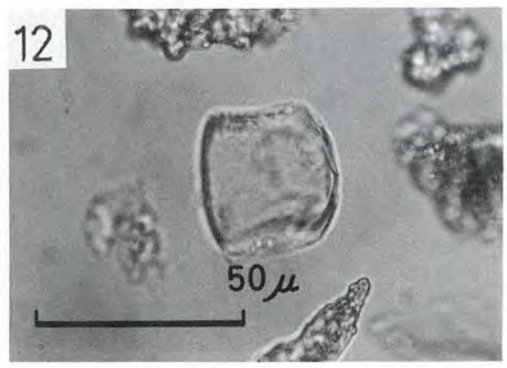








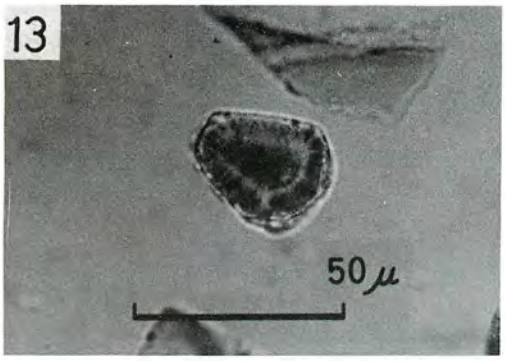


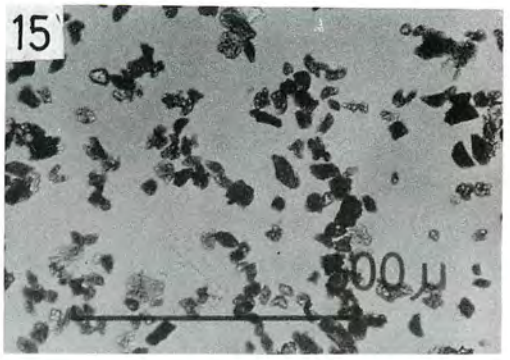


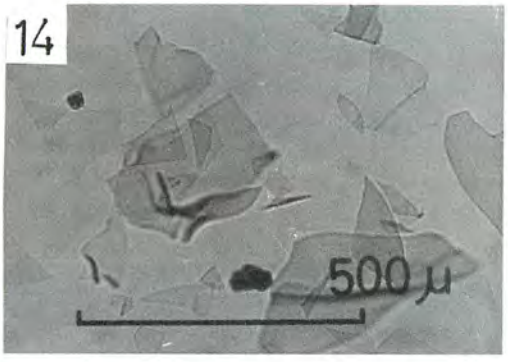
付Ⅰ－図版２

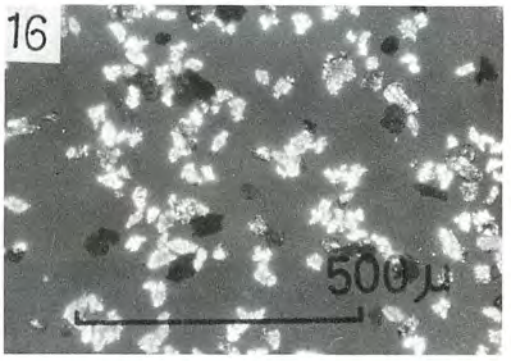
	採取区	プラント・オパール
7	A３北５	ジュズダマ機動細胞様プラント・オパール
8	A３北６	クマザサ機動細胞様プラント・オパール
9	A３北６	ヨシ機動細胞様プラント・オパール
10	B２西３	スズタケ機動細胞様プラント・オパール
11	B２西３	チガヤ機動細胞様プラント・オパール
12	B２西７	ジュズダマ or モロコシ機動細胞様プラント　オパール

天岩戸岩陰遺跡出土プラント・オパール(2)







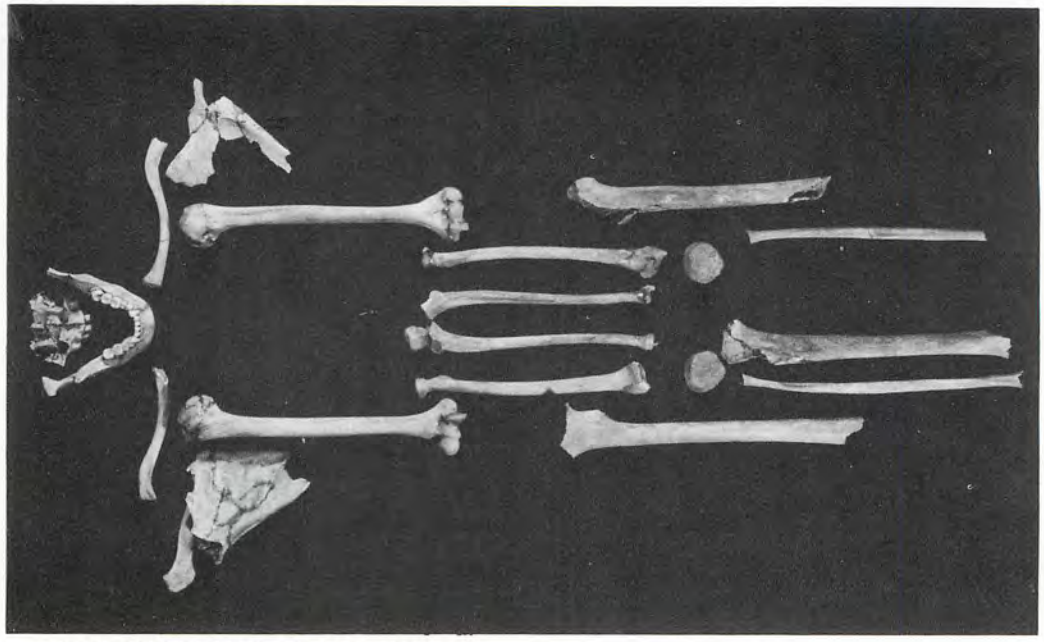


付Ⅰ－図版３

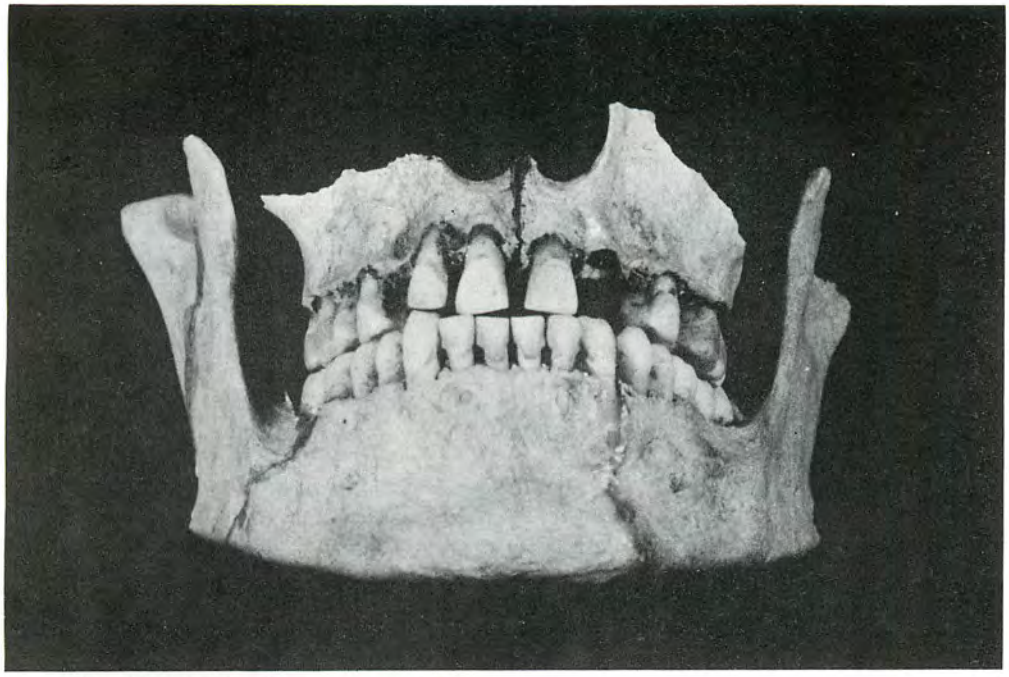
	採取区	プラント・オパール
13	B２西８	チガヤ機動細胞様プラント・オパール
14	A３東3.15~3.3	シラス
15	B２西５	植物灰
16	B２西５	同偏光

天岩戸岩陰遺跡出土プラント・オパール(3)

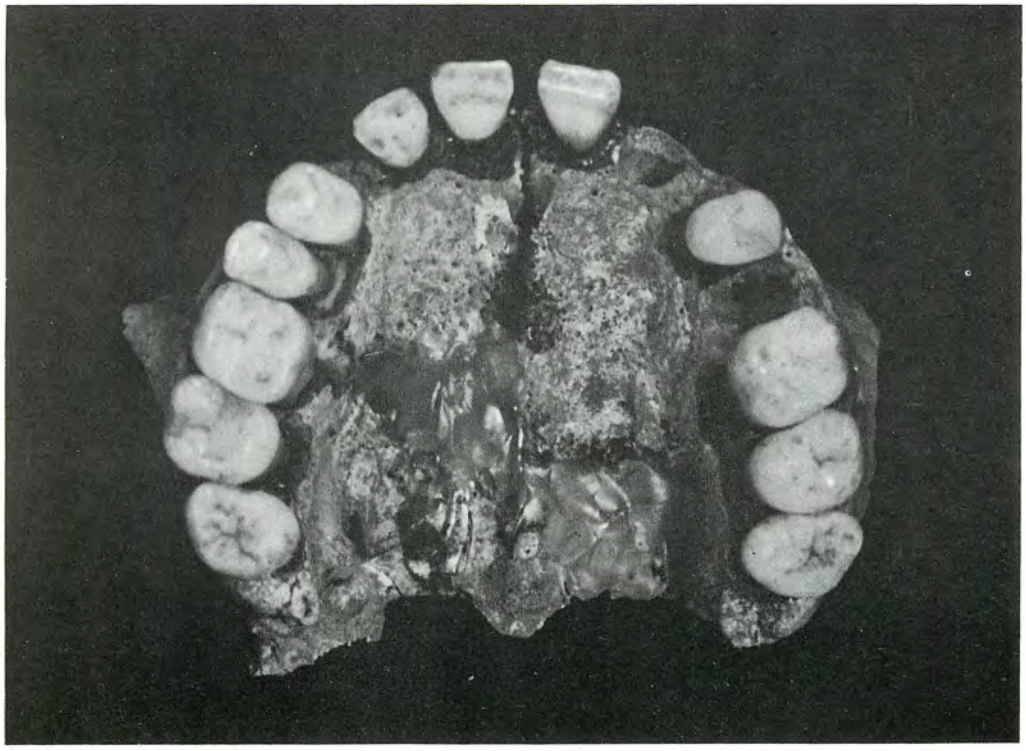
(1)人骨出土状態



(2)天岩戸岩陰遺跡出土人骨(女性・壮年骨)



(1)天岩戸岩陰遺跡出土人骨(女性・壮年骨)



(2)抜歯(両側上顎犬歯)

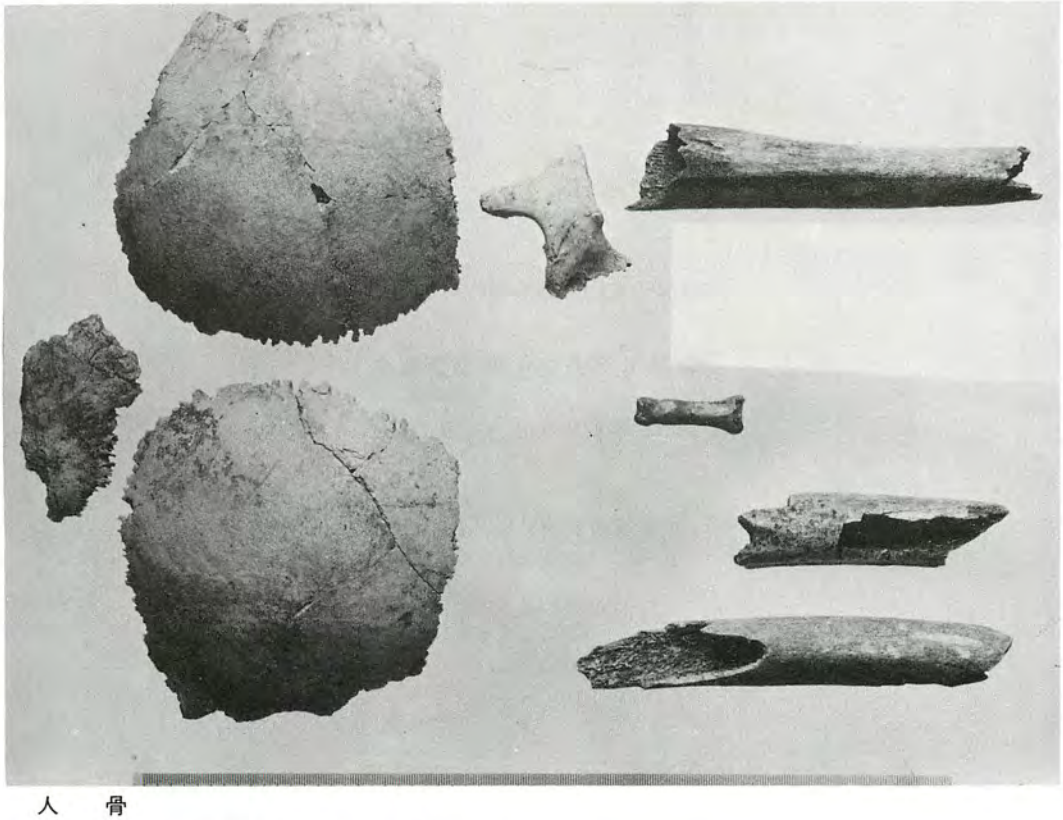
付2－図版2

魚類・ウミガメ類・スッポン・ニホンザル・タヌキ

イノシシ

付4—図版Ⅰ　若園貝塚出土動物遺存体

シ　カ



人　骨

付4—図版2　若園貝塚出土動物遺存体・人骨

あ と が き

トンカラリン問題を契機として、菊池川流域の文化財の再検討の必要に迫られ、3ヵ年にわたる調査を実施した。

調査は基礎資料の整備を第一の目的とし、さらに緊急性等を加味して調査地の選定を行った。したがって、本書の内容も基礎資料の提示に重点をおいたため、考察に欠ける憾がある。

本書に収録した遺跡は5遺跡であるが、調査を実施したのは13遺跡を数える。本書に収録できなかった遺跡で、日置氏銅板墓誌出土地（いっちょ墓）、江田船山古墳の再検討等の問題は重要な課題であり、いくつかの新しい所見も得ることができた。機を改めて発表したいと考える。（松本）

熊本県文化財調査報告　第31集

菊池川流域文化財調査報告

昭和53年3月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒861　熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　コロニー印刷
〒861　熊本市二本木3丁目12－37

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 31 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：菊池川流域文化財調査報告書
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日